
◆◆◆桜咲く◆◆◆

幻宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

◆◆桜咲く◆◆

【Nコード】

N1841V

【作者名】

幻宇

【あらすじ】

一年中花の咲き乱れる桜の木。それはかつて強靱な鬼が封印されたものだった。

そして現代、桜の木を守る『鬼封道士』の血族が途絶えたことで、かつての強靱な鬼が目覚めてしまう。

空間の歪によって平安時代から現代に飛ばされた道士の娘が出逢ったのは、平安時代で結ばれぬ恋の中戦で失った恋人の生まれ変わりだった。

ここに、現代を舞台にした奇想天外な鬼退治が始まる。

プロローグ

僕には、母親が2人いた。1人は僕を産んだ人で、5つぐらいまで一緒にいた人。

もう一人はお婆さんで、本当の孫のように可愛がってくれた人だ。厳しかった事もあったけど、大好きな“お母さん”だ。

春にはよく手を繋いで桜を見にいった。家の桜も綺麗だけど、一緒に行ったお花見が一番の思い出。脇の出店でよく玩具を買ってもらった。

お婆さんは不思議な人で、僕が病気の時なんかにはよく体をさすってくれた。すると不思議なことによくなくなってしまふのだ。

それから家の庭には桜の木があつて、その桜は一年を通して一度も枯れる事がない。お婆さんはいつも、その桜を枯らしてはいけなうと言っていた。枯れる時、災いが起るとか。口癖みたいに使っていた。

いくつの時だったか、小学校に行き始めたばかりの頃だったと思う。僕がトイレに行きたくなつて夜中起きた時、庭で話し声を聞いた。恐る恐る向ってみると、十二単を纏った綺麗な女性が桜の木の下に立っていた。

名前を“桜”と言っていた。

それ以来桜は僕の一番の友達で、相談相手だ。

幼い頃は彼女が何かわからなかったし考えもしなかったけれど、彼女が桜の木の精霊だと知った時は何か大きなものを失った気がした。たぶん、今思えばそれが初めての失恋だったのだろうと思う（

苦笑)

そして、桜に逢ってから変なものばかりみるようになった。

あれから何年か経ち、ここ数日前から桜が散り始めている。

栄養剤を買ってきて挿してやったけど無駄みたいだ。数日前から桜の姿も見えない。いくら僕が呼び掛けても出て来てくれないし。心配だ。

◆過去から◆

「実に残念な事です…」

医者のか細い声に被るようにして、夏から吊り下げたままの風鈴が、秋色の風に吹かれて小さく鳴った。

夏祭り、この家の老婆に向けて一緒に住む青年がお土産に買ってきたものだ。静かに目を閉じる老婆を、一緒に住む青年はただ呆然と見下ろしていた。

声をかければすぐにでも起きてにつこりと微笑んでくれそうなのに、もう老婆が起きることはない…。

今朝起きたときいつもならとうに起きているはずの老婆がいなかったため、青年が心配して部屋を尋ねると空ろな目で老婆は天井を見上げていた。おかしいと思い医者呼びに行ったが、連れてきたときにはもう老婆の息はなかった。

——89歳、老衰だそうだ。

青年から流れ落ちる涙が、一つ、また一つと老婆の顔を伝った。

「…あんだ、医者だろう？ なんとかできないの？」

無駄だとわかっていても、つい責めてしまう。医者は何も言わず、ただ黙りこくったままだった。彼もそれ以上なにも言わず、ただただ涙を流すだけだった。

老婆に身内はいない。夫は戦争で亡くなったそうで、子供はいないらしい。だから、彼が身内として葬儀をあげた。

葬儀が終わり、一人、また一人と人が引くと、この家で自分が一人なんだと厭味な程実感させられてしまう。実感すればするほど涙がとまらなくなる。

5つの時本当の母親に捨てられてから、いつだって一緒にいてくれた老婆。“いい子にしていればお母さんが迎えに来てくれるよ”と励ましてくれた。勉強も運動も頑張って、一番になれば彼自身以上によるこんでくれた。大人になればなるほど、もう母親に逢う事

もないんだと実感していったが、老婆がいればそれでよかった。

「私は何人も見て来たから：大好きな人がいなくなるの見てきたから…」

蹲って泣いていたら、桜が涙声で話しかけて来た。

「：桜は慣れたの」

静かに首を振る。

「サヨナラは慣れないわ。でも、いつも一人だったけど今は日向ひうががいるから…」

涙目で精一杯笑っていた。桜の涙が月の光を浴びて、キラキラと輝いて落ちた。一人じゃないんだと少しだけ安心して、彼、日向は桜に精一杯笑いかけた。

『来週のライブ中止にしようか？』

日向が趣味でやっているバンドメンバーからそうメールが来た。

『大丈夫だよ。やれるよ』

とメールを返した。

『無理するなよ』

と返事が来たが

『大丈夫だって。明日の練習は出るから』
と再び返した。

いくら一人でないとと言っても、やはり悲しいのは変わらない。今の日向にはじっとしている事が辛かった。気が滅入ってしまいそうで、少しでも気持ちを楽にしたかった。ブルーな状態で仲間達に会う事が、どれだけ気を遣せる事かわかってはいる。けれども何もしない事に耐えられなかった。

メール交換を終えてギターに手を伸ばした。得意の細かなタッピングでさえ、指先が震えて出来なかった。

「：やっぱり、中止にするべきだったかな」
と思わず苦笑い。

ふと予定を思い返して、あることに気付く。

「明日バイト代入るなあ。そろそろ貯金も貯まるし、新しいギター

でも買おうかな」

真っ暗だった自分に、少しだけ楽しみが出来たような気がした。

狭い店内。人一人通るのが精一杯な通路。少しでも注意を誤れば、商品を蹴り飛ばしてしまいそうだ。壁やら通路やら至る所にギターとベース。決して綺麗とは言えない店だが、日向のお気に入り場所だった。

「おお！酒猫^{さかね}君、スタジオ入りまでまだ時間あるんじゃないのか？」

少し小太り気味で人の良さそうな店長が話しかけてきた。

「練習の前にギターを見にきたんだよ。こいつを下取りしてもらって新しいの買おうかなあと」

日向がそういいながら少し古びた革製のハードケースの中から彼愛用のギターを取り出すと、店長はまるで少年のような表情でイタズラめいた微笑を浮かべた。

「そいつ以上の物だろう？やっぱリランク的にはかなりレベルが高いものでないといかんな」

なにやら一人でぶつくさ言っている。

「そりゃ、こいつより音のいいものがいいよ。でもあんまり高いのも困る」

不安げに店内を物色する店長を見ながら日向は言うが、当の本人はお構いなし。

(怖いなあ…)

ゆえにギターの値段なんてピンからキリまである。1本でベンツどころか家にだって匹敵することもあるくらいだ。それなのにあまりギター屋に泥棒が入らないのは、売却時の問題だろう。大抵の泥棒は楽器なんてどこで売っていいかわからないし、興味もない。第一楽器に付いているナンバーやメイカー、名称などで流通先から仕入先まで情報として残ってしまうし、楽器屋の繋がりなんて組織的なものだから、そこから簡単に足がついてしまう。

日向愛用のギターは30万円弱、いい部類に入る物。これをしのごものというからだろう、店長の気合いも入る。ふっ、と店長の動きが止まった。

「…げっ」

と思ったが嫌な予感はあるもの、店長はショーケースの中から一本の古びたギターを取り出した。

「これはいいぞ！これに決定！！アメリカの某天才ギタリストが使ってたやつだ。幻の逸品なんだ。持ってけ！」

店長は有無を言わず自信満々に押し付けた。

「持ってけっていくら？お金そんなにないよ」

慌ててつきかえそうとする彼に対し、

「300万にまけといてやるよ。少しずつ返してくれたらいい。オレローンだ！」

と自慢気に言った。

「さ、300万も無理だって！！」

「大丈夫だ！オレローンだからな」

こうなったらもう何を言っても聞きはしない。

「…負けた」

うなだれながら日向はつぶやいた。

かくしてこの謎めいた大変お高いギターは、めでたく(?) 日向のものとなったのだった。

新しいギターの調子がいい事はすぐわかった。否、それどころか弾けば弾くほど良い音色を聴かせてくれるのだ。その音はまるで芸術品、メンバーの手も止まるくらいだった。日向自身もまた、その芸術的音色に驚いていた。

「ちよっと、弾かせて」

ベースの奴が興味を示した。だが不思議な事に、日向以外が弾いても素晴らしい音はならない。それどころか、弦の弾く音とアンプからのノイズだけしかどう頑張っても聞こえないのだ。

「…どうなってるんだ？」

スタジオからの帰り、店長に聞いてみるが確信めいた返答はえられず、ただ

「ギターに選ばれたんだな。すごい戦士だ」

とよくわからない事を言われただけだった。確かに自分が弾く分に差し支えなければそれでいい。

むしろそれによってそれ以上の大きな代償が得られるなら十二分だ。高い買い物ではあったが、事実満足していた。満足させられる音色だった。しかし疑問がもう一つ頭をよぎった。

「…これ一体誰のギターだったんだろ？」

新しいギターを抱えたまま、バイト先に向かう。日向の働いているバーは、町中より少し外れた小さなテナント。従業員は3人しかなく、お客はいつも同じ顔触ればかり。それでもシックに落ち着ける雰囲気と美味しい料理に豊富なお酒が、常連客をひっぱり続ける鍵となっているのであろう。

中でも日向の恵まれた顔立ちは、結構な人気であった。更に天才的なギターテクに酔い痴れるお客も多く、月に2、3度ソロライブまで開かせてもらえる始末だ。そんな日は特別盛り上がった。

バイト先に着くと日向の不幸を知ったマスターは、給料袋を渡しつつ少々心配そうだった。

「今日はもし辛かったら帰っても構わないからな」

日向は精一杯笑いながら答えた。

「そんなに気の遣わないでください。大丈夫ですよ！ところで、次のライブいつにします？新しい曲作りたくて」「そうだな…再来週なんてどうかな？」

「来週でも構いませんよ」

マスターが、負けたよと言わんばかりに苦笑した。

「わかったよ」

今、彼の心の一番の慰めになってくれるのは、新しいギターの音色だけであった。

想い出唄うよ、そっと…

風に乗って舞う桃色桜のように

あなたの優しさ僕を包んで…

ここ数日大学に行けなかった。普段は勉強なんてしない友人が、心配してか授業のノートの写しを持って飲みにきてくれた。彼もまた、昔のバンド仲間だ。高校から趣味程度でバンドと同じように進めていたボクシングを、大学に入ってから本気でやり出した。今日はトレーニングの帰りでもあったらしい。ジャックダニエルをショートグラスに一杯だけストレートで注文した。

「陽太郎飲んでいいの？」

「一杯だけだし、試合は当分先だから。一杯おごるよ」

「珍しいね」

ありがとう、と簡単にモスコミュールを作って乾杯をした。

「そういえば、今日店長にショーケースの中のギターを押し売りされてさ」

あははと笑う。

「ああ、あれか。あの店長よく売ったな」

何気ない会話。今日のギターの話をしながらも、彼“陽太郎”と昔よくしたセッションがやたら懐かしく感じた。「某アメリカのギタリストのとか言ってたけど、誰のかわからんし。やたら高いし。今度またセッションしようぜ？」

すると彼は大きく溜め息を吐きながらいった。

「やなこった！」

「けちっ！」

1時間くらい話し込んで、彼は帰っていった。

「ありがとう、明日学校で」



時は1183年平安の世。光のうちは鮮血が舞い、闇になれば魍魎がはびこる、そんな時代。ひとときも休まる時間がないように見えて、何故かまったりした人間が多いのも特徴的。

京の都の鬼門の位置に構える一つの民家。何故だか一年中桜が咲き乱れ、散っても咲き散っても咲きを繰り返すそれに、花が絶えることはない。日が落ちたら落ちたで百鬼夜行の列がその家だけを避け、子供の遊ぶ楽しそうな鞠唄がこだましていた。

物の怪が恐れ神が好む場所、より御仏に近い術者がそこに住んでいる。京はそれを欲しがり、幾度となく部下を走らせた。が、どんな褒美や地位や名誉にも動かされる事なく、そこで定められた使命を全うするのみ。歴史にはもちろん、社会的にも決して出てくることはない。寧ろ出てはいけないほど強大で且つ、神聖な一族なのだ。桜が散ったときその一族が減びる、そう囁かれていた。

屋敷の上を、一匹の鶴が泳いでいく。薄桃色の桜の花弁がゆつくりと旋回を続け、やがて紺色の着物の上に舞い降りた。年は20歳前後、桜の花弁が一人の青年を呼びとめた。

「…もし？」

驚く事なかれ、そういう屋敷なのだから。

「どなたか存じませぬが、この敷地で私を降ろしていただくか？ここから離れてしまつては、命の灯火が消えてしまいますゆえ」

一瞬その声に彼は息を飲んで驚いたが、周りを見渡しても桜しか見当たらないので空耳だと思ふことにした。ひらひらと舞い落ちる薄桃色に、彼はいつしか見とれていた。

「浮気な殿方じゃ」

再び声が聞こえた。

「私が好きか？」

「私が美しいかや？」

「私を見てるのかや？」

幾つのも声がまるで追っかけっこのように、彼の頭に響き渡る。初めは空耳だと思った彼だが（思うようにした、の間違い）、鳴り止まない囁き声に徐々に恐怖心が込み上げてきた。

「なんだ？」

なんだなんだと一人騒いでいるから、道行く人々の視線が冷たい。いわゆるチラ見、というやつだ。

青年はなんだかとてつもなく脱力して、大きくため息を吐いて呟いた。

「：疲れているのだろうか？」

なんだか急に眩暈を覚えた気がした。

「もし？」

ふと、背後から聞こえた女の声。

「顔色がよろしくないみたいです、少し休んでいかれますか？」

またか、と思いつつも今度の声は頭に響き渡るようなものではないだけに、人間である事を祈りつつ彼は振り向いた。ありがたい事に、そこにはちゃんとした一人の人間が立っていた。

緩やかにウェーブを描いたふわふわした髪と大きな目、白く透けるような肌。この時代の『美人』と称される部には入らないが、今で言う可愛らしい女性だった。

季節は、師走。そぐわない、温かな風が二人の間を通りぬける。

「：風が温かいと感じるのだ。師走だというに」

女は答えた。

「ここだけは、いつでも春です」

男が問う。

「桜の声が聞こえると言ったら、お主は私を変人だと罵るか？」

女が再び答えた。

「いいえ、私は桜の歌声が大好きですから」

「・・・・・・」

二人、くすつと笑った。

「不思議な娘じゃの」

「そうかもしれません」

女の喋り方は、甘く優しい。そしてどこことなくはかなげで悲しい面影。

「お主、名は？」

「織紗那と申します。貴方様は？」

「月華丸と申す」

恐らく貴族の出なのだろう。腰には装飾品の飾られた刀が下げられていた。

「よろしければ、お茶でもいかがですか？」

織紗那と名乗った女が、頬を染めて誘いをいれた。

「これも何かの縁かもしれぬ」

くつたくの笑い顔を見せる月華丸に、織紗那もつられて微笑んだ。

香しいお茶の香りと、季節にはそぐわない桜の香が鼻孔を満たす。

「こんな物しかございませんが、お待様のお口に合うかどうか……」

1人の老婆が桜餅とお茶を差し出した。銀色の眼で、少し眼光の鋭い不思議な老婆だった。一瞬ではあったが、その不気味さに不自然にも月華丸は思わず眼を背けた。

「お構いなく」

「……月華丸様、この屋敷を不気味だと思いでしょう？」

織紗那の思わぬ問いかけに、彼は口に含んだお茶を噴出してしまった。

「失礼！否、そんな事は……」

「いいえ、ご無理なさらなくとも織紗那にはわかります。おわかりでしょうが、確かにここは化け物屋敷ですから、誰も近づいたりいたしません」

人間味を感じさせないような無表情ではあったが、声だけは寂しそくに聞こえた。



日向は慌てて屋敷に飛び込んだ。荷物を背負ったまま桜の木の下に行く、何度も何度も桜を呼んだ。いつもならすぐに現れるのだが、桜の木は花びらを散らすだけで何も答えてはくれない。

「…一人にしないで…」

思わずつぶやいていた。

両親と離れてから、本当の家族のいない生活から自分なりに頑張つて過ごしてきたつもりだった。自分は強いといい聞かせ、いつしか強いと思い込んでいた。いかにもろく弱い人間だったか、お婆さんや桜が居たからこそその強さだったのかが思い知らされ、自分の前から再び大切なモノが失ってしまう事が何より怖くなっていた。

桜の木の根元に、数滴の涙が落ちて消えた。

『…日向、ごめんね』

頭の中で声が聞こえた。

『大切な時期が来たみたい。何百年もこの時を待っていたの。大きな力が必要になるから、少しだけ眠らせて…』 「桜!? また、すぐに会えるかな? 僕に何かできることないかな? 桜がいなくなったら僕、本当に一人になってしまう…」

必死で話かけていた。

優しい風が、彼を包むように吹いた。

『会えるよ。優しい音楽また聴かせて。私はいつでもここにいますよ…』

「桜…」

それ以上、どんなに話しかけても答えてはくれなかった。

「…待ってる。君の為に毎日でも唄うよ」

日向の悲しくも優しいギターの音色が、季節外れの薄桃色を纏いながら静かに響き渡る。

想い出唄うよ そつと…

風に乗って舞う桃色桜のように

あなたの優しさ
僕を包んで……

世界でちっぽけな僕だけど

精一杯に君を想う気持ち持ち続けてる

忘れないピュアに夢見た日の事を

少年の瞳で今も想い続けてる……

[illegible][illegible][illegible]

•

もう何度目だろう……。散歩と称しては、つい足を運んでしまう。今日は雪、雪見桜もいいものだ。

通い慣れた屋敷の奥から、いるはずのない子供の笑い声が聞こえる。

「…お待ちしておりました」

眼光の鋭く不気味な老婆が、入口の前に立って出迎えてくれた。

「なぜ私が来ると思った？」

けつくと小さく不気味に笑う。

「織紗那様にはなんでもお見通しなんです」

「・・・」

桜の木がよく見える一室で、花びらに見守られながら織紗那はお茶を立てていた。

「月華丸様、こちらへ」

薄紅色の器に、茶のモスグリーンがよく映える。傍には落雁と羊羹が2人分。

「なぜ私が来るとおわかりに？」

彼女はほほ笑む。

「戌亥いぬいの鼻はよく効くのです」

「さようで」

戌亥とは織紗那を守る犬の式神であり、老婆もまた彼女の身の回りの世話をするための、蛇の式神であった。月華丸は床に上がると、礼儀正しく茶を召した。

「結構なお手前で」

彼女は照れながらもゆっくり深々と礼をした。

「織紗那殿、たまには町へ散歩にでも出ませんか？」

ふと、思いついたように月華丸が問いかけた。

「町へですか？」

「ええ、いろんなお店があって楽しいですよ。少しだけですから」

——町へ。

屋敷から出た事のない彼女には、魅惑的な誘いであった。

しかし：

「月華丸様、町へ行きたいのはやまやまなのですが、桜の木が心配でございます」

織紗那は、申し訳なさそうに深々と再び頭を下げた。

「顔を上げてください。私の方こそ無理言ってすまなかった。気にするほどの事ではないよ」

月華丸がそう笑いかけながら織紗那を起こそうとした時、ただならぬ気配が彼らを囲んだ。そのぴりぴりとした空気は、やがていくつものこだまとなり、織紗那に語りかけた。

「織紗那樣、行ってらっさいまし。私めが代わりに桜の木を守っています。何かありましたら、すぐに戌亥を行かせますから」

老婆の声だった。家を守る者達は優しい。織紗那が生まれてからも生まれる前からも、ずっとずっと酒猫家の者達を見てきた。

「必ず、日没までにはお帰りください」

——ひとときだけの自由を。彼が彼女に惹かれ、彼女が彼に惹かれていたのはわかっていた。それでも、皆止められなかった。

「蛇老^{じゃろう}、行かせてよかったのだろうか？」

戌亥が老婆に問うた。

「しよせん叶わぬ男と女。我は織紗那様の幸せを願っています」

そう言うとき老婆こと蛇老は白く大きな美しい蛇となり、桜の木の根元でとぐろを巻いた。

「やれやれ」

戌亥もまた灰色の大きな犬となり、蛇老の近くで寝そべった。

「大丈夫、大丈夫。月華丸様は素敵な方。織紗那様の素敵な恋もきつと薄紅色の素敵な色……」

桜の花弁は十二単を纏った美しい娘となり、縁側に座って歌を唄っ

ていた。

いつの間にか雪も止んだよう。季節外れの桜だけが、屋敷内に降っていた。

初めての町。今までに見たこともない沢山の人々。少し怖くなつて、織紗那は月華丸にしがみついた。

「大丈夫？驚かせてしまったかな？」

「大丈夫です」

ふと、彼女の目が止まる。視線の先に櫛売りがあった。その中の桜が絵彫られた櫛を彼女は見つめていた。

「きれい……」

月華丸がくすりと笑う。

「その櫛をいただけるかな？」

買った櫛を彼は彼女に渡した。

「いけませんわ！そんな……。本当に申し訳ありません、私がついてしまったから」

頭を下げたまま受け取ろうとしない織紗那の手を取り、包むようにして再び櫛を渡した。

「気にするな。私があげたかっただけなのだから」

彼女はそれ以上なにもいえなかった。

散々歩き周り日没も近くなった。織紗那を送る途中、月華丸がぼつりとつぶやいた。

「いろいろありがとう」

「？」

「しばらく、屋敷に行くことができなくなりそうなのだ。もしかしたら、もう会えなくなるかもしれぬ」

織紗那の胸が、どくんとした。

「……月華丸様？私、何か失礼な事でも？確かに、身分をわきまえず振る舞ってしまったかもしれません。どんなにお詫び申し上げても

許していただけませんか？私、貴方様が…」

——好き、とは言えなかった。

そして、これが好きという事なんだと気がついた。

「…私…」

大粒の涙が幾つも幾つもこぼれ落ちる。

泣きながら言葉を探す彼女を、今度は月華丸が抱き締めた。強く、強く…。

「…楽しかった。言葉に出来ないくらい幸せだった。…愛しているよ」

お互いの体温が、お互いを痛いくらいに締め付ける。

「戦だ。戦に行かねばならなかったのだ」

「…そんな…」

「今度の戦は激しくなりそうだ。生きて帰れたら、もし生きて帰れたらもう一度町へ行こう」

織紗那も彼を抱き締めた。

「生きて帰ってくださいっ」

必ず！

寿永三年。

3か月くらい経った日の事だったと思う、寒さが厳しさを増した頃だ。

“月華丸戦死”と彼女が聞いたのは…。



「今日は花見だ！」

久々の学校。帰り際、陽太郎が駆け寄ってきた。

「はぁ？」

「今日バイトじゃないんだろ？日向んちで花見しよーぜ」

陽太郎なりに、親友なりに気を遣ってるんだろう。今日は彼がバイトの筈だ。陽太郎は日向と違い、体力作りも兼ねて倉庫で働いている。

「お前が今日バイトだろ？」

「あぁ、臨時休暇だ。迷惑か？」

陽太郎から“迷惑”などという言葉が出るとは、夢にも思っていなかった。もちろん、日向的にも迷惑なんてものではなくむしろありがたかった。けれども

「花見は無理だな。うちの桜さ、枯れそうなんだよ…」

「え？」

「いつもみたいに散っても新しい花が咲かないんだ。栄養剤とかさしてみたけど全くだし。もう、ダメかも」

「……」

『私はいつでもここにいるよ』

そう語りかけた桜の言葉も不安に押しやられ、今の日向の気休めにもならなかった。

「なら、お前んちで飲もうぜ。桜なんか今の時期に咲くもんじゃないしさ、春になればまた復活するって」

ちよつとやんちゃな陽太郎の笑いにつられ、日向も笑った。

陽太郎と買い物を買って済ませて屋敷に戻ると、桜の木には花が半分以上もなくなっていた。

「…なんか寂しいなあ」

そんな桜を見て陽太郎がつぶやいた。

「木が枯れると災い起きるらしいんだ。なんか心配で」

「ノストラダムスの大予言が今！って感じ？」

「冗談じゃない！」

散り桜を見ながらの花見だ。花見というより、“嫌な事は忘れよう会”。

「嫌な事なんて長い人生のゴキブリくらいの大きさだ！」

陽太郎が叫んだ。

「ゴキブリは嫌だけど、今日が駄目でも明日があるさ！」

つられて日向が叫んだ。2人とも言ってることがよくわからない。が、元気が出ればそれでいいのだ。

缶ビールを開けて、ぐびびっと飲んだ。

「今日は飲むぞー！」

乾杯としたときだった。背後から女の子の声が出た。

「ねえ、あたしも飲んでいい？」

陽太郎が振り向きながら「どうぞ」と、酒の沢山入った袋を差し出した。

「どれにしようかなあ」

酒を選ぶ女の子を見て、日向が吹き出した。

「君、誰？」

彼女は酒が決まったようで、取り出しながらきょとんと言った。

「レディって呼ばれてた。一緒に遊べてうれしいですう」

少し派手めな化粧とレザー服のパンクなスタイルで、レディとかいう女の子は家の中に立っている。

「……」

誰？と混乱しつつ言葉を無くしている日向に、陽太郎が耳打ちした。
「この俺好みの女の子誰だよ？紹介しろよ」

そう言われても、日向自身誰だかわからないし、なぜ家にいるのかもわからない。仕方なく

「こちら、僕の友人で陽太郎といひます」

「どうも」

と、とりあえず紹介した。それを彼女はにこにこしながら聞いている。そして、日向は一度大きく深呼吸すると我に返り

「ちょっと」

とレディの手を引いて屋敷の別の部屋へと移動した。

「日向！てめえ、抜け駆けすんなよ！！」

「するか！ボケッ！！」

かつて主人だった老婆のお骨が、まだ仏壇にそなえられている。線香臭い、冷えきった部屋。小さな豆球だけが、ほんのりと室内を浮き上がらせていた。

「君は一体なんなんだよ？人ん家に勝手に。こっちだって警察沙汰にしたくないし、泥棒なら素直に謝ってくればそれでいいよ。第一取るようなもん何もなかったろ？」

よく見ると綺麗な顔立ちだ。年は18〜20歳くらい。キツく塗った目元がムツと歪む。

「待ってよ。貴方があたしをここに連れて来たのよ！こんな霊力の強い結界の中、ある程度魂の宿ったものなら具現化して当たり前でしょ？」

日向にとつてはちんぷんかんぷんもいいところだ。結界だとか霊力だとか、漫画や小説の世界だと思っている。

「…何言ってるかさっぱりわかんないんだけど…？」

すると彼女は呆れ返ったかのように言った。

「こんなとこに住んでるのなら、わかって当然なんじゃない？」

レディは日向を無視して陽太郎のところへと一旦戻った。再び戻ってくる手には買ったばかりのお高いギター。レディはギターカバーをひっぺがえし、日向の鼻頭へと突き付けた。

「これがあ・た・し！今から証拠見せてあげるわ」

言うと、レディはアンプもないのにエレキギターを爆音で鳴らしだした。それも、ギターに触れただけで弾く体勢すらとってはいない。曲は購入当日やったバンドでの曲、そして桜に聴かせた曲。彼の癖もリズムもすべてそのままだ。

「：どうして：？」

変な汗が額を伝った。

「言ったでしょ？私はこのギターだって。ギター自身が具現化したものだって。一度体に刻まれたものは、よっぽどのことがない限り再現可能よ！」

自信満々に話す彼女を見て、ただただ呆然とするしかなかった。

「ねえ、そんなことよりよーたらーんとこ行こう？あたしお酒って一度飲んでみたかったんだあ！」

啞然としたままの日向を引き釣り、結局はレディによって陽太郎の元に引き戻されたのだった。

「ただいまあ」

見た目には似合わないあつけらかなとしたソプラノが響く。

「2人で何話してたんだ？」

陽太郎の問いに日向はまだ整理しきれてない頭を回転させようと必死だった。すると変わりにレディが

「私ね、ばーちゃんの遠い親戚なの。ばーちゃんが死んでこの家の事でちよつとね。たいした事じゃないわよ」

と口を挟んだ。そして小さく日向にウィンクをした。

「ま、まあね：ははっ、」

笑うしかなくなって、彼も飲みかけのビールに手をかけた。

散る桜を見ながらいろいろ考えた。将来の事、今、これから、そして過去。考えれば考えるほど涙があふれそうになった。それでも側にいてくれる陽太郎や心配してくれる仲間達を見て、本当の幸せをなんとなくだけでもわかったような気がした。

3人で散々飲んで、気がつくといつの間にか朝方が近くなっていた。依然桜は散り続け、紺色の空も白くグラデーションがかかりはじめていた。側ではいつの間にかレディが眠っていて、陽太郎もくんくんとうたた寝しかけていた。

日向はふわふわとする意識の中、二人を寝かそうと（ついでに自分も寝るために）毛布を取りに行こうと立ち上がった時だった。突然

ドーン！！

という大地をも揺らすもの凄い轟音と、天地が裂けるかと思う程の閃光と共に桜の木に雷が落ちた。眠りかけてた陽太郎は飛び起き、眠っていたはずのレディまでもが起き上がった。日向は突然の落雷に思わず叫びながらひっくり返っていた。

頭の中が真っ白になって目を真ん丸にしている3人の前に、今度は土の中から巨大な蛇が現れた。蛇はぐるぐると桜の木に絡みつきのながら、赤い舌をチロチロと吐き出し睨み付けてきた。続いて巨大な灰色の犬が空をかけながらどこからともなく現れ、桜の根元に舞い降りた。現実味のない現実を目にし、酔っ払った勢いもあったのか日向と陽太郎はほぼ同時に気を失った。

どのくらい眠っていたのか…。

日向は子供の無邪気な笑い声と鞠唄につられるようにして、目を覚ました。

「起きた？ よーたるーは当分起きないねえ。酒は飲んでも飲まれるなって教わんなかったのかしら」

隣りで寝息を立てながら気分良さそうに眠る陽太郎の鼻をつつきながら、レディはけけらと笑って言った。

いつの間にか畳の部屋へと移動させられていた。レディを見て、夢ではなかったんだと実感する日向。まだ覚めきらない頭でレディに聞いた。

「何があつたの？」

「ん？」

「確か雷が落ちて…」

ああ！とレディが口を開いた時、襖ががらりと開いた。そこには不気味な老婆が立っていた。目は鋭く、見据えられるとぞっとした。

「…本当によう似ておりますこと。姿形だけでなく声も雰囲気も…」

けけつと嗤う。

日向は怖い、と思った。ここまで不気味な人間がいていいものだろうか、と思うほど誰だ、と聞きたいのに声が…。

「…蛇老、怯えているではないか。月華丸様ではないのだよ」
横から黒づくめの男が現れて言った。

「…桜や。お主に任せるぞや」

ふいっと蛇老と呼ばれた老婆は去っていった。やれやれと黒づくめの男も後に着いて立ち去った。

「さ…桜…？」

やっとか細い声が出た。

一枚の薄紅色、ひらひらと舞い、いつしか美しい娘の姿へと身を変えた。

「日向、元気にしてた？ 思ったより早く会えたわ」

いつもの春の日差しのような暖かい笑みで桜は笑った。

「大事な事を話さないといけないの。酒猫一族として、この家の主として」

ふと、険しい表情になる。ただ事ではないかと、隣の部屋に移った。仏壇とギターがそこにはある。なんだか少しばかり物悲しい空間。
「…単刀直入に申し上げます。先程の雷は、過去…すなわち平安の時代からの封印が解き放たれた合図でございます。あの桜の木は幾千年の時を、術者と共に生きてきた木。あの世とこの世の空間のバランスを支える為にある木です。ですから、この家に住む者は代々

あの桜の木を守ってきました」

外から再び聞こえる子供の無邪気な鞠唄。

「平安の時、この家には織紗那樣と呼ばれる強靱な法力を持った術者が住んでいました。ある日、織紗那樣は決して結ばれる事なき恋をしました。結ばれる事はありませんが、共に語り合う事はできると……誰もがそう信じておりました」

そこまで話した時、桜の目にきらりと光るものがあった。

「……先程の老婆は蛇老、そして黒づくめの殿方は戌亥といって、私も含め織紗那樣の忠実な式神になります。私達は常に織紗那樣の幸せを願ってました。あるとき織紗那樣の愛していた殿方が戦にて亡くなり、織紗那樣は7日間部屋に閉じこもり8日目に姿を現しました。どこか物静かに、雰囲気もがらりと変わっておられました。その7日間の間に起きた出来ごとを私達に決して詳しくはなくとも話してくださいました。そして、織紗那樣のおっしゃった約八百年後というこの日を私達は待っていました」

そこまで一気に話終えると、桜は一度深呼吸をした。

「一年です。一年しかありません。桜の木に封じられていた強靱な鬼、鬼を桜へ封じる事。それが出来なければ、この世は終わりです。私達も力及ばずながらお手伝い致します。ですから……ですから……織紗那樣に力を貸してただけませんか？」

突然桜が日向に向かって土下座をした。

「月華丸様と同じ魂を持つ日向様、でなければ出来ないんです！半ば泣きながら頭を下げたままの桜を抱えるようにして日向は言っ

た。

「桜、頭なんて下げないで。月華丸とか僕にしかできないとかまだよくわからないけど、出来る事ならなんでもするしさ」

すがりつくように桜は言った。

「ありがとうございます」

止めどなく、桜の目から涙が溢れた。

日向自身複雑な心境ではあったが、桜が戻ってきたのがうれしか

った。また昔と同じような生活が戻ればと強く願った。

◆妖刀と鬼◆

昔々はるかむかし、一人の娘がおったそうなの。

娘はたいそう腕の立つ術者で、村人からは妖術遣いと恐れられておった。

人々は村で病が流行れば娘を罵り、貧困に至れば娘を呪ったと伝えられている。

ある晩屋敷に、一人の村人が火を放ったそうなの。

しかし、火はみるみるうちに屋敷に広まるどころか龍となり、その村人を飲み込んだとか。それ以来、罵るどころか誰一人屋敷に近付かなくなったと。

ある寒い日、娘の屋敷の近くを一人の青年が通り掛かった。青年は冬だといふのに咲き乱れる桜に、心底心を奪われた。

青年が桜に見とれていると、娘が声をかけてきたそうなの。青年はこの不思議な娘に心奪われた。娘も、恐れを見せない青年に心奪われた。

何日か経ち、青年は戦へと行かねばならなくなった。この戦はとてつもなく大きな戦であった。戦に行く前に、青年は娘に恋語った。娘はそれはそれは幸せだと思った。このままの時間が続けば良いなと願った。

けれども、天はなんとも無情ではあるまいか。青年はその戦で敵に捕らえられたあげく、拷問の刑に処せられ無残な最期を遂げた。

娘は泣いた。泣いて、涙が枯れる頃、一人青年の墓にて骨と灰を掻き集めた。娘は青年を生き返らせようとしたのだ。しかし娘のそれはそれは強い術は、生き返らせるどころか娘をあの世へと飲み込んでしまったのだった。

あの世で娘は、鬼に出会った。鬼は娘の強い法力を欲しかった。しかし、娘は鬼より強かった。

鬼は泣いて謝った。そこで娘は、元の世に帰る方法を鬼に問うた。

鬼は言った。命を助けてくれたお礼に、法力を分け与えましよう。此所へ来る時以上の法力があれば戻れますよ、と。娘は悦んだ。

そして、この世に戻った娘は鬼に感謝を込めて桜の木に鬼からもらった法力を封じた。

そののち、愛した青年の死を弔うように、青年の骨を一本の刀に仕込み、自らの血で刀を作らせた。刀は『妖刀―月華丸』と名付け、妖怪退治に使ったといふ。

桜は、仏壇さくらの上の天井を指差した。

「あの場所を外す事はできますか？」

桜が何百年も守って来た場所だった。それを守る為、唯一桜は人形ひとがたとしてこの家にいた。

「？ああ…開けた事はないけど。天井…だよね？」

桜はこくと頷いた。

ちよつと待ってと日向ひうがが脚立を持ってくると、それに上がって天井を外した。大量の埃が外した天井の板から舞い、ゴホゴホとむせ込んだ。

「…何百年分もの埃ですから」

桜の苦笑いも涙で滲んで見えた。

「仏壇の丁度真上くらいにないかしら？少し大きめの箱よ」

手探りで探すと直ぐに見つけた。ゆっくりずるずると引きずり出す。引きずられて、更に埃が宙を舞った。

「この埃なんとかないかな」

こりゃたまらんとばかりに左手で仰ぐと、思わず吸い込んだ埃に鼻がムズツとした。

あっ、と思った瞬間だった。

派手なくしゃみと共に、日向は箱と一緒に脚立から転げ落ちたのだった。

「!日向大丈夫?」

痛いやら埃が凄いやらで何がなんだかわからない。

「痛っ…。今思いつきり腰ぶつけた…」

腰の辺りを擦りながらもゆっくりと体勢を立て直す。桜に心配されながら、情けないやら格好悪いやらと正直へこむ。

滲む視界で共の落下物を見ると、その箱は1m弱くらいの木できている箱であった。不気味に幾つもの御札が貼り付けられている上、仕上げと言わんばかりに縄で何十にもぐるぐると巻き付けられていた。

桜は言う。

「これは日向のモノ。これから必要になるものだから」

「……」

ちょっと不気味すぎて、あんまり開けたくない箱だ。

「…開けるの?」

「?ええ」

「……」

崇られそうな思いを内に秘めて、日向は縄から順に外していった。最後に蓋を外す時、ゆっくりと深呼吸を一度だけした。

「は、外すぞ」

どきどきとする心臓。

「どうぞ」

それを涼しい顔で見守る桜。

カタン…と、腐りかけた木造の蓋を外すと、中には何百年も眠っていたようには思えない装飾の施された綺麗な刀と、それと同様に小さな手鏡が入っていた。蓋の裏にミミズののたくったような（腐敗仕掛けている為、よく見えない）文字、いわゆる行書のようなモノで少し長めの文章が書き込まれていた。

「…昔々はるかむかし、一人の娘がおったそうなの。娘はたいそ

う腕の立つ術者で、村人からは妖術遣いと恐れられておった……」

「？」

きよとんとする日向の顔を、桜が悪戯っぽく覗き込む。

「妖刀の出生の秘密ですわ」

鞘から刀を引き出して見る。刃こぼれ一つない。一緒に入っていた鏡にも、曇り一つ見当たらなかった。

「この鏡は、真実を写すの」

そう言って覗き込む桜の姿はそこにはなかった。かわりに薄紅の花弁が、桜のいる辺りに舞っていた。

「真実を見て。人には108つの煩惱があると言われているけれど、常に真実を見つめていればきっと打ち勝つ事ができるから」

包み込むような笑顔で見据える彼女。彼女もまた、これから起こる何かに内心不安を抱えているのはいうまでもない。

また、子供のうたう毬唄が聞こえる。

「日向の家族、紹介しないとね」

「……家族？」

「そう」

桜が立上がり、日向の手を引く。

「こっちへ」

――家族。

彼にとって……日向にとって、受け止めきれないくらいに大きな響きであった。



桜がひっばってきた場所は、特別何があるわけでもない家の庭。

庭にはさっきの老婆と黒づくめの男、それから両サイドをハーフアップに結んだ髪型の先ほどこら唄っていたと思われる子供がいた。

「ああ！月華丸様だあ！」

手に持っていた毬を、日向に向かってポーンと投げる。

「…僕は日向って言うんだけど…」

困ったようにぽつんと言った。

「ねえ、蝶子^{ちょうこ}。この方はよく似てるけど、月華丸様ではないのよ。

日向“様”よ」

様を付けて呼ばれるとなんだかとてもこそばゆい。

「様なんて付けなくていいから。なんか、こそばゆいし」

思わす口を挟む。

くすつ、と桜。

「日向、お世話役の老婆、元は蛇の蛇老よ。身の回りの世話から全て任せて構わないわ」

桜の紹介に、けっけとわらう。相変わらず不気味だ。

「次に黒い殿方、元は大犬の戌亥。忍びとして常に守ってくれるわ。これから日向の剣の先生よ」

「よろしく」

遅いどこか頼りがいのある戌亥を見て、父親がいたら彼のようにだったのだろうか、ふと考えた。

「最後にこのチビッコちゃんは蝶子。元は蝶だけど、人によっては座敷童ともいうみたいね。妹だと思ってあげて」

無邪気に笑いながら、蝶子は日向の持つ鞆を取り上げた。

「てーん、てーん、しよう？」

毬つきをせがむ蝶子。

突然の環境の変化にただ呆然としながら、それを飲み込もうと努

力するしかなかった。困惑した表情だったのか、上手く反応を表せないでいると桜が

「今はまだいろんな事が突然過ぎてよく飲み込めないんだと思う。少しずつでいいの。本当の家族みたいになれたらいいよね」と囁いた。

何だか、心から“ありがとう”を言いたくなった。

「織紗様はまだ眠っていらっしやいますから、ご飯の用意でもして待ちましょう。ご紹介はのちほど」

桜の言葉を合図のようにして、蛇老が台所へと消えていった。

.....

.....

.....

「今日は、お母さんとお出かけしようね」
泣きはらした目で、母だと語る女は言った。

いつも一緒にいた男性：つまり、記憶上父親だと思われる人物の姿はない。母親もまた、記憶上の人物であり、既に霞みがかかってしまってる。

手には一枚の紙切れが握られていた。

「日向の好きなカブト虫、探しに行こうか？」

母は、無理して笑っていた。

母とついた場所は山と田んぼに囲まれた、何もない場所。母は言う。

「少し待っててね」

小さなバス停：着いた場所で待たされて、やって来たのは田舎の駐在さん。

「坊、大丈夫か？」

きよとんとした。

そのまま、手を引かれて交番へ。小さくて平和な村だったから、こんな事でも事件になったらしい。

何日経っても待てと言った母は迎えにこないし、気付けばお婆さんの家に引き取られる事が決まっていた。捨てられたんだと気付くまでには、かなりの時間がかかった。お婆さんは良くしてくれたけれど、家族とか家庭とは何か違う感じだった。そして、もう家族ってやつとの縁はないんだらうとこの時心からそう思った。

・・・

久々に並べられた朝ご飯。卵焼きに焼き魚、ホウレン草のお浸しにお味噌汁と炊きたてのご飯が人間の数だけ用意されていた。

「日向様、お友達を起こされては？」

蛇老が食事を並べながら言った。

「あ！うん」

：とりあえず、一応今日も学校は学校だ。

陽太郎ようたろうの寝ている部屋の襖をあけると、彼は寝苦しそうにゴロゴロと転がっていた。

「陽太郎…、朝メシ」

日向がそういうと、陽太郎は寝ぼけまなこで頭をぼりぼりかきながらゆっくりと起き上がった。自慢の赤メッシュも乱れて、酷く滑稽に見える。

「…気分悪い…」

呆れて言った。

「飲み過ぎだろ」

彼は夢だと思ってるんだろうか、昨晚みた蛇や犬や雷の事を。聞かれたらどうしようか、日向の頭の中では目まぐるしい緊急会議が行われているようだった。

「そういえば…」

陽太郎が疑問符混じりに問い掛けた。

「はい？」

なんとも不自然な返答だと、自分でも情けない。今だいい言い訳が

思いつかない。

(…とりあえず、しらばっくれるか…)

再び心臓はどくどくとダンスを始めた。

「なあ？朝メシはお前のお手製か？」

はあ…と溜め息が出た。

「…いいから来いよ」

「新妻みたいな奴だな」

去り行く日向の背中に、ぼつりと言った。

日向が再び戻ると、食事を並べる蛇老を始め戌亥、レディ、桜、そして見知らぬ和服の女性が座っていた。和服の彼女は、どこことなく桜と良く似ていた。

「織紗^{りしやな}那樣、ほうら！よく似ているでしょう！」

桜が日向を指差しながら、初めて見る女性にきゃっきゃと話す。すると女性は、日向をちらりと見ただけで頬を真っ赤に染め

「これ、指を差すものではありませんよ」

と言った。

「…あの…戌亥さん、彼女は？」

「戌亥で構わんよ。織紗那樣だ。平安の京から来たんだ。昨日の落雷による次元の歪み、それから桜の木の靈氣によって吸い寄せられたんだ。皆この日を待っていた」

言葉が出ない。出るはずもない。漫画や映画で起きていた事が現実に起こりうるというのであろうか？そんな馬鹿げた話…しかし、目の前には“平安”の時代から来たと言う女性がいるのだ。どこことなく憂いな気を纏い…。現実には日向に“信じる”と言う。

「…はじめまして」

「こちらこそ」

彼女は笑ったが、泣きたいのを堪えたような痛々しい笑みに見えた。

「…ういーす…」

大あくびをしながら、陽太郎が居間に入ってきた。髪はぼさぼさのままだ。

「……」

彼は初めて見る酒猫家の人の多さに言葉をなくした。そして驚いた表情のまま横目で日向をチラリと見ると

「…先に顔洗ってきます」

と居間を飛び出した。そんな陽太郎に対して、彼は苦笑するしかなかった。

5分くらいして彼は戻って来たが、日向の腕を無理やりひっぱると再び居間から出た。

「おい、日向！なんかいっぱい人がいたけど、何？てか、昨日雷の後にすぐ寝ちまったからなあ。俺が寝てる間…って言っても朝方くらいだろうけど、何があったんだ？」

いきなりの質問責めである。心配と半ば好奇心、しかし陽太郎の場合、好奇心の方が勝っていた。

日向は指をくるくる回しながら、えーつと…と必死に考えこんでいた。

「何から話せばいいのか、か？はじめてから話せばいいさ！」

陽太郎は尚も突っ込む。更に考えた挙句、開き直るかのように陽太郎の両肩を両手でバシイン！と叩いた。

「陽太郎クン！」

「なんだね、日向クン！」

「あの人達は親戚なんだ！婆さんは、婆さんの姉でおっさんはお婆さんの息子、奥にいた和服の女の子はストレートの方が幼馴染みでその横が婆さんの姉の娘オウケイ？」

捲し立てるように言いながら、なんて自分は頭がいいのかと腹の底で正直思った。

「皆僕を心配してこの家に来てくれたんだ。ほら、僕はお婆さんと血の繋がりはなかったし。暫く一緒に暮らす事になるみたい」

すると陽太郎は微かに涙ぐみながら

「よかったなあ」

とバッシバッシ同じように日向の肩を叩いた。

日向の中に罪悪感が少しだけ生まれる

「ようし！飯食うぞっ」

居間に入る陽太郎を見送りながら、日向の全身から大きな溜め息が出た。けれども、雷の後の蛇だとか犬だとかの突っ込みがなかったのには安心した。というより、彼の話し振りが陽太郎には見えていなかったようだ。

「…これからどうなるんだろ」

今頃になって不安が込み上げて来た。



朝ご飯はかなり満足行くものであった。陽太郎もまた美味しい美味いと遠慮なしに頬張った。

朝食を済ませると、学校に行く為陽太郎と家を出た。

大学でもまた日向の人気はバンドの影響もあってなかなかのもの、もちろん陽太郎も日向ほどではないなしろ人気はあった。

久々の登校、しかも2人揃ってとあって校門前に張っていたファンクラブの子達がきやあきやあ騒いでいた。恥ずかしいなと思いつつも不自然なスマイルを浮かべていると、後頭部辺りに鈍痛をくらった。

「痛っ！」

思わず陽太郎とハモる。

「んっだよっ！」

口より手が早いのは言うまでもなく、頭に來たのかファイティングポーズを構えながら陽太郎が振り向くと、そこには女教師が立っていた。年は30代後半くらい、髪をおダンゴに上げ、化粧っ気はないが、童顔なせいか不思議と違和感を見せなかった。

「あらあゝ。おはよう、葉菜ちゃん^{はな}」

これでもかといわんばかりに怒りを押さえ込んだ笑みは、正直2人を怖いと思わせた。

「おはよう、学園のアイドル2人組」

素晴らしいながら葉菜ちゃんと呼ばれた教師は、陽太郎の耳をひっぱりながら耳元で怒鳴った。

「酒猫君^{さかね}はともかく、あんたは留年もやばいつてのに何やってるの！？2人共お酒の臭いがすごいわよっ！ここは学校なんですから、場を弁えなさい！！」

「わーかったよ！わかったから、耳痛いって」

「まったくもう！」

葉菜ちゃんは呆れながら陽太郎の耳を離すと、今度は日向に話しかけた。隣りで陽太郎が少し離れながら耳を押さえて女教師に見えないよう、手の甲で日向の方へシッシとあおっていた。

「酒猫君、今は家の事が大変だとは思うわ。けれどここは学校です。成績優秀、スポーツ万能と言う事ないかもしれない。でも“天才”というレッテルに溺れちゃいけないわ。貴方もしっかり場を弁えなさい！」

「…はい」

――天才。

正直、嫌な言葉だ。家庭だけではない、人としても人とは違うと言われているようで。悔しい…そんな言葉が、感情が真っ先に溢れて来た。

「佐藤先生、僕は天才なんかじゃないです」

ぽつりと言った。すると彼女は溜め息混じりに小さく笑った。

「あのね、酒猫君。天才とは80%の努力と20%の才能だって昔のダレソレが言ったわ」

「…エジソンっスね」

「そう、エジソン」

「なら僕は80%の努力だけで成り立ってますよ」

そう苦笑する日向に、葉菜は肩をぽんぽんと叩きながら一步を踏み出した。

「言ったでしょ、“レッテル”って。努力なく天才が生まれる事なんてほとんどないんだから。ほうら、早く教室入んなさい」

「……」

ふうっと、溜め息。けれども、あの先生はやっぱり好きだと背中を眺めながら思った。

「俺と日向の態度違う事ないか？」

隣りで陽太郎は大変不満そうだ。

「かわいがられてるんだって」
そう苦笑するしかなかった。

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•

•
•
•

「絶景かな絶景かな♪」

一人の女性が高い高圧棟の天辺に立って、景色を眺めていた。少し乱れた風な着物に、長く柔らかく巻いた様な髪。織紗那という娘と

瓜二つであった。

「これがヘイセイって時代なのねえ。わくわくしちゃうじゃない」
彼女は首を左右にコキコキと動かした。

「…鬼沙那様、数百年振りの自由はいかがですか？」

彼女の髪から、やせ細ったミイラのような角の生えた小さな霊体が、ひよっこり顔を出して言った。

「もう最高！」

そして、無邪気な笑顔はふと真面目になる。

「餓鬼、私の力はまだ充分に戻ってないの。あの桜のせいだね。だからあの憎ったらしい桜の木を消して、本当の自由を手に入れるつもり。手に入れたらこのすっぱらしいヘイセイと霊界を昔みたいに繋いで、私が女王となるの。人間なんて私のオモチャ、良質な人間の魂を存分に食べ、毎日阿鼻叫喚のオーケストラを聴くの。そしてら餓鬼、あんたはパラダイスの一番偉い人よ」

「御意！有り難きお言葉」

鬼沙那はけらけらと笑った。

「毎日おいしい魂食べ放題ね！」

そして、ふと思いついたように顎に指を付けて空を見上げた。

「そそ。織紗那とかいうクソ生意気な女術者覚えてる？」

「ええ、しつかと」

「そいつとねえ、いつか感じたかなり良質な魂の臭いがするのよね…」

表情が濁る。

「生まれ変わりですか？」

餓鬼が問う。

「うーん…、良質な魂は変わりっぽいけど…あの女は直接的なの。ついでに嫌いなあの女のペットの臭いも…」

ありえない、と思いつながら何度も臭いの確認をするが、やはり答えは変わらない。

「鬼沙那樣、刺客と密偵を送ってみたいかがですか？」

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•

•

今日のバイトは休みだったが、陽太郎がバイトだったので真っ直ぐ家に帰った。バイトの日を替えてもらっていたらしく、交替をしてもらっていた人の関係で早めに出勤した。

な笑い声に、なんだか無性に泣きたい気分になられた。

(…居場所：なくなつたみたい…)

無理して笑おうとした。が、笑えないうえに屋敷に入れなかった。足が動かなかつた。

諦めて回れ右した時、笛の音が聴こえてきた。物憂げで、悲しげな笛の音。音のする方向へと目線をやると、屋根に織紗那が座っていた。

「危ないよ！」

思わず叫んだ。日向の声に気付いて織紗那もほほ笑むが、その表情は暗くてよく見えなかつた。

「大丈夫！おいでなさいます？」

再びにっこりほほ笑んだようだった。

「あ、うん」

なんとか入る口実が見つかり（実際、彼の家であるのだから口実なんていらないのだが）よかつたと再び門の前に行くと、今度は蛇老が立っていた。

「おかえりなさいませ」

「…た、ただいま」

屋敷の庭では蝶子と桜が遊んでいた。

「桜、織紗那さんどうやって上つたの？」

長い梯子がなければ上がれるはずもない。この家で屋根に上れる程長い梯子なんて見た事もない。すると桜は「蝶子、織紗那様のとこ行く？」

と聞いた。

「うん！」

そして手毬を桜に渡し、てけてけと屋敷の中にかけていった。

「日向」

桜が背中を押した。

蝶子についていくと彼女はトイレの前で立ち止まり、少し離れて思いつきジャンプをした。壁に小さな隙間が出来た。蝶子が押すと、壁の中に人が一人入れる程度の小さな梯子がつけてあった。

「…どんでん返し!？」

忍者屋敷か、ここは!と思いつつ梯子を上がると屋根裏につながっていた。更に上がると、屋根の上、丁度織紗那の隣りに出た。一匹の蝶がひらひら。

「いらっしやい」

「いらっしやいました」

照れながら隣りに座る。

「わぁ!気持ちいいね。星も月も綺麗♪」

満天の星空、秋ゆえ月も美しい。どこか物憂げで泣きたくなる。

「初めてですか？」

ゴロン、とした。

「うん、あんな隠し通路があるなんて知らなかった」

思わず苦笑い。

「日向さんから見れば昔ね。昔はこの屋敷から私達術者が出る事は許されなかったんです。桜を守らなければいけないかったけれど、同時にこうして俗世を守る事も必要でした。その為に必要なからくりだったんです。まるで忍びのお屋敷みたいでしょ？」

彼女もまた苦笑いを浮かべた。

「でもすごく楽しいかも。もっと小さかったら、毎日冒険だったかもね」

くすつと笑った。

「ねえ…」

声が重なった。

「ごめんなさい、でしゃばって」

「謝る必要ないしでしゃばってないよ。言いたい事は言っていないし、そりゃ織紗那さんの時代には封建制度ってのがあって身分の差があったんだろうけど、今現実には存在しているのは平成っていう時代なんだよ。平成では市民平等なんだから」

「そう…なんですか。市民平等…でしたら…もしかしたら、身分を考えず…その…愛するもの同士結ばれる事も…可能なんでしょうか

「？」

「？もちろん」

そう答えて日向がふと隣りをみると、月の光に反射して宝石の様な
しずくが瓦の上に何滴も落ちては消えた。

「…え…あ、あの…織紗那さん？」

思わず慌てて飛び起きた。

「日向様、織紗那で結構です」

口調だけは冷静に言う。

「あ、いや、僕も日向でいいけど、なんかひどい事言っただけかな？ 謝
るよ」

「…いえ、気にしないで下さい。ただ…」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・



なんとなくまだ違和感はある。寝起きの顔を眺めながら昨晚を思い出した。

『ただ、そんな時代に生まれたかったなって』

正直、そのセリフは胸の中をえぐられるような痛みを感じさせた。

『…日向は好きな方いますか？』

『今は特に。そんな余裕なくて』

『私はいました。決して結ばれる事はありませんでした。それでも語り合う事くらいは出来ると、そう思っていました。けれども彼は戦で、命を落としました』

『戦で？』

『そう。敵に捕らえられ、大変惨い殺され方をしたようです。遺体は山の麓に投げ捨てられ、発見されたときは獣に食い荒らされたと。私は悲しくて…悔しくて…彼の魂を呼び戻せないかと禁断の術に手を出してしまいました…』

『……』

『…日向？あの方は私を恨んでいると思いますか？』

わからない、わかるはずもない。それなのに…

『…恨む筈ない』

考えるより先に口に出していた。

「…日向」

顔を洗っていたら、背後で声がした。

「おはようございます」

「あ、おはよう」

織紗那だ。

「昨日はありがとうございました」

彼女の表情が昨日より明るく見えた。

「何もしてないよ？」

けれども彼女はくすくすと笑った。

「私は、元気をいただきました」

なんとなく、日向も吊られて笑った。

「元気かあ」

「はい、元気です。朝食出来てますから」

につこり笑いながら、彼女は居間へと戻っていった。

支度を整え日向も居間へと向かう。居間では昨日と同じように、織紗那、桜、戌亥、蛇老、レディが居た。実際食事を取るのは日向と織紗那のみ。特に急いだ風でもない朝だった。

「日向殿、今日から剣を教えたいのだがよからうか？」

朝食を食べていたら戌亥がいった。

「…剣：要するに剣道だね？」

「まあ、そんなとこだな。あの刀を使いこなしてもらわないと」

日向が箸をコトリと置いた。

「日向様、お口に合いませんでしたか？」

心配そうに蛇老が問う。

「やはり昨日てれびとかいう物の中で小さな人間の作っていた料理の方が、この時代の方には合うのでは？蛇老、精進せねばなりませんよ」

織紗那がもつともらしく言う。

「御意」

蛇老は日向に対し、深々と頭を下げた。

「…蛇老さん、頭上げてください」

「蛇老で結構でございます」

「…蛇老、ご飯はすごく美味しいよ」

「でしたら、お腹でも痛いのですか？」

今度織紗那が心配そうに問いかけた。日向は首を左右にぶんぶんと振ると、俯いたまま答えた。

「：剣道なんてやった事もないし、ましてやあんな重たい刀を使いこなすなんて僕に出来るのになって」

すると今度は桜が言った。

「大丈夫、日向なら出来るわ」

ふふ、と笑う。

「出来ない事を無理にとは言わん。だが基礎からしっかり教えてやるさ。あの刀は日向殿にしか扱えんものだ。それに酒猫家の者だとしたら、いずれ刺客も現われる。身を守る為にと考えればよいよ」
戌亥がさらっと言った。

「：わかったよ」

再び箸を取った。

「あのさあ、日向！」

隅でゴロゴロしていたレディが、急に呆れたような口振りで話出した。

「剣だとかなんだとか構わないけどさあ、あたしも構ってくれなきゃ嫌よ。腕なまるよ」

「あ！ごめん。そういうえばライブも近いや、忙しくなるなあ」

.....

.....

.....

・

「うひひっ…」

ばさばさと大きな羽根を羽ばたかせ、一匹のぬえが舞い降りた。

頭は猿、胴は狸、手足は虎、尾は蛇、実に不気味なその生き物は屋敷の屋根から、日向が出かけるのをじっと見ていた。

そして日向が屋敷から離れると、少し離れた上空からその後を追った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

「…夢のようですね」

織紗那がぼつりと言う。

「こんな気持ちでいてはいけないのに…くつろいでしまう。私のした事は何より罪深いのに…時間も空間もすべて振じ曲げてしまったというのに…」

俯く織紗那を桜がそっと抱き締めた。

「織紗那様のせいではありません。誰も責めたりしません。過去も現在も未来も、私達は一緒。強く強く、素晴らしい聞かせて疲れたでしよ？時に誰かに頼るのもいいと思います、私達はこの命果てるまで織紗那様にお仕えいたします」

コクリ…と頷く。

「…それに…」

桜が抱き締めていた手を肩に置き直し、顔を見ながら話を続けた。

「織紗那様が禁断の術をお使いになった事だけが、空間や時間の歪みの原因ではないと思います」

「？」

「…先日、正式な酒猫家の血は途絶えました…。桜の木を制御できる者はおられません。それによる力の暴発と織紗那様による術時の力が共鳴したものが原因と考えられます」

「……」

織紗那の目の前が、一瞬にして真っ暗になった気がした。

◆日向只今修行中◆

いつもより早めに帰宅した日向は、早速戌亥のスペシャルメニューを受ける事となった。

日向の話を聞いて陽太郎が、面白そうだと遊びにきた。スペシャルメニューもまずは体力作りから。ついでに陽太郎も付き合う事にした。

けれども流石にインテリ派。運動神経は悪くはないが持久力はなかった。村の神社を目の前に、日向はゼイゼイと倒れ込む。

「…もう…無理…」

その点、陽太郎に関しては流石ボクサーと言えよう、余裕の彼は呆れて言った。

「なっさけねーな。まだ2kも走ってねーぜ」

せっかく付き合ってやってるのにと言わんばかりに、今度は日向の周りをぐるぐる周り出した。

「ほれ、行くぞ！日が暮れるぞ！」

「…やめれ、うざい…」

切らせた息の間からそう洩らした。

「ふうん、外に出ても大丈夫みたいね」

レディだ。るんるんさせながら歩み寄って来た。

「どう？」

「どうってこいつが体力なさすぎて話にならん」

陽太郎の皮肉に付き合う元気もないらしく、2人を横目に日向はヒーヒー言っただけ。

「嫌だ…もう。足痛いし、腰痛いし…帰るっ！」

まるでだっ子の様に日向が叫んだ。

なんでこんな目に…、そう思い始めたら腹が立ってきた。陽太郎は余裕でレディとお喋りを始めるし、自分は自分でなんだか情けない。かと言って今の日向に走らなければならぬ理由というものも見

つからない。妖刀やら妖怪退治やらと言ったものも単に巻き込まれただけのようなもの。戌亥が言っていたように酒猫一族の運命さだめだと言っても所詮血筋の話を出せば日向は赤の他人なのだ。無理に付き合う理由はないはずだ。

「…日向、なんか情けないぞ」

再び陽太郎が呆れて言う。

「…だって…」

叱られた子供のように、日向はしょぼんとしたまま返事をした。だって…の先、適当な帰るための理由もなく、そのまま黙りこくる。やれやれと言わんばかりに、陽太郎は溜め息を吐いてから今度はレディに話を振った。

「…そういえば、なんか用でも？」

話を振られたレディは、思い出したように言った。

「ああ！戌亥っちが、日向に無理なら今日は帰ってきていいぞって。初日だし仕方ないからって」

「ふうん…、だって。日向どうする」

それを聞いた陽太郎は何やら不愉快そう。日向を見る目も、何やら突き刺す様な視線だ。

「…帰る…」

そう呟く彼の中に少なからずの罪悪感が生まれたのも事実。が、同時に情けなさに押しつぶされそうなほどへこんでいた。

「…ごめん…」

帰り、陽太郎にぽつりと言った。

「なにが？」

「……」

答えようもない。

「…日向、明日ジムに来る？」

そう言われてふと考えてみたら、陽太郎のジムなんて覗いた事もなく、ましてや興味を持ったこともなかった。

「…うん」

「…おうっし！明日開けとけよ」

なんだか分からないが声の低音の響きに、鳥肌が立った。

「ただいま…」

と、何故か日向が陽太郎に隠れて帰宅すると、織紗那がにこにこしながら駆け寄って来きた。そして、ずっと正座すると指を3本ずつつきながら

「日向も陽太郎様もおかえりなさいませ」

と言った。

「…おっ！様なんて初めて」

陽太郎が感動した。

「お風呂の用意が出来てますから、食事が出来るまで先にどうぞ」
2人同時にコクリと頷いた。

「日向、後で遊ぼうねえ？」

レディが負けずにせがむ。日向は何故か顔を赤らめつつコクリと頷いた。

古い家だと言えど時代の流れと共に、風呂だのトイレだのの設備はやはり年寄りが住む為だともあって造りかえられてきた。ただ風呂桶だけはお婆さんが気に入った様で、五右衛門風呂のまま。陽太郎もなれないうちは、底板のバランスを崩し溺れかけ（多分3回くらい）、その度日向に助けられた。

汗泥で汚れたスポーツウェアを洗濯籠に放り投げ、長い髪を束ねたゴムを外した。細く柔らかなねこっ毛の髪が、さらりと垂れ下がる。浴室に入ると手で湯加減を確かめる。

うん、ばっちり。

五右衛門風呂だがいっちょ前にシャワーは設備されているから、取りあえず頭からお湯を被った。髪を洗おうとシャワーをとめた時

「失礼します」

と声がして、浴室の扉が開いた。

「!？」

織紗那が白い浴衣（肌着だと思われる）で正座しながら覗きこんでいた。

「日向…」

動きがふっと、止まる。すると彼女は顔を真っ赤に染めながら、両手で軽く頬を押さえつつ

「…あら、やだ」

と、まるで語尾にハートマークでも付けているようにボソリと言った。

「どどどどどど、何つつつ??？」

支離滅裂である。動揺した彼は、取りあえず引っ掛けてあったバスタオルを取ろうと急いで立ち上がり、床に滑って思いつきり仰向けにコケた。

気を失うとまではいかないか、目の前でお星様がきらきら星を唄ってるようだった。

「大丈夫ですか?!」

慌てて日向を起こそうと立ち上がった彼女も、また床に滑って転んだ。そう、五右衛門風呂以外は近代的造りなのだ。風呂釜付近以外は滑りやすいタイル張り。

「きゃっ!」

と日向の上に崩れた。恥ずかしいやら体中痛いやら…そんな彼の顔面に、大きくはないがそれなりの女性特有のクッションがのし掛かって来た。しかも、転んだ瞬間どこかに引っ掛けたらしく若干乱れ気味だ。

「どうしたっ!？」

バァンッ!と勢いよく扉が開け放たれ、陽太郎が飛び込んで来た。そして彼は一瞬静止すると

「何考えてんだ!?!風呂場ですんなよっ!お前にはムードってやつがないのか?!女みたいな顔してるくせにっ!!!」

といいながら大股でズカズカと入って来て、頭は織紗那の下にあたので膝の辺りを叩いた。明らかに勘違いしてる彼にムカっとして日

向が蹴りを入れた為、今度は陽太郎までもが転んだ。しつこいようだが、五右衛門風呂以外は近代的なタイル張りなのだ。よく滑る。陽太郎も織紗那の上に倒れたが、幸い運動神経が良かった為、とっさに身を交わして、彼女の上に四つん這い状態で負担が掛からない様体制を作った。

「馬鹿日向！」

「痛いっ…」

「お前が悪いっ！」

「やめてください！」

おかしい体制での言い争いが続く。

織紗那がやめて、やめてと騒ぐから流石に式神達もやってきた。

一番最初に乗り込んだ桜も、陽太郎同様静止した。

「…織紗那…さま…」

「……………」

その瞬間風呂場だけではなく屋敷全体に2回、ものすごく『痛い音』が響いたのは言うまでもない。

「…厄日だ…」

「なんともまあ、立派な秋だな」

黙々と食べているだけの3人と、薙刀を手にした袴姿、所謂戦闘体勢の桜に戌亥が水を差した。織紗那以外が、キッ！と見つめた。

「……」

日向と陽太郎の左頬にはお揃いの真っ赤な紅葉。実にご立派！

夕飯を先に食べ終えた陽太郎が席を立った。日向がふと見上げると彼は

「便所」

と言い残して居間を出た。再び黙々と食べていたら、突然陽太郎が

悲鳴を上げた。

「！なんだ？痔にでもなったのか？」

呆れた様にぼやきながら日向も立ち上がると、陽太郎が居間に飛び込んできた。

「出たっ！！」

顔面蒼白で彼は叫ぶ。

「なんだ？イボ痔か？」

日向が昼間のお返しと言わんばかりに嫌味ったらしく言う。

「違うわ！ボケっ！！」

日向は陽太郎に、漫才っぽくはたかれた。

「今便所で用を足してたらな、小窓から変なジジイが覗いてて、がんばれーって言ってきたんだっ」

冗談にしては、陽太郎のリアクションがすぎる。

「まじで？」

「嘘だと思うなら見てこいよ」

「……」

絶対嫌！！

織紗那がふと口を挟んだ。

「かんばり入道かもしれないね。屋敷に妖怪が集まってるのがかも……。かんばり入道は厠を寂しくないのが勤めですから、がんばれーって応援はしますが元々厠の神様なので他は何もしませんよ。安心してください」

と、ニツコリ笑う。

「……うっわ……。目茶苦茶迷惑……。てか、トイレ行けないじゃん……」
過去、日向がこれほどまでに家出したい衝動にかられた事はなかった。

陽太郎が帰り、精神的にも肉体的にも疲れ果てた日向は、レディにごめんと言い残して早めの床についた。が、暫くして我慢の限界

に達した彼はやむなく起きるハメとなった。

夜中のトイレがこんなにもオソロシイものだと感じたのは、多分今日が初めて。床の軋む音までが、彼の心臓をあおる。

「…トラウマになりそ…本当、出たらどうしょ…」

願わくば何もない事を願う。

「？」

トイレの廊下に、夜中だというの

に何故か織紗那がいた。

「…あつ、日向…」

何故か、少しだけ安心した。

「どうしたの？冷えるよ」

「…かんばり入道には、私から説得しておきましたから。日向や陽太郎様が怖がるからって」

「そっか、ありがとう」

もの凄く安心した。

日向がトイレに入ってからでも織紗那はまだいた。彼が一安心と出て来ると、彼女は言いにくそうに彼を呼び止めた。

「…日向…、ごめんなさい…。あの、私…」

言葉に詰まる。

「え？」

日向が聞き返すと、彼女は一度だけ息を大きく吸っては吐き、再び言葉を作ろうと必死に勤めた。

「…悪気はなかったんです。ただお背中お流ししようと思っただけで…」

「…あ」

思わず苦笑い。

「気にしないで」

力なく言う。

「その…ぜ、全部見てしまいました…許してくださいますか？」
頭から湯気が昇くらい真っ赤にしながら彼女が言った。『全部』と

言われ、やっぱりと思いつつもキツパリ言われたショックは予想以上に大きかった。

「…うん、いいよ。減るもんじゃないし…」

日向の乾いた笑いがその場に流れた。



「鬼沙那樣、こやつは？」

鬼沙那の肩から餓鬼が覗きながら問いかけた。

「山婆。山から出張してもらった」

ふふん、と自慢げに言う。

山婆は、口からシュコーシュコーと息を吐きつつ餓鬼を睨んだ。

耳まで裂けた口を持つ醜い顔の老婆、こんな目立つやつでいいのかと餓鬼はふと思った。

すると鬼沙那が偉そうに言った。まさしく権力者の特権だ。

「山婆、あんたちよつとどころかかなり不細工ね。若くて綺麗な女になれないの？」

「!？」

流石の山婆も元は乙女。乙女心が傷ついたらしく、少々涙目になっていた。

「…はい」

力なく返事を返すと、山婆はみるみるうちに和服姿の美しい娘となった。しかし鬼沙那は手厳しい。山婆の頭をスッコーンと叩くと

「あんた馬鹿じゃないの？いつの時代の格好してんだよ。山にばかり引き籠ってるからそうなるんでしょ!？」と怒鳴った。すると今度は、巻き髪に白いニットのカットソー、ピンクのミニスカートにロングブーツのまさしく今風ギャルの姿となった。今度は鬼沙那も満足そう。

「やれば出来るじゃない!」

「……」

次に鬼沙那は拳大くらいの小さな提灯を渡した。

「今は『酒猫日向』^{さかねひうが}と呼ばれる人間を狙うのよ。肉体はあげるから、魂は私に持てきなさい、この中に閉じ込めて。但し、織紗那とかいう女術者には十二分に注意して。織紗那は殺してくれても構わな

きやつきゃ笑う。数日振りだった為、日向自身も真剣だ。また陽太郎が迎えにきたら、そんな余裕もなくなる。

そして昼過ぎ、案の定陽太郎が迎えにきた。彼の車に同乗してそのままジムへ。

ジムは陽太郎の自宅近辺にあり『桜木下ボクシングジム』と掲げられた小さなビルだった。

陽太郎に案内されながら更衣室で着替えを済ませると、2人揃って練習場所の真ん中辺りに設置された小さなリングの脇に歩み寄った。丁度スパリングをしていた様で、近くに監督らしいおっさんがいた。何やら陽太郎がおっさんと暫く話をし、おっさんは日向を舐めるように上から下へと見つめると、再び陽太郎と話を続けた。

つまらん…と思ってふとスパリング練習を見上げた時、血の付いたマウスピースが吹っ飛び、日向の足元に転がった。

(ひい！)

「何やってんだ！田中っ！！しっかり歯食いしばっとけや！」
おっさんがリングに向かって怒鳴った。

「す、すいません…」

そして、丁度コングがなった。殴られ役の田中の顔はボコボコになっている。

「あんま顔ばっかやんじゃねえ！田中がつぶれた饅頭みたいな面になっちまうぞ！」

「田中！悪い」

悪気もなさそうに殴る側の男がいった。

「勘弁しろよ。面の事よりパンチドランカーになりたくはねえからよ」

ジム内に小さな笑いが起きた。そんな彼らのやり取りを、日向は果然と見ているしかなかった。何が面白いの理解出来ない。笑えない。

「どうだ？」

陽太郎が話を終えたようで、目をきらきらとさせながら問うた。

「怖いわ。あんな面になりたくない…」

小声で言ったつもりが何故か周囲にも聞こえたらしく、ギロリと睨みつけられた。

「顔面ならまだいい。腹打ちされたときに比べたらな。俺も何回倒れて水ぶっかけられたか」

陽太郎のいつもとは違う姿を見た様で、今の日向には彼が遅しく映った。

「ギターじゃお前には勝てないけどさ、ボクシングじゃ負けねえよ」
くすつと笑う。

「うっし！練習すつぞ」

「おう！頑張れ！」

陽太郎の掛け声に、日向が他人事の様に返した。

「は？何言ってるんだよ。お前もジム生だろ？」

「は？」

只の見学だと思っていた日向には理解が出来ない。

「ま、実際ボクシングやりたい訳じゃねえと思うから、トレーニングコースで申し込んでおいたぞ」

陽太郎という男は、物凄く勝手なのかも知れない。何今更言ってるの？？的な返答に、日向は卒倒しそうになった。

「走るよりいいからな。じゃ、俺はお前の百万倍（↑ハツタリ）鍛えなきゃならんのでまた後でな」

「……」

こうして、抗議する間もなく陽太郎は縄跳びをしに去っていき、

日向は日向ででかい男に引きずられていった。

ボクサーのトレーニングは、思っていた以上にハードだった。取りあえず縄跳びからどうだ、とのことで、日向を引きずっていった

でっかい男が縄を渡した。

彼はここのトレーニングコースのコーチとの事だ。手始めに軽く3ラウンドだけ跳んでみるといわれた。1ラウンド3分、休憩1分。この間を3回繰り返すことになる。たかが3分と思っていたが、実際やってみるとかなりキツイ。カップラーメンの出来るまでがこんなに長いとは思ってもみなかった。それに引き換え休憩1分がここまで短いとは…。彼には3分が1時間、1分が15秒に感じる。そしてコーチは言う。

「…君…体力なさすぎ…」

昨日の情けなさが蘇る。

「まっ、初めは誰でもキツイから、体力なんてぼちぼち付けていけばいいんじゃないかな」

「はぁ…」

溜め息混じりに頷いた。

他には腹筋100回、腕たて200回を取りあえずこなし、再び縄跳び5ラウンドで今日のメニューは終了した。

全部終わる頃、日向は真っ白に燃え尽きていた。

「おう！なかなか大変だったろう」

けられらと笑いながら、陽太郎が歩み寄って来た。流石に彼も若干お疲れ気味だ。

「…明日筋肉痛決定…」

力なくぼやく。

「…いい汗かいてるよ。一緒に頑張ろーぜ」

「…鬼め…」

ジムが終わり陽太郎に送ってもらうと、すぐさま自分の車に乗り換えてバイトへと向かった。本当の所このまま眠ってしまいたいが、そうはいかない。静かなジャズが流れ、お客達がわいわいとお喋りを楽しむ。日向がおはようございます、と挨拶すると、常連客達もおはよう、と返事を返す。

「今日は遅かったねえ、デェト？まあ、ビールでも飲みなよ」

常連の一人から一杯戴いた。

「ありがとうございます。デェトなんかじゃないですよ。友達に連れられてボクシングジム行ってきました。体力ないって言われちゃいましたよ」

わははっと笑う。

「酒猫君はギター弾いてればいいんじゃないの？あさって楽しみにしてるんだから」

忘れてた…。

明後日はバーでのライブ。バンドライブにばかり気を取られて本気で抜けていた。下手したら、当日ギターを持たずに出勤するところだった。

「あはあ…あんま期待しないでくださいっ」

取りあえず愛想笑い。カラン、とドアベルが鳴る。

「いらっしやい」

初めての客だ。白いニットのカットソーにピンクのミニスカート、黒いロングブーツに巻き毛の美女。新顔にしては珍しく一人で店に来たようだ。

「いらっしやい」

と笑顔で日向がお絞りを渡す。

「メニューはありますか？」

「ありがとうございます。人を待ってるだけだから。セックス・オン・ザ・ビーチって出来る？」

「OK」

日向は棚からウォッカ、メロンリキュール、クレーム・ド・フランボワーズを取り出しカウンターに並べた。続いて冷蔵庫からパイナップルジュースを取り出すと手際よく作り始めた。

「お兄さん、長いの？」

彼女が尋ねる。

「否、一年くらいかな」

「そうなんだ」

おまたせ、とカクテルを差し出した。

「…私、これ大好き…」

女がグラスの代わりに日向の手に触れた。更に彼の耳元に唇を寄せると

「ねえ、もし待ち人が来なかったら送ってくれない？」と囁いた。僅かに見える首筋の血管がピクリと動いた。

「…お願い…」

尚も彼女は囁く。

「…もし…ね」

「約束よ」

ふふっと笑った。それから閉店まで3時間の間、彼女はグラスを弄ったりカウンター越しに話しかけたりと時間を潰していた。

「…もう閉店だけど…」

日向がボソリと言う。

「…約束、守って」

「……」

帰り支度をすますと、彼女は店の外で待っていた。

「…遅い」

「ごめん」

ふてくされた様な顔を一瞬見せてから、すぐに笑い出した。

「初めまして！私、兎うさぎといいます」

「あ…、僕は日向ひつが」

つられて自己紹介した。

「じゃあ、今から遊びに付き合って！」

「は？」

兎が突拍子もなく叫んだ。

「だって、本当は今日私の誕生日だったんだよ。って、もう明日か。彼にはフラれちゃったみたいだし。セックス・オン・ザ・ビーチは、本当は彼のお気に入りだったの」

今夜月はないようで、星のまたたきのみが道標。

「…一晩だけの恋もいいでしょ？あとぐされなくて」
兎がいう。

「そんな、もっと自分を大事にしろよ」

日向が車に歩み寄りながら呟いた。続いて助手席のドアを開いて言った。

「もう遅いし。送るよ」

「……（…ちっ!）」

兎は黙って車に乗り込んだ。

「彼氏に何かあったのかもよ？理由聞いてちゃんと話しあいな」

「…そうね。日向、また遊びに行ってもいいかな？」

日向は頷いた。

車で20分、兎はここでいいからと、自宅近辺らしい寺の前で車を降りた。

「…また」

車は静かに走り去った。

「…ガキの分際で生意気な…」



日向は自宅に付くと、玄関で倒れ込んだ。

「…疲れた…」

織紗那が駆け寄る。

「日向、風邪引きますよ」

織紗那の心配そっちのけで彼は言う。

「…知らない」

彼女は大きく溜め息を吐いた。そして手の平を3回程叩き戌亥を呼ぶと、彼を部屋まで運ばせた。

「…全く、世話のかかるぼっちゃんだこと…」

「戌亥、多めにみてあげて」

「御意」

翌日、日向は蝶子の無邪気な笑い声で目を覚ました。携帯についている時計を見ると、既に昼過ぎ。身体中が、昨日の慣れない筋トレのせいでミシミシ唸った。

「…陽太郎のあはたれ…」

起きて一番最初に口を付いて出た。起き上がると更に身体は悲鳴をあげた。ヒドい筋肉痛に泣きそうになりながら耐えていたら、“あはたれ”の陽太郎からメールが来た。

『筋肉痛にはラジオ体操!』

「……」

できるかっ!?

『あはたれ』とだけ返信して、携帯をベッド脇に投げ捨てた。

そしてゆっくりと身体を起こすと、取りあえずシャワーを浴びたいと風呂場に向かった。廊下をよろよろと歩いていたら

「日向あ、おはようう！」

つと蝶子が飛び付いて来た。思わず大袈裟に悲鳴をあげ、そのまま転倒した。

「日向あ？」

蝶子が思わず泣いた。

「ああーん：日向が死んぢやう：」

日向の悲鳴と蝶子の泣き声を聞いた織紗那と桜が、驚いて駆け付けた。

「日向！どうしたんです？」

蝶子は死んぢやう、死んぢやうと依然泣いたまま。

「死んではダメです！直ぐにお医者様を呼びますから。ああ、桜、ここに一番近いお医者はどこ？」

「ええっと：確か、神社の近くに」

「私が行ってきますっ！」

「織紗那樣あっ」

桜が日向を踏み付けて織紗那に飛び付いた。

「ああ、お氣をつけて。陽太郎でもいれば、使いっぱしりにさせていたのにつっ」

織紗那が桜の手をがしりつと握り締めた。

「桜っ！私は必ず帰ってきますからっ」

2人共泣いた。

「：桜：お願い：どいて：」

桜の足下から日向が唸った。今一番泣きたいのは彼に違いない。

「：生きてるから：只の筋肉痛だから：」

「ああっ！日向、なぜそんなとこに！！」

桜は日向の上から、急いで飛び下りた。

「：風呂行ってくる：」

彼はなんだか悲しくなってきた。色んな意味で。

「蛇老に風呂の用意させますよ」

織紗那が言う。

「いいよ、シャワーで」

そう言い残し、彼はふらふらと廊下を歩いていった。壁に激突するたび、桜は大丈夫なんだろうかと思った。

日向が風呂から出ると、居間に遅い昼食が用意されていた。

再び「日向あゝ」と蝶子が駆け寄ってきた。

「蝶子、触るなよ。身体中痛いんだから」

ぷうっと頬を膨らませた。

「つまんなあい」

自分よりはるか年上の子供につまらない対象にされた男は、無言で遅い昼食を食べ始めた。今日のメニューはホウレン草と豆腐の味噌汁に肉じゃが、それと自家製だと思われる漬け物。漬け物はなかなかの美味だった。

今も含めてこの所バタバタしっぱなしの彼が一番有り難いと感じるのは、この3食しつかりと考えられたおいしい食事であった。

一緒に暮らしていた老婆が死んだ時、毎日インスタントで済ます気でいたから特に。

一人でもぐもぐ食べていたら、蝶子がごろごろ転がって来た。

「日向あ、ご本読んでえ」

折角の食事タイムを邪魔されて、彼は酷く不満そう。それでも家族は家族だからと怒る気にはなれなかった。

「ご本は無理だけど、後でギター弾いてあげるよ」

くすりと笑う。蝶子もつられてにつこり笑った。

食べ終わってからは、身体が痛いのもあって秘密の通路から屋根に上ってギターをずっと弾いていた。走ったり、腹筋したりするより何倍も自分らしく感じた。このままずっとずっと弾いていたいと思った。

◆月影◆

「…月影^{げつえい}…」

“父”の声がした。月影…、そう…はるか昔そう呼ばれていた。

「来週、祝言だ。私の親友の娘だ。名を春宮^{はるみや}と言う、気立ての良い娘だよ」

興味もない、むしろ義務だと思った時、再び場面が変わった。

次に現れたのは…陽太郎…？違う、似ているけど…彼ではない。

「月影、めだたい話じゃないか。一杯やろうぜ」

「…ああ、美鏡^{みかがみ}か。私はあまり飲めないよ？」

「わかつてる、たまには酔い潰れてしまえ」

無茶苦茶言うな、と飽きれてまた場面が変わった。

何故か…身体中が痛い。僕の顔の上で僕が美鏡と呼んだ男が泣いている。

「…人を…初めて好きになったんだ。最期の頼み…聞いてくれないか…？」

美鏡の頬に触れると、頬が血糊で真っ赤に染まった。

「…なあ、美鏡。“恋”とは素晴らしいな…」

意識が飛び、更に場面が変わった。

「…この男…口を割らねえ。金にもならんなら殺してしまえ」

殆ど身動き取れない状態をいいことに、盗賊に助けられた。助けられたというより、拉致された。この時僕は覚悟していた。否、多分こうなる前から覚悟は出来ていたこと。死んでしまおう…。こんな“盗賊”の為に家に大金（身代金）を用意させ助かるくらいなら、いつそ死んでしまおうと。武士の恥だ。

「…殺せ…どうせ俺は死んでいるのと変わらん…」

盗賊の振るい上げた刀が、僕の頭部を切り落とした。

[illegible]

.....

「……はは、夢……？」

携帯電話の時計を見ると、まだ6時前。悪夢のせいで寝直す気に

75

「……」

真っ白い肌に、それほど大きくはないが形のよいバストがむき出しとなっている。それを直視し、思わず静止する日向に気付き、彼女は腰まで下ろした薄手の肌着を着直した。

「…やだ…」

決して騒がず大声を立てる訳ではないが、紅潮する頬と目だけは泣いているように見えた。

「…あ…あの…、えっと…」

動揺しすぎて言葉がでない。頑張ったあげく出たセリフは

「いいお天気ですね♪」

「ま、まだ暗いですよ？」

自分の情けなさに死にたくなった。“穴があったら入りたい”とはまさにこの事だ。

「ち、違う…えっと…」

更に謝るタイミングを見失う。取りあえず落ち着こうと一度大きく深呼吸してから両手を合わせ

「ごめん！上しか見てないからっっ！」

と言い放つ。…いかん、墓穴だ。しかし織紗那は

「“おあいこ”と言う事で」

と顔を真っ赤に赤らめながらもそう言った。

「日向、こんな早くからどうしました？」

織紗那が残りの着物を着付けし、帯をしめながら言う。

「…うん、あまり良くない夢を見てね、汗で気持ち悪かったからシャワーでも浴びようかと。時間もまだ早いし、この後少し走ってみようかとも思ってるんだ」

彼は照れながら答えた。

「…日向、苦劳かけてすまない」

ポツンと、言った。

織紗那が風呂場を出ようとすると、日向が擦れ違い様彼女の腕を掴んで引き止めた。

「…ねえ…一つ聞いていいかな？」

「？」

「…平安で死んだ織紗那の恋人の名前…」

振り返ろうとした彼女が顔を逸らしてみせた。

「…突然…なぜ…ですか？」

問い返され、ふと我に返る。掴んだ手をごめん、と離れた。

「…月影様。でも私には幼名である月華丸様げっかまると名乗っていらっしやいました。奥様と同じ名前で呼ばれたくなかったと…のちに戦死を知らせてくださいましたお友達から伺いました」

…月影…。

「…ごめん…」

織紗那は俯いたまま答えた。

「…日向…貴方に逢えて良かったのか…それとも悪かったのか…私には…今の私にはわかりません。それでも、私の中の大きな支えであることには変わりありませんから」

「……」

その場を小走りで、彼女は離れていった。
ふと気付けば、庭の桜は散りきっていた。



織紗那とはそれっきり話どころか目すら合わせてもらえなかった。胸を見たのが悪かったのか…？ふと考えはしたが、あれは不可抗力だ。彼女もおあいこだと言っていた。別に襲うつもりもなかったし、そんな事をした日には“織紗那親衛隊隊長（日向が勝手に思っている）”の桜サマにボッコボコにされるのが目に見える。

なら…と考えて、やはり死んだ恋人の名前なんか聞いたのがまずかったかな、という所に行き着いて、それ以外にはやはり胸を見たくらいしか思いつかなかった。

学校へ行く前にもわざわざ“いってきます”とだけ言いたいのが為に織紗那の部屋に行った。けれども彼女はいなかった。大きな溜め息だけ、誰もいない静かな空間に残してきた。

夢の中でしきりに聞いた『月影』の名。もし自分がそうであるなら、彼女の死んだ恋人であるなら彼女のそばにいられるのは自分しかいない…そう思った。今の自分では何一つ満足にはできないけれど、そばにいて抱き締めてあげるくらいは…。そこまで考えて、目くじら立てつつ『日向のドスケベえっ！』と平手打ちする桜が出て来た。

「……」

無駄に鳥肌が立つ。

「…犯したるか…あの女…」

ポツリとつぶやく。最低である。

学校が終われば今日はライブの為、早めに出勤だ。バイト先に着き裏口から入ろうとしたら、数日振りにあの兎が待っていた。

「やあ？」

少し気まずそうに挨拶すると、待っていたとばかりに彼女も話しかけてきた。今日は胸元が開き気味になった、黒の短いワンピース姿だった。

「昨日来たらね、休みだけど今日ライブがあるってマスターに聞いて来たのよ」

「そっかぁ、ありがとう」

気まずい素振りもなかったので、何か安心した。

「ライブまで後2時間くらいあるからゆっくりしてってよ」

「うん♪」

と笑う。屈託のない笑顔は、また夜と違ったかわいさをみせていた。兎は店に入ると、日向の好きな物を作れと言った。暫く考えカウンターに、マリヴリキュール、グリーンバナナを出すとパイナップルジュースと一緒にシェイクした。誰が考案したかは不明だが、ジヤングルフアンタジーというカクテルだ。兎は美味しいと、2杯程飲んだ。

やがて毎月不定期だが恒例のライブが始まる頃には、立ち見が出るくらい店内に人があふれていた。お陰様で筋肉痛につきバラードしかできなかったが、300万のギターこと“レディ”はいい音を出してくれた。

ついでにギターの話しにしろ筋肉痛の話しにしろ、日向的には適当に喋っていただだけのつもりだが何故かウケたようだった。

8曲程演奏して、一安心すると何故か（いつもの事なのに）小さな花束を8つ程もらった。バラードのみで少々不安はあったが、別段気にする人もいなかったよう。逆に、しっくり終わった気もした。客が引くと再びカウンター内に戻り、2時間程して今日のバイトは終了。その間も兎は飽きずにだらだらと待っていた。

日向が店を出ると、おとといと同じように彼女は待っていた。

「日向、今日は貴方の為に待ってたんだからね。今日こそ付き合ってもらおうよ」

少し膨れたように甘えた声で言った。

「…あとぐされなく…ですか？」

飽きた様に苦笑い交じりに言う

「ばかたれっ！エッチだけが全てじゃないでしょ」

とまた膨れる。

「わかったよ。どこ行く？」

と観念すると、兎はうれしそうに

「じゃあ、私朝までやってるクラブ知ってるからっ！そこ行こう？」
と、まるで恋人の様に腕を引っ張ってせがんだ。

「良いよ。何系？」

「R&Bとユーロかな」

日向の車で20分くらい走らせると、テナントのがらがらに開いた小さな商店街の脇に着いた。兎の案内に従い裏路地へと歩いていくと木製の古い小さな入口があり、そこから地下へと繋がっているようだ。階段を降りると、ブラックライトの青白い光が、踊りあかす若者や外人を照らしながら2人を迎えた。

ブルームーンをカウンター越しに頼み、軽く飲んだ。兎もピュアラブを頼むと、一口だけ飲んでテーブルに置き「一緒に踊ろう」とホールに飛び込んだ。日向もそれに応じた。

散々踊って疲れた頃、二人共ソファに腰掛けた。酔っ払った兎が勢いで日向にキスする。

「気分最高！」

日向もかなり酔いが回っていたため、キスぐらいでは今更気にもならなかった。彼も勢いでキスを返した。調子に乗って、兎が日向の上に馬乗りになる。日向のトロンとなった目が彼女の視線と重なった。

「食べちゃうぞ♪」

と日向の首筋に再びキスをした。

「…普通逆だろ」

兎の唇が彼の白い首筋を這う様に動き、一番柔らかそうな場所にそっと歯を突き立てた。

「…っ！」

瞬間、日向の体がピクリと反応し、そっと彼女を引き剥がした。

「…歯はダメだって」

兎は小さく胸の中で舌打ちした。

もっと酔わせて…もっと…。

ふと視線を脇にやると、隣のカップルがピンクの錠剤を含んでキスするのが見えた。

…確か、計画を練る前に少しだけ勉強した。

ドラッグ。

あれは多分…。

にやりと笑う。

「ちょっと待ってて」

と兎が立ち上がった。

「どうしたの？」

朦朧とした意識の中で囁く。体中が熱い…。

「お酒、欲しいから」

そう言う彼女の腕を日向は力いっぱい引き寄せた。

「…いいから、ね」

既に雰囲気と酒に飲み込まれ理性のかけらもない。

甘いマスクと甘い声、何もかも甘く優しい。さすがの兎も、一瞬トキメいた。しかし

「…もうちょっとだけ…ね。すぐだから待ってて」

と再び日向の体から離れる。子供のようにコクリと頷いた。

暫くして兎がビールを持って戻ってきた。例の錠剤を彼女は口に含むと日向にキスをし、口移しでビールと一緒に一気に飲ませた。

日向にすればビールと一緒に何やら固形物も飲み込んだ気がしたが、気のせいだと思った。

彼は彼女からビールを受け取ると、更に飲みほした。ふうっと一息付いたとき、益々酔いが回ってきた。

「…やばい…飲み過ぎた…」

視界が歪む。

「吐きそう？」

兎が心配そうに覗きこんだ。

「否、でもまともに歩けないと思う」

酔ったにしてはおかしい。体中が異様なまでに熱く、そして…。

「…兎、どんな気分？」

「…なあに、欲しい…」

最後まで言い終わるのが早いのか、今度は日向が上になった。

「の…!？」

「…ごめん、我慢できない…」

くすりと笑う。

「…しなくていいよ」

朦朧とする意識の中、ただそこにある快楽だけ求め初めていた。

何故かわからない異様な興奮。ただ病み付きになるほど、熱い関係…。そして最高のスパイス…罪悪感…。

多分その間の意識はなく、最高の脱力感を味わった時、ふと我に返った。

「…満足した？」

「……」

…満足？…満足ってなんだ？

「…兎…」

「なあに？」

彼女は勝ち誇ったように言う。体がピクリとも動かない…。

「…さっき…流し込んだ固形物…」

そこまで言葉にした時、腰の辺りにチクリとした鋭い痛みを味わった。口の中までもしびれ出して来た。

カラン…と床に固いものが落ちる音。

「…男っで単純よね」

くすくす笑う。そして耳元で兎は囁く。

「最高のセックスだったでしょ？ 冥途の土産よ。といっても、あなたに冥途なんかありやしないけど」

…マジでヤバイ…と本気で思った。



朝飯をごちそうになろうと、いつものように陽太郎が押しかけてきた。

彼の家は父子家庭らしく、酒猫家の家庭料理は楽しみの一つだそう。いつもごちそうになってばかりでは悪いと、今日は父親からみかんをいっぱい持たされた。

玄関に段ボールいっぱいのみかんを置いて、日向を呼んだ。朝5時近く、迷惑な奴である。

蛇老が、いつものテンションのまま陽太郎を出迎えた。

「陽太郎様、おはようございます。生憎ですが、日向様はまだ帰ってません」

むつと眉が歪む。

「バイトから？」

「はい」

すると今度は、織紗那が慌てて走り出て来た。

「織紗那ちゃん、どうしたの？」

すると息を切らせながら彼女は言った。

「…嫌な予感がして…不安で…。陽太郎様お願いします！どうか至急…日向を…日向を探してくださいませんか?!…」

泣きながら訴える彼女に、陽太郎も流石に只事ではないと思った。

「ああ…。でも、どこに…」

すると何気なくいたレディが言う。

「私が案内するわ。日向、ギター持って行ってるでしょ？私もなんか嫌な予感がしてて…」

…嫌な予感。

そう聞いてふと思い出した。陽太郎も不思議な夢を見た事。その時は気にも止めてなかったが…多分、だからこんな時間に虫の知らせのように此所へ来たんだと。本来なら朝のトレーニングを始める時

間だ。

『…月影…、死ぬなよ…。俺がもっと…もっと強ければ…』

『なあ…美鏡。お前のせいじゃないよ…。また来世でも会えるさ…』

レディの案内で向かった先は、車で30分程度の寂れた商店街の脇。路上に日向の青い4WDが止まっていた。陽太郎も近くに路駐し、同乗してきた織紗那とレディも降りた。和服では目立つからと、織紗那は日向のGパンとパーカーを借りた。

既に冬へと向かっている夜は明け方と言えどだいぶ冷える。

「…寒みい…。織紗那ちゃんもレディも車で待ってる？」

織紗那はぎゅっと日向の妖刀を握り締めながら言った。

「…いえ…私も一緒にお願います。邪魔にならないようにしますから…」

そして3人は適当に周辺の店を探し出した。と言っても、この時間迄営業している店は限られているからそれらしい店はすぐに見つかった。木製の古い小さな入口から入る地下のクラブ。あとはここしかない。

「俺行っ見て来るから、危ないし2人共此所で待ってて」

すると織紗那がポケットの中から、青く小さな勾玉を出し、陽太郎に渡した。

「…お守りです。くれぐれも、お氣をつけて」

陽太郎が暗い地下への階段を降りて行くと、ブラックライトに照らされた入口が見えた。入口の前の張り紙には英語と日本語、そして中国語で

『PM5…00～AM6…00（AM3…00～AM5…00迄パーティータイム）木曜休み』

とだけ書かれていた。恐らくパーティータイム＝ドラッグタイム、と

言う意味だろう。

(…嫌な予感的中かな？あの馬鹿)

なんて質の悪い店だろうかと心の中で悪態を吐きながらも、とりあえず奥へと進んで行く。

もう閉店だからと、幸い入場料は取られなかった。奥のホールでは、まだ数人の東洋人が踊っていたが、殆どの人間は2人なり複数なりで馬乗りになりながらにゃんにゃんと楽しんでいた。

「……」

この中に正気の奴が一体何人いるのだろうか？考えると恐ろしくなる。

パリン…と何か踏んだが、それがドラッグ用の注射器であることは確認せずともわかった。

更にホールを抜けると、ロッカールームと共同の休憩室があった。

「…あ！」

暗いが直ぐに確認はできた。無数の注射器がブラックライトに照らされ、床で不気味に蠢いて見える。幾つか並ぶソファー、そこで馬乗りになる男女の中に混じって日向がいた。それを確認し、なぜか無性に腹立たしくなった陽太郎は、日向を力一杯殴り飛ばそうと近付いて、ふと足を止めた。

兎に抱かれながらまるで玩具の様に、されるがままになっている日向の表情に生氣はなかった。ただ上にいる彼女だけが恍惚と悶えているだけの気がした。男にしたらある意味屈辱的にしかない。吐き気がした。

「…日向…？」

震える声で呼び掛けた。すると女が振り向き、冷たい目で笑いかけてきた。人だと到底思えない様な目で、だ。

「…なんだ…お前…？」

陽太郎が兎に問う。

「あとぐされない、おつきあいよ。邪魔しないでちょうだい」

くすくす笑いながら、瞬きすらない人形のような日向に頬擦りし

た。瞬間、鈍い音と共に兎がぶっ飛んだ。

「!？」

陽太郎は無言のまま日向の服を直すと、彼を抱えて立ち去ろうとした。

「お待ちっ！私の獲物よ!!」

女がぞっとする程低い声で叫んだ。

「…うるせえよ、妖怪女…」

今度は陽太郎が吐き捨てるように言った。そんな騒動も、ドラッグでウリった奴等には関係ないようで、誰一人気にする奴はいなかった。更に彼女は言う。

「私の獲物だっって言ってるでしょ!!」

無視する陽太郎に、今度は飛び掛かった。爪が肉に食い込んだが、彼は声一つ上げずに彼女の頭を鷲掴みにすると、床に叩きつけた。その瞬間、兎の顔半分がボロボロと崩れ落ちた。

「…女に二度も手を上げるなんて…」

「…俺には醜い妖怪にしか見えないがね」

「!？」

兎がそっと自分の顔に手を触れ、崩れ落ちた部分を隠す様にして蹲ると、罵りながら啜り泣き出した。

「…貴様も喰ってやる…その男と一瞬に骨も残らぬようにな」

陽太郎は鼻で嗤った。

クラブを出ると、陽太郎は日向を直ぐさま自分の車の後部座席に寝かせた。頬を軽く叩きながら呼び掛けるが、彼は依然と返事はおろか瞬きすらしない。それを見て織紗那が、その場にぺたりと座り込んだ。体中ガタガタと震えている。

「…下手に病院連れて行けないしな…」

変な汗が陽太郎から流れる。

「…誰が…こんな…」

織紗那が震える声でぽつりと言った。

「…俺には醜い妖怪に見えた」

はっ、とする。

「私が渡したお守りは、幻覚や欲望に惑わされない様にする為のものです。…鬼が…狙ったんだと思います…」

織紗那から涙が溢れ出た。

「…死なないで…また…また、私を一人にしないで…」

涙を流す彼女の頭に、ポンッと陽太郎が手を置いた。

「…死なせない」

コクリ、と頷く。

「…陽太郎様…後で全て話します…やはり、貴方様の力…私達には必要です。日向を…守って…」

「ああ…こんな馬鹿だけど、死なれたら寂しいからな」

不安が渦巻く中、陽太郎は精一杯苦笑してみた。

「なあ、どこか親しい医者とか…」

ふと気付く。

「…あった…日向が小さい頃から世話になってる医者が」

陽太郎は、直ぐさま車を走らせた。

もちろん、出来る限りスピードも信号も無視して…。



陽太郎と日向がであったのは、小学生の時。悪ガキだった陽太郎が、親がいない事でイジメに遭う日向を庇ったのがきっかけだった。

『俺だってかーちゃんいないよっ！』

陽太郎ははっきりとイジメっ子に言った。

日向には内緒だが、この時まで彼は日向を女の子だと思っていたらしい。男だとわかってても、陽太郎は日向を憎めなかった。

『お前弱っちいから、俺が守ってやるよ』

中学になって、まともに学校に行かなくなった陽太郎に、日向は熱心に勉強を教えた。

『俺みたいな馬鹿でも、お前と同じ学校に行けるか？』

『行けなかったら、僕がランク落とせばいいだけ』

さらりとそう言うから、陽太郎は必死になった。

ギリギリ都内一の高校に入学した陽太郎を、日向はバンドに誘った。同時期、陽太郎は漫画に影響されてボクシングを始めた。けれども一方では強く、ならなければいけないような気がしていた。

悪い事も一緒になって一杯した。

卒業間近にして、今度は日向が進学しないというのを引き止めたのは彼だった。

『もったいないだろ？進学しろよ』

日向は言った。

『お前がするなら』

だから陽太郎は陽太郎なりに頑張った。好きだとかホモだとかではなく、ただ離れてはいけない気がした。陽太郎の中で、自分が日向を守り、日向が陽太郎の“鞘”となる。それが自然となり立っていた。これからも、ずっと…多分、そうだ。

日向は激しい恐怖感と絶え切れない程激しい頭痛にベッドから転げ落ちた。死んだ方がましだと思った。

…致死量に近い程、投与されたドラッグの恐ろしい程の副作用。切れてからが地獄だった。暇があれば吐いていた。夜はベッドにくくり付けられた。理由が理由だけに、誰とも疎外されていた。

一か月近く、病院（と言っても、村の小さな治療院）に収容された。後遺症や血液感染等がなかっただけ、幸いといえよう。

やがて容体も落ち着き、普通に起きていられるようになった頃、最初にお見舞いに来たのは陽太郎であった。

あれから彼は毎日のように来ていたらしく、今日は大丈夫だからと、医者に向の病室へと無理矢理押し入れられた。柄でもない、照れる陽太郎に気付いて、恥ずかしいやら情けないやら、日向はまともに陽太郎の顔を見られなかった。

「…だいぶ、やつれたな」

生々しく日向の両手首に残るロープの痕を、陽太郎は見つめていた。彼は手首の傷をさりげなく隠すようにして

「…笑えよ…」

と、ポツリと呟いた。

「…なんだよ…」

「馬鹿みたいだろ？あのまま死んでれば良かった」

陽太郎がぎゅっと、拳を振り上げる。

「日向、しっかり歯食いしばっとけ」

「!？」

瞬間、陽太郎の右ストレートが日向の顔面目掛けて飛び、紙一重で寸止めすると、今度は思いつきデコピンをかました。

「痛っ！」

そして呆れて言う。

「おのれは、散々迷惑かけといて“ありがとう”の一言も言えんのかっ！」

その瞬間、日向の中で何かが外れ、そのままスイッチが入ったかの様に、大泣きしだした。

「…ごめん…そして、ありがとう…」

「はいな」

彼は日向が泣きやむまで待っていた。

「早く退院してこいよ。皆待ってっから」

「…うん…」

陽太郎は、またねと普段と変わらないよう病室を出た。泣きやんだ日向もひらひらとまたね、と手を振って見送った。

ボタン、と病室の扉が閉められると、検診にと丁度医者が来た。

「陽太郎、何怖い顔してんじゃ？」

はっ、と気付く。

「…別に…」

「…若いとはいいのう…」

ふおっふおっと笑いながら、医者は病室へと入っていった。

「…変なジジイ」

生々しく記憶に残る、忘れたくても忘れられないくらい腹立たしい情景。陽太郎自身何度も夢に見た。醜く歪んだ白髪の老婆が、日向にすり寄り不気味に笑う場面を。

普段ならその場から逃げ出したに違いない、改めて思い出すと気味が悪い…。その場の感情で、腑が煮えくり返るような怒りで、蠅でも追っ払うかの様に殴り飛ばしはしたものの。今でも“夢”のように思える。が、今日夢ではなかったんだと改めて実感した。異様な迄にやつれ、はかなく散る前の花の様な…。死に逝くのを刻一刻と待っただけの“女”に見えた。手首に残るまだ新しい青痣にミミズ腫れ、もう少し話をしていたかったが思わず目を背けてしまった。

あの妖怪が言っていた。

『お前も喰ってやる！骨も残らぬようにな』
次は陽太郎の番なのか？

「…日向…俺も怖ええよ…」

ポツリと呟き、狭い病院を後にした。

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•

病院に着いた陽太郎は、簡単にではあるが古くから親しい医者に
事の成り行きを説明した。

「……助けてくれ……」

陽太郎の目から涙が溢れた。

「日向を死なせたら酒猫のぼっちゃんが化けて出るだろう。死なせはしんよ」

そう聞くと益々涙は止まらなくなる。

「折角のぼうかーふえいすが台無しじゃぞっ」

医者なのんびりした態度とは裏腹に、背後ではけたたましく足音や掛け声が聞こえる。

「久しぶりに腕がなるのう…」

ふおっふおっと笑ったが、目だけは笑っていなかった。

待合室で待つ間陽太郎に、織紗那は事の成り行きを説明した。自分是谁なのか、何を

させようとしているのか。そして言う。

「月影様の戦死を教えて下さったのは、親友である美鏡様でした。守り切れなかった自分の責任であると、そう強くご自分を責めていらっしゃいました。…自分が命を捨てても守るべきだったと」

昼過ぎになって、待合室にいた陽太郎、レディ、織紗那にもう安心ですよ、と看護婦が言付けにきた。全員、魂が抜けたかと思えるくらいに安堵を覚えた。

そして陽太郎の中に、強い使命が生まれたのもこのときだった。

「…それは日向じゃない…俺がやるべき事だ…」

◆枯れた桜◆

日向の退院日には、陽太郎が迎えに来た。入院中路駐したままの車が心配だったが、それは陽太郎が家まで移動させておいてくれたとの事。とりあえず、今尚残る手首の傷は包帯で隠した。

「女遊びも程々にせえよ」

医者がいつもの様にふおっふおっと笑う。思わず赤くなった。

「…もう、それは言わないでっ!」

陽太郎も笑っていた。

「日向がいなくなると、看護婦達のやる気もなくなるなあ。またいつでも入院しにきなさい」

冗談にしては笑えない。もう、と膨れたまま陽太郎の車に乗り込んだ。陽太郎も乗り込んだのを確認すると、助手席のシートを一杯まで倒した。

「…病院の飯って不味いんだぜー。椎茸嫌いだからって避けると、次の飯で倍の椎茸入ってんだ!信じられん…ばあちゃん居た時みたいだった」

どうでもいい話を振られた運転手は、あははと笑うしかない。

「なら、久々になんか思いつきり喰いにでもいくか?」

「…悪い。行きたいのはやまやまんだけど、まだ体だるいし腹の調子も整ってないんだ」

さぞかし残念そうに言う。

「…なら仕方ないな。今度奢ってもらおう」

「……」

日向の家までほんの数分程度の距離。家に着くと織紗那がおかえりなさいと出迎えてくれた。

はっ、として陽太郎に耳打ちする。

「ラリった時の状況、彼女には言っていないだろーなあ?」

すると彼は呆れたように答えた。

「言える訳ないだろ？ あんなエグイ話」

：ついでに、相手が妖怪だったとは本人にもいえない。

「…どうなさいました？」

「な、なんでもないよ！ 風呂も入りたいしお腹も空いたし：」
はぐらかす様に玄関を上がった。

「なら、日向。先にお風呂にどうぞ」

「うん」

風呂場へと向かう日向に続いて、陽太郎も玄関を上がった。

「：陽太郎様：」

奥へ進もうとする陽太郎を織紗那が呼び止めた。

「少し、よろしいでしょうか？」

「……」

織紗那は仏壇の部屋へと案内した。そこには一本の日本刀が置かれてあった。それから、向かい合わせになった座布団。

「どうぞ」

と織紗那が促した。

陽太郎が腰掛けると、絶妙なタイミングで蛇老がお茶を運んで来た。

「では、単刀直入に申し上げます」

彼女はそう言うと、置いてあった刀を手にとり、鞘から引き出して見せた。隙間から覗く光に揺らめく齒は、なんとも不気味だ。

「日向に渡したのは妖刀“月華丸”、これは新たに私が作ったものです。妖刀には劣るかもしれませんが、それでも充分に力を発揮します。霊刀“美鏡”と名付けました」

彼が彼女から美鏡を受け取った。どくん、どくん、と脈打つように感じた。

「…生きてるみたいだな…」

織紗那がそれを見て安堵の溜め息を吐くと、それを合図としたかのように、彼女はぐったりと崩れ落ちた。

「…おい！」

頬に触れると、体は想像以上に冷たかった。

「…マジかよ…」

とりあえず織紗那を抱き抱えると、陽太郎は廊下に飛び出した。

すると部屋の直ぐ外に桜が待っていたかのように現れた。

「妖刀を作る時、自らの血液を大量に必要とします。霊刀を作る時は、自らの霊力を。ですから、心配はいりません。この所まともに食事も睡眠もされていらっしやらなかったから、極度の疲労だと思います。寝室まで、運んでいただけますか？」

断る理由もなく、コクリと頷いた。

織紗那を寝かせると、食事にどうぞと誘われたので居間へと移動した。丁度日向も風呂から上がり、テーブルの前に腰掛けた。まず並べられたのは陽太郎から、ご飯に豆腐とホウレン草の味噌汁、肉じゃがと茶碗蒸し。日向に関しては茶碗蒸しと（しかもやたら具のない）卵のお粥のみであった。もふもふと食べる陽太郎を、日向は恨めしそうに半分べそかきながら見つめた。

桜が気を遣って言う。

「日向はまだ体調が良くないでしょ？また良くなったら好きなモノ作ってもらえばいいから」

「…ふうんだ…」

膨れながらもしっかりと食べていた。

「ねえ、桜。そういえば、織紗那は？」

「緊張の糸が切れたみたい。今ようやくお休みになってますよ」

「緊張？」

「すごく心配してましたから」

「……」

横から陽太郎も付け加えた。

「俺にお前を探せって泣きながら言ってきたのも、あの子だったしなあ」

…罪悪感。

「…後で…謝っとく」

残りの昼食を一気に平らげた。

ジムに行くからという陽太郎を玄関まで送り、自分の部屋に戻る前に織紗那の部屋に寄った。寝てるんだろうと思いつつも、入るよつと一言だけ告げて襖を開けた。

何もない和室に敷かれた貧相な布団の中で、静かに寝息を立てながら彼女は眠って居た。思わず近寄ってはペタンと座る。

「…タイムスリップってどんな感じなんだろう…」

膝を抱えて小さく座りなおした。

「心配かけて、ごめんなさい」

ポツリとこぼしながら、そっと人差し指で頬に触れてみる。そのままなぞる様にして唇に触れた。

「…柔らかい…」

そして、そっとキスをした。

軽くではあるが、今までのキスの中で一番愛情深いものだと思った。そして、急に恥ずかしくなって部屋を飛び出した。

自分の部屋に入ると、今度は自分の唇をそとなぞった。柔らかい織紗那の唇の感触がまだ残る。ふっ…と笑みが零れた。



一方日向が織紗那に口付けをしたのと丁度同時刻頃、某K空港に金髪男女の外人が降り立った。ケープの様な襟のついた黒いロングコートという出で立ちは、外国の神父をイメージさせる。

歳は2人共まだ若い。彼らは、黒いスーツ姿のボディーガード数名を携えながら空港内を移動した。道行く人々は道を開けながらも、緊張した目で彼らを見た。

「：どこかのお偉いさんかねえ：」

そんな人々の囁きはおろか、視線にも気付かないかの様に空港を出ると、止めてあった数台のリムジンに偉そうに乗り込んだ。リムジンが発進しだしたのを見て、通りすがりのOLが声をあげた。

「：あ！あの人ってもしかして：」

「お兄様、アルマゲドンの場所はお解りに？」

走り行くベントツの中で、金髪の女が流暢なフランス語で男に問いかけた。“お兄様”と呼ばれた男は、地図を膝の上に乗せ先端に水晶のついた振り子を垂らし持っていた。

「アルマゲドンかどうかはわからないが、手掛かりになりそうな屋敷なら見つけたよ、妹よ」

ふふふっとナルシストに笑う。

「世界を救うのは、我らクリンストーン兄妹だ！」

.....

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

その晩、陽太郎からのメールで話があると言うので近くの居酒屋に出かけた。まだ呑めはしないが、近所にはそこしから仕方ない。田舎は不便だと、日向は思った。歩いて行ける距離だが、何かあると怖いのでとりあえず妖刀を携えた。

居酒屋に着くと、まだ陽太郎は来ていなかった。仕方ないのでと

りあえず待っていると、居酒屋のおばちゃんがうれしそうに話しかけて来た。

「あらあ、日向ちゃん体もういいのかい？」

小さな村だから、皆家族みたいなものなのだ。

「ええ、なんとか」

「先生と陽ちゃんに聞いたわよ。大変だったわねえ」

一瞬ドキッとしたが、そのドキッは次ぎの瞬間恨みに変わった。

「ギックリ腰になったと思ったら極度の食中毒に、サルモネラ菌が水虫と喧嘩して肺結核に陥って危なかったんだって」

「…いやあ、もう意識なかったですから」

笑ってごまかすしかなかった。

(…いやがらせだ…)

やがて陽太郎が、悪い！と悪振れた様子もなく現れた。

「…僕はどんな病気だったんだ…？」

無言の威圧感で攻めてみる。

「…いやあ、礼にはおよばん」

手の平をヒラヒラと動かして、照れながら遠慮がちに答えた。

「…アナタにはもう何も言うまい…」

日向はガクツと俯きながら嘆いた。

「…ところで、用って何？」

呆れて問う日向を尻目に、陽太郎は酒だの焼き鳥だの刺身だのと嫌味の如く注文を入れる。

「をい！陽っ！！」

「あっ！悪い」

そして、ふと深刻そうな顔をした。

「…忘れる前に奢ってもらおうと思って…」

日向は再びガククリと肩を落とした。

「…お前…いつか刺されるぞ…」

カンパァーイ！と何やら上機嫌。

「まあ、冗談はさておき」

（…冗談だったのか…）

「…愛してしまっただ…」

ばふっ！と口に含んだウーロン茶を吹き出した。

「…なっ…ホモかつ！」

日向の吹き出したウーロン茶で濡れた顔を拭きながら、陽太郎は続けた。

「アホか、レディだよ。実はお前が死んでる間織紗那ちゃんから色々聞いたんだ。人でなくても、俺は愛してる」

日向はぽかぁんとするしかなかった。

「…熱いな…」

「…俺はいつでもホットマンだ」

「……」

面白くないな、と思いつつ、日向は大きく溜め息を吐いた。

「…で、僕に何をせろと？」

すると陽太郎は柄にもなく照れながら言った。

「好きな男のタイプと、お好みのデトプランを聞いてくださ
い」

く、下さい…？、背筋がゾクツとした。

「…まあ、今回は僕も命救われたし。そのくらい構わないよ」

例え命救われてなくても、日向なら応じたであろう。陽太郎の為に何かできる、陽太郎に頼まれたこと…呆れる反面、なんとなくそれが嬉しかった。

「頼むよ！」

陽太郎はテーブルに乗り出しながら、日向の手を握って懇願した。

日向はそんな彼に、圧倒されつつ、うんうん頷いた。

頼んだ料理を食べ終えて、とりあえず途中まで一緒に帰る。学校やバイト先は車で数十分かかって、日向と陽太郎の家はさほど遠くない。古い神社の分かれ道で、ふと足を止めた。日向が陽太郎に“じゃあね”と言おうとした時だった。

「日向あー！」

と叫びに近い織紗那の声がし、彼が驚いて振り返った瞬間日向の左肩を紙一重で黒い物体が落ちて来た。

「!？」

それは音もなく地面に張り付くように、着地した。

「逃げてっ！」

再び織紗那が叫んだ。

着地した黒い物体は、再び日向に飛び掛かろうとした。逃げようとしたが、そのもの凄い早さに体が追いつかない。ヤバイ!と思った刹那、陽太郎が真横から物体に美鏡を突き立てた。黒いそれは、この世のものとは思えない奇声を発しながら、サラサラと砂のように崩れて消えた。

「2人共上っ！」

2人が見上げると、そこには同じような黒い生き物が無数に浮いていた。日向も慌てて月華丸を引き抜いた。物体は「ギャー!」とか「キキー!」とか奇声を発しながら向かって来た。

少し離れていた織紗那が何やら空で文字を書く。すると、足下の石ころが浮かび上がった。更に彼女が物体に指を向けると、石ころは物体へと弾丸のように直撃した。石ころに当たった物体は、美鏡に刺されたの如く弾けながら砂のように粉碎した。

「きゃははははははっ！」

突如、頭上で女の馬鹿笑いが聞こえた。

ふと、顔をやると鳥居の上に人が2人座っていた。

「…織紗那、あんた何遊んでんの？」

馬鹿笑いの犯人だと思われる人物が叫んだ。

「誰？」

織紗那が日向達に駆け寄りながら問う。すると鳥居の上の人物が2人、ストンと飛び下りた。

「お久し振りね、織紗那。800年振りだったかしら…。その節は

どうも」

織紗那に良く似た女が、冷たい目をして口許だけでクスリと笑う。

「…鬼沙那…？」

ターゲットにされた娘は、忌まわしい過去を思い出すかのように、その名前だけ口の中で呟いた。

「ご名答！パーフェクト！大正解！！」

パチパチと手を叩く。そして鬼沙那の横に居たのは――…

「…兎…？」

日向の問い掛けに彼女は答えた。

「素敵な夜をありがとう」

その言葉に感情はない。そして、兎は陽太郎に言った。

「…約束、覚えてるか？」

「…忘れたね」

兎がキツと睨みつけた。と、同時に陽太郎も刀を握る手に力を込めた。

「男として、日向に知られたくなかったんだけど…」

ポツリという。

「え？何？」

はあー…と溜め息。

「…いいよ、知らない方がいいこともあるから」

「？」

鬼沙那が言う。

「…やっぱり貴女だったのね。なんでこの時代にいるのかしら？なんで私の邪魔ばかりしようとするのかしら…」

凍り付くような冷たい目で織紗那をピタリと捕らえたまま、瞬きすらみせようとしない。

「宿命さだめですから」

とだけ答えた。

「宿命？馬鹿おっしゃい…。貴女達酒猫一族が、桜の木を守る為、この世とあの世のバランスを保つ為だけに生きてると思ったたら大間

違いよ！守る為ではなく、木の秘密を公にしない為だってこと。あの木の発祥：貴女は知っているの？」

織紗那は不愉快そうな顔を向けた。

「…いいえ。残念ながら」

更に鬼沙那は得意げに続ける。

「でしょうね！だからこうして私の邪魔ばかりできるのよね」

ぶん！と鬼沙那が手を振り下ろした。同時に小さなカマイタチが出来、彼女の両肩を切り裂いた。

「…あっ！」

彼女の白い着物が赤く染まる。

「織紗那っ！」

それを見て日向が駆け寄ろうとするが、体がピクリとも動かない。また、陽太郎は兎によって、蛇に睨まれた蛙のごとく動けないでいた。

（…今動けば殺られるな…）

格闘家の本能であろう、冷や汗が全身を伝った。

「…日向、逃がさないわよ。あんたは鬼沙那様のご飯になるんだからねっ」

どうやらこれが、金縛りというやつらしい。

鬼沙那は織紗那に歩み寄ると、今度は首元を締め上げた。

「…かはっ…」

息が…できない…。

「どうやら貴女も“私”も、本調子ではないようね。貴女はこの時代へ来る時、そしてなんらかの形で膨大な霊力を失ったのではなくて？…殺すなら今かしら」

不気味な微笑を湛えると、織紗那を締め上げる指先に力を込めた。背後では日向が何やら叫んでいたが、2人には聞こえていないよう。

「…さよなら、織紗那」

鬼沙那は静かに、そうつぶやいた。

織紗那もなんとか逃れようと鬼沙那の手に手をかけるが、力が入

らない。視界も涙で霞んで来た。

（…お父様…ごめんなさい…）

そう心の中で呟いた時、織紗那はドツと勢い良く背後に吹き飛ばされた。げほげほと激しく咳き込む。

「何奴！」

織紗那の代わりに鬼沙那が叫んだ。霞んだ目で鬼沙那を見ると、彼女の背に銀細工のナイフが突き刺さっていた。彼女はそれを苦もなく引き抜くと、地面に叩き付けた。



「…ふふっ！やはりソノくらいでは、効かないナっ」

ナルシストな男の声がした。場に不釣り合いなハイテンションのその男は、夜なのにサングラスを付け、

怪しげな黒のロングコートを翻しながら月明かりの中に現れた。

「マドモアゼル、ご無事でしたか？我らクリンストーン兄妹が現れたカラニはもう安心ダコトデスっ！アルマゲドンは我ら専門家におまかせアレっ」

怪しげな金髪の外人は鬼沙那にビシッと人差し指を突き付けた。

「…あらまけどんってなんですか？」

倒れ込んだまま、動けないでいる日向に織紗那がきょとんと聞いた。

「アルマゲドン。世界滅亡の事を指したと思ったけど、1999年にブームが去ってから忘れた」

「あるまきどん、とは鬼沙那の事だったのでしょうか？」

日向は暫くうーんと考えてから答えた。

「いや、違うと思う」

2人の会話を聞いてか聞かずか、クリンストーン兄が「シャラー—ップ！—」と叫んだ。

「我が妹のタロット占いはサイキョーそしてセイカクですっ！ここジャポンで世界を破滅に導くもの、イワユル“アルマゲドン”が現れます！それがアナタです！！間違いない。アナタの力、強いネ。ボクが倒します」

早口で不慣れな日本語を捲し立てるクリンストーン兄を、鬼沙那は冷やかな目で見つめた。

「…へえ…やれるもんならやってみなさいよ」

ペロリと舌なめずりをして見せる。

「西洋のイカレボンクラ野郎に、この鬼沙那様を倒せるとでも思ってます？」

そう言いながら彼女は、高笑いと共に巨大な赤い龍へと身を変えた。
「オウ！ドラゴン」

兄が懷から手帳サイズの聖書を取り出した。それをぶつぶつ読み上げると、今度はクリンストーン兄の足下に紋章の様な赤い光が浮かびあがった。

「紹介します！悪魔と天使の娘アラリタ」

突如ずっと紋章から女性が現れ、兄の背後に絡み付くよう寄り添った。背にパールのような大きく柔らかな羽根を携え、それでいて凍て付くような冷たい目をした娘だった。

「…天使…？」

日向がボソリと呟やく。

——明らかに番組を間違えている。

「解説致しますワ！」

出番のなかったクリンストーン妹が得意気に突っ込む。

「私達クリンストーン兄妹は、今では超有名なシャーマンです。ヨーロッパ各地で悪魔祓いをチュウシンに、エクソシスト、チョージョーゲンショーなんでも解決致しますの。妹の私は世界を見るセンリガンと予知能力、お兄様はエンジェルやゴッド達を扱い悪魔を平伏す能力があります。あのデビルもお兄様の敵ではありませんワ
！！」

織紗那と日向が、へえ…と人任せモードで頷いた時、蚊の鳴くような声で

「…どうでもいいから…誰か助けろよ…」
と陽太郎の泣きそうな声がした。

「…あ、そういえば、僕も動けないんだ…」

あははっと和む。

「和むなっ！あんたら立場わかってんの？」

半ば呆れながら兎が叫んだ。ふう、と織紗那が息を吐いた。そして

地面をポンッと蹴ると、まず日向の金縛りが意図も簡単に解かれた。

「陽太郎様、お待たせ致しました」

織紗那がゆっくりと兎に近付く。彼女が徐に手を挙げると、そこに不気味な火の玉が現れた。

「確かに私は本調子ではありません。けど、アナタ程度なら赤子の手を捻るより簡単に消せます」

兎が圧倒されてジリジリと後ずさる。同時に陽太郎もぐったりと地面に崩れ落ちた。

「…す、すげえプレッシャー…」

「ご苦労！」

ポン！と日向が陽太郎の肩を叩いた。織紗那が兎に向け、火の玉を乗せた手を振り下ろそうとした刹那、兎自身が炎を纏い爆発した。そのまま、兎の破片は跡形もなく炎と共に消えてなくなった。

『役立たずが』

鬼沙那：こと龍が低い声で唸った。

「キー！」

とクリンストーン兄の天使が奇声を発し、消えた兎を哀れむかのように泣きながら龍に襲いかかった。龍がためらう事無く炎を吐き付けると、それは天使の羽根をゴウゴウと燃やし始めた。天使が羽根を仰ぐと、炎は消えたがその半分近くは燃えてなくなっていた。

「…フツウのデビルではないナ！」

龍が鬼沙那の姿に戻る。

「私は世界を征する者」

ふふっと薄笑いを浮かべ、彼女は鳥居に飛び乗った。

「面白い！いいわっ。アナタ達を殺すのやめる。やめて、私の力として吸収する事にしたわっ！！もっと、もっと強くなるのねっ」

そう言い残し、鬼沙那は突如現れた旋風の中で消えた。

「…アルマゲドン…」

誰かが間拔けに呟いた。

「…鬼沙那と桜の木、そして酒猫一族の話、するべき時が来たよ

うですな」

どこからともなく蛇老が現れた。

「蛇老、いつの間に」

日向が問う。クリンストーン兄妹以外の人間が、全員思った事だった。

「随分前から。あちらの木陰で」

しれっと言う。そして蛇老は続ける。

「酒猫家の一代目当主より、秘められてきた話でございます。本来、酒猫家の者だけ知る権利をお持ちなのですが：皆様も巻き込んでしまった事ですし、ご協力頂く条件でお話いたします」

蛇老は相変わらず不気味なそぶりで、回れ右をすると屋敷に向かって歩いていった。それにつられ、そろそろと関係ないクリンストーン兄妹までもが屋敷に向かった。

屋敷につくと、いつもの仏壇の部屋に全員集まる。桜と蛇老によってお茶が配られた。皆がお茶を一口二口啜り、ぴりぴりと緊張した空気の中沈黙を最初に破ったのは織紗那だった。

「蛇老、話して下さい」

蛇老は静かに頷く。

「御意」



時は遙か昔の大昔。この村には古くから、酒猫という一族の術師が医者と兼用して住んでいた。医者と言っても医学も殆ど進んでいない時代であるから、する事と言えは祈祷やまじないといった物が主であった。また隣の村には夜叉神家^{やしやがみ}という、祈祷師が住んでいた。夜叉神家もまた古くからの家柄ではあったものの、酒猫家の力には遠く及ばず、大変貧しい生活を強いられていた。

ある日夜叉神家の娘が流行病に倒れた。夜叉神家の主人は7日7晩、断食し更には一睡もせずに祈り続けた。けれども願い届かず娘は死んでしまった。その噂は直ぐさま村中に広まり、ますます生活は苦しくなった。その苦はやがて、酒猫家への怨みとなった。

——何故、神は我々の願いを聞き届けてくれんのか？

ある晩主人は一匹の犬を殺し、犬神として酒猫家を襲わせた。しかし、それは苦もなく跳ね返され、逆にその晩主人と妻は犬神に喰い殺されてしまった。翌日、昨晩の犬神を不審に思った酒猫家の者が霊波の痕を追ってみると、荒れ果てた屋敷にたどりついた。それこそ夜叉神家の自宅、自宅内の貧相な布団の上に夜叉神家の人々の喰い荒らされた死体が散らばっていた。それを見た酒猫家の当主が驚きの声を上げた刹那、夜叉神家の死体から黒い霧が昇り、酒猫家の奥方が抱いていた赤子に向かって飛び込んで来た。奥方も当主も必死で守ろうとしたが間に合わず、黒い霧は赤子の中に入ってしまった。

『…死した娘の怨みじゃあ…末代まで呪い殺してくれる…』

物言えぬ筈の赤子がそう言うと、赤子は醜く…まるで犬の様に口

が裂け、目がギョロリとむき出した。それから酒猫家の悪霊祓いは1か月にも及んだ。しかし祓うどころか、使用人が次々亡くなるなどの災いが多発した。夫婦は泣く泣く、赤子を桜の木の根元に封じるしかなかった。

赤子がまた生まれて来る事ができるよう、魂だけ切り離して。

そこまで話すと、蛇老は茶を啜った。

「酒猫家の力と夜叉神家の力を兼ねた怨霊は鬼となり、当時の酒猫家の赤子の姿を借り鬼沙那となりました。鬼沙那は封印されていた間も、桜の木を通じ負の力を溜め込んでいました。もはや酒猫家への報復だけが鬼沙那の望みではないでしょう。人間を好き勝手弄ぶ事に喜びを感じ、更には悪魔や神も恐れない強靱な力をつけること。かつて自分達が酒猫家に恐れていたように、全てのものが自分に恐れる理想を築きあげたいんだと思います」
更に桜が付け加える。

「私は桜の花びら。だからこそ鬼沙那が桜の中で脈打つのを何百年と感じて来ました。鬼沙那がが不完全な部分を、今までと同様の時間で負の力を吸いながら補うと、完全体までに1年かかります。ですから、一年以内に再び封印もしくは消滅させてしまうしか手がないのです」

桜は深々と頭を下げた。すると部外者クリンストーン兄が口を割って出た。

「任せなサイ！我々は専門家ですから、チョージョーゲンショー、エクソシスト、なんでもカイケツします！！」　そこで、はいと陽太郎が挙手した。

「ナンだね？」

「…てか、あんたら何？」

クリンストーン兄妹以外がうんうん頷く。

「失礼！改めてショウカイします。ボクはフランシス・クリンストーン、妹がジュリエラ・クリンストーン。ヨーロッパ各地で活躍チユウのシャーマンです」

「あ！」

思い出したかの様に陽太郎が声を出した。

「若い天才悪魔祓い師とか言って、先週特番に出てた奴等か？」
フランシスがふふんと笑った。

「イエース！ボくら有名です」

——いくら有名でも、部外者は部外者である。

それでも首突っ込みたい奴はいるようで、クリンストーン兄妹も例外ではなかった。

織紗那の手を掴むと、顔を近付けて言った。

「マドモアゼル！ボクはアナタが気に入りました！それに、困ってるマドモアゼルをムシできません。是非力になるデス」

「…は、はい…」

フランシスの顔を初めて近くで見た織紗那は、彼が意外と美形だったことに気付き顔を赤らめた。日向とは違う、金色の流れる髪に、ブルーに輝く切れ長の眼。薄く色付いた唇まで魅惑的に思えた。思わず

「…お願いいたします…」

と答える。

「オウケイ！」

とフランシスが織紗那に抱き付いた。

「ぬわぁにしてんだ！」

瞬間、日向がフランシスを突き飛ばし、桜が更に肘鉄を食らわした。

「織紗那様に、ご無礼は許しませんわっ！！」

「……」

ノックダウンしたフランシスを見て、陽太郎がポツリと呟いた。

「恋のライバル出現か…」
面白くなるねーっと、叫びたかった。

◆火傷するほど熱い恋◆

陽太郎が帰り、クリンストーン兄妹もホテルへと戻った。外は朝方に近かったが、取りあえず今日はもう寝ようと風呂に入った。風呂から上がった部屋に向かう途中、なんとなく意識が屋根に向いた。気分転換に朝焼けでも見る気になったのか、日向は屋根に上がった。屋根には既に先客がいた。

「…日向…どうしたんです？」

織紗那が小さく座り込みながら、不思議そうに問うた。

「…うん、なんとなく朝焼けでもと思って」

「…そう」

ふっ、と笑う。

「織紗那は寝ないの？」

「寝れなくなっていました」

彼女は苦笑いをしてみせた。

「風邪引くよ」

「日向こそ湯冷めしますよ」

今度はくすくす笑う。

「じゃあ、待って」

そう言い残すと、日向は屋根から降りて行った。

それから5分程して戻ってきた時、彼は毛布を抱えていた。織紗那の肩にそっとかける。

「もう冬も近いし、冷えるか…」

はくしょん！とお間抜けにもクシャミが出た。それが彼女のツボに入ったようで、織紗那がけらけらと笑い出した。しばらくしてうっすら浮かんだ涙を拭いながら、日向の掛けた毛布の片側を開いて言った。

「日向も入りますか？」

「…うん…」

なんだか妙に恥ずかしくなった。照れ隠しに「あったかいね」なんて言って、更に赤くなった。

「…失礼とは存じ上げますが、日向は本当に月華丸様によく似ていらっしやいますね。時々あの方が本当に近くにいらっしやるような、そんな気になります」

朝の薄明かりに紛れながら、星が一つ二つと姿を消し始める。彼女の中には月華丸が…そう考えて、少しショックに思いながらも仕方ないと自分に言い聞かせた。仮に自分が月華丸の生まれ代わりであったとしても、今は日向であってそれ以外の誰でもない。元を正せば彼女だって平安時代の娘、いつかは元の時代に帰る身だ。

「…月華丸ってどんな人だったの？」

これ以上入り込んではいけない…。知りたくない…。ハズだったのに…。彼女は答える。

「素敵な方でした」

と。

「…そっか…もう、いいよ…」

日向は急に泣きたくなり、顔を隠すように俯いた。

「…僕は日向、月華丸とは違うから…」

単なる負け惜しみだとは、彼自身もわかっていた。格好悪い…。けれども織紗那は気にする事なく宥める様に言う。

「わかっています。日向は日向。月華丸様はもういません。あの方に未練はありませんが、何故でしょうね。今この瞬間が凄く幸せに感じるのです」

「……」

織紗那の指がそっと日向の髪を撫ぜた。

「…言わば私も鬼沙那の分身のようなものなのです。桜に埋められた娘の生まれ変わり…お父様には蛇老程詳しく聞かせていただいた事はなかったのですが、幼き日ふとした拍子に鬼沙那の封印の一部を解いてしまい、核である娘の話はなんとなく聞いていました。その時はお父様が命をかけて、鬼沙那から私を守ってくださいました」

織紗那はそこまで言うと、1度大きく深呼吸をした。

「…私も…日向を守ります…かつて、私を守ったお父様の様に…」

「…男の子が女の子に守られるなんて恥ずかしいよ…」

彼女が吹き出す。そして再びけらけら笑い出した。

「織紗那っ！」

俯いていた顔を上げ、咎める様に名を呼んだ。

「…だって…あまりにも可愛かったもので…」

赤い顔が更に紅潮する。

「もう、知らない！」

そして日向はまた小さく座り直した。

（…また、愛しく思っではいけない相手を、私は愛しく感じてしま
うんでしょうか…）

彼女も同じように小さく座り直した。

朝が来ても、朝方からの肌寒さは変わらなかった。



翌日、酒猫宅に宅配便が届いた。薔薇の花束100本と、オーダーメイド（多分）のワンピースドレス、それからダイアのアクセサリーセット。どれも一般人が即座に用意できるようなものではなかった。

宛先は“RISHANA SAKANE”送り主はあの憎ったらしいクリンストーン兄からだった。

『明日、お話でもいたしませんか？これは、僕からのささやかな贈り物です。お気に召していただけるとよろしいのですが。BY・フランシス・クリンストーン』

そんな内容の手紙が付け加えられていた。

「あら、素敵！」

どれもこれも初めて見るものばかり。胸を踊らせて感動した。

「ダメ！ゼー………たいダメだって！！」

その手紙を横から盗み見して、日向が叫んだ。

「日向も一緒に行けばいいですよ」

にっこり微笑む。

行く行かないの問題がない訳ではない。が、それ以前に奴からのプレゼントを受け取る事自体が彼的に許せなかった。

「そんな高価なもん受け取っちゃダメだって！」

本気で咎める日向に、思わずしゅん…となる。

「…折角この時代の服を着れると思ったのですが残念ですね。そんなに高価な物でしたら仕方ないです、明日返してきますね」

織紗那の落ち込む姿を見て、罪悪感を覚えた日向は衝動的に口走っていた。

「今から買い物に行こう！服くらい買ってやるよ」

無駄に負けたくない気持ちが暴走した瞬間であつた…。

『また、町へ行こう』

最後に織紗那が月華丸と交した約束。

（生まれ変わっても、ちゃんと覚えていてくれたのですね）
頬が赤く染まる。

和服では目立つからと、日向の服を借りた。かなり大きいが、和服で歩き回るよりはいい。

車でファッション街まで出ると、駐車場に止めてそこからぶらぶら歩いた。町行く若者達、酔っ払った親父…何もかもが新鮮に見えた。

時々日向の腕を引っ張っては「あの人足が出てますよ！」とか「胸が見えそうですよ」とか、恥ずかしい事を口走った。

日向の勧めでいろいろな服も着た。フリフリの服や、ボディコンチックなワンピース、流行りのファッションまで。悩んだ挙句、薄桃色の薔薇がプリントされたロングのワンピースに決めた。胸元と裾、袖にレースとピンクのリボンがしらわれた可愛いデザインンの服だ。イヤリングとネックレス、口紅も買ってもらった。

あつと言う間に日は暮れた。

帰り際、流行りのカフェに寄って織紗那は生まれて初めてのプリンアラモードを食べた。日向はお気に入り苺パフェをつつきながら話す。

「ここのデザートすっごく美味しいんだ！僕甘いもの好きだから」
無邪気な日向を見て、織紗那も益々楽しくなる。

「ぷりんあらまうども気に入りました」

「プリンアラモード、僕も好きだよ」

彼女は今まで生きてきた中で、一番の幸せを感じていた。目の前にいるのが例えいつの日か愛した彼でなくても、目の前にいる彼もまた、確かに愛している人なのだから…。そう考えると、不思議と涙が零れてきた。

「ど、どうしたの!？」

焦る日向を見て、笑いながら泣いた。

「ご、ごめんなさい…私、こんなに笑ったの初めて。いい時代に生まれてきましたね。私も…この時代に生まれて…貴方と別の形で出会いたかった…」

日向も笑った。

「今は変な事考えない。苺、食べる？」

生クリームと苺をスプーンですくって織紗那に差し出した。

「ほら、このままパクって」

くすつと笑う。彼女がパクつと食べると、なんとなくお互い恥ずかしい気持ちになって、取りあえず2人笑ってその場をごまかした。

翌日、織紗那が買ってもらったばかりの服を着ていつてきますと玄関先に立った。日向が慌ててどこに行くのか尋ねると

「わかりませんが、11時に玄関先で待っているようにとフランシスさんから」

といい、日向に白い封筒を差し出した。それは今朝届いたようで、中には彼女が言った事と同じ事があった。ついでに

『素敵なデートをプレゼント致します』

と書かれてあった。

「だからダメだって!」

日向が怒る。

「でも戴いた物をお返ししないと…」

そんな感じで言い争いをしていると、田舎には不似合いで珍しいリ

ムジンが酒猫家の前に止まった。

黒い服の男が降り、リムジンの後部座席のドアを開ける。するとタキシードではなく、Gパンとタートルネックのセーターにジャケットを重ね着した姿のフランシス・クリンストーンが現れた。多分、全部ブランドもんであろう。

「待たせたね」

と微笑み差し出す右腕には、某高級ブランドの新作腕時計が輝いていた。

「おや？マドモアゼル、プレゼントは気に入らなかったデスカ？」
ちよつと残念そうにフランシスが尋ねる。

「いいえ、大変素敵でした。でもこの様な高価な物を戴くなんて勿体ないです。お返し致します」

そういうと彼女はプレゼントされた服とアクセサリを渡した。

「そういえばあのお花、初めて見ました。とっても綺麗なお花でしたから、私のお部屋に飾らせて戴きました。あちらもお返しした方がよろしかったでしょうか？」

今度は彼女が問うと、フランシスが笑い出した。

「ローズ気に入りマシタデスカ！良かったデス。ドレスやネックレスは高いデスカ！ボクは気にしません」

そして突き返されたプレゼントを今度は日向に、まるで使用人にでも渡す様に渡した。

「デートしましょウ！デート知ってマスカ？楽しいところ考えました！」

そういいながら、フランシスが織紗那の肩に手を置いて引き寄せた。その瞬間、今度は2人の中に日向が荷物を抱えたまま割って出た。

「ダメだって！」

2人が引き離される。

「織紗那はあんたなんかとデートなんてしません！ご飯も食べませんし、お話もしません！リムジンなんか恥ずかしくて乗れませんネ！！大変迷惑ですから、お帰り願いませんか？」

日向にしては刺々しく、やたら堅い口調だ。すると今度はフランシスが鼻で笑いながら、止めてあった日向の4WDを親指で指しながら言った。

「マドモアゼルをお迎えするにはリムジンです。礼儀ですネ！他にも高級車色々あります。ですが、あんな車ありません。あっちのが恥ずかしいネ！ボロイです」

「かっちーん！！と来た。投げるようにしてプレゼントを付き返した。

「ボロくて悪かったな！あれでも買った当時は人気でなかなか手に入らなかったんだスケドネ」

お互いの間に火花が飛び散る。

フランシスは再び鼻で笑う。

「失礼！人気ある車は人気なくなったら買い変えます。アナタやっぱりださいね。いい車、イツニなっても人気です。大体アナタなんですか？マドモアゼルのボーイフレンド？ダーリン？」

「…うっ…」

痛いトコロを突いて来た。日向が何も言えなくなって固まっていると、フランシスが構わず彼女のエスコートを始めた。さすがにヤバいと思い織紗那も遠回しに断るが、断り切れずデートをすることになってしまった。

「…あの…日向…直ぐ帰ってきますから…」

気を使う織紗那に

「いいよ、ゆっくりしてきな」

なんて心にもない返事をしたが、その笑顔は引きつっていた。



昨晚遅くまで友人と呑んでいた陽太郎は、二日酔いかも…違うかも…と夢うつつに考えながら寝ていた。すると物凄い勢いで廊下を走る足音がした。

(…うるさい…)

バーン！とノックもなく部屋の扉が開け放たれると、抵抗する間もなく襟元を掴まれ前後にぶんぶん振られた。「陽太郎おおおお…ムカツク！悔しい！腹立つよー！」

声の主からして日向だという確認は取れた。そしてその日向らしき人物は、泣きながら抱き付いてきた。その直後

「男に抱き付いたって気色悪いわっ！」

と一人怒って陽太郎を突きつとばし、今度は部屋の隅に転がっていたシロアザラシの縫いぐるみに抱き付いて、しくしく泣き出した。一体何が起きたのがわからない陽太郎は、1分程ただ呆然と固まっていたが、胃の辺りから込み上げる違和感に気付きトイレに駆け込んだ。

再び部屋に戻ってくると、縫いぐるみを抱きながら黒々としたオーラを放つ日向に、どう声をかけていいのか悩んだ。

「…日向…サン…？」

色々なパターンを考えてみたものの、取りあえず名前を呼んでみる。

「…陽太郎おおおお…」

「……」

すげえ顔だな、と内心思う。日向の泣きっ面を見て、気まずそうに取りあえず「どうしたんだ？」と聞いてみる。そして事情を聞くと、彼は大きく溜め息をはき、肩にポンっと手を置いた。

「…あのな…相手は金髪サンだ。勝とうと思うな。色気にゃ負ける」
陽太郎が心の中でほくそ笑む。

「…織紗那ちゃんが無事であるよう、暖かく見守ってあげようでは

ないか!」

興味、好奇心、極め付けは暇潰し。泣きながら思考回路の働かない日向には、陽太郎の意見が輝いて見えた。

「後付けるぞ! バレないよう変装してこい」

「あい、わかった!」

と、勢い良く家を飛び出した。

ほんの数十分して、日向が戻ってきた。けれども今度は、桜、レディも一緒だっ。日向はシャツの上からベージュのジャケットを着て、マフラーで口許を隠し、尚且つ目許までふかぶかと帽子を被った上にサングラスをしていた。桜も同様にサングラスをし、ショールを頭から被りファー付きのダッフルコートとベージュのワンピースと重ねていた。レディも同じくサングラスを掛け、いつもとは少し違う雰囲気のだらっどスタイルで現れた。言い出しっぺの陽太郎は、ヒップホップ調のファッションにサングラスと帽子を合わせていた。

「うっし! 完璧」

取りあえず町へ行きゃいいだろう、って事で陽太郎の車に全員乗り込んだ。相手はボンな高級車、嫌でも目立つ筈だ。皆胸の中にそれぞれの思いを抱え、車は出発した。

車で30分程度走らせた先に、妙な人ばかりができていた。小洒落たオープンカフェ、テレビ取材でも来てるのかと思う。一応車からチラッと覗いて見ると、入口に黒い男が立っていた。間違いない、フランス・クリンストーンの御付きの男。

「あ! あいつ、フランスなんとかの御付きの野郎だ! 今朝見たっ」日向が指差して叫ぶ。

「そんな名前だっけ? よし、じゃあ中に入るか」

「ラジャ!」

近くに駐車場はあり、案の定リムジンが止まっていた。人込みを掻き分けて中に入ろうとすると、御付きの男に止められた。

「なんだ？悪いが、今日は貸し切りなんだ」

「…すぐ出ますから。今日ここにこれる日を楽しみにしてたんですよ」

取りあえず、泣きまねしてみた。

「ダメだ」

…ちっ！…と舌打ち。取りあえず裏へ周ってみる。…裏口は開いてるよう。

「…ここからなんとか入れないかな」

陽太郎がぼやく。

「僕、ここ初めてだからなあ」

うーん…と唸る。するとタイミンクの良い事に、裏口から若い女の子が出て来た。年は10代後半程度。陽太郎が思い切って話しかけた。

「ねえ、君ってここの従業員？」

すると彼女はよそよそしく答える。

「ええ」

「お願いがあるんだけど…」

陽太郎がサングラスを外し、裏口に引っ張った。

「あの2人、少しだけ近くで見たいんだ。見つからないようにでいいから、こっそり中に入れてくれないかな？」

陽太郎の顔が彼女の顔に近付き、吐息がわざと触れるようそつと囁いた。

「え…あ…えと…」

（…色仕掛けか！）

日向は良く分からない衝撃を受けながらも、自分も入りたい一心で賛同した。ある意味2人の得意分野だ。今度は日向がサングラスを外し、顔を近付ける。ふっ…と笑みを浮かべながら

「マスターに頼んでみてくれない？お・ね・が・い♪」

と囁く。続けて絶妙なタイミングで、彼女のサラサラと揺れる髪にキスをした。彼女の顔がありえない程真っ赤に染まる。

「…き、き、き、きく…聞くだけ聞いてみます!」

そしてふらふらと店内に飛び込んだ。

「うっし!」

思わず陽太郎と手の平を叩き合う。

「…日向…あんた達…何考えてんの…」

桜が呆れてぼやく。

「……」

レディも言葉を失ったまま、呆れて固まっていた。

それから直ぐマスターだと思われる女性と共に、先程の女の子が戻ってきた。

（しめた!女だ!）

「あなた達、うちの従業員に何するの?」

マスターは厳しい口調で歩いてきた。

「何も。僕ら、どうしても中に入りたくて。いえ、貸し切りだとは分かってはいるんですけど、どうしてもあの有名な方を近くでみたんです。もちろん、見つからないようこっそりで結構ですから。ご迷惑はおかけしませんでした」

通称天使のスマイルと言われた甘いマスクを、日向が惜しげもなく女マスターに投げ掛けた。口調も甘く優しく、宥めるよう。更に陽太郎が後押しする。

「この様な美しいお嬢サン方にご無理申し上げるのも心苦しいのですが…ほんの少しで結構なので、僕からお願い聞いていただけませんか?」

ふっ…と笑う。

「…あら…美しいお嬢サンなんて…口だけはお上手ね」

「本当の事を言っただけですよ、マドモアゼル」

どうやらこのマスター、陽太郎が好みのようだ。

（あーとちよっと!あーとちよっと!）

日向は一步下がると、心の中で必死に応援した。サンサン7拍子にも気合いが入る。

「…お礼と言っではなんです、ご希望とあればお相手致しますよ。否、変な意味ではなくてね」

（出たー！究極の殺し文句）

女マスター…多分年は30後半くらいだが、お洒落な店に似合うお洒落なマダムだ。マスターはくるくると巻かれた髪を弄りながら、顔を真っ赤に染めた。

「もう、大人をからかうもんじゃないわよっ」

陽太郎は変な意味ではない、と確かに言った。要するに、皿洗いでもデートでも、という意味。もちろん、考えようによっては夜のお相手すら。しかし女マスターは真っ先にピンクな状況を思い浮かべたよう。

「からかうなんてとんでもない。僕だって充分なおトナなんですから」

「…今夜11時にここで…」

「了解！」

「…激しくしてネ」

「お望みとあれば地獄の果てまで」

女マスターはるるんとスキップしながら「どうぞー♪」と裏口を開けてくれた。

「…あんたらに貞操観念って奴はないの？」

桜がぼそりという。

「据膳食わねばなんとやらって言うでしょう」

日向が半ば笑いながら言った。

「狼め」

「俺が狼ならお前は羊の皮を被った野犬って所か」

「…意味わからんわ」

僕はお前程タチが悪くない、と言ってやりたかった。



バレない様こそと小さくなりながら、4人は織紗那達がお茶をしている席の衝立で仕切られた真横の席に隠れた。

「好きなモノたくさん食べてクダサイ」

「ありがとうございます。甘くて美味しいものばかりですね」

たわいもないが、何やら楽しそうな話声が聞こえる。

(…なんだよ、楽しそうにして…)

日向は隣りで聞き耳を立てながら、何だか妙に辛い気分になっていた。

更に会話は続けられる。

「ヤマトナデシコ探してマシタですヨ。貴女ジャポンの鏡です。ボクのワイフにしたいデス！理想の女性です」織紗那は“？”を飛ばしながら問う。

「わいふとは何でしょう？」

「妻デス。スウィートエンジェル！」

ぎゅっと手を握る。

衝動的に殴りかかろうとする日向を陽太郎が、桜をレディが力で押さえこんだ。織紗那は悲しそうに言った。

「…すいません。私には、もう既に夫がおります…」

「オオウ…」

陽太郎の中で、日向の力が抜けた。

(…織紗那ちゃん、人妻だったのか…)

陽太郎は何だか大層日向が気の毒に思えてきた。

フランススが問う。

「愛してイマスか？」

誰もが“はい”という返事を期待していた。

——桜以外は……。

彼女は少し考えてから答える。

「…いいえ。私の愛した方は…この世にはもういません。それでも今私の近くに…近くに大切な方がいますから。きっと、あの方が巡り合わせてくれたのだと思います」

にっこりと笑う。日向の顔が真っ赤に染まる。良かったな、と陽太郎が無言で頭にぼんつと手を置いた。

「オウ！愛していませんですか。離婚したらボクと結婚しまシヨウ！！オカネならイッパイありマース！」

フランススがやたら元気に、また彼女の手を握る。

「ええ???」

「今スグ言いません！マドモアゼル、まだスキな人いるネ。ボク諦めません！またデートしまシヨウ」

フランススに圧倒され、織紗那はコクコクと頷くしかなかった。

「ボンボン食べたらドコ行きたいデスカ？お任せいいデスカ？」

「…はい、結構ですよ」

それからフランスス達は金持ちの特権で、遊園地、高級レストラン（貸し切り）を周った。その間も取りあえず4人は頑張っけて付いていった。

夜9時を回る頃、再び酒猫家の前にリムジンが止まった。が、車は直ぐに帰っていった。

「ただいま」

と織紗那が玄関を潜ると、日向が玄関の壁に腕を組ながらもたれかかって待っていた。

「あの…日向、遅くなってすいません…」

不機嫌そうな日向を見て、様子を伺う様話かけた。けれど彼は無愛想に黙ったまま。

「日向、怒ってますか？」

「……」

彼女がしゅんとする。日向の服の裾を掴み、ごめんなさい、と言う。

「…怒ってないケド…」

「？」

照れながら続ける。

「…ちよつと、拗ねてるだけ…」

彼女がくすりと笑う。

「？なんだよ？」

「また、デートに誘ってくださいね」

「僕は貧乏だからリムジンなんて持ってないよ」

「ええ」

「店の貸し切りなんて出来ないよ」

「ええ」

「薔薇の花、10本は買っても100本も買えないよ」

「ええ」

「ダイヤもドレスも買えないよ」

「ええ」

織紗那にしては大胆に、日向にぎゅっと抱き付いた。彼女の顔が胸より少し下の辺りにぎゅっと当たる。

「…日向がいてくだされば私はそれで満足ですから」
そつと彼の指が彼女の髪を撫でる。

「…日向…」

「？」

「あったかいですね」

「……」

更に熱くなった。

一方、今回活躍した陽太郎が、ラブホテルで泣きそうなくらいヒートアップさせられていたのを、誰一人として知る由もなかった（むしろ皆忘れていた）……。

また、後日これを原因に陽太郎が3日程寝込んだ事実を、未だ知

る者はいない。

◆私をゲレンデに連れてって!!◆

「月影、春宮との新婚生活はどうだ？」

20歳そこそこの男が、昼間っから酒を持ってやってきた。月影と呼べた同じ年の男は、ほげー…と庭の梅の花を眺めていた。

「んあ？ ああ、美鏡かあ」

どうやら寝ていた様だ。大欠伸をする。

「…で、何？」

こほん、と咳払い。

「新婚生活はどうかと思ってな」

月影はうーん…と暫く考えると、ちょいちょいと指先で美鏡を呼び寄せ、耳打ちした。

「春宮とは、気立てはいいかもしれぬが、つまらぬ女だ。まな板の上の鯉とは、ああいうのを言うのかもしれない」

再び美鏡がこほん、と咳払う。

「…なんの話をしている」

「ナニがソレの話ではないのか？」

「……」

穏やかに薫る梅の香は、なんとも香しい。

「では、聞こう。ナニがソレが結婚生活というもののなのか？」
再びうーん…と考える。

「春宮は俺に惚れているのかもしれないが、俺は父上から仰せ使った義務だと思っているから。他に思い付く事がない」

「…ふうん」

そんなもんかねえ、と酒の入った陶器の栓を抜いた。

「お主も呑んでばかりおらぬで結婚したらよかろう？」

美鏡は陶器から直接酒をあおった。

「嫁か…。俺も父上から仰せ使う前に、気に入った娘をさらってこようかの」

けらけら笑う。

美鏡の呑んでいた酒を、月影が奪う様にして取り上げると自分も呑んだ。

「…恋でなければ、ナニがソレもつまらぬわ」

ポンポン、と手を叩く。

「春宮、酒の肴は何かないか？」

すると3メートル程奥の襖が開き、重そうな着物を引きずりながら娘が出て来た。

「あら、美鏡様いらっしゃいまし。月影様、今聞いて参りますね」
（…なんだかんだ言って、ちゃんと夫婦してるではないか…）

月影から奪う様にして、再び酒をあおった。

暫くして春宮が戻ってくると、彼女は肴とおちよを置き3本指で軽く頭を下げ、また部屋へと戻っていった。それを見、一緒に呑むのかと思っていた美鏡が、啞然として問うた。

「いつもこういうのか？」

肴をつまみながら月影が言う。

「そうだ。でも布団は同じだよ」

美鏡は、わからないという顔をした。

「春宮は嫁いで来た時から、俺に対してどこかよそよそしくてな。普段はああして直ぐ部屋に引きこもっては和歌を読んだり、裁縫をたしなんだりと一人で遊んでおる」

少し、もったいないと思う。

「お前は何をしておるのだ？」

「俺は、庭でこのように季節を楽しんだり、散歩したりしておる」

美鏡も肴を口に放り込みながら、溜め息混じりにいった。

「…暇…なんだな」

「……」

春宮、年は10と3。気立ても容姿も悪くはない。気も利くし、嫁としてどこからどう見ても申し分ない娘であった。それでも月影は、どうしても惚れる事が出来なかった。

「美鏡。もつと遊びに来いよ。暇だから」

美鏡は呆れて言う。

「お前はいいかもしれぬが、新婚生活を邪魔する狼藉者として巷の
有名人にでもなったらたまらんわ」

月影が笑う。

「それは愉快だな」

彼が軽蔑するように月影を見た。

「お前なあ…」

はああ、と溜め息を吐く。

「まあいい。しかしな、お主はどうであれ今は春宮の夫なんだ。も
っと大事にしてやれ」

(…気立てや容姿だけでは…好きになれぬのだよ…)

「…努力する」

それから月日は流れ、気が付けば村外れの娘に恋をしていた。名
を織紗那といい、もののけと暮らす、大層風変わりなおなごであっ
た。

何回目かに屋敷を訪れた時、門を潜ろうとしたら頭上で声がした。
見上げると屋根の上で、一人酒盛りをしていた。

「月華丸様っ！今お花見をしておりますの。ご一緒にいかかですか
？」

なかなか高いので、思わず声を張り上げる。

「お主一人でか？」

すると彼女も声を張り上げていう。

「いいえ！一人であって一人ではありませんせぬ」

「また難しい事を言うの」

あははと笑う。

「今迎えを寄越しますから、上がっていらっしやいませ」

「わかった！危ないから乗り出すではない」

蝶子という幼女に案内され、隠し通路から屋根に出た。下からは

分からなかったが、そこでは摩訶不思議な事に、天女が唄い踊り動物の顔をした男達が酌を酌み交わし、惜しげもなくごちそうが並べられていた。いつもの庭の桜がやけに満開に見え、ふわふわと降る雪が更に薄紅を引き立てているよう思えた。

「おおう！酒でも呑みなはれ」

猫の顔をした男が月影こと月華丸におちよこを渡した。

「すまぬ」

「月華丸様、今日は1年で一番桜が満開になる日なのです」

まるで絵本の竜宮城、呑めや唄えの大宴会。酒を一口口にして、その絶品さに酔い痴れた。料理も見た事のないような物が沢山あり、その美味に舌鼓を打った。

「宴は明日まで続きます。ゆっくり楽しんで行ってくださいまし」
織紗那が月華丸に酌した。

「…えー、今から和歌の大会を致す！」

兎の顔の男が言った。

「優勝者は何がもらえる？」

牛の顔をした男が言った。

「何もない」

兎男がきっぱりと言う。すると周囲からはたちまちブーイングの嵐だ。見兼ねた織紗那が挙手をした。

「では、優勝者には私が呪術を施しましょう！女でも男でも人の姿に致しましょう。半日間、条件付きで町に出る事を許しましょう」
おおっ！と皆が絶賛した。

「月華丸様は、何がお望みですか？」

思わず呑んでいた酒を吹いた。

「わ、私も参加するの؟؟？」

「もちろんですわ」

この男、和歌に対するセンスのなさでは有名であった。焦る、本気で焦る。

「聞く…専門ではダメか？」

「ええ、是非お聞かせくださいな」

「……」

るー……っと心の中で涙を流す。

「お望みは？」

笑顔で織紗那が迫る。

「……では……もしも優勝したら言おう」

「はい」

そして和歌考案タイム。皆が必死で考える。

「……織紗那殿、どんな感じで書いておられる……？」

うーんうーん唸った挙句、月華丸が織紗那に問うた。

「ダメですよっ」

「うーむ……」

やがて考案タイムも終わると、月華丸の予想通り一番手にされた。皆が拍手で迎える。

「で、でわぁ！和歌を詠みますっ」

「月華丸様、頑張って下さいまし」

こほん、と取りあえず咳払い。

“咲く桜 桜咲く咲く 桜色 薄紅の色 綺麗に咲いた”

「以上。まあ、この歌は桜が綺麗だと言う事を言いたいんだな……」

そこまで言ってチラリと周囲の反応を見てみると、その場にいた全員が氷の様に冷たく固まっていた。織紗那ですらフォロー出来ずに硬直している。

「……」

「……」

短くも長い沈黙を破ったのは、羊頭の男が叩いた食器のちーん……という音であった。その場の誰の耳にも、仏壇の鐘の音にしか聞こえなかった。

「……では次」

兎男が言う。

「私が行きましょう！」

鼠頭の女が答えた。和歌大会は何事もなかったかのように進められた。

「…だから嫌だって言ったのに…」

流された月華丸は、半泣きになりながら小さく背を向け、隅っこのの字を書いていじけていた。

「げ、月華丸様、素敵な歌でしたよ。解りやすくて」

慌てて織紗那が宥めにかかる。

「…いいよ…歌下手なの解ってるから…」

「……」

もはや上手い下手の問題ではなく、センスの問題だと誰もが思う。式神、もののけ達が次々と歌を詠み上げる。どれも素晴らしい歌ばかりだ。時には感嘆の声を上げ、時には辛口に評価をする者もいた。そして、最後に織紗那が詠み上げた。

「私も上手くはありませんが、一つ皆様に聞いていただきたいとおもいます」

“君唄う 面影恋し 春の夕 無情の想ひ 我泣かぬけり”

ほほう、と皆が感嘆する。

「流石織紗那樣じゃ。どこぞの優男とはひと味違うの」

ははは、と笑いが巻き起こったが、約1名は底なし沼に沈んで行くようにへこんでいた。

「これ！人には得意不得意がありますからっ」
すると牛男が問いた。

「月華丸とやら、お主は何が得意かな？」

へこんでいた顔を上げて答える。

「そうだなあ…剣ならばそこそこ得意かな」

ほほう、と猿の頭をした男が頷いた。そして、織紗那の前に深々と

頭を下げて言う。

「明日は剣での大会と洒落込みませんか？ 剣は危なくない様、呪札を刀に似せたものでどうでしょう？」

「危なくないのなら、構いませんよ」

すると横から月華丸が口を挟んだ。

「織紗那殿が良いと言うのであれば、明日私の親友を連れてきたい。普通の試合では面白くないであろうから、2人組で手合わせするというのはどうだろうか？」

猿男が言う。

「そいつぁ、面白い！ 剣に自信のない者でも、組み合わせによっちゃあ勝てるって事だな」

「わかりました。確かに面白いですね。では、反対の者はどれだけいますか？」

すると虎男が声を上げた。

「ワシは反対だ！ ワシは腕に自信があるから、弱い者は足手まといだ。だが、皆が賛成というならワシも賛成しよう」

織紗那がポンポンと手を叩く。

「では、明日は剣術とします」

拍手が起った。

そして、多数決で和歌が選ばれる。結局、優勝を手にしたのは羊男であった。その後はあいもかわらず呑めや歌えの大宴会。月が天辺に昇る頃、月華丸は一時帰宅した。

自宅に帰り寝間着に着替えて寝室に入ると、布団では先に春宮が眠っていた。そっと隣りに潜り込む。

「…月影様？ お迎えもせず申し訳ありませんでした…。おかえりなさいませ、お酒を吞まれてきたんですね」

「…構わんよ」

ふいつ、と春宮に背を向けて寝転んだ。

「おやすみ。明日も遅くなるやもしれぬから」

「…はい」

春宮は月影の背に向いて眠った。

翌日美鏡を連れ、屋敷に赴いた。美鏡は式神やもののけ達に、言葉無くして驚いていた。

ガチガチに固まったまま式神達から酌を受けていたが、ある程度酒が入ると美鏡も又わだかまわりや緊張が解けた様で、楽しそうに酒を酌み交わしていた。

暫く騒ぎ、程よく酔いも回った辺りで剣術大会が始まった。今日は鼠女が審判をやるようだ。女中の格好をした鼠女が数人、色々な武器を運んできた。第一試合は、猫男と兎男であった。猫男は鎖鎌を、兎男は薙刀を取った。

鼠女が声を張り上げる。

「構えてっ！」

お互い目の色が変わる。まるで真剣同士のように。

「はじめっ！」

「フギャーッ！！」

「キーツ！！」

と気合いが入る。

どちらも、結構なやり手の様だ。最初に兎男が突っ込み、続いて猫男が向かった。兎男の連続技を空中芸のようにくるくるかわすと、隙を狙って分銅を投げ込み、避けた瞬間を狙って仕留めてしまった。

「それまでっ！」

拍手が巻き起こる。

「お見事っ！」

月華丸が絶賛した。すると猫男が言う。

「ありがたい。次はどうか？ 昨日の挽回のために」
ははっと思わず苦笑い。

「そうだな、ぜひお手合わせ願おうか」

月華丸はそう言いながら、襷と鉢巻きを身に着けた。

「お手柔らかに頼むよ」

刀を手取る。

「構えて」

ぐっと構える。

「はじめっ！」

掛け声と同時に月華丸の足が地を離れる。鎖が飛びきるのが早いかな。否かのタイミングで、間合いに追い詰められ猫男は切られた。

「それまで！」

一瞬水を打った様静かになり、すぐに物凄い歓声と拍手を浴びた。

「見事じゃ！見事じゃ！」

織紗那も実に喜んだ。

「すごいですわっ！」

偉そうに美鏡が言う。

「こいつの剣の腕はかなりのものだ！幼少の頃から手合わせしてた俺が言うんだ、間違いはない」
すると羊男がいった。

「ならば拙者は主と手合わせ願おうかの」

ふふふと笑う。

「俺の活躍も見てもらわねばの」

美鏡も襷と鉢巻きを身に着けた。

羊男は弓を、美鏡は剣を取る。

「はじめっ！」

羊男はいきなり弓をガンガンに打ちまくってきた。弓は矢がなくとも、弦を引けば矢のような光りの線が生まれてきた。狙いを外す事なく光りの矢は飛来する。

「なんだっ！？お主、妖術とは卑怯な！」

彼はなんだかんだ言いながらも、紙一重で全部避けていた。

「卑怯？武器は全て妖術ですぞ」

織紗那が叫ぶ。

「光りの弓の様に見えますが、刀で打ち消す事もできますよ」

その瞬間、美鏡の動きが変わった。

矢を紙一重で避けたかと思うと、まるで舞いでも舞うかの様に刀

で飛来する矢を打ち消しながら間合いを縮めると、一気に切った。

「それまで！」

わーっ！と歓声が沸き起こる。

「美鏡様もお強いんですね」

織紗那がうれしそうに美鏡の手を握って小さく飛び跳ねた。それを見て月華丸が、ムツとした。

「よし！次は私だっ！！」

そんな感じで剣術大会は夜まで続いた。大盛り上がりの中、月華丸と美鏡の2人組みが優勝した。大会が終われば、やはり吞めや歌えの大宴会。

宴は月が天辺に昇る頃、夢から覚めたように終わりを告げた。

帰り道、美鏡と少しだけ語った。

「なあ、月影。何故に幼名で、あの織紗那とか言う娘に呼ばせてるのだ？」

月影が笑う。

「嫌なのだよ」

「？」

「妻のいる身が」

美鏡が複雑な顔をした。

「俺も半年前妻をもらったが、お主が言う程悪くないとは思うのだが」

更に笑う。

「何故かな。努力はしたが、好きになれなかった」

「…あの娘が好きなのか？」

歩みが止まる。

「…織紗那殿も近々嫁ぐそうじゃ。俺は妻がおる身、黙秘させてくれ」

「ああ…」

再び歩き出す。

「ところで…」

美鏡が何か言いかけた。なんだ？と振り返った刹那、月影は思いつきり壁にぶつかって後ろに倒れた。

「危ないって言おうと…」

と微かに聞こる。倒れたショックで後頭部をぶつけ、チカチカ星が飛び散ったところで意識が飛んだ。

――暫くの空白……。

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•



意識が戻りはっと気付くと、顔の上に蝶子の絵本が、体に蝶子が馬乗りに乗っていた。

「……」

「日向あ、ご本読んでえ」

絵本で顔をべしべし叩く。

「…あの…蝶子さん、痛いんですケド…」

「ご本、ご本っ！」

お構いなしにべしべしやる。

仕方なく蝶子を抱き抱えた。

「降参。わかった、今起きるから待ってて」

「わあい♪」

携帯電話の時計は昼の13時過ぎ。重たい体をゆっくり動かした。

部屋を出ると、蝶子がとてと洗面所にまで付いて来た。取りあえず顔を洗い、電気剃刀で手入れをする。寝癖を直すと、長い髪をなんとなくいつもより上の位置で束ね、コンタクトレンズの変わりに眼鏡をかけた。「蝶子、ご飯食べてからでいい？」

「いいよー。蝶子、もしもししてる」

「もしもし？」

ふと目をやると、蝶子が携帯電話をガチャガチャ弄っていた。携帯がマナーモードになって、バイブっている。

「あ、蝶子返して」

「もしもしするの」

「いやいや、と後ろに隠す。」

「こら、お願いだから。もしもししてもいいけど、使い方わかんないだろ？」

苦笑いを浮かべて手を差し出すと、暫く振動する携帯を見つめて、不満そうに携帯を返した。受け取り、表示された着信歴を見ると、

陽太郎からであつた。とりあえず出てみる。

「はい。どうした？」

『あのさ、来週ボード行かねえ？』

あきれて言う。

「お前、今のうちの状況わかつてる？」

すると笑いながら答えた。

『アホ。ゲレンデにラヴはつきもんだろ』

「はあ？」

『お前、約束したろ？レディの事。お前も織紗那ちゃん、頑張れよ』
何やら気合い十二分以上だ。いつもの“ゲレンデナンパ症候群”とは訳が違う。

「…なんだ。てっきりいつもの悪い病気かと」

『俺はレディ一筋ですからっ♪』

全くもって幸せな男だと彼は思う。

「あ！」

ふと気付く。

『何？』

「お前、今度の期末落としたらかなりヤバいって葉奈ちゃん言っ
てなかったっけ？」

『…いや…もう…ね？』

嫌な事を思い出させるなど言わんばかりに言葉に詰まる。仕方ない
など、日向は溜め息を吐いた。

「しゃーない、ヤマ掛けしといてやるよ」

『恩に着るよ！』

「恩に着せるよ」

『あー、そうそう。泉の便乗だから、そこんところろしく。今年雪
が思ったより少なくて、ゲレンデのペンションの客入りが悪いらし
いんだわ。で、泉んところがそのペンションのオーナーと仲良いら
しくて、

格安で泊まってくれって』

泉こと、泉 イズミ カイト 海斗、完全に名前負けした大学での友人である。趣味は映画鑑賞、読書、ショートスキーという何処にでもいそうなごくごく普通の一般人。

「織紗那やレディもいいのかよ？」

しかもカップルで行ったら嫌味なのではないかと思う。

『6人用のペンションだから平気。だけど、あいつ一人かわいそうだから桜ちゃんでもどうよ？』

——それだけは嫌だ……！

電話の向こう側で、あからさまに嫌な顔になる。

チラリと蝶子に目をやった。

「……泉、子供好きかな？」

『？好きなんじゃない？この前公園の子供に、フィギアのおまけの菓子あげてたぞ』

……それは少し、違うと思うヨ。

「んじゃ、蝶子連れてこ！」

『蝶子？』

すかさず蝶子に電話を代わる。

「蝶子、もしもしてごらん？」

うれしそうに電話を手取る。

「もしもしももしもしいい」

『こんにちは。蝶子ちゃんいくつ？』

「んとねえ、蝶子852歳だよ」

『???』

「ゴフツ！」

日向は思わずむせた。

電話を代わる。

「ご、5歳くらいデス」

『……ナイスなボケかますお子様だな』

「まあ、そんな事はいいとして、料金配分は？レディの分持つてくれるよな？」

『うん、そのつもり。蝶子ちゃんの分は払わせる。力技で』

“力づく”ではなく“力技”である。

「うん、任せた」

そして、電話を切った。

あとは、皆にどう説明するかだ。ちょっとやさっとじゃOKしてくれないだろうし、桜が付いて来ると言い張るだろうし。

洗面所で考え込んでいたら、織紗那が

「ご飯どうしますか？」

と探しにきた。

：誰もいない。チャンス！

洗面所の扉に鍵を掛けた。

「？」

「織紗那」

「はい」

肩を掴む。

「旅行に行こう？レディと蝶子も一緒に」

足下で蝶子が小躍りを始める。

「りょこーりょこー♪」

「旅行：ですか」

ううん、と暫く考える。そしてにっこりほほ笑みながら言う。

「構いませんよ、楽しみですね」

良かったあ、と挨拶みたいになちよつとだけ抱き締めた。



一匹のぬえが鬼沙那の前に舞い降りた。

「鬼沙那様。奴等、ゲレンデとか言う所に行くらしいです」

「ゲレンデかあ…」

そういうと、髪を一本抜いた。ふうっと

息を吹き掛けると、それはくると踊りプロポーション抜群、誘う様な超セクシーフェイスの女性スノーボーダーとなった。餓鬼がひよっこり顔を出す。

「鬼沙那様、こやつは？」

「現代風雪女。もっと強くなってもらわなきゃ」

目だけ冷たく、くすくすと笑う。

「雪女にやられるくらいなら、日向だけ喰ろうてくれるわ」

ふと餓鬼が問う。

「鬼沙那様はなぜあの男をそれほどまでに？」

鬼沙那が舌なめずりをしてみせた。

「人は7回生まれ変わるのだけど、私が一番旨いと感じるのは5回から特に6回めの魂。更には特殊な才能、若さ、純粹さ、何より汚れなき事。簡単に言えば殺人や動物等の無意味な虐殺をしていないこと。あの男は前世から全ての条件を満たしていた。戦に出ても、必ず急所を外していたから瀕死になっても死んだ者はいなかったわ。否、死んでも彼におわされた傷が原因ではなかっただけね。今生でも音楽的才能として生きている。これ以上の魂はないくらいよ」

そして餓鬼を摘みあげると、雪女の肩に乗せた。

「あんたもたまには戦場に出てみたら？」

意地悪そうにほくそえんだ。

「か、勘弁してください」

ぴよこん、と鬼沙那の肩に戻る。彼女が鼻でわらった。

「雪女、わかってるわね？」

雪女は膝を付いて、深々と頭を下げた。

「はい。必ずや生け捕りにしてお持ち致しますわ」

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•

-
-
-
-

とつと1週間は過ぎた。織紗那と蝶子のウェアやらボードやは、日向ファンクラブから親戚の女の子にと言う事で仕方なくレンタルした。

前日深夜、泉がワゴンにて酒猫家に迎えに来た。泉は自分の相手が蝶子だと知って、かなり気落ちしたが、陽太郎が現地で捕まえてやるからと約束し、泉もなんとか気持ちを持ち直した。

朝6時、ペンション到着。荷物を運び込むと、朝ご飯を済ませ早速ゲレンデに向かう。

「日向、取りあえず一回滑ってこようぜ？」

「一番上まで行く？」

「当たり前だろ」

板を抱えた野郎連中は、やたら無邪気に雪の中を走る。

「織紗那、レディちよっと待ってて。様子見て来るから」

様子見とは只の口実でしかない。わかっていながら、にっこりほほ笑む。

「わかりました。楽しんできてください」

「すぐ戻るから」

「ゆっくり気をつけて」

「否、早いから」

そう言い残し、2人はリフトへと掛けて行った。

一緒に残った泉に織紗那が言った。

「蝶子は見えますから、行ってきてもらっても構いませんよ」

すると泉は苦笑いを浮かべて言う。

「何も知らない人達置いていけないよ」

「優しいんですね」

レディが愚痴る。

「ほんと！あの2人とは大違い」

「いや、あの2人も優しいよ」

なんとかフォローしようとするから、余計いい人に見えてしまう。

織紗那が言う。

「自然は私の仲間ですから、あの様な板遊びなら簡単に出来ますよ。すぐに2人に追いつきます。足手まといにはなりませんからっ」

「？」

すると、ポケットから小さな札を3枚取り出し、それぞれ3人の板の裏に貼り付けた。

「おまじない？」

泉が問う。

「そんなところですね。さ、上に行きましょう？」

すると泉が慌てた様に言った。

「織紗那さん、いきなりなんて無理ですよっ！怪我しますよ。あの2人だって、怪我するんだから」

につこりほほ笑む。

「私達は大丈夫ですよ」

「否、危ないって。僕はボードわからないから、2人が来てから教えてもらって、それから上にいきなよ」

いきなりリフトで上に行くといいはる織紗那と、それに付いて行く2人を彼は必死で引き止めた。

雪の上でのバランスも、タイミングや感覚さえも想像以上に簡単ではない。少しでも気を許せば、骨なんて簡単に折れてしまう。

必死で引き止めていると、周りの女の子がキャーキャー騒ぎ出した。有名人でもいるのかと思いい顔を上げると、日向と陽太郎コンビが何だかすごい早さで滑り降りて来た。

「…あら、日向と陽太郎様は有名人なのでしょうか？」

泉が呆れて答える。

「否、あの2人はいつもあんなん。毎シーズン休みの度にやってんだもん、上手い方だしあの見た目だろ。そりゃ、無駄に目立つよ」
2人は下に着くと片足を板から外し、こぐ様に地面を蹴りながらこちらにやってきた。陽太郎が息を弾ませている。

「ゼンゼンいい感じ。泉も行ってこいよ。俺3人見てるから、日向ももう一回行ってくる?」

「私も上に行きます!」

突然織紗那が言った。日向が驚いて彼女の側に寄った。

「ごめん、置いてかないから下で少し練習しよう?」

すると彼女はいう。

「お構いなく。足で纏いにはなりませんから」

うんうん、とレディも蝶子も頷いた。

「…実はやった事ある…とか?」

陽太郎が問う。

「全く。でも大丈夫です。なんなら勝負してみます?」

「……」

日向と陽太郎は少し考えるように黙りこくった。

しばらくの沈黙を最初に破ったのは日向。

「わかった。その代わり無茶はしない約束でね。陽太郎、レディ頼むよ。あと泉は蝶子」

「りょーかい」

と一同声を揃えた。

初めてのリフト。日向に教えられ、セーで乗る。

「わぁ♪高いですね!大丈夫なんですか?落ちたらどうするんです?」

織紗那が興奮したように言う。

「落ちたら…どうするんだろね?見た事ないから」

どうするんだろうと、なんとなく彼もつられて気になった。

リフトから降りると、織紗那のボードを取り付けてやり、自分のボードもはめた。

少し坂から滑り降り、エッジを立ててしっかり固定して止めると

「よいよ、おいで」

と手を差し出した。丁度レディと蝶子も到着する。

「日向、大丈夫ですから」

すると織紗那は胸元で左手を開き右手で拳を作り、それを合わせて小さく呪文らしきものを唱えた。一瞬彼女達のボードの周りの雪が立った様に見えたが、日向は特に気にもしなかった。

「ちゃんと支えるからね」

「ではいきます」

その瞬間、彼女達3人はプロ並みの滑りで男連中を追い越して滑り去った。

「日向、おいでくださいな♪」

「陽太郎！遅いー」

「きゃあーははっ♪」

「…！？…」

動揺してか、陽太郎が本日初めてコケた。その後体勢を立て直そうとした日向もまた、本日初めてコケた。泉がポツンとぼやく。

「…僕ら…無茶苦茶格好悪い…」

「…ボードなんか嫌いだ」

2人の男の夢が、無残にも音を立てて崩れ消えた瞬間だった。取りあえず滑り降りてみると、3人は下で待っていた。

「日向、次はもっと上まで行ってみましょうよ？」

「ああ、いいよ」

ふと、日向、陽太郎の様子がおかしい事に気付く。

「泉様、どうかなされたんでしょうか？」

「いや、何もないよ」

彼は苦笑いをするしかなかった。

「日向、お腹でも痛いのですか？」

「なんでもないよ」

「寒い？」

「…もう、ほつといて…」

わーん、と陽太郎に抱き付いた。

陽太郎はよしよしと頭を撫でながら、自分も凹んでいた。

「ああ、良い事あるよ。これが全てでないから」

「…ほーもー」

蝶子がケラケラ指差して笑う。すると日向&陽太郎を見ていたギャラリーかざわめきながら立ち去って行った。泉がぼやく。

「蝶子ちゃん止めてね、今度は僕が凹んじゃうから」

「ほーもー、ほーもー♪」

誰が教えたのか。織紗那が蝶子の口を無言で塞いだ。

別のところでギャラリーのざわめきが起きる。

「アールマゲードーン！！」

どこかで聞いた様な声、聞いた様な台詞…。更に日向は気落ちした。
「嫌な予感してきた…。ほんつと、ボードなんか嫌い！」

眩き終わると同時に、ズサザツと雪を舞い上げ、あのクリンストー
ン兄妹が織紗那達の前に到着した。

「ボンジュウ！マドモアゼル。貴女も来る思ってマシタ。アルマゲ
ドン来マスからデス」

織紗那がうれしそうに言う。

「お奇遇ですね！皆さんで楽しくなりますね。それにしても、フラ
ンシス様お上手ですね」

するとフランシスが、相変わらずのナルシストで答えた。

「3歳の時から、ボードしていマス。10歳で大会シマシタ！ユウ
シヨウしました。でもジュリエラは、次のユウシヨウでした。2番
デス。でもウマイですヨ。教えますデスよ。それとも見ますか？イ
ロイロできますヨ」

「ぜひ拝見させてくださいな、日向も拝見させていただきますよね
？」

ふと視線を移す。

「…悪い。ペンション戻るわ」

「あ、なら私も…」

織紗那が気を遣うから、余計に腹立たしくなってきた。何に対して
怒っているのかも分からず、ただモヤモヤとした何かに気分が悪い
…。

「いいよ。只の貧血だと思うから。ゆっくり楽しんでおいで」
そのまま振り向きもせず、板を外すと足早に走り去った。



ペンションの部屋に戻ると、陽太郎から丁度メールが届いた。

『大丈夫か？皆心配してるよ』

取りあえず

『大丈夫』

とだけメールを返した。

(…馬鹿みたい…格好悪い…最低だ)

心の中で何度も呟いた。

ウェアを椅子に掛け、ベッドの上に寝転ぶ。体調が悪かった訳じゃなくて、ただあの場にいたくなかっただけ。彼女達が滑れるなら滑れるで、それでいい筈。織紗那だって、クリンストーン兄妹について行くといった訳でもないし…何かをするにも『一緒に』が付いてる筈なのに…。

(僕ってこんなに嫉妬深かったっけ…?)

思わず自嘲していた。ふと思う。

織紗那に『好き』だと言えたら、どんなに楽なんだろうかと。否、いつの間にか好きだと今更気付いたのかもしれない。

ベッドから体を起こした。俯いて腰掛けていたら、足の上に置いた手の甲にポタリポタリと滴が落ちた。

(…?…)

徐々に視界が滲み、涙なんだと気がついて、指先で拭った。

(…情けない)

全てが怖いだけだとは、自分でも十二分に承知している。

面白い番組でもないかと、テレビを付けた。適当に時間を潰していたら、夕方過ぎぐらいにペンションのオーナーの

「お帰り♪」

という声がして、リビングが賑やかになる。

「日向は？」

「部屋にいるよ」

という陽太郎とオーナーの声がして、慌てて窓から飛び下りた。窓のすぐ下に中かがみで隠れていたら、案の定陽太郎が部屋に来て

「あれ？いない」

等とぼやいてまたリビングに戻って行った。

「電話かメールしてみたら？」

「おう」

という泉との会話が何となく聞こえ、今度は自分の携帯の着メロにビックリして放り投げた。お陰様で携帯電話はビシヨビシヨ…。

「あれ？部屋からしてない？」

「否、今切られたよ。掛け直しても繋がらないし…」

「なんか怒ってるのかな？」

「流石にあいつも一応はオトナなんだから大丈夫だとは思うが…」

「女の子とやってんじゃない？」

「あははっ」

どうやら再び部屋を覗きに來た様で、扉を開けままらしく陽太郎達の会話が丸き声。

「やるってなんですか？」

織紗那の素っ惚けた質問が聞こえた。

「ああ、とーっても気持ち良い事♪」

（…いらん事教えんな！バカ陽っ！！）

心の中で殺意が芽生える。

（…てか、僕なんで逃げてるんだよ…）

なんだか腹が立ってきて、憂さ晴らしに一人ゲレンデに向かった。雪がライトアップされ、それなりにロマンチックだ。逆ナンパされる余裕もないくらい、ガンガン飛ばした。ジャンプも決めたりした。拍手や歓声をくれた女の子達にも、取りあえず投げキッスを返しておいた。

散々滑り、戻る前に普段余り吸わないタバコを吹かしていたら、20歳半ばくらいの女性が話しかけて來た。

「あんた上手いね！あたし、雪花^{ゆきか}。あんたは？」

「あ！日向」

「今日は宿泊？あたしも泊まりでさ、あっちのペンションにいるのよ」

誘う様なマスク、申し分ないスタイル。ちょっぴりクール感漂うスポーティな雰囲気。彼女雪花は、日向と同じ方向を指した。確かに自分等の泊まっているペンションの周りには、あと2つ程ペンションがあった。

「へえ。同じ場所みたい。僕の泊まってるペンションは、赤い屋根」
「あら、私は青い屋根よ。良かったら、遊びに来て！ああ、その前に近くにご飯でも行かない？」

「いいねえ」

と反応して、ふと2か月程前の苦い思い出が蘇る…。

（そういえば2か月前もこのパターンで、痛い思い出したんだっけ。

あー…でもなあ…）

「どうしたの？ボードの話ゆっくりしたいのよ」

雪花の誘いに、日向悪魔と日向天使が現れて喧嘩し出した。悪魔は囁く。

『今回もこのパターンだとは限らないよー。最近溜まってるんだろ？イロイロと。男なら行っちゃえー』

すると日向天使が反発するのだ。

『理性を持って！皆ペンションで心配してるんですよ。只でさえ狙われてるんですから、今回もそのパターンかもしれないじゃないのっ』

再び悪魔登場。

『据膳食わねばなんとやらと、以前陽も言っていただろー。天使の言う事聞いてたら、チャンスもチャンスでなくなるでー』

更に天使の反撃。

『そんなプレイボーイな事ばかりしてたら、そのうち彼女の信頼もなくなりますよ！』

『ええい！信頼も何も付き合ってもないし、向こうは人妻さあ』

その瞬間天使は悪魔に叩き殺された。残った悪魔を今度は日向が叩き落とした。日向が問う。

「そっちは何人で来てるの？」

「あたしは一人なの。ただ純粹に楽しみたいだけだから」

一人でなければ、安心だろうと単純に考えた。

「僕らグループで来てるんだ。良かったら皆でどうかなくて」

彼女は暫く考えると、息苦しいから2人がいいと言った。仕方なくすぐ帰るなら、まあ大丈夫だろうと2人で行く約束をした。

着替えを済ませたら迎えに行くからと、2人は一度ペンションに戻ることにした。

ペンションに戻ると、オーナーが普通に迎えに来てくれた。気さくで大柄な、髭の似合うおっさんだ。

「お帰り。どこ行ってたんだ？皆心配して早めに上がって待ってたのに…」

咎められた本人はなんとなく悪びれた素振りではぐらかした。内心“織紗那が悪い”等と情けなくも考えていた。

「少し気分良くなったから、皆探しがてら滑ってたら夢中になっちゃって。携帯落として壊れちゃったし…」

フランスと織紗那と一緒に滑ってる所なんて、想像するだけでも腸が煮えくり返る。

「そうか。それで、夕飯をなんでもクリンストーンとかいう人達に招待されたとかで、皆有名な金持ちペンションに行ったよ。もし帰ってきたら来る様に、と言っていた」

日向の眉が、ピクリと動く。

「あ、僕パスするから。今からグレンデで知り合った子と夕飯食べてくるネ。帰って来たら陽太郎達に伝えておいてください」

「連絡どうする？しなくて大丈夫か？」

「携帯壊れてるし。まあ多分平気でしょ」

と、足早に部屋へと飛び込んだ。ウェアを掛け着替えを済ませ、白

再び部屋を出ると、行って来ますとペンションを後にした。

[illegible][illegible][illegible][illegible]

「皆サンはジャポンでのベストフレンズ達ですネ！ いっぱい食べてクサイ」

言われなくても皆食べ出していた。普段食事規制している陽太郎で

さえ、のちの苦しい減量覚悟で食べまくっていた。

突然、部屋の照明がダウンすると、ひずみの掛かったレコード板によるR&Bが流れだした。

「皆サーン！踊りまシヨウ」

ジュリエラが、くびれのいい腰を揺らしながら踊り始めた。スリットの入ったラメ入りの黒いワンピースドレスから、白い太股がチラリチラリと見え隠れする。

「お、踊りマシヨー！」

陽太郎が、太股につられて乗り出した。

「蝶子も踊るのっ！」

蝶子が泉のズボンを引っ張ってせがんだ。

「ようし！」

両手を取り、まるでフォークダンスの様にズンチャカ踊り出す。それを見た織紗那が、クスリと笑う。が、それは直ぐ様溜め息へと変わった。

（：日向、今何処にいらっしやるのかしら？また妖怪に捕まっていないかしら？）

ハジメテのフォアグラにハジメテのキャビアを乗せながら、物憂げにつついていたらフランススが誘いに来た。

「踊りまシヨウ？」

ちよっと戸惑う。

「私、踊りはわかりませんよ？」

すると彼は紳士らしく、深々と頭を下げ、手を仰ぐ様にして胸の前で構えた。

「エスコート致しますヨ」

「えすこおと？」

「イエス」

フランススが手の平を差し延べた。反射的に手を置くと、彼が手の甲にキスをした。思わず真っ赤になる。

「さあ？」

フランシスが手を引くと、織紗那の身体のバランスが崩れフランシスの身体とぶつかる様に密着した。

「す、すみませ…」

謝ろうとした唇を、今度は彼が唇で封じた。身体をリズムに合わせて、適当に揺らす。

「アン、ドウ、トゥロワ♪アン、ドウ、トゥロワ…」

甘いテノールが耳元で囁く。彼女の身体が熱を帯び、心臓が早鐘の様に波打つのが感じられた。

（日向、悪い女ですね）

それでも、不思議と嫌ではなかった。

その様子を一番不愉快に思っていたのは、他ならぬ陽太郎であった。横目で軽蔑する様見つめても、その嫌悪感溢れる怒りは日向に向けられていた。

「陽太郎、怖い顔しちゃってどうしたの？」

「!？」

愛しのレディの声に、はっと気付く。

「日向の事、考えてたでしょ？」

「…レディにとって、日向はどう見える？」

ふと、問いかけてみる。

「最高のパートナー。あれだけの才能、私は巡り合ったのアメリカ以来。以前のパートナーがアメリカ中を周っていた時にね、田舎の小さなレストランに入ったの。ギターが幾つも掲げられていて、今ももう奏でられてないのに凄く幸せそうなギター達だったよ。マスターのおじさんがあたしを手を取ってくれた時、カミサマに出会った気がした。なんていうのかなあ…そんな感じに似てんだ」

懐かしそうに語るレディの横顔に、妙な切なさが入り込めて来た。

「あいつじゃないとレディは音を出さないって聞いた。あいつには足下にも及ばないけど…俺もお前を弾いてもいいかな？ 応えてくれる？」

レディがコクリと頷いた。

「特別だよっ」

「約束な」

にっこり笑う。

そしてすぐ、はぐらかすようレディが

「ねえ、踊ろうよ」

と誘った。

それぞれが、それぞれの世界で楽しんでいた。シャンパンが配られる。料理とお酒とダンスと……。どれも最高だ。



ペンションから15分程歩くと、一軒の焼き鳥屋が開いていた。日向達と同じような宿泊客が沢山来ていて、騒がしい。

「ここでもいい？色気もなんもないけど」

苦笑いを浮かべると、雪花も同じように苦笑した。

「気にしないで。全然充分よ」

生憎カウンター席しか開いておらず、取りあえず2人並んで座ると生中2杯と、焼き鳥を適当に数本頼んだ。

「：日向、やっぱり綺麗な顔してるのね」

「え？」

突然の突拍子もない発言に、ドキッとする。

「明かりの下でも凄く綺麗。キスしちゃおうかしら♪」

「はい???」

突然過ぎて、意外過ぎて、突拍子なさ過ぎて：思いきり動揺していた。すると彼女は軽くデコピンを当て「ばーかー」と笑った。

（：か、からかっただけですか：）

何故だかガクッと肩が落ちた。

「キスするならやっぱりムードが欲しいじゃない」

「……」

なんだか妙にモヤモヤとした気分 to 襲われる。

「彼女やらしてくれないの？欲求不満？」

「：否、今はフリーですよ」

そう答えた瞬間、別の所からおかしな視線を幾つか浴びせられた様な気がして鳥肌が立った。

「ふうん、なんか勿体ないね」

運ばれて来たビールを見つめて、雪花がぼやいた。

「お疲れっ」

日向が構わずグラスを近付けると、彼女もお約束にグラスをカチン

とぶつけた。

「好きな人いないの？」

雪花の問い掛けに、少し戸惑ったように答えた。

「…好き…なのかな…？ 気になる人ならいるよ」

彼女は特に反応しなかった。

やがて料理が運ばれてきた。つまみながらたわいもないボード話をしていたら、あつという間に閉店時刻になった。

店員がラストオーダーを聞きに来て早々、会計を済ませて外に出た。真っ暗な中、真っ白に凍る吐息が浮かんでは消える。木々も大地も一面雪で覆い隠され、小さな電灯に照らされたそれらはクリスマスツリーの様だ。

「日向の好きな人ってどんな人？」

ペンションに向かって歩いていく途中、ふと雪花が口を開いた。

「…真っ直ぐで、純粹でしおらしい子。どこか寂しそうでほっとけない」

くすつと苦笑い。

「ねえ…」

彼女が足早に近寄ると、日向に抱き付いた。

「…暫くこうしていたいな」

拒否る事もできず、ただそのまま静止していた。抱き締める雪花の手の位置、ちょうど日向の腰の辺りがやたら冷える。

（…これ以上冷やすとまずいな…腰痛になりそ…）

冷えは時間が経過する度徐々に広がり、背中から腿の辺りにまでかかった。身体の中まで突き刺す様な冷えは、時間を掛ける度徐々に広がり行く。

流石に耐え切れなくなって片手を背後に回すと、指先に冷たく硬い氷が触れた。

「…え？」

小さく疑問符を上げて振り返ろうとするが、身体が動かない。雪花が小さく笑い出した。

「あんたも馬鹿な男よね。ちょっと誘惑したらのこのこついて来ちゃってサ。お蔭でこっちは楽だったけど」

彼女の身体が一步離れた。

「あたしは雪女の雪花……。鬼沙那樣の一部から生まれた従順な手下よ」

「…最低…」

「最低はあ・ん・た♪よっぽど欲求不満だったのねん」

雪花が日向の身体に少しずつ吐息を吹き掛けていく。吐息が当たると、その部分は氷で固められていった。

(…やっぱり、学習しとくんだった…)

今更後悔しても遅い話。織紗那や陽太郎にも絶対に知られたくない事実。身体が凍り顔だけを残すと、雪花は日向の頬から顎のラインを指先で優しくなぞる様に撫でた。

「ほんと、綺麗なんだからっ。魂抜いてもこの身体は氷に閉じ込めて、私の部屋に飾ってあげるからね」

彼女がキスをした。唇には体温が通っていないかのように、冷たく感じられた。

(これまでか…)

諦めてぎゅっと目を閉じた瞬間、急に身体が軽くなり後ろに倒れた。宙を仰ぐように感じた時、何か柔らかく暖かいモノにぶつかった。

「!？」

もたれかかったまま顔を上げると、それはあのクリンストーン妹の身体だった。

「ミライ見えまシタ。アナタ狙われる。でも、死んだらアルマゲドンハッピーなるだけです」

兄とは違い、敵を目の前にした彼女の表情は冷たい。スツと手の平をジュリエラが雪花に掲げた。

「私は悪魔持ってマス」

雪花の背後に黒く大きな物体が現れた。目の様なモノだけが、青白く不気味に光る。

「ワレヲメザメサセタノハ…オマエカ…？」

頭の中で低い声が響く。低音が響く度、酷い頭痛が走る。頭を抱えてしゃがみ込む日向を、ジュリエラがギュッと抱き締めた。

「モウイチドキク。オマエカ？」

「…何？何なの？」

ガタガタと震える雪花を、黒い物体は上から被る様に口に含まと、彼女の地獄の様な悲鳴と共にバキバキと噛み砕いて飲み込んだ。日向がそれに耐え切れず、ジュリエラを突き飛ばし嘔吐し出した。黒い物体は、ゆっくり日向へと振り向いた。

ジュリエラが、再び手の平を向ける。すると無数の青白い手か地面から伸び、まるで布でも引きずり込むように黒い物体を地面に引き込んだ。

「オオオオオ！！」

物体が消えると同時に、日向も事切れるかの様に気を失った。

（…やはり、普通の人間では耐えられないか…）

ジュリエラは仕方なく、日向を背負った。

（…重い…）

フワリと彼の髪が頬に触れる。

（…可愛い男の子ね…）

ずるずると引きずって歩き出した。

（…お兄様が気付く前に早く帰らなきゃ。あの人、私の男関係については鬼のように五月蠅いんだから）
イヤだイヤだと、歩みを早めた。

◆悪魔の娘◆ 〈クリンストーン兄妹編〉（前書き）

こんにちは。

幻宇と申します。

ここまで読んでくださり、本当にありがとうございます。

この小説は、以前個人のHPにて連載していたものです。

当時途中で編集と物語の校正をしたくなり一旦掲載及び連載を中断いたしました。

が、結局そのまま放置プレイで今に至りました。

どうせなら元のカタチのままでも読んでもらいたいなあという思いにて掲載と連載を再スタートさせることにしました。

それとも思い入れの強い作品であるが故です。

物語を読んで頂き、更にこのメッセージを読んで頂いている中でお気付きだとは思いますが、文章能力が乏しい私です。

なので、読者の皆様には高度な解読能力を要する場合があるやもしれません。

なにかと不便をお掛けするかと思いますが、迷惑にもこのお話はまだまだまだまだ続きます。

次回より、それぞれのキャラクターへと焦点が当たりながら物語が進んでいきます。

その中で皆様のお気に入りのお話、お気に入りキャラクターが出てきたのなら幸いです。

それから少しだけ贅沢を言うなら、ぜひ何かメッセージを残して頂けたらと思います。

では、『桜咲く』の世界へ…再度、行ってもらっしやいませ♪

◆悪魔の娘◆ 〈クリンストーン兄妹編〉

日向が気がついた時は、ペンションのベッドの上だった。一体何があったのが解らず、ただ天井をぼんやりと見上げていた。

暫くして、徐々に記憶が蘇ると恥ずかしさで死にたくなった。

直後あの黒い怪物が脳裏に浮かび、ただならぬ恐怖感に再び吐き気と頭痛が襲った。

まだ皆は戻って来てない様で、オーナーが心配して部屋を訪れた。
「金髪のべっぴんさんが背負って来た時は、本当にびっくりしたよ」
「なんか言っていました？」

「いや、特に。酷い片言の日本語で、酒の飲み過ぎだと言ったくらい。あんな美人といたんなら、そりゃ内緒にしたいわな」
がっはっは、と笑った。

「心配かけてすいません」

ガクリと肩を落とすと、若いんだからとオーナーは部屋を後にした。
（…少し眠よう…）

日向は静かに瞼を閉じた。

.....

.....

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

「明日も滑るんだろ？」

深夜4時半。明日というより今日、泉とフランスに陽太郎が尋ねた。

「イエス！」

「うん。明日も泊まりだし、平気だろ？」

織紗那とレディと蝶子は、壁にもたれたままいつの間にか眠っている。

「構わないけど、女の子3人寝てるし。日向来ないし、と思って」
なんとなく、フランスと織紗那を引き離してしまいたかった。

「部屋イッパイありまするカラ大丈夫デス」

「否、折角ペンション借りてるし帰るよ」

すると泉が言う。

「オーナーなら多分大丈夫だよ」

いらん事言うなど、陽太郎が泉をキッ！と睨んだ。

「：俺、織紗那ちゃんとレディ連れて帰るわ。泉、蝶子お願い」

「え？」

「オウ、ザンネンですヨ」

すると陽太郎は織紗那とレディを肩にひょいと担ぐと、荷物を運

ぶかの様に立ち上がった。

「フランス、明日ゲレンデでなっ」

「楽しみにしてマスよ」

そう言いながら立ち去るが、その姿は紳士ではなく“人さらい”の様であった。

そんな人さらい陽太郎の後を蝶子を背負った泉が追いかけた。

「フランス君、ありがとう！また明日ね」

「ハイ！」

その姿は、パパの様にほんわか馴染んでいた。

外はやはり寒い。ぐっすり眠っている織紗那が寝苦しそうにしながらも、ギョツと陽太郎の服にしがみついた。

「…月華丸様…」

ポツリ、とそう聞こえた気がした。

「…泉、悪いけど日向いたら少し部屋使って良い？」

「え？」

「一発殴る」

「ええ？」

泉は疑問符を上げながらも、それ以上言う事が出来なかった。

事情は知らなくとも、見ていれはなんとなく解る感情のすれ違い。と、陽太郎が何に対して腹を立てているのか、なんとなく自分も感じていた。

「あいつ、何がしたいんだろうね」

「お子ちゃまなんだよ」

夜明けを背に語り合う2人の姿は、はたから見たら犯罪者以外の何者でもなかった。

自分達のペンションに戻ると、まずベッドに女の子3人を寝かせた。それから泉に、様子見がてら待っているように伝えたと自分達の部屋に戻った。

ベッドでは、日向が気持ち良さそうに眠っていた。始め、取りあえず揺すり起こしてから話をして殴り飛ばす順序を考えていた陽太

郎であつたが、静かに寢息を立てる日向を見て無性に腹立たしくなり、気付けはゴン！と殴っていた。無意識に近かったせいかわぬ力が入ったようで、日向はベッドから転落していた。ついでに落ちた衝撃で顔面を強打したらしく、床に蹲ったまま顔を押さえて変な呼吸をしていた。殴り飛ばした陽太郎も流石にヤバいと思つたらしく、ちよつぴり動揺した。

「…おい、陽…あにすんだよ」

妙に鼻声で顔を上げるから、まさかとは思つたが、案の定顔を押しさえる日向の手にはベツタリ血が付いて、更には滴っていた。

いつも温和な日向でさえ血を見たたん、目が座つた。その瞬間プツンと言う音を聞いた気がした。

「…てめえ…」

聞いた事もないような低い声で日向が唸る。陽太郎が責任転嫁するよう、真面目に言つた。

「…暴力は何も生み出さないと思います。話合いましょう」

この一言が更に怒りを膨張させた。日向は取りあえず近くにあつた壊れた自分の携帯電話を引っ掴むと、陽太郎に向けて思いっきり投げ付けた。丁度2人が気になりいたたまれなくなった泉が部屋に顔を出した為、投げられた携帯は泉の顔面に綺麗にヒットした。鈍い音が部屋中に響きわたる。

「…!!…」

言葉もなく泉が膝を付いて蹲る。

「お前、泉はなんにもしてないだろ!」

「貴様が避けるから悪い!この下種野郎!!死ねっ!」

日向は陽太郎の胸倉を掴むと、殴りかかった。が、それは簡単に手の平で止められた。

「お前にこの俺は殴れん」

ふふんっと鼻で笑う陽太郎に、今度は日向が鼻で笑い返した。

「あら、そう♪」

刹那、陽太郎の全身から血の気が引いた。

「…おま…」

多分、“お前、なんて事するんだ”と言いたかったに違いない。

「手加減はした」

しれっと言う。日向の膝が陽太郎の股から外れ、陽太郎の身体がゆっくりと崩れ落ちた。ちよっとだけ意識のぶっ飛んでいた泉が気がつき、顔面血だらけになっているのを確認すると飛来した携帯を掴み、日向に投げ付けた。陽太郎に気を取られていた日向の後頭部に、それは真面に直撃した。携帯の鈍い音が、またもや部屋中に響き渡る。今度は日向が倒れ込んだ。

陽太郎は復活出来ず。顔面血だらけ男2名、再起不能男1名…。

「喧嘩なんか辞めろよ！」

顔面血だらけの男の一人が叫んだ。

「…お前が言うなよ…」

もう一人の血だらけ男が、蚊の鳴く様な声で言った。

「……」

再起不能男も何か言いたそうであったが、声を出せなかった。

「2人共、そこに座りなさい！」

喧嘩を止めろと怒鳴った泉も、どうやらすっかり頭に血が上っているよう。だくだく流れる血を手で押さえると、仁王立ちで指図した。

「…悪いのは、陽だろ？普通いきなり殴るか？」

自分は悪くないと言い張る日向の前に立つと、今度は自分で自分の顔に指差して言った。

「じゃあ、これは誰がやったの？」

「…僕が悪かったデス…」

子供の様に膨れて、そっぽ向いた。

「陽太郎も陽太郎だよ。気に食わない事があるなら、まず言いなよ」
「……」

陽太郎も同じ様に膨れて、そっぽ向いた。

「大体、なんでいきなり殴られる必要がある訳？てか、泉もまず顔拭けよ」

日向はベッド脇のティッシュケースに手を伸ばすと、3、4枚引き抜いて自分の顔を押さえ、残りを泉に渡した。泉は無言でそれを引き抜き、自分も同じ様に顔を押さえた。

「…なんで来なかったんだよ」

陽太郎がポツリという。

「…それが理由か？」

「ああ、そうだよ。このスカポントン」

「てめえ…！」

再び日向が陽太郎に殴りかかろうと振り上げた右腕を、泉が掴み止めた。

「泉、何すんだよっ！このバカタレあと5発は殴らんと気がすまん
！！」

「だから、止めろって！」

「うるせえな！」

泉に止められてもがく日向の隙について、陽太郎が腹に軽く拳を入れた。

「…ぐっ！…」

腹を押さえて蹲る。

「陽太郎っ！」

咎める泉に、手の平を見せてそれ以上言うなど合図をした。

「一応俺もボクサーだしな。これで日向は暫く動けないハズ」

涙目になりながら、キツと陽太郎をにらみ付けた。まるで子供でもあやすかの様に、陽太郎は日向の頭をがしがし撫でた。

「お前が奥手で、モーレッツにアピールしまくるフランシスが嫌なのは解るけど、それでも側に居てやれよ。織紗那ちゃん、一人で寂しそうにしてたぞ。それに…」

軽く言葉を濁してから、彼は続けた。

「…フランシスが良い奴だ。好き勝手させといていいのかよ？お前の肩ばっか持てないぞ、こればっかは」

日向がボソリと言い換えした。

「裏切りモノ」

「なんとも言え」

「……」

日向はよろよろと立ち上がると、無言のまま部屋を出た。後を追おうとした泉を、陽太郎が引き止めた。

「ほっとけ」

「…お前ら2人共最低だ」

払う様にして、引き止める手を振り解いた。そしてまた、泉も部屋を飛び出した。



午前８時半、朝食の席に日向と泉の姿はなかった。織紗那が心配そうに、陽太郎に問うた。

「日向と泉様は？」

彼は不機嫌そうに

「さあね」

とだけ答えた。

「陽太郎、機嫌悪いのね」

今度はレディが言う。

「別に」

いつもの陽気さのかけらも見えない。

「……」

それ以上何も言えなくなつて、皆無言で朝食を済ませた。

各自部屋へ戻ろうとした所、今度は陽太郎が織紗那を呼び止めた。

「ちょっと、いいかな？」

「ええ」

再びリビングへ戻ると、一度テーブルに腰掛けてからコーヒーでもと、陽太郎が立ち上がった。彼女が代ろうとしたが、そう言い出せる雰囲気でもなかった為、この場は任せた。

「砂糖とミルクは？」

「２つずつお願いします」

やがてコーヒーが置かれると、彼は重ったるそうに口を開いた。

「実は、今朝方日向と喧嘩した」

「あら」

特別興味もなさそうに応じる。意外な返答に驚いたのは、陽太郎の方であった。

「心配でない？」

彼女はクスリと笑った。

「では聞きますが、どちらが悪いとも言えないのでしょうか？多分、手を出したのは陽太郎様」

「…うん」

「なら、きつと夕飯には帰ってきますよ」

彼女はにっこりと笑った。

その日一日は、各自でゲレンデを堪能した。織紗那は蝶子と、陽太郎はレディと。ゲレンデでクリンストーン兄妹にも出会ったが、彼等にはギャラリーの注目により、近寄ることができなかった。

午後7時頃、すっかり暗くなってからペンションに戻った。今日が最後の宿泊になる為、まだ帰らぬ日向と泉以外簡単に荷物をまとめていた。荷物をまとめ終えた陽太郎が、風呂でも入ろうと腰を上げた時部屋の扉が開いた。ふと目をやると、泉が立っていた。

「何処行ってたんだよ？」

何事もなかったかのように陽太郎が聞くと

「普通に滑ってた」

と、何事もなかったかのように泉が答えた。泉も荷物の整理をしようと鞆に手をかけたとき

「巻き込んで悪かったな」

と陽太郎がポツリと言った。泉がそれに素直に相槌をうちながらも聞かない振りして一人ぼやいた。

「…あいつ、ああ見えて、案外だらしないんだな」

目をやるベッドは日向の使っていた場所。大して使っていない筈なのに、小物やら服やらと散らかっていた。

「ああ、典型的なO型タイプだ」

「じゃあ、頑固で負けず嫌いなんだ」

なんとなしに2人、溜め息がハモった。泉がいう。

「…探しに行った方が良くないか？多分、戻るタイミングなくしてるから」

「織紗那ちゃんは、夕飯には帰ると言ってたけど…」
はあ、と溜め息混じりに呆れた泉が突っ込む。

「んなもん、お前がへこんでたから言ったに決まってるだろ。お前、ほんっつとに典型的なB型だな。知ってるか？OとBって相性抜群なんだぜ」

…そんな泉はA型だった…。

陽太郎と泉が他の3人に見つからない様、こっそりと日向を搜索しに行った。

「ほんと、世話の焼ける」

陽太郎が零すと

「それは多分、お互い思ってるよ」

と泉が苦笑した。

30分くらい適当に歩き周っていたら、ペンションから裏の林の少し奥辺りに、陽太郎が段差のある川を見つけた。なかなか良いモノだなと段差の下を軽く覗き込むと、日向がぼんやりと川を眺めていた。

「あ！何やってんだ？馬鹿日向」

その言葉に、わざとかと思えるくらい物凄く不愉快そうに、日向が振り向いた。

「ああ？」

「折角迎えに来てやったのに、なんだその態度は？」

陽太郎も負けじと、ムツとした顔をした。

「馬鹿に馬鹿って言われたくないわ。知ってるか？馬鹿言う奴が馬鹿なんだぜ」

「なら馬鹿に馬鹿って言われたくないっていったお前は馬鹿だ。大体馬鹿ってなんなんだよ？馬と鹿に失礼だろ」

日向が眉間に指を当てながら、思いつきり呆れた。

「アホか…」

丁度その時、陽太郎を呼ぶ泉の声がした。

「泉も来たの？」

「ああ。泉！家出少年、発見したぞ！！」

「おお！良かったー。さっさと帰ろうぜ、寒い」

こちらに着く前に、泉は回れ右をして寒い寒いと戻っていった。

「ほれ見ろ。色んな人に迷惑かけて、悪い奴め」

「なっ！お前が言うな！！」

またふいっとそっぽ向いた。

「日向、悪かったな。さあ、寒いし帰るぞ。風邪引くぞ」

「：うん」

陽太郎に連行でもされるかの様に、とぼとぼと後ろを着いていった。

「ところで」

ふと陽太郎が口を開く。

「アルマゲドン現れないな」

その言葉に、ドキッとした。

「あ、あー、気が変わったんじゃない？」

実は襲われました、とは口が裂けても言えない…。

ペンションに2人が着くと、既に夕飯が並べられていた。クリンストーン宅には遠く及ばないが、昨晚の夕飯分の料金もかけてあるそうだ。

「おかえりなさい」

と織紗那が日向に駆け寄る。もう、何年も逢ってなかったかの様に感じた。彼女は彼の頬に右手を当て、左手で手を握りながら覗き込む様に顔を見上げた。

「凄く冷えてますよ。お鼻もほっぺも真っ赤。夕飯召し上がったら、お風呂入って休まれた方がいいですわ」

ありがとう、と微笑んだ。日向もまた昼間は一人滑っていた為、ウェアのままであった。

先に着替えを済ませてくると、皆の待つリビングに急いだ。全員が集まると、先に口を開いたのは織紗那だった。

「皆様お疲れ様です。先程、フランシスさんかお見えになって、あの方達も明日ここを離れるそうです。お仕事でなんでも、すぺいんとか言う所に行かれるそう。よろしかったら、暫くお会い出来ない

のでまたダンスパーティーでもしませんか？とおっしゃってましたよ」日向の顔がムツとする。

(…さっき休めって言った癖に…)

蝶子が行きたいと泉にねだった。どうやら、蝶子は泉が気に入っている様子だ。レディが陽太郎を誘うから、陽太郎は悦んで承諾したが、日向だけは頑固にも行かないと主張した。

「…僕寝てるから、皆行つてこれば？」

陽太郎がムツとした。

「…日向…」

陽太郎が立ち上がろうとするのを、また喧嘩は勘弁と泉が止めた。すると織紗那が割って入るかの様に

「今回は私もご遠慮させていただこうかな」と言った。

「行けばいいじゃん」

日向が言う。

「いえ、私は行きません」

頑として言い張った。

「そう」

しれっと返答しながらも、内心何処かほっとした。

夕飯が終わると、日向と織紗那を残して皆クリンストーン宅に向かってペンションを出た。皆を見送ると、何故行かなかったのかと日向が彼女に問うた。

「行った方がよろしかったですか？」

と聞くから、何も言えなくなつてリビングのソファに腰掛けた。

「やっと2人になれたではないですか」

意地悪っぽく彼女が言った。

「行くなつて顔に書いてありましたよ」

「…イジワル」

彼は顔を赤く染めながら、ふいっと逸らした。

「でも、いいのです。フランシス様嫌いではないですけど、なんか

あの方“夫”に似ていて苦手なんです」

「夫に？」

「ええ。こうひいとかいう黒いお茶、飲みますか？昨日泉様に教えて頂いて、今朝も飲んだんですけど美味しかったですよ」

クスリと笑う。

「うん、もらうよ」

「砂糖とミルクを2つずつ入れると美味しいですよ」

「じゃあ、それをお願い」

「はい」

彼女は足早にキッチンにかけて行った。



泉に揺さぶり起こされ、翌朝日向は目を覚ました。いつの間にかソファで眠ってしまっていた様で、肩にはうなだれる様に織紗那が眠っていた。テーブルには飲みかけのコーヒーが2つ。かなり疲れていたのか、日向が起きても彼女は目覚めなかった。

氣を利かせて、泉が毛布を持ってきてくれた。

「このまま寝かせとく？それとも部屋まで運んでやる？なんか起すのは可愛そうだな」

「…僕、このまま起きるの待ってるよ」

そう泉に告げると、日向は織紗那の頭をそっと支え、自分の膝に寝かせた。そこに泉が毛布をかけた。

「熱いね。まあ、今日が最終日だし、ごゆっくりと♪」

「……」

泉は茶化す様にして、おほほほと訳の解らない笑いを残して去っていった。

すやすやと眠る彼女を見つめ、急に込み上げる愛しげな想いに駆られると、彼は彼女の唇に唇を近付けた。あと数ミリで触れ合うと言う時「あら？」と言う陽太郎の声にびくつき顔を上げた。

「…なんて大胆……」

日向の顔が一瞬にして真っ赤に染まる。

「な、な、どっから沸いてでた？」

「なんだよ、人をボーフラみたい……」

にたにた笑いながら2人を見つめる陽太郎。

「まあ、俺の事は気にせず続きをどうぞ！」

相変わらず無茶苦茶言う。

「できるかっ！今日帰るんだぞ、さっさとゲレンデ行ってこいよ」
手の甲でシッシと追い払う様に仰ぐと、彼は何やらブツブツ言いながら去って行った。

「全く」

溜め息混じりにそう洩らすと、誰もいないのを確認してから彼女の唇にキスをした。

.....

[illegible][illegible]

-
-
-
-
-

サッカーボールくらいの大きさの水晶玉を、平成の鬼こと鬼沙那

が覗いていた。中にはジュリエラ、日向、雪花が映し出されている。その映像はまるでDVDよろしく、鮮明かつリアルにあの黒い物体に雪花が飲み込まれるシーンを再生していた。ひと通り終わると鬼沙那が頭に血管を浮かべながら、気味が悪いくらいに低い声で唸った。

「…こざかしい…」

ピシッ！と触れてもいない水晶玉が真つ二つに割れた。餓鬼が鬼沙那の肩から顔を出す。

「鬼沙那様、どうなされ…」

言い終わらぬうちに餓鬼は彼女に驚掴みにされ、ぎりぎりと握り潰されまいとしていた。

「…それ以上握ると、死んでしまいますぞ」

高くしゃがれた、聞き心地の悪い男の声で、鬼沙那は手を放した。餓鬼がぼてつと床に叩き付けられる。

「鬼沙那様、お遊びはお止めになったら？」

今度は甘く誘惑するような、女の声。

「…どうか僕ら…」

「5人衆をお使いください…」

小さな男女の子供が恭しく言った。

「私めを是非一番手に」

ナルシストな男が言う。

「何を言うか！鬼沙那様に奴等の首を持ち帰るのは拙者」
しゃがれ声が言う。

「ジジイは引っ込んでおきな！私が殺る」
と誘惑女。

「…うるせえ…」

鬼沙那が溜め息混じりに吐き捨てた。

「どいつもこいつも。いいか？魅多寡^{みたか}、貴様が行け！あの西洋人2人を潰せ。黒いのはお前の専門だろ」

「御意。かたじけのおございます」

ナルシスト男が暗闇の中、深々と頭を下げた。

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•

日本円にして約2億。スペイン片田舎に小さな教会が立てられたらしい。観光客を呼ぶのが目的らしく、スペイン屈指芸術家達が腕を振るっていた。しかしながら土地がなかったらしく、墓を潰して作ったとかで怪奇現象が絶えないそう。そこを浄霊して欲しいとの依頼であった。

飛行機ファーストクラスで、ステータスアップしながらロマネコン

ティを片手にジュリエラが口を開く。

「お兄様、日本にはまた戻るつもりでいられるの？」

同じ様に機内食を食しながら、最新映画のDVDを眺めつつフランシスが答えた。

「ああ、この件が片付いたら取り敢えず戻るよ。アルマゲドンも気になるし、何より愛するマドモアゼルが心配……」

「お兄様、あの娘は遊びではなかったの？」

「何を。本気だよ、運命を感じた」

ジュリエラはやれやれとでも言う様にワインを飲み干し、スチュワードに新たに注がせた。

「お兄様の事、ニースの砂浜の砂粒程度でも考えてくれてるのかしら。昨日のダンスパーティーも来なかったのに。火傷する前に引いた方が賢明かと思いますよ」

「あの女男の事かな？」

「ええ」

「心配ない、あんな奴には負けん」

そんな自信は一体何処から……と感心する。するとそれを見透かしたかのように、彼が言った。

「彼女、パーティーの時キスを嫌がっていなかった」

「……」

フランシスもワインを飲み干した。

「シャンパンもらえる？」

金髪のスチュワードが、冷えたシャンパンを差し出した。

「……もし私があの女男君を好きになってしまったら、お兄様は祝福して協力してくださいます？」

妹の突然の質問に兄は押し黙ると、一口シャンパンを飲んでから答えた。

「……考えとく……」

果たしてシャンパンが不味かったのか、質問がまずかったのか……。フランシスは苦い顔をしてみせた。

飛行機が着陸すると、空港ではテレビや雑誌の取材が待っていた。『若き天才悪魔祓い師』だとか『悪魔祓いのカリスマ兄妹』だとか『美人悪魔祓い兄妹』だとか、キャッチフレーズは様々だが答える内容は一緒だ。日本出張の理由は？とか、今回の仕事についてとか。中でも一番多かったのは、日本出張に関してのインタビュー。お忍びであったから、余計話題になったようだった。

いつもの様にさっさと取材を終わらせると、迎えのリムジンに乗り込みホテルへ。ホテルで最初にした事はと言えば、ルームサービスの注文であった。サンドウィッチとサラダ、紅茶とチョコデザートを頼むと、兄フランスがシャワーを浴びにいった。続いて兄を待つ間、ジュリエラはバルコニーに出て風に当たる事にした。

日本とは違うアンティークな町並みに、何処かほっと安心した。自分達が生まれ育った場所に良く似ている。日本の大都会の様な冷たさや、忙しさが無い。ふと日向達のいた村を思い出し、そこだけは空気が似ていたんだと気がついた。

兄フランスの織紗那のナンパに着いて行つては、一人ぶらぶらと散歩していた。幼い頃教科書で勉強した日本、ずっと憧れていた日本のイメージ。大好きな場所であった。

(…また、皆に会いたいな…)

寂しくなつて、ジュリエラはそっと目を閉じた。瞼の裏に、出来る限り村をイメージした。少しでも日向達に近付ける様に…。

「ジュリ？」

フランスの声にはっとして彼女は振り向いた。バルコニーの入口で、フランスは紅茶の入ったアンティーク調のカップを2つ持って立っていた。

「シャワー浴びておいで。それとも先に紅茶を飲むかな？」

兄の差し出したカップを

「ありがとう」

と妹は受け取った。

「お兄様。早く日本に戻りたいですね」

「あの女男か？」

「…さあ？」

クスリと笑う妹に対し、眉間に指を当てて兄はやれやれと唸った。

「ジュリ、何も僕は君の恋愛に対して何もかも否定したいわけではないんだよ？ただ可愛い妹が傷つくのを見たくないんだ。もしも…」

「お兄様」

彼女が彼の言葉を遮る。

「私ももう子供ではあ

りません。自分の力のコントロールや限界も把握してるつもりです。いつまでもお兄様に甘えていたくはないの」

「…本当に君がそう考えているなら…」

フランシスの顔が急に真顔になり、怒りを必死で押さえている様な表情を見せた。彼女の全身に、ぞくつと悪寒が走った。

「まだ恋愛はもちろん、人との関わりを自由にさせることは出来ないな。アレが暴走したら…僕には止められない。ジュリも恐らく生きていられないだろう。犠牲者は出したくない」

ジュリエラはフランシスを見つめたまま、固まる様にしてうなだれた。そしてポツリと洩らす。

「…私は…ただ、自由になりたいだけ」

彼女の目から大粒の涙が溢れた。

「それを今探してるんだろ。一人にはしない…一人にはさせない。残酷な神様ではなくて、母や父に誓った約束だよ」

「…知ってるよ…」

フランシスはジュリエラを、そっと抱き締めた。



フランスの片田舎。おとぎ話の様なレンガ造りの建物が建ち並ぶ、小さな村があった。中でも一番花が咲き乱れる一軒が、かつてのクリンストーン家であった。なんの変哲もない、平凡だけれど幸せな家庭。フランス10歳、ジュリエラ8歳の春の出来事。

その日、母はいつもの様にテーブルに焼いたばかりのパウンドケーキとクッキーを並べていた。

「フランス、ジュリ、お茶にするわよ」

母は生クリームとラズベリーを、2人の兄妹の為に取り分けた。やがて子供達が席に着くと、両手を合わせて感謝をした。

「ママ、今日のケーキおいしいね」

妹のジュリエラが、口いっぱい頬張りながら笑った。

「ドライフルーツを沢山入れたのよ」

するとフランスが生クリームでベタベタになりながら言った。

「明日はナッツがいいなあ」

母は兄の口許をティッシュで拭きながら笑った。

「いいわよ」

この所、そう数日程前から村中に奇妙な事件が相次いでいた。なんでも、村人が次々に獣憑きになったり悪魔に憑かれたりしているとのこと。実際フランス達も獣の様に吠えて走り回る村人の声を聞いたし、白く黒反転した目をむき出して死んでいる人を見た事もあった。おかげでフランスもジュリエラも怖くて、一人で寝る事が出来なくなっていた。誰もが家中に、紐で輪の様に吊したニンニクを飾った。更には17時を過ぎると、外出する人間は誰一人いなくなっていた。

「：どうしちゃったんだろうね、この村は。私達、明日引っ越す事にしたんだ。あんた達も早く引っ越した方がいいよ」
隣りの奥さんが、クリンストーン家にそう挨拶にきた。

「そうですか、わざわざありがとうございます」

「本当に、早めに引越す事だよ」

奥さんは強く忠告する様に告げると、帰っていった。母は大きく溜め息を吐いてから、扉の鍵をしっかりと閉めた。無邪気な2人の子供を見ていると、再び溜め息が出た。

（…主人に相談してみよう…）

母は母なりに、これ以上子供達に怖い思いをさせたくないと考えていた。そして可能な限り早く、引越したいと考えた。

…こうしてまた一人、また一人と村人は出て行き、一月と経たずひとつきに村人は半分以下になってしまっていた。

村で悪魔騒ぎが始まってから一か月程して、国から避難命令が下された。国からまだ残る住民達へ住居の手配がなされ、この村は封鎖されることになった。伝染病の疑いも強いとの事で、村人全員へ精密検査も義務付けられた。

「フランシス、ジュリエラ！明日引越しするぞっ」

会社から帰宅した父は、嬉しそうに子供達を抱き締めた。

「マリリアーナ、お前にも怖い思いをさせたね」

父は母を見つめながら、そう微笑んだ。

「引越しながらたいした事じゃない。皆無事なら、また同じ様に生活出来るから」

「ええ」

それは、自分自身にもいい聞かせている様であった。

2人で必死に働いて手に入れた家。ここで喜びも悲しみも分かち合ったけれど、それ以上に安らぎを与えてやりたかった。

「…悪魔が去ったら、また戻ればいいさ」

小さな希望を胸に抱え、一つの決心をした。自分も家族も、共に守ろう。と。しかし、この時既にパンドラの箱は開いていた…。

その晩、突如ジュリエラが奇妙な声で笑い出した。何があった訳でもない。兄の隣りですやすやと眠っていた筈であった。驚いてフランシスが飛び起きると、彼女は笑いながら踊り出した。母と父が

子供部屋を開け、その現状に青ざめた。フランシスは両親の元に駆け寄ると母の背後に隠れ、がたがたと震えていた。

「ジュリ！」

父がジュリエラにかけ寄りそつと手を伸ばしてみたが、彼女は笑いながらその手を払いのけた。払われた父の手から、真っ赤な血液が滴り落ちる。皮どころか、肉、筋肉までもが引き裂かれていた。だが父は痛いと感じるより、その状況にどう対処したらいいかわからず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

ジュリエラはなおも踊る。高く奇怪な笑い声を上げながら…。

やがてジュリエラの足の爪が床に擦れて割れると、床に引きずる血液の痕により、父がはっと気を取り戻した。

「マリリアーナ、フランシスを連れて神父様のところへ行け。フランシスを教会に預けて、神父様を連れてきておくれ」

母はもつれる様にしながらもフランシスの手を引くと、パジャマのまま、裸足のまま外へ飛び出した。

どのくらい走ったかは分からないが、がむしゃらだった。何か踏んだのかもしれない、教会に飛び込む様に着いた時には、二人の足は血まみれだった。母は助けて下さいと叫びながら、必死に教会の入口を叩いた。母が悪魔憑きなんではないなと思うくらい、泣きながら必死に叩いては引つ掻いた。何百回叫んだかはわからないが、神父が疑う様にそつと扉を開けると、母は隙間に手を入れ無理に引き開けた。驚く神父に

「助けて…娘が…」

と泣き付いた。彼女の姿を見て只事ではないと、神父は彼女を抱き上げ車に乗せると、フランシスを待たせて教会を出た。

一人で待つ方が地獄だったかもしれない。フランシスはキリスト像の前に膝まづくと、必死で祈りを捧げた。

「…妹が助かるなら、僕はこの身を捧げても構わない…」
体中の水分がなくなるかと思うくらい、涙があふれ出た。

「神様、妹を助けて。代わりに僕をあげるから」

ふと頭の中で声が聞こえた。鮮明に且つはつきりと、知らない男の声だった。

『人間とは愚かだな。それでも、守りたいと思うか？肉親だけではなく、人間を守りたいと思うか？そう思うなら、ぶどうの杯を飲み干すがよい』

男の声はそれっきりだった。

「ぶどう？」

フランススが顔を上げると、先程までなにもなかった。筈のキリスト像の真下に、小さなアンティーク調の杯が置いてあった。覗くと、甘い匂いの立ち込めるぶどう酒が注がれていた。彼は、それを何の疑いもなく一気に飲み干した。

徐々に広がるぶどう酒の甘さ、急に苦しくなり、ボタンと倒れた。恐らく5分と経っていないだろう、今度は頭の中で鳴り響く様な女の声に目を覚ました。

『この身体、命朽ち果てるまで我がモノと共有致す』

目の前に白く美しく、それでどこか冷たいまなざしの女が立っていた。背には白い羽根の様な光。

『我が名はアラリタ。貴方のこれからの分身。幸ある時も悲しき時も、死がこの世と別つ時まで貴方と共に私は生きる…』

そう語りかけ、彼女は消えた。目の前に、小さなバイブルがバサリと落ちる。中を開くが、何も書かれていなかった。

更に何かないかとパラパラ捲っていると、フランス語で『念じろ』と文字が浮き出した。不思議と、怖くはなかった。

(…妹を助けて…)

フランシスは強く思った。すると今度は

『悪魔の前で“彼女”を呼べ。悪魔は天使を恐れ、神の手によって平伏すであろう。娘は正気を取り戻し、再び悪魔の娘となって神に仕えるであろう』

読み終わるか否可である。刹那、身体は家へ家へと意思とは無関係に走り出していた…。

途中転びながらも必死で走ったが遅かった。家に着くと、ジュリエラが変わらず奇妙な声で笑いながら踊り狂っていた。足下には破裂した様に頭部のない神父の死体と、五体バラバラになった父の死体。

「…!?…」

フランシスは声の無い悲鳴を上げると、再びガタガタと震え出した。

「らんらん、らーらーらー…♪あはは…らららー♪」

ジュリエラは遺体を踏み付けながら楽しそうに踊りまくる。俯せに倒れていた母が、息子に気付いて顔を上げた。その顔に、あの美しいグリーンンの眼の眼球は付いていなかった。

「…逃げて…」

その瞬間、ジュリエラの足が母の背中を踏み付けると、母は口から大量の血を吹き出し死んでしまった。

「ぎゃあああああああ！」

彼の悲鳴がやっと声になる。

「きやはははっ♪らんらんらららーららー…♪」

彼女の足も当にどうかなっているようで、いつもの倍程に腫れ上がり、それでも尚も踊り続けていた。その姿は、まるで赤い靴を履いている様。ふと、昔聞いた赤い靴の話を思いだした。

——赤い靴を履いた女の子は、死ぬまで踊り続ける。踊りを止める為、女の子は

足を切断した。

「らんらんらららー♪らんらんらららー♪」

震える手で、フランシスはバイブルを開いた。涙がバイブルに、幾つも幾つも染みを作った。

「…アラリタ…」

震えながら名を呼ぶと、ぶわっと大きな光が現れ、それはみるみるうちに人を形作って行く。大きな羽根を蓄えた、真っ白い翼の女性だった。

「…妹を…助けて…」

彼女は、何やらイルカのような声で鳴き出した。その声に反応するかの様に、ジュリエラは踊りをやめた。

「…ヤメロ…」

もはや人の出せる声では無い。地獄から湧き上がる様な低い声で呻く。

「…ヤメロ…」

まるで凍らされたかの様に固まったまま動けないジュリエラに、彼女は羽根で包み込むかの様に抱き締めた。するとジュリエラからどす黒い煙の様な物体が立ち上り、一つの影の様な形をなした。彼女がそれに向かって手の平をかざすと、床から無数の青白い手が伸び、黒い物体を引き摺り込んだ。

「グオオオオオオオ！！」

黒い物体が消えたかと思うと、今度は消えた中心辺りが光りだし、光はやがて床から飛び出してジュリエラの体内に消えた。

「ぎゃあああああ！」

ジュリエラが断末魔のような悲鳴を上げた。

「ジュリ！」

「いやあ！！見たくない！！見たくない！！」

ジュリエラはそう泣き叫びながらのた打ち回ると、事切れるかのよう
に意識をなくした。

天使が霧のようになり、フランシスの中に消えた。彼は腰が抜けた
様で、そこから動けなくなっていた。頭の中が真っ白のまま這い
ながら電話に手をかけ、警察に電話をした。

「…助けて…」

彼も意識を無くした。

フランシスは天使に取り憑かれ、ジュリエラは悪魔に取り憑かれ
た。それはある種の永遠のイタチごっこである。悪魔がいる限り、
彼女は望みもしない未来の姿に脅かされ、天使がいる限り彼は悪魔
に脅かされる。彼女の悪魔を彼の天使が押さえ付け、彼女の悪魔が
その天使を呪い続ける。なぜ彼女が未来を見せつけられるのかはわ
からない。が、それは生き地獄に近いものがあつた。…自由になり
たい。何にも脅かされる事なく、静かに。妹を助けたいとこの時得
た力が、2つの平穏との等価交換であつた。この日最後にバイブル
が示した言葉。

『死ぬまで悪魔から人間を守れ。さすれば、来世で平穏を返そう』

それが、等価交換だそうだ。

.....

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・

ジュリエラを抱き締めたまま、フランシスが囁いた。

「等価交換に代わるモノを見つければいいさ。だから危険な仕事程僕は引き受ける。等価交換さえ成り立てば、きっとこの呪縛から逃れられる」

いつも側にいて、いつも守ってくれて、いつだって支えてくれた兄。絶望だと感じていても、納得させられていた。それで、自分もいくらか安堵をもらった。

「…ごめんなさい…」

「謝る理由がないよ。それでも悪いと思う事があるのなら、いつでも守れる様側にいておくれ。もちろん笑顔で」

彼女は涙を拭くと、コクリと頷いた。

◆死霊使い◆

早朝、まだ霧が深い時間に2人はホテルを出た。ケープ付きの真っ黒なロングコートに、銀のロザリオを首から下げて。

「どうぞ」

ホテルの入口に止まっていたリムジンの扉を開け、少し年老いた運転手が案内をした。

「護衛一人いないのかい？」フランシスが意地悪そうに尋ねると、運転手は片眉をピクリとだけ動かして答えた。

「：申し訳ありません：」

「別に。ただ、よっぽど質が悪いと見える」

愛想が悪い。運転手は何も言わずに車を出した。

車で1時間程走らすと、小さな村についた。村の入口で運転手は一旦車を止めた。人っ子一人：どころか、生き物の気配すらない。「私のご案内できますのは、申し訳ありませんがここまでです。いつ頃お迎えに参りましょう？」

「電話ではだめかな？」

「電子機器は一切お使い頂けません」

「へえ、そんなに質が悪いんだ」

再び意地悪そうに返した。

「私達2人、こんな所に置き去りにされて：本当に迎えに来て頂けるの？」

ジュリエラが怪訝そうに問うた。

「必ず。お約束の時間に参りますよ。忘れる事は致しませんから」すると運転手は、フランシスに横長の一般的に使用される郵便封筒を差し出した。

「後程お読みください」

「わかったよ。なら、明日の夕方に来てくれ。それまでには片付いてる筈だから」

「かしこまりました」

運転手は深々と一礼すると、リムジンを飛ばして村を出た。

「なあ、ジュリ。今回はどうやら苦戦しそうだ」

フランススは封筒を開封しながら、妹に苦笑いを見せた。

「そうね。きっと死霊使い（ネクロマンサー）がいるわ」

「大ボスカい？」

「いいえ、多分余所者」

封の中にはフランス語で殴り書かれた便箋が5枚同封されていた。教会の経緯、怪奇現象の数々：どうやら、死霊の怒りによって村人の半数は死んでしまったようだ。そして残りは国からの保護を受け、無事非難したよう。

今この村には、クリンストーン兄妹以外いない。

「嫌な気分だね。ワインもキャビアもお預けだよ」

「お兄様、ワインやキャビアどころじゃなくて、パンやレタスだってないわ」

「ううむ。そいつは困ったな」

何やらブツクサばやきながら、彼は手帳サイズの聖書を取り出した。適当な場所を開き彼が十字を切ると、聖書に文字が浮かび上がった。

『死霊使いに注意せよ。鈴の音にて悪魔も眠る』

フランススの片眉が、ピクリと動いた。再び聖書の文字は続く。

『死霊使いはお主等を狙っている。日本からの刺客』

「…そう！素晴らしい事ではないか！！」

フランススが突然馬鹿笑いを上げながら叫んだ。そんな兄に驚いたジュリエラが、警戒するように振り向いた。

「お兄様？」

「なあ、ジュリ。アルマゲドンは、どうやら僕達が邪魔なようだ！

ここの死霊が大した事がない事くらいわかっていたさ。おかしいとは思ってたんだ。墓はきちんと移動させたと聞いているし、第一墓の上に教会を建てたくらいでここまで酷くなるものか。奴等はマドモアゼル等と俺達を引き離す為ここにおびき寄せたのだろう。奴等も本気で動き出して来たと言う事だよ。惨殺？大いに結構！片っ端から地獄に引きずり込んでくれるわ」

彼が聖書を閉じると、その上に首から下げていた銀のロザリオを外し置いた。更にその上へ手の平を置き何やらもごもご唱えようと、フランスを中心に光りの魔法陣の様な物が広がり始め、やがてそれは村全体にひろがった。

「さあ、これで結界は完璧だね」

彼の中からアラリタが姿を現わした。

「お兄様、近くにいますわ」

「卑怯者め！直ぐにでも姿を現わしたらよいものが」

チリン：と鈴の音が聞こえた。と同時に地面からぼこぼこ中途半端に腐った人間の屍や白骨化した屍が、まるで生きているかの様に這い出してきた。

『身体をおくれ…』

『綺麗な身体が欲しい…』

屍達は次々に呟く。

「お前等にはもったいないよ」

フランススがパン！と手の平を叩くと、それを合図としたかの様に屍が崩れ落ちた。しかし、崩れ落ちた屍は鈴の音が聞こえると5分とせずに再び元に戻ってしまった。

「ううむ、先に死霊使いをなんとかせねばな」

もう一度手を叩くと、屍が崩れ落ちるのと同時に、2人はコートを翻し走った。

「お逃げ、お逃げ。所詮人間、どこまで逃げれるかな♪」

少しばかりの上空にて、2人を見下ろしながら髪の毛の長い真っ黒の男がクスクスと笑っていた。手には銀の鈴が垂れ下がっている。チリン：チリン：と男の手の中で鳴る度、ゾンビが増えていく。

「お兄様！何か作戦でも？」

息の上がり始めた妹が問う。兄は不敵な笑みを浮かべると「ない」とだけ答えた。

「ジュリ、とりあえず教会に入るぞ！」

奥へ奥へと進む2人の前方に、例の教会らしき建物が見えて来た。フランシスはジュリエラの手を掴むと、一気に速度を上げた。そのまま教会の扉へと飛び蹴りをくらわ

に中へ転がり込んだ。勢い良く奥へ滑り込む兄を無視し、今度は妹が扉を閉め、扉に自らの血で魔法陣を描くと外界との一線を引いた。「まもなく日が昇るぞ。太陽が照らすまで待とう」

息の上がつた兄の声に、妹は静かに頷いた。

——彼らはまだ知らない。この村だけがフランシスの結界の上から、更に死霊使

いの結界が張られ、日から完全に遮断されているという事に…。



あれから、多分1時間は経った筈…。外では変わらずゾンビ達の不気味な呻き声と、壁に体当たりをしたり爪で引っ掻いたりと言った音が聞こえる。更にはあの憎々しい、澄んだような鈴の音までも。せいぜいもって後40分程度、1時間もたないだろう。極度の緊張によって、無駄な体力だけが消費されていく。

「おかしい…、もうとつくに日が照っていてもいい筈なんだが…」
座り込んでいたフランシスが、徐に立ち上がった。聖書をばらばらと捲る。

『死霊使いの結界により、汝等は闇に閉ざされている』

彼の片眉が不愉快そうにピクリと動く。

「なあ、ジュリ。敵も大層頭が良さそうだ」

突如、天井が抜け落ちた。

「きやあ！」

落下する屋根の破片から庇うよう頭を手で覆うと、彼女もその場から転がるように逃げ、立ち上がった。

『見つけた』

『人間見つけた』

屋根に開いた大穴からゾンビ達は口々につぶやくと、ボトボトと教会内に落ちてきた。緑色の薄気味悪い体液や蛆虫が飛び散るが、再びそれらを残してゾンビは再生した。

「アラリタ！」

フランシスの掛け声を合図としたかのよう、亡霊の様な大きな羽根を背負った女性は、口から勢いく火を吹き出した。まるで油に浸された蠟人形よろしく、ゾンビ等はどろどろと溶ける様に燃えて無くなった。

「死霊使いを見つけないと…体力だけ使って、こっちが御陀仏だ」
気まずそうに彼がつぶやくと同時に、今度は教会の扉が破られ、のそのそと大量のゾンビが歩み寄ってきた。

チリン、と鈴の音。はっとジュリエラの第六感が感じた。

「お兄様！上！！死霊使いは頭上にいるわっ」

ふっと、彼の口許に笑みが零れた。

「了解！」

再びアラリタが炎を吹き出すと、みるみるうちにそれらは燃え上がり、更には他のゾンビ等へと燃え広がっていった。

「ジュリ、掴まれ！」

それでもゾンビは鈴の音と共に増えていく。

ジュリエラが抱き付いたのを確認すると、彼は十字架を聖書に挟んだ。再び口の中でもごもご呟くと、聖書は巨大な鳥へと姿を変えた。鳥はフランシスの肩を掴むと、教会の天井の穴から一気に飛び出した。

「まるで地獄絵図ね」

空から見下ろす景色は、それ以外に例えようがなかった。教会を取り囲み屋根にまでへばり付く、何万という数の屍達。村全体を覆う、地面から浮き上がる赤い光りの魔法陣。フランシスがパンと手を叩くと、魔法陣は一瞬強く発光し、同時に屍達が崩れ落ちた。再び、あの鈴の音。

「…見つけた…」

フランシスがポツリと呟く。するとアラリタのみが鳥の頭上へと上昇した。

「キキイー！」

アラリタの甲高い声が空気を切り裂く。2人の兄妹の目の前を、黒い塊が落下するように物凄いスピードで通過した。それが地面に叩き付けられる前に、彼は懷から銀のナイフを取り出し投げ付けた。ナイフは黒い塊を貫くものの、黒い塊は霧の様に分散し、鈴の音と共に地面の上で人の形へと姿を成した。ナイフだけがカランと虚し

く地面に落る。

兄妹も、地面へと降り立った。

「：我が名は魅多寡^{みたか}。鬼沙那様の忠実な部下、そして妖魔5人衆の一人“死霊使い”。鬼沙那様の命により、貴様らのお命頂戴致す！」
真っ黒な長い髪から覗く銀色の眼が、不気味に2人を捕らえた。気持ち悪いくらい青白い肌の、不気味なくらいに左右対照的に整った人形の様な顔の男であった。そのせいかな年は16、17才と幼く見える。それなのに声だけはナルシストなまでに自信たっぷりだ。

「ガキのクセに生意気な」

フランシスの脇に、アラリタがフワリと戻る。

「ガキ？これでもあんたより長生きしてんだけど」

言うのと、魅多寡は銀の鈴が中指に吊り下げられた右腕をフランシスに向かって突き出した。彼がチリンと鳴すと地面からゾンビがぼこぼこ這い出し、魅多寡を護衛でもするかのように取り巻いた。

「お嬢ちゃん、雪花を食べた黒い奴出さないのかい？このままじゃボクに触れる事なくこいつらの仲間だよ。けどまあ、あんた綺麗だからボクの側で可愛がってやるよ」

魅多寡が不気味にニタリと笑った。

「ふざけんじゃないわよっ！」

ジュリエラも銀ナイフを取り出すと、魅多寡に投げ付けた。が、それは意図もたやすく手の甲で払いのけられてしまった。

「君等に、持って生まれた術者としての素質はないようだね？恐らく、なんら原因で今の力を得たとみた。その原因、欲しいなあ。そしたらもっと強い死霊が出来るのに」

再び不気味な笑みをニタリと向ける。

「うるさいっ！」

ジュリエラが地面を軽く蹴った。すると無数の：あの黒い悪魔を引きずり込む青白い腕が伸び、魅多寡の足を掴んだ。

「へえ」

魅多寡の身体が何の抵抗もなくずるずると地面に引き込まれて行く。

「魅多寡、あんたも永久に闇に囚われることね」

「さあどうかな？」

魅多寡の下腹部までが埋まった時であった。彼が地面に手を付くと、引きずり込まれる身体の動きが一瞬ピタリと止まった。

「お楽しみはこれからだよ、お嬢ちゃん♪」

地面に付いた魅多寡の腕に力がこもる。それ以上に沈んで行こうとしない魅多寡の身体を、今度は頭から押さえつけるように何本もの青白い腕がぬっと伸びた。

「ごさかしい」

そう呟いた瞬間、今度はまるで弾丸の様に魅多寡の身体が飛び出した。身体にしがみついた腕が、ぶちぶちと引き千切られる。男なのか女なのか解らない無数の断末魔の様な悲鳴と、飛び散る腕。腕は地面に叩き付けられると、水から上げられた魚の様にビチビチと動いて霧の様に消えた。空中で感情の見えない魅多寡の笑い声が聞こえる。

「人間とはおろかなモノだな！」

あの時と同じだ。あの時：フランシスにぶどう酒を飲ませた時と。

「人間がおろかだと言うのなら、お前達化け物はなんだというのだ???」

今度はフランシスが叫んだ。

アラリタが甲高い声を発しながら、魅多寡に襲いかかる。奴がニヤリとした。

「かかったな…」

「お兄様危ない!!」

ジュリエラが叫んだ瞬間であった。無数の青い腕が魅多寡からターゲットを変え、アラリタに襲いかかってきた。

「駄目ー！ー！！！！」

飛び逃げ回るアラリタの足を青い白い腕が捕まえ、ずるずると引き込み始めた。

「どうやら闇に囚われる運命にあるのは、お前の兄の様だな」

アラリタが甲高い悲鳴と共に、地面の中に消えた。

「…！？…」

フランシスが愕然と膝を付いた。ジュリエラもへなへなと地面に崩れ落ちた。辺りが水を打った様に静かになると、魅多寡が2人の前に降り立った。

「さてと」

今度は彼がパチンと指を鳴らした。すると今まではびこっていた霊やゾンビ達はもちろん、結界までも全てのモノが何事もなかったかのように綺麗に消えた。力を無くした兄の手から、バイブルがさらさらと砂の様に風化して消えた。

「…さっさと殺れよ。但し、ジュリだけには手を出さないでくれ」
力なく吐き捨てるフランシスに一步一步と近寄ると、魅多寡は兄の頭を鷲掴みにして自分の顔に近付けた。

「殺すもんか！あんたは使える。目的はあんた等を潰す事だがそれが出来た今、更なる目的がある」
フランシスがキッと睨み付けた。

「…織紗那か？」

掴んだ頭を後ろに倒す様にして離れた。

「わかってるな」

「断る！」

刹那、魅多寡の指がフランシスの喉を締め上げた。

「！？」

「お兄様！」

ジュリエラが近付くが、殴り飛ばされただけであった。

「あんたを殺して肉体を操るのは訳ない事だけどね、それでは余りにつまらないことだろう？そう思わないかい？」

魅多寡が彼に口付けをした。奴の重ねられた唇から喉元が、順に何かを伝う様に動いた。兄の体が力なく崩れ落ちた。

続けて魅多寡が自分の唇を噛み切ると、どす黒い血液をフランシス

の口に流し込んだ。その一部始終を、ジュリエラは震えたまま見守るしかなかった。

「さあ、日本に行こうか」

魅多寡がほくそえんだ。冷たい視線をジュリエラに流す。

「兄を殺したくないなら、黙って従う事だね」
コクリと頷いた。



クリンストーン兄妹が旅立ってから2週間程して、酒猫宅の前に
リムジンが止まった。チャイムに反応して日向が玄関を開けると、
大量のお土産を抱えたフランススが立っていた。

「あ！どうもっ！！なんか用？」

自然と嫌味っぽくなる。が、彼は構わず笑顔で話し出す。

「こんにちは。スペインから帰ってきまシタでスよ。オミヤゲ持っ
て来ましたデスね！」「あはー！それはそれは！」

お前なんか嫌いだと言わんばかりに扉を閉めようとしたら、それを
ジュリエラがぐっと止めた。「…！…」

「…少しオハナシしまシヨウ？ミナサマに会いたカタですよっ。ミ
スターヒウガ、会いたくナカタですカ？」

憂い揺れるジュリエラの目に圧倒され、思わず

「あ、会いたカタですよっ」

と不自然な日本語が飛び出した。

「ヨカッター！」

ふと、気付く。ジュリエラの握る手が震えてる事に。

「ジュリエラさん、寒い？震えてるみたいだけど…」

「…！イエス！ジャポンの冬サムいデスね」

少し顔色も良くない様だ。

「疲れてるみたいだね。上がりなよ、但し織紗那に変な事したら追
い出すから！」

「オウ！ウィー！！」

「靴脱げよ！」

「ワカリマシタ。ジャポンはコマカイですからネ」

「……」

はああ、と日向の口から溜め息が漏れた。

「金髪のお兄ちゃんだあ！」

蝶子が嬉しそうに走って来た。

「また踊ろう！踊ろう！」

るんるんと交互に足を上げてはしゃぐ。どうやら少女にしたら、踊って見せているようだ。

「オウケイ！」

「蝶子、織紗那樣呼んでくるう♪」

「…あ！」

日向が余計な事をするなど引き止める前に、蝶子は走り去って行った。

「…2人の魂を引き込む所を、お前にも手伝わせてやるよ。まずは女からだ」

流暢なフランス語でフランシスがジュリエラに囁いた。

「…わかりました…わかったから、兄を返して…」

流暢なフランス語で妹が返す。

「全てが終わったらな」

兄が不気味にほくそえんだ。

そんな二人の会話を意味がわからないだけに不愉快に感じながらも、日向は兄妹を居間へと通しコタツに座らせた。

机には山の様なお土産。

「ミナサマで分けてクサイね！」

高級チョコレートに免税店で買ったと思われるブランドの財布やキーケース、タバコケースに腕時計。アクセサリに香水や化粧品までもが並べられた。

改めてまじまじと見つめ、日向は目を丸くした。

「こんな…こんなの本当にもらってもいいの？何もお返し出来ないけど…」

「お返し？イラナイですよ！オミヤゲですよっ。気に入らないですか？」

ぶんぶんと首を左右に振った。

「そうデスカ！ヨカッタですヨ」

フランススが気楽に笑った。

「……」

そんな兄をジュリエラはずっと不安そうに見守っていた。

蝶子に連れられ織紗那が廊下を歩いていると、真っ黒の忍び装束を纏った男が煙の様に現れた。

「どうしました？戌亥」

男は深々と頭を下げたまま、恭しく言った。

「織紗那様、お気を付けください…。あの金髪の男、以前と変わり酷く死臭がするのです」

織紗那の顔つきがふと変わる。

「わかりました。確かに、黒く濁った様な靈気は感じられるのですが…」

「織紗那様、特に日向にご注意ください。あの男、お気付きでしょうが鬼沙那の手の者に四六時中監視されてます。お守りしたいのは山々なのですが…」

織紗那が目を伏せた。その表情は、非常に困っている様に見える。

「…薄々感じてはいました。影ながら苦労かけましたね」

戌亥が再び頭を下げた。

「…申し訳ござらん…。拙者の力が及ばないばかりに、何度も危険な目に合わせてしまった」

そんな戌亥を咎める事なく、彼女は静かにほほ笑んだ。

「日向が今の生活を維持出来ているのはそなたのお陰。このまま継続しておくれ。私が日向を守ります。否、私が守りたい…また失わない様に」

「……」

「それに、例の術を施すにもまだ日向の体力や精神力が足りません。多分、陽太郎様の方が問題ないでしょう。日向の教育に関して、今まで以上に力を入れてくださいな」

「御意！」

戌亥が煙の様に姿を消した。

「織紗那樣？」

心配そうに蝶子が呼ぶ。

「ん？ 行きましようか」

「：蝶子、桜に言ってお茶持ってくるっ」

織紗那から離れると、蝶子はキッチンへと走っていった。無意識に溜め息を吐いていた。

正座をしたまま上品に襖を開けると、織紗那は深々と頭を下げ「お待たせいたしました」と挨拶をした。

「オウ！ マドモアゼル元氣デシた力？」

立ち上がりとしたフランスより先に日向が立ち上がり織紗那を誘導すると、フランス↓日向↓織紗那の順に座らせた。呆氣に取られる全員を無視して、日向が咳払いをした。と、丁度よいタイミングで蝶子と桜がお茶とお茶菓子を運んで来た。

お茶菓子は、蛇老自慢のおはぎと桜餅。

「まあ、こんなものしかないですが」

日向がおはぎと桜餅の乗った皿を、フランスの前へと寄せた。

「ジャポンのボンボンあまり食べたナイね！ オイシイですか？ 味わデスカ？」

「食ってみろよ」

「メルシイ」

日向から意地悪そうに、箸が差し出された。

「ジャポネイズ、すごいデス！ どうやるデスカ？ コレは使たナイですから。ビザレー、困タです」

そんなフランスを日向はざまあ見ろと横目で見つめた。

フランスが箸を何度かもたつきながら落としては拾う。その様子に苦笑を浮かべ、織紗那が日向の後ろから声を掛けた。

「フランス様、お料理用の小さな熊手と包丁をお持ちしましうか？」

すると彼も同じ様に苦笑を浮かべ

「ミスターヒウガ、カシテくれたデス。失礼イケマセンね、紳士デス。ジャポン好きですカラ、オハシ使うタイですネ」
と答えた。

彼女はわかりましたとだけ答えると、フランスの後ろから失礼しますと彼の手をそっと取った。

思わず日向が口に含んだお茶を吹き出した。

「なっ！ 織紗那っ！！」

そんな日向の様子にお構いなしに（というか気付かず）彼女はフランスに箸の持ち方を熱心に教えていた。まさに“手取り足取り”
…。

自分から与えた状況なだけに、下手に怒れないのが悲しい。
かと言ってまた部屋を飛び出すのも癪だ。癪だが…。

「日向？」

徐に立ち上がった日向に織紗那が問うた。

「おしっこ」

桜の脇を陰悪なオーラの日向が通過した。

「…私、お盆下げてきますわっ」

後を追う様に桜も居間を出た。

「日向！」

居間から少し離れた所で桜が呼び止めた。

「何？」

「今のは日向が悪いのよ？ 織紗那様の性格、わかってるでしょ？」
ふうっと息を吐く。

「だからあ、トイレだって。すぐ戻るよ」
ぷいっと、また歩き出した。

「…もう、馬鹿日向。廁はそっちじゃないでしょ。どこでする気よ」
呆れた様に溜め息を吐いた。



思ったより早く、多分15分くらいして何食わぬ顔で日向が戻ってきた。

「遅かったですね？」

織紗那が問う。

「電話してた」

フランスと織紗那の距離が、当たり前だが近い。

「……」

何処に座ろうかと立ち尽くしていたら、さっきと同じ場所を彼女が開けてくれた。無言で腰掛ける。

「オハシ使うようなるまシタ！」

自慢げにフランスが使って見せる。

「…良かったね」

なんだかそっけない。気を効かせて、織紗那が日向の手をテーブルの下でぎゅっと握った。

「日向、私達もいただきますよ？」

「あ、うん」

織紗那がおはぎと桜餅を小皿に取り分けると日向に差し出した。彼もありがとう札をのべ、それらをつついた。何故だか皆が沈黙する中、気まずい静寂を打ち破ったのは突然鳴ったフランスの携帯電話であった。

「…！…」

ジュリエラの肩がビク付き、そのショックで湯飲みが倒れた。

「ゴ、ゴメンナサイ！」

「大丈夫です？火傷は？」

動揺するジュリエラを桜が宥めるように言った。

「大丈夫デス」

「良かった。今、布巾持ってきますからゆっくりしてて下さいね」

桜が足早に駆けて行くと、彼女は益々顔色を悪くした。

流石に日向も気になる。

「ジュリエラさん、大丈夫？ 顔色悪いよ。横になる？」

その言葉に反応するかの様に、フランススが電話をしながら妹の目を見つめた。一瞬、鋭い光が走ったかの様にも感じた刹那、蛇に睨まれた蛙の如く彼女は硬直したが、直後「お願いシマス」と気分悪そうに頷いた。

「…僕のベッドでいいかな？」

「気にしませんですヨ」

ふらふらとするジュリエラの身体を日向が支えあげた。

「…メルシィボク」

日向の肩で小さく呟いた。

ジュリエラを自分のベッドに寝かすと、再び居間へと戻る。

「…疲れが溜まってたんじゃないかな？ 少し落ち着いたら帰った方がいいと思うよ」

ジュリエラを心配して日向がフランススに言うと、フランススは困ったかの様に何か苦い物でも口にした様な顔をした。

「実ハ、お願いあります。今の電話、ありマシタね。ホテルの予約ミステイクありましたデスこと。別のホテル探す思いマシタですが、ジュリエラが心配デス。ジュリエラオンリーで良いですカラ、泊まるダメですか？」

「……」

日向にしたら、否が応でも断りたい心境だ。広い家、余った部屋数、倒れた以前の命の恩人。断りたいが、断れない条件も幾つかある。

「日向、私からもお願い出来ませんか？ フランスス様達を泊めてあげて頂けませんか？」

織紗那にまで頼まれれば断れる筈もなく、観念したかの様にガックリと肩を落とした。

「いいよ」

「ありがとうございます！」

彼女からのお礼の言葉に、心底胸が痛くなった。

結局、ジュリエラは12時を回っても起きず、仕方なくフランシス共々自分の部屋で寝て貰うことにした。追い出された青年は、少々客間に布団を敷く準備を始める。

押し入れから布団を出していたら、織紗那が入ってきた。

「なんだかごめんなさい」

「ん？何が？」

「追い出してしまったみたいで…。貴方の部屋でしたのに」
すまなそうにする織紗那に、苦笑いを向けるしかなかった。

「別に織紗那は悪くないよ。面倒だったから、部屋に寝かした僕が悪かっただけの話。明日また泊まるならこっちで寝てもらおうし、気にしないで」

彼女がコクリと頷いた。

「そういえば、私の部屋と今日は隣り同士なんですよね…。なんだか…」

そこまで言うと言顔を真っ赤に染め、それ以上何も言わずに廊下からではなく、部屋同士を仕切る襖から自分の部屋に飛び込んだ。

「ひ、日向、おやすみなさいましっ」

パシャン！と勢い良く襖が閉められる。

「あ！はい！！」

気が抜けたのか、布団の重みに押され、そのままどすんと尻餅をついた。心臓がやたらバクバク高鳴り、全身が無意味に熱い…。

（…なんか期待してる？）

下半身がこれ以上元気にならないよう、とりあえずこういう様にして部屋を出た。

「…よくやった…」

真っ暗な空間の中で、フランシスがニヤリと笑った。

「…神様…」

ジュリエラが必死に泣き声を押し殺しながら、小さく唸った。

「神？神より悪魔の方が信頼性があるんじゃないのかい？」

フランシスが不気味に笑いながら立ち上がった。瞬間、爪先に何か固い物がぶつかり、ベッドの下でそれらが崩れる様な音がした。

「？」

只の好奇心でフランシスがベッドの下に手を入れ、崩れ落ちたものの一つを引っ張りだしてみる。

「DVD？」

『一完全保存版―淫乱女子口性がク・ン・ニ・チ・ハ（はあと）』

「……」

彼は見なかった事にすると、ジュリエラに解らない様ベッドに戻すフリをしつつ、大切そうに自分の鞆へとしまった。そして何事もなかったかの様に立ち上がると、顔を伏せては声を殺して泣くジュリエラをおいて部屋を出た。

一方、織紗那が部屋にて一騒動を予想し、呪術の準備を始めていた。

（敵は多分、死霊遣い…ならば…）

縄で五角形に囲うと、その前に小さな祭壇を置き、祭壇の前に座った。九字を切ると、何度か呪文らしきものを呟く。すると囲われた五角形の中が赤く光りだし、老人が一人現れた。

頭は禿げてはいるが、髭が長く鋭い目の翁であった。

翁は言う。

「ほほう、こんな小娘がワシを呼ぶとは」

翁から黒い影が幾つも飛び出すが、それらは織紗那に向かい、触れる事なく弾けとんだ。

「ほほう、見事じゃな」

今度は織紗那が言う。

「魂を肉体から切り離す事は得意か？」

「死を司るが神と言われた存在：死とは、ワシ等が肉体から魂を切り離す事。出来ぬ筈なからうが」

翁がケツケと不気味に笑った。

「だがな、小娘。只では働かぬぞ」

織紗那がふと笑う。

「酒猫家に逆らうか？」

彼女の目がギロリと光る。

「約束じゃ。私の霊力を半分あげましょう」

「約束じゃぞっ！」

翁が煙の如く姿を消した。

『必要とあらば、いつでも呼ぶがいいわ。一度だけなら力を貸してやるぞや』

◆覚醒◆美鏡編◆

部屋から這い出た日向は、無意味にほてった気持ちを落ち着ける為縁側で15分程風に当たった。

再び部屋に戻る気分にもなれなかったので、軽く煙草を吹かしてから先に風呂に入る事にした。

風呂場でゆっくりすると心なしか気分が落ち着いた様で、湯船から上がると寝る時いつも着ているジャージ姿になり髪を上の方で束ねると、コンタクトレンズから眼鏡に変えて再び部屋に戻った。

寢床を完璧に確保すると、まるで修学旅行の様。広い家、たまには気晴らしに部屋を変えてみるのも悪くないなあと思った。

ふと物音一つしない隣の部屋に意識がいく。寝てしまったのかと思いつつ、襖越しに小声で彼女の名を呼んでみる。

やはり返事はなく、自分も寝ようと布団に入って横になろうとした時、襖が5センチ程静かに開いた。

「…日向…」

「ごめん、起こしちゃった？」

いいえと、言葉の代わりに首を左右に振った。

「今夜は、人がたくさんおりますのに、なんだか静かですね」

「そうだね」

「少し、冷えませんか？」

そう考えてみたら、冷え込む冬だと言うのにこの部屋に暖房機器はない。寒いと困るからと、ジャージの下にいつもより多めにいくらか服を着込んでいた。

「そうだね。閉めないところちの冷氣がそっちに入ってきて冷えちゃうよ」

苦笑しつつ、襖に手を掛けた。

目線を外しつつ織紗那が呟く様に言う。

「…あの…殿方にこのような事を申し上げるのは女としてはしたな

い事だと存知あげます。けれども、その…」

上手く言えずに言葉が止まる。ふと顔を上げると、ごくごく近い位置に日向の顔があり、爆発でもしたかの様に顔を赤らめると小さくのけ反ってから再び顔を背けた。なんだかこちらまで恥ずかしくなる。

(…かわいい…)

彼女が数回深呼吸してから口を開いた。

「お、お風邪を召しては大変ですし、その…こちらなら多少暖かいと思いますので…いらっ、…いらっしやいませんか？」

燃え尽きた様に、紅潮した顔を両手で隠す様に押さえてぐったりとなった。

「ありがとう」

嬉しかった。はっきり言って、人生の中でも数える程度にしか起きないだろう幸せくらいに嬉しかった。

しかし…

「僕の事は気にしないで。大丈夫だから」

心では泣きながら、そう答えた。

「そう…ですか。もし寒くて眠れない様でしたら、こちらに来てくださいね」

「わかったよ」

「それでは、おやすみなさい」

「おやすみ」

そっと襖を日向が閉めた。

(馬鹿じゃないの？自分…)

思わず自分で自分の額を、壁に打ち付けた。

もし今織紗那に従って一緒に部屋に入れたのなら…多分、否、間違はなく襲ってしまうだろう。誰にも触れられないくらい、誰のものにもならないように、自分だけの殻に閉じ込めてしまえるくらいめ

ちやくちやに傷付けて、めちやくちやにしてみたい…。

必死に押さえ込んでいる嫉妬や独占欲が理性を殺してでも、所謂“性欲”となって爆発するであろう。彼女を愛してしまったから、もっと自分だけを見て欲しいから。

自分の手で大事な人を壊してしまうのが怖いと感じた。軽い想いではないからこそ、つい距離を作ってしまう。腫れ物にでも触る様に、そっとしか近付けない…。

押し倒し、着ている服をひっぺ返し、痛い程強引な口付けをして、自分の中の快楽に引き摺り込む事くらい訳ないだろう。

いつもなんとなくしている事に“強引”があればいいだけ。

でもそれは日向ではなく、只の男でしかない。

それでは、意味がない。

“愛してる”、ましてや“好き”の一言すら言えない癖に、身体だけは迷惑な程正直に反応する。

(…もう嫌だ…こんな自分…)

大きく溜め息を吐いて、冷えきった布団に潜り込んだ。

すぐに眠れる筈もなく、寝返りを何度も打ったりとゴロゴロしていた。30分程して気になったのか織紗那の声が聞こえた。

「日向、やはり眠れないのですか？」

こればかりは、ほっというて欲しい…。

それでも、顔は女の様でも、身体も心も男の子なのだ。

「そうでもないよー」

…としか答えようがない。

「あの…、私の事お嫌いですか？」

思わずむせる。

「日向は、好きな方いらっしゃるのですか？」

君が好きだとは、喉まで来ても言えやあしない。

「今日は大胆だね？」

精一杯はぐらかす様に質問を返した。

「お嫌いですか？以前、私に言いたい事があれば言って良いとおっ

しゃってくださいましたよね、すごく嬉しかったです。だから、私……。もしも、女の癖にとおっしゃるのなら私はそれで構いません。だから側に居させていただけませんか？黙っていますから」

確実に日向が好き、織紗那もそう解ってはいた。愛していると聞き、愛していると言えなかった、言えずに失ってしまった過去の彼。今は違えども気持ちは変わらず昔の彼ではなく今の彼だけを見てた。もし次に逢えたら必ず打ち明けよう、例え結ばれなかったとしても、しかし想い伝えられず後悔に潰されそうな夜に幾度枕を濡らし、こうして再び巡り合った彼へ想い伝えられれば……。それで彼、月華丸をふっきれる気がした。

月華丸ではなく日向として見れると……。

「織紗那は月華丸が好きなんだよね？でも旦那もいる」

「月華丸様には奥様がいらっしやいました」

春宮……。愛してなかった事ぐらい、知っている。彼は織紗那にゾッコンであった。

「僕が例えば諦めて月華丸になれば、織紗那も僕もスッキリするのかな？」

「え？」

気付くと、了解も得ずに襖を開けていた。驚いた彼女が身体を起こそうと肘を付いて身体を振った時は、もう既に30センチ程度の距離間の位置に日向が来てしゃがみ込んでいた。

「……日向……？」

「織紗那が悪いんだよ？」

いつもより、声のトーンが僅かに低い。

「……あの……」

……もう、何も言わせない……これ以上馬鹿な事……

「僕だって男なんだよ。もちろん月華丸だって。我慢の限界があるだろう？」

「!？」

怖いと感じた瞬間、織紗那の唇に強引なだけの日向の唇が被せられた。



どくん…どくん…と織紗那の鼓動は徐々に早さを増すが、日向だけは口付けしたまま冷静に彼女を見下したかのように見つめた。

(…こんなの嫌…)

彼が冷たい…。

織紗那の顔をそっと挟むかの様に彼の手がかかり、再び唇に力が込められる。額を合わせ、短い位置で呟いた日向のセリフは「月華丸って呼べよ」。

言葉を発する間もなく再び口を塞がれると、織紗那は押し倒された。口の中に日向の舌が滑り込み、口の中をテイストする様にぐるぐると掻き乱し始める。

「…ん…っ…!?!」

硬直したままの彼女の下から手慣れた動作で布団を動かすと、上手い具合に2人布団に潜り込んだ。

「…硬くなる必要ないだろ?」

「…日向…なんで…こんな…」

震える唇から、織紗那がようやく掠れた声で呟いた。日向はわざと作ったような笑顔で微笑みかけた。「日向って誰?」

「え?」

「ハジメテなのかな?この中なら恥ずかしくないだろ?怖がる事ないんだよ、優しくするから」

パン!!

と日向の頬に勢い良く織紗那の平手打ちが決まった。

「……」

「…こんなの…嫌です…」

彼女の目から涙が零れた。

「…望んでたんじゃないのかよ？月華丸の記憶、完全じゃないにしろあるんだ。僕も彼も考える事は同じだ。いつだって、めっちゃくちゃにしてやりたいって思ってる…」

「…怖い…」

「怖い？何を今更。男が只寄り添って、一緒にいて、それで満足する生き物だとも思ってた？ガキじゃないんだ、それなりに相手してくれなきゃ」

日向の唇が再び彼女の口塞ぎ、片手で両手を押さえ付けると足で下半身を固定し、着ていた薄手の着物を脱がし始めた。今度は唇の代わりに手で口を塞ぎ、もう一方は両手を押さえ付けたまま、もがく彼女の胸へと丁寧な舌を這わせはじめた。

時々ピクリと反応する部分を見つけては、また丁寧に反復した。

「…痛っ…」

口を塞ぐ日向の指から血が滲んだ。

「悪足掻きはやめろよ」

彼女の全身から一気に力が抜けた。

「声上げてみろよ。もっとめっちゃくちやにしてやるから」

直ぐにでも口を塞げる様、顔を近付けたままそつと手を放した。けれども織紗那は諦めたよう、そっぽ向いたまま喘ぎ越え一つ出しはしなかった。

「…良い子だ…」

そつと陰部へと手を掛けると、流石に身体がピクリと動いた。

「怖い割にはしつかりと反応してるね」

…声を押し殺しながら泣いている様に見えた。

「……」

そつと、今度はできる限り愛情を込めて口付けをした。

着物を簡単に直してやると、何事もなかったかの様に布団を綺麗に整え「…おやすみ…」と、隣の部屋に戻った。

「…男なんてね、涼しい顔しててもこんなもんよ」

…ショック、だ。

「…信じて…たのに…」

「…裏切った覚えはないよ」

誰にも聞かれない様必死に押さえて号泣する織紗那の啜り声を、日向は痛い思いで聞いていた。

…本当に、その純潔を壊してやりたかったんだ…



「…フランシス様？」廊下を歩くフランシスを、桜が呼び止めた。
「眠れませんか？」

フランシスがゆっくりと振り返ったが、その顔は人間ではなかった。
目は猫の様に光ながらも、炎のごとく紅い色をし、呼び止めた桜を瞬き一つせずにピツタリと捕らえた。

「…！？…もしや…」

そこま口に出した瞬間であつた。桜の胸を黒い何かが貫いた。

「…かはっ！…」

「邪魔だよ」

桜が倒れると同時に、幾つもの舞う桜の花びらとなって彼女は姿を消した。

続いて、音も無く灰色の犬が、フランシスの前に飛び下りた。

「鼻が利くな。流石犬ところだ」

再び桜の胸を貫いた黒い何かが飛来したが、それは飛び避けた戌亥の身体を掠め、廊下に落ちた。

「逃がさんよ！」

と、戌亥がそれを踏み仕留めた。

「昔と違って、動物の死体が多いんだ」

フランシスが不気味に笑う。戌亥の足下には、雀の死体がびくびくと蠢いていた。

「貴様！鬼沙那の手のものか！？フランシスを殺したのか？」

戌亥が唸る。

「わかってるなら、聞く必要もないだろう？ただ、殺すことくらいは簡単にできるんだけどね。それじゃあ、つまらないからね」

ぐるぐると唸る戌亥の傍ら、桃色の花びらが風もないのにふわふわと舞いながら廊下を移動する。

“レディ！お願い、陽太郎を…”

「…桜…？」

眠っていたレディの鼻頭に、桜の花びらが舞い降りて囁いた。

“フランス様が鬼沙那の手下に乗っ取られて、少しでも力を貸して欲しいの。お願い急いで！”

「わかった！」

桜を肩に、レディはこっそりと屋敷を抜け出した。

「忍者みたいね♪」

“そんな事どーでもいいからっ！早くしないと皆やられちゃうわ！！”

「陽太郎ごときがいても、役に立つのかしら？」

“織紗那樣に考えがあるの”

確かではない救世主を求め、2人は暗やみの中をひたすら走った。

.....

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

眠り始めた日向を起こしたのは、廊下での物音であった。

足音や、上手く聞き取れないがぼそぼそと言う話し声が騒がしい。不思議に思い起き上がってはみるものの、偵察に行く勇氣もない。

心配になり、隣の部屋に聞き耳を立ててみる。静かなモノだ。

「…織紗那…起きてる？」

返事はない。

「開けるよ？」

そつと襖を開くと、布団に潜り込む様にして彼女は眠っていた。

ほっとした時「来ないでください」と、織紗那が呟いた。

「……」

「貴方がこれ以上私に近付くと言うのなら、私はこの場で自害致します」

「……」

冷たい言葉が突き刺さる。謝る事すらできず、襖を閉めた。

一方廊下では、戌亥対フランスの壮絶な戦いが行われていた。
「ボクを倒さなきゃこの男は帰ってこない。でも、ボクは倒せない。
無意味だね」

フランススがくすくすと不気味に笑う。

「人質とは卑怯な奴め！」

「それも作戦のうちだよ」

フランススが指を鳴らすと、どこからともなく鼠やら蛙やらイタチやらと言った小動物の死体が、すたすたと防壁を作る様に現れた。
「悪趣味だな。鼻がもげそうだ」

「犬っコロと遊んでる暇なんかないんだ。織紗那と日向だっけ？ 鬼沙那様が楽しみにしてるんでね。通してもらおうよ」
小動物のゾンビ等が、一斉に戌亥へと襲いかかった。

.....

.....

.....

・
・
・
・
・
・

・
・
・

陽太郎の家に着くと、レディは取り敢えずチャイムを20回程連打してみた。

「ようーちーん！」

ついでに叫んでみたら、玄関の明かりがパツとついた。

「誰だよ！こんな夜中に！！」

寝ぼけた様な怒った様なしゃがれ声がし、出て来たのは見ず知らずのつんつるてんなおっさんであった。

「：嬢ちゃん：誰だ？」

特に気にする素振りもなく、レディはすつ頓狂に叫んだ。

「あたしは、レディーー！！陽ちゃんいませんかあああ！？」

「わーかったからっ！深夜なんだから静かにしてくれい！！」

あきれた様につんつる親父は叫ぶと、一度家の中へと入っていった。

再び扉を開けたのは、寝ぼけ眼のTシャツジャージ姿の陽太郎であった。

「レディ、家出？」

ふああと大欠伸をかました。

「違うよう！フランス兄ちゃんが暴れてんの！！」

彼女は彼の腕を掴むと、ぐいぐいと引っ張った。

「陽太郎がいたらなんかなるって桜がっ！桜も消えちゃって大変なの。早くっ！！」

「消えた桜が連れてこいって、何？桜ちゃんの遺言？でも桜ちゃんって妖怪だろ？」

待て待てと言わんばかりに、レディの腕を陽太郎が握った。肩で聞いている桜が怒った。

“誰が妖怪ですかっ！式神ですわっ！！せめて妖精と呼びなさいよっ！！！！”

叫ぶ桜の花びらに目を丸くしながらも、陽太郎は悪びれた素振りもなさそうに言った。

「悪い！悪い！すぐ用意してくるから5分、10分待ってて」

「早くねっ」

「あいよー」

口では言っても、どこか呑気なモノである。



ポタリ…ポタリ…と、廊下に赤く染みが出る。

「へえ、一応あんた、怪我するんだ」

馬鹿にしたかの様に感嘆の声を漏らすフランスを睨み付け、床で再び動き出そうとする鼠の死体を戌亥が踏み付けた。

同時に、前足が崩れ落ちるかの様にバランスを失った。

「そろそろ限界かな？ボクはまだまだ大丈夫なだけどねえ」

「…例えこの身滅びたとしても、貴様を通しはせん！」

戌亥のギロリと光る眼が、目の前の敵を今にも噛み殺さんと捕らえる。敵は大きく溜め息を返した。

「わからん。何故お前はそこまで主に執着するのだ？犬の本能というやつか？」

「では、お主こそ何故鬼沙那に執着する？」

逆に問い返されたのが気に触ったらしく、フランスの眉がムツと歪んだ。

「先にこっちが聞いているんだが」

「あえていうなら“恩”だ」

「恩か？」

「そうだ」

その言葉に、フランスは驚いているようであった。

「では主は？」

「…母だからだ」

「母？」

「そう、我々は鬼沙那樣から生まれたのだよ。この命は鬼沙那樣のものだからだ」

義務、使命、定め…。

生きる事も死ぬ事も、全てが鬼沙那を中心、否、軸となっているように思えた。

「自由はないのか？」

「自由？なんだそれは？」

「……」

…主が違っただけで心を持つ事が出来ないのかと、戌亥は残念に思った。

戌亥の姿がみるみる間に人へと変わる。

「？」

「…お主の心、しかと受け止めた。だがな、拙者もここから先行かす訳にはゆかぬのだよ」

戌亥が口の中で念を唱えると、彼の周りの空気だけがざわめき始めた。徐々にそれは霧から水、水から氷へと姿を変え、最後には一本の小太刀となった。

「そんなモノでボクが倒せるとでも？」

フランススがほくそ笑む。

「フランスス殿は傷付けたくない。が、ここで足止めする事くらいは出来るよ」

「そうかな？」

再び小動物達のゾンビがビクビクと動き始めた。

「新しい技を見せよう」

彼が指を鳴らすと小さかったゾンビ等は集結し、一つの不気味な塊と変じた。

「さあ、終わりだよ」

僅かに血の滲んだ汗を額から拭い取ると、戌亥は小太刀をぐっと構えた。

[illegible][illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

[illegible]

織紗那の部屋の襖を、ジュリエラが開けた。

⋮

泣き腫らした目を袖で拭い、誤魔化す様にほほ笑みかけると「どう

したんですか？」と織紗那は尋ねた。

同様に、ジュリエラもまた目を泣き腫らしているようであつた。掠れた声で「お兄サマを…助けて…」と呟いた。

織紗那の目が鋭く光る。

「…死霊遣い（ネクロマンサー）が…お兄サマを…」

織紗那の胸に飛び込むと、彼女は嗚咽した。

「やはり、フランス様は……」

コクリ、と頷く。

($\vdots$ 桜 $\vdots$ 早く $\vdots$)

「もう暫くここで待って下さい。役者不足ですから」

「陽太郎様さえ来てくだされば」

• • • • •

•

•
•
•
•
•
•
•
•
•

・
・
・
・
・

屋敷の前に、陽太郎の車が停車した。中から陽太郎、レディと力を無くした桜が現れた。桜が話す。

「そつと、見つからない様織紗那様の部屋へ。この靈力だと、戌亥がもってもあと1時間程度……」

「急がなきゃ！」

レディが陽太郎の腕を引っ張った。

入口をくぐり抜け裏から侵入すると、織紗那の部屋の前で「陽太郎です」と小さく呟いた。

すると僅かに襖が開き、陽太郎は引きずり込まれた。

「時間がありません、ので単刀直入に申し上げます。今から、陽太郎様の今の時間を約800年分逆回転致します」

「は？」

思わず疑問符が飛ぶ。

「美鏡様であった時代、月華丸様と並ぶ都でも評判の剣の達人でありました。それに、私も私の率いる

武道に長けた式神を、意図もたやすく負かす所をこの目で拝見致しました。あの腕さえあればと思ったのです」

陽太郎は少し困惑した様な表情を見せた。

「じゃあー、俺、陽太郎はどうなるの？」

織紗那が答える。

「無くなったりは致しません。要は憑依のと同じ。陽太郎様の中に美鏡様が存在するのです。けれども体力的に持って、タイムリミットは2時間」

「……」

「こんな事をお願い出来る立場でない事くらい存じあげております。が、どうか信じてご協力願えませんか」

織紗那が深々と頭を下げた。

「まあ、乗りかかった船だしな。そのつもりだけど、危険性は？」

「はい、腕次第です。では注意事項を述べます。まず一つ目。2時間を越した場合、体力の限界に伴い命に危険が及ぶか美鏡様の人格に乗っ取られる可能性が出てきます。これは無闇に逆回転させた場合にも起ります。二つ目に、逆回転と逆回転の間には充分な時間を取ってください。体力を必ず万全な状態にしてくださいと、体が保たないからなのです。以上となります」

「というと、自由に逆回転が出来る様になるワケ？」

コクリ、と頷いた。

そして織紗那は、赤い勾玉の付いた数珠を差し出した。

「これには特別な呪術が施してあります。装着する事によって、魂の逆回転が始まります。ただ、陽太郎様が美鏡様であった時代の記憶やら意識も戻ってくるということだけ、忘れないでください」

陽太郎は織紗那から数珠を受け取ると、静かに装着した。

頭の中、脳へ直接書き込まれるかの様に、いくつもの記憶が浮かび上がって来る。それはまるで、走馬灯というよりもフラッシュ映像。昨日までそうしていたかの様に、昨日までであったかの様に、懐かしいというよりも当たり前の様に“平安”の時代を感じる。

——今更、動揺なんかしない。

守りたかったモノ、守れなかったモノ。もう一度神様のくれたチ

ヤンスなんだと、受け止める事にした。

「：陽太郎様、参りましょう？」

「ああ」

2人は部屋を出た。

その隣りで聞き耳を立てていた日向は「惨めだ」と呟き、小さく膝を抱えて座り込んだ。

（：仲間外れ：）

一番、怖かった事。一番、避けたかった事。

嫌われた。

突き放された。

捨てられた？

また、だ。と思った。また、だと思って苦しくなり、いたたまれずに自分も月華丸を持って部屋を抜け出した。

戌亥の小太刀が、死臭を纏った黒の物体を切り裂く。物体は真っ二つにされながらも再び再生し、避け切れずよろけた戌亥の横っ面を殴り飛ばした。

戌亥の身体が大きく放物線を描きながら、外へと投げ出され、大地に激しく叩き付けられた。

「ぐはっ！」

フランシスがケタケタと笑う。

「よく頑張るねえ：。こうなったら、死んじゃうまでとことん相手してもらおうかな？」

黒の物体が戌亥の胸倉を摘み上げると、頭部を往復ビンタするように何度も殴り付け、地面に叩き付けた。

鈍い音が辺りを木霊する。まるで戌亥は人形の様に弄ばれた。

「：惨めだな：」

フランシスがぽつりと零した時、突如黒の物体の腕が切り落とされ

た。

「!？」

それは再生することなく地面を暫くはい回ると、ドロドロと溶け、地面に黒い染みを作って消えた。

「何奴!？」

振り向いたフランススの前に、刀を携えた陽太郎が立っていた。刃がゆらり、と月明りを反射して不気味に光る。

「くせえよ。てめえだけは許さん！」

いい終わるのが早いか、陽太郎の身体が疾風の如く黒の物体に近付き真つ二つに切り裂いた。

「…よ：陽太郎：殿：」

意識のほとんどない戌亥が、傍らで呟いた。

「戌亥、ご苦労でした」

織紗那がそつと手をかざすと、彼は小さな子犬となった。

「頼みましたよ、陽太郎様」

陽太郎の太刀が更に物体を切り裂いた。

「ギョエエエエ！」

この世のモノとは思えぬ奇声を発しながらそれは崩れ落ち、ドロドロと溶け、地面に黒い染みを作って消えた。

「やるなあ！だけど、ボクを倒せないよ」

僅かに動揺しながらも勝ち誇った様なフランススの後ろから、織紗那が声を張り上げた。

「それはどうかしら？」

瞬間、何かがフランススの喉元を切り裂く様に擦り抜けた。

「もう、貴方に勝ち目はありません」

「何を！」

叫ぶフランススの鼻先に、陽太郎が刀の切っ先を近付けた。

「よく見てみる」

「！」

フランススの泳眼の先に見えたモノは

…フランスの身体？

「…なっ！」

ふっと一人の翁が現れた。

「小娘、これでいいんかの？約束を果たしてもらおうぞい」

「ありがとう」

翁は霧の様になり織紗那の身体に纏わりつく、暫くしてから煙りの様に消えた。彼女が立ち暗みでもしたように、ふらふらとした。徐に歩き出すと、フランスの抜け殻の傍らに寄り添った。

「貴様を倒さなければ、フランスは戻らないんだったよな？」
切っ先が更に魅多寡へと近付いた。

「…そうだ。だが、それがどういう事かわかるか？」

まだ勝算はある、そんな含み笑いを魅多寡が一瞬見せた。

「危ない！！逃げてっ！！！」

縁側からジュリエラが泣き叫ぶ様に声を張り上げた。

「遅いわっ！」

魅多寡を中心とし、辺り一面から無数のあのローズマリーを飲み込んだ青白い腕が伸び、陽太郎に向かって襲いかかる。だが、まるでアクロバットでもしているかの如くに、彼は紙一重でくるくると腕を交わした。

それでも途切れる事なく腕は彼を追い、陽太郎の足首を掴んだ。

「くっ！」

彼が腕を切り落として逃れると、周りには断末魔の様な悲鳴が響き渡った。

「逃げろ！逃げろ！！闇に引きずり込むまで、悪魔は貴様を追い回すぞ」

「くそっ！」

悪態をつきながらも、陽太郎は逃げるのに必死であった。前からの腕を切り落とし、後からの腕を飛び避けた瞬間であった。

「しまった！逃げろ！！」

腕の先には、ジュリエラが固まったまま座っていた。

「きゃああああ！！」

彼女が悲鳴を上げた瞬間、腕が陽太郎からジュリエラへとターゲットを変えた。

陽太郎もジュリエラへと走るが、身体が追いつかない。

（間に合わない！）

次の瞬間、ジュリエラが横へと吹っ飛び青白いうでが一本の太い固まりの様に蠢き始めた。ジュリエラの顔がみるみるうちに青くなる。

「…い、…いやああああ！！」

腕に絡められていたのは日向であった。動けないジュリエラを衝動的に突き飛ばし、そのせいで一番近かった自分が腕に捕らえられたのであった。

「う…嘘だろっっっ！」

陽太郎が腕を切り裂くが、それは余りに多く、余りに遅かった。捕らえられてから2分とせずに、日向は腕と共に地面の中へと消えていった。

辺りが水を打った様に静かになる。織紗那が、ガクガクと震えながら愕然と膝をついた。

「…ごめん…ごめん…なさい…」

織紗那の口から微かに洩れた。

「日向あああ！」

陽太郎が叫ぶ。

カラン…と刀が落ちた。

ふと魅多寡に目をやると、彼もまた顔面蒼白になりながらガタガタと震えていた。

「ボ…ボクが悪いんじゃない…。悪いんじゃないんだああああ！！」

発狂したかのように叫び出した。

『否、貴様は重罪を犯した』

空から、聞き覚えのない女の声がした。

刹那、魅多寡の胸元を何かが貫いた。

「…椿か…」

直後、魅多寡の身体が何かにズタズタに切り裂かれた。

『また、殺しに来るよ』

◆理想の境地◆

それは居心地が良く、気持ち良く感じた。敢えて表現するとすれば、セックスと同じ様な感覚に思えた。頭の中で、誰かが話しかける。

『真実が一つとは限らない…』

(…真実…?)

声は心を読むかの様に、再び続けられる。

『物語がそこで終わったのなら、また作り出せばいい…。ここは永遠の空間、永遠の安らぎ…。想像の産物、そして…』

声がハモる。

——理想の境地…。

.....

.....

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

けたたましい目覚時計と、追い討ちを掛ける携帯アラームの音に日向は叩き起こされた。重ダルい身体を起こし、ふらふら居間へと歩きだした。

「日向、先に顔洗っちゃいなさい！ご飯はそれから」
朝から元気の良い母の声に、コクリと頷いた。

「ちゃんと目開けて歩かないと、また柱に頭ぶつけるよ」

「うーん…」

朝は弱いの一言だ。洗面所で顔を洗い長い髪を束ねると、パジャマ姿のまま居間に向かう。テーブルには焼きたてのトーストとベーコンエッグが並んでいた。

「…かあさん、珈琲…」

「はいはい」

ミルクと砂糖がやたらに多い珈琲（…と言うより珈琲牛乳？）が差し出された。

「ほら、早く用意しないと遅刻するよ」

「……」

「日向っ！」

「…うん。なんで学校ってこんなに朝早いんだろね」

「高校2年にもなって、何今更ばやいてるの。早く行く！桜ちゃん迎えにくるわよ」

忘れてたと言わんばかりに、朝食を掻き込む様に頬張った。

部屋に戻ると、有名県立高校のブレザーに着替えた。指定のネクタイを絞めていたら、幼馴染みの桜が迎えに来た。

「桜ちゃん来たわよー！」
母が叫ぶ。

「すぐ行くー！」
鞆を引っ掴むと部屋を飛び出した。

日向の家はボロボロではあるものの、先祖代々からの古く由緒正しき寺となっている。その為、観光客も度々訪れる。外に出ると、観光客だと思われる老人が数名チラチラ見て行く。

釣り鐘の石段に、桜は腰掛けて待っていた。

「ごめん、桜っ。待った？」

「3分待った。もうバス来ちゃうよ、急ごう？」

二人並んで足早にバス停へと歩いて行った。

バスに乗り込むが、自分達と同じ制服の学生はいない。有名県立高校の為、いつもの事ながら良く目立つものの、2年も通えば流石に慣れた。

朝以来一言も口をきかない桜が、少し心配になる。

「…桜、元気ないね？」

桜は大きく溜め息を吐いた。

「…うん…ちよっとね…」

「何があったの？僕でいいなら、話くらい聞くけど？」

深刻そうに覗く日向の顔を見上げて、軽く頬を染めながらぷいっと顔を背けた。

「やだあ、恥ずかしい」

今度は日向が心外だと言わんばかりに顔を背けた。

「なーにがっ！風呂まで一緒に入っというて」

その一言に、益々顔を赤らめて桜が咎める。

「やめてよっ！小さい頃の話でしょ!？」

「小さくても桜は桜だろっ。僕と一緒に風呂入るの大好きって言うてたくせに」

からかう様に言う彼に、彼女は

鞆を打ち付けた。

「何さっ！自分だって、うちに泊まりに来ておねしょしたくせにっ！！」

今度は日向が顔を赤らめた。

「なっ！そんないらん事ばっか覚えてなくなっただっていいだろ!？」

「ふんっだ！3回したって覚えてるもん!！」

「桜あっ！」

「他にもまだあるよ。中学1年の時、野良犬に悪戯しようとして…」
学校も近い。いつも口喧嘩に負けるのは日向。

「わーかった！僕の負けっ!! だからもう辞めてよ」

「えっへんっ！」

勝ち誇る桜に、日向はガクンと肩を落とした。

バスが学校前のバス停に停車した。2人揃って下車すると「おはよう」と声を掛けられた。振り向くと、金髪の眩しい美青年が立っていた。

「あ、生徒会長。おはようございます」日向が事務的に挨拶を返すと、

「やあ、副会長は朝から元気だね」

と嫌味っぽく返された。傍らにはこれまた金髪で、書記の座を持つ妹を携えていた。

「あっ…あの、クリンストーン先輩おはようございます」

桜が少し遅れて、緊張した様に挨拶をした。日向の眉がピクリと動く。

「えっと…君はそこの副会長の…」

「幼馴染みの桜木桜ですっ」

生徒会長はにっこりと桜に微笑みかけた。

「桜木君か。覚えておくよ。いつも一緒にいるなあとは思っていたんだけどね、君達幼馴染みだったんだね。以後よろしく」

生徒会長は桜に手を差し延べた。

「こ、こ、こ、こちらこそ、よろ、よろしくお願いいたしますわ」
震える手で握り返した。

「…生徒会長…」

ふと日向が横野次を入れる。

「なんだね？副会長」

「名前で呼んでくださいよ」

「うーん、では酒猫君。^{さかね}ボクも名前で呼んでももらえないかな？」

「嫌です」

「何故？」

「言いにくいから」

「……」

生徒会長事クリンストーンは、大きく咳払いをした。

「さあ、学園に急ごうではないか？　そういえば、君のファンらしき女子生徒が昨日生徒会室の前に張っていたよ。邪魔だから注意しておくように」

「……」

そう言い残し去って行く兄の後を追う様に、妹は日向に苦笑い付きの会釈を残して走り寄っていった。

クリンストーンが先に行っても桜は暫く固まったままであった。

「…さては、桜あ…」

ふふん、と何か企んだ様な含み笑いをしながら、日向が桜を横目で見つめた。

「…な、何よう…」

「生徒会長が好きなん…」

最後まで言い終わらないうちに、更に顔を赤く染めた桜が顔を背けながら、持っていた鞆を両手で日向の背に叩き付けた。叩き付けられた幼馴染みは、声も出せぬまま勢いよく前のめりに倒れ込んだ。

周りの生徒が、何事かと驚いて注目する。

「やめてよ！そんな…」

顔を背けたまま、桜は走り出した。

「…日向のどあほう！！」

…と言いついて残して。

「…ひどい…」

そう日向が溜め息混じりに呟いた時、周りで観察していた女子生徒の輪から、ぶつぶつと不満と非難の声が溢れ始めた。

綺麗に整った顔立ちに、常に上位に在籍する成績、そして天才的ギターテクニクによるバンド活動。もうしぶんない程恵まれた存在だと誰もが羨む。目立ちたくなくても気付けば目立っている、とても言おうか。昔から、日向はアイドルの様な存在感を持っていた。もちろんこの学園においても変わはない。

妬みに陰口、いつもの事だからと2人共大して気にはしていない。以前は桜への嫌がらせも多々あったのだが、可能な限り阻止出来る様にと例え桜に日向自身がうっとおしがられようとも常に一緒にいる様に気を付けていた。

だから、朝元気がなかったのも、自分が原因なのではないかと心配になったのだ。桜の強がりな性格も、心配かけまいと気を遣う性格も、十二分に解っているつもりであったから。

「…何よ。幼馴染みだからってあの態度…」

「また嫌がらせしてやろうかしら」

どこからともなく耳に飛び込んで来た。とりあえず彼は周りをキッと睨み付けると、慌てて桜を追いかけた。

下駄箱を開けて、いつもと同じ様に白い目で見つめる桜の肩を掴まえた。

「…からかった訳じゃないんだよ？」

「日向にはわかんないよね。恋する乙女とばかり食らう人の心」
…わかってるから、下駄箱は使わない様にしている。山の様な剃刀レターに、赤い塗料で書かれた罵倒のコトバ。

「“バカ” “死ね” “ブス” だって」

下駄箱の蓋のつまみを握る桜の手を退け、日向が代わりに蓋を閉めた。

「僕が後で綺麗にしとくよ」

「いいわよ。どうせ使わないんだから」

「でも、僕のせいだし…」

思い付いたかの様に桜が言った。

「いいのよ、本当に。私、この学校辞めるし」

「は？」

固まる日向を無視して、桜は走り出した。彼女の背中に「意味わかんない！」とぶつけた。

早いもので、昼前には桜が学校を辞めるという噂は広まりきっていた。自分に相談もなしに、突然に、そんなイライラが時間が経てば経つ程日向の中に蓄積されていく。それはとうとう限界に近付き、彼を行動に移させた。

化学の時間。

「酒猫君、この数式の解説をしてくれたまえ」

当たり前の様に差す教師の顔を見ながら「わかりません。廊下に立ってます」と立ち上がった。

日向に解らない筈がない問題だと誰もが思った。ただ呆然とする教師と生徒を尻目に教室を立ち去った。

ワンテンポ遅れて教師が外へと飛び出すが、既に日向の姿はなかった。

「えーすけーぷうー！？」

裏返った声で叫ぶ教師の声が、廊下に響き渡る。

日向がエスケープしてから数分後、校内放送が流れた。

『2年E組桜木桜さん、至急生徒会室迄お越し下さい』

E組にて桜が差される。

(…授業中なのに?)

彼女は直ぐさま教室を後にした。

桜が生徒会室の扉を失礼します、と開けると、日向が何故か会長席に腰掛け、どうぞ、と出迎えてくれた。

「これはこれは、生徒会副会長殿。授業サボって一般生徒になんのご用件でしょうか？」

彼女は姿勢を正し、実に事務的に話を振った。副会長殿は頭を支える様額に指を着きながら、やれやれと溜め息を吐いた。

「…桜、まあ座りなよ。どうしても話がしたかったんだ」

桜は副会長席に座ると、再び口を開いた。

「私、副会長サマと違って授業抜けたらついていけなくなってしまふんですけど…」

「本当なの？」

突拍子もない。

「何が？」

「学校辞めるって。辞めてどうするの？」

「……」

桜は無言のまま席を立とうと腰を浮かせた。

「桜っ!! 逃げるんじゃないよ! なんで相談もなしに」

彼女は浮かせた腰をそのまま戻し、顔を見られまいと俯いた。

「…ぞく…してる？」

「ん？」

「満足してる? って聞いたの! 私ほねえ、満足してない!!」

「……」

桜の目に涙がうつすらと浮かびあがった。

「ずっと、日向には黙ってた。小さい頃からお互い一人っ子で、幼馴染みだけど姉弟みたいで…。いつも一緒、高校だって一緒に通おうって約束して…。だから必死で勉強したの。日向がガツカリする顔見たくなくて。運良くこんな馬鹿みたいに頭いい学校に入れたけど…私もう限界なのっ!」

日向の顔が無意識に引き吊る。

「笑いたければ笑えば？ なんとか1年までは頑張ってこれたけど、家庭教師付けてもらっても、授業の内容さっぱり解らないの。どんなに頑張っても学年最下位。先日、私先生になんて言われたとう？ “君はこの学園始まって以来の生徒だよ。恥なんだよ。手続きしてあげるから、転校した方が君の為だよ。その方が、君自身楽だろう？” って。挙句“あの酒猫君の幼馴染みだなんて、彼も面倒見が良過ぎるんじゃないかな。迷惑していると思うよ” って他の先生からもね。どいつもこいつも酒猫、酒猫、酒猫って。なんで私があんたと比べられなきゃいけないの？」

「……」

「笑いなさいよ！ 馬鹿にしたら！！ ね！ 天才クン！！」
全身が罪悪感で満たされる。

どんな言葉を言えば良いのか解らない。

「でも桜、会長の事はどうするの？」

震える唇を必死で堪えて、聞いた。彼女は鼻で笑った。

「世界に幾つも病院を構える医者の子サマ、しかもドイツの美男子：思いを寄せる女も数知れず：。雲泥の差だわ。私みたいなバカ、相手にされると思って？」

「…そんな…」

「大体、なんであんたに相談しなきゃいけないの？ 相談したからなんになるって言うのよ？ 恋人でもなんでもない癖に。ただ家が近いってだけじゃない。これは私が決めた事よ。もう教科書に追われるのはうんざり！ あんたと比べられるのもうんざり！」

固まる日向を冷やかな目で睨み付けて、桜は立ち上がった。

「私、戻るから。まだ少しはN高（こ）にいなきゃいけないし」

「…いつまで？」

「今月末まで。もう朝も迎えに行けないから」

「どこいくの？」

「教えない」

「……」

それ以上問い詰める事もできず、引き止める事もできず、桜が生徒会室を去るのを横目で見送るしかなかった。

「…最悪だ…」

頭をかきむしる様にして、机に塞ぎ込んだ。

…気付いてやれなかった。

…いつも一緒にいたくせに、言われるまで。

授業終了のチャイムが鳴る。2分程して、生徒会長が入ってきた。

「おや？さっきの放送は、もしや君の仕業かい？」

「…そうだけど」

…こいつの顔を見るとイライラする、と日向は思った。そんな彼の心境を知ってか知らずか、クリンストーン生徒会長はやれやれと大袈裟に溜め息をして見せた。

「いけないなあ、生徒の見本になるべき代表の君がエスケープなんて…。清く正しく生きなければ」

…こいつのどこが清く正しいのかと思った。

「で、生徒会長は何しに来たんっスか？」

「ボクの島で何が行われてるのか気になってね」

（…あんたの島って…）

「さいですか」

日向は立ち上がった。

「授業に戻るんだろうね？」

生徒会長が問う。

「帰ります。気分が良くないので…」

「桜木クンの事かい？」

「……」

伊達に成績が良い訳ではないようだ。生徒会長は、核心を突いてくる。

「…僕が、悪いんです」

「噂では聞いていたんだ。毎年何人か出るそうだ。学校のレベルを常に高く保つ為、県立と言えどもついて行けないと見切りを付けた生徒を転校させる話し。考えてもみたまえ、留年する生徒が一人もいないんだ。おかしくはない噂だ」

「…なんでもいい。ただ、僕が近くに居た事で、桜はそれ以上に傷付けられた」

「君に…」

生徒会長が言葉を出し、そしてふとつぐんだ。

「なんですか？」

「…傷付ける事かもしれないが…」

「構いませんよ、今更」

桜の事だけでも十二分に痛い。

「では言おう。生徒が君に近付かないだろう？女子生徒ですら、ファンクラブと称して盛り上がってはいるが、それでもアイドル止まりだ。皆、桜木クンの様になる事を恐れている。比べられ、陰で非難される事にね。彼女自身よく耐えたと思う」

「……」

そして、生徒会長は溜め息を吐いた。

「それはボクにも言える事なんだよ。だからボクには妹しかいないしね。君となら平和に仲良く出来そうだけど、君がボクを嫌っている」

苦笑いを向ける生徒会長に、やれやれと言わんばかりに軽く手を上げ、下ろした。

「初めてですよ、こうして話するの。別に嫌ってなんかいませんよ」

「嫌われモノ同士仲良くしようではないか？」

思わず吹き出す。

「…そんな傷を舐め合う様な友情嫌ですよ」

「人間とは弱い生き物なんだ。時には舐め合う事も必要さ」

「…そうかも…しれませんか」

「まあ、今日は上手くボクからしておいてあげるよ。お疲れ、また明日！」

「ありがとう、クリ先輩」

「…クリは辞めてくれ…なんかイヤラシイ。名前で良いから」

「なんでしたっけ？」

「フランス。フランスで構わないよ」

「そう。じゃあ、フランス！」

「じゃあ、日向！」

ボタン…、と扉が閉められた。

翌朝、桜は迎えに来なかった。が、代わりに幼馴染みの陽太郎が来た。

彼は中卒、今はプロボクサーを目指しながら、工事現場を中心に働いていた。

「日向、久しぶり！今夜飲みに行こうぜ」

「いいけど、それならわざわざ来なくてもメールで言ってくれれば良いのに」

すると彼は笑顔でじゃーん！と、持っていたDVDを突き付けた。

『秘蔵・外伝・ムフフン！人妻温泉フェ●痴女巡り旅』

…と書かれていた。日向は顔を一瞬で紅潮させると、DVDを下に押し下げ隠した。

「やめろよ！こんなところでっ！！」

素っ惚けたように陽太郎は言う。

「観たいと思って」

「…あのさ、場所を弁えてくれる？真面目で誠実で純粋な僕のイメージ壊さないでもらいたんだけど」

とぼやきながら鞆に急いで入れる日向を、陽太郎は面白いなと内心思いながら見ていた。

「…先日掴まえた女の子どうだった？」

「うん、なかなか楽しませてくれ…」

はっと気付く。

「何言わすんだよ！」

キッ！と咎める日向に、陽太郎はニタリと笑いかけた。

「やっぱ、お前面白いわ」

「……」

バスが迎えに来る。結局、バス停にも桜は来なかった。気に止めながらも、また…と陽太郎に告げて、バスに乗り込んだ。



学校に着くと、その足でE組を訪れた。近くを歩いていた女子生徒に桜は来ているか尋ねた所、“停学中”だと言われた。

「理由は？」

「知らないけど、校内新聞に張り出されてあったの」
日向の顔がムツと歪んだ。

そして直ぐに、掲示板に走った。掲示板には明らかに、学校からでも新聞部からでもない誰かの嫌がらせだと思える校内新聞が張り出されてあった。周りで見ていた数十名の生徒が、日向に気付いて注目した。

― “酒猫日向のストーカー女、桜木桜停学処分！のち退学決定！！” ―

卑劣なタイトルだけ読み、勢い良く破り剥した。

「ふざけんなっ！！」

生徒がざわめく。更に破き、ぐしゃぐしゃに丸めると、地面に叩き付けて踏みにじった。

トイレに入って、桜に電話を掛けてみるがコール2度目で出もせず切られた。メールを送るが、返事はなかった。

「…何だよ…桜の馬鹿…」

ぼやいた自分の小声が、泣きそうな事に気がついた。

―もう暫くN高に居なきゃいけないから…。

どうやら生徒会室から逃げる為の只の言い訳だったらしく、結局月末になっても桜は学校に来なかった。携帯も繋がらず、自宅に電話しても出ず、家に行っても逢えなかった。

桜がいなくなってから、周りの女達がやたらウザく感じるように思えた。何やら女の輪の中で暗黙の了解なるモノが存在しているらしく、ランダムに違う女の子が行き帰り待ち伏せしていたり、弁当やプレゼントを渡して来た。

「…フランススは、弁当やプレゼントどうしてますの？」

生徒会会議終了後、会議室にて日向がフランススに問い掛けた。

「捨ててる」

「マジですか？」

「うむ、気持ち悪いだろ？なんか仕込んであったら怖いし…君はどうしてたんだい？」

「適当な場所に、さも落としかの様に置き去りにしていました」

「それもいいね。メモしておくよ」

フランススがほくそ笑んだ。

「そういえば、桜木クンの転校先知ってるかい？」

ズキンと胸に突き刺さる。フランススは特に気にする素振りも見せず、なぶる様に話を続けた。

「知らない様だね。聖K女子学園って知ってるかい？レベルは低いがお洒落なお嬢サマ学こ…」

最後まで話終える前に、日向は衝動的に立ち上がるとフランススに掴みかかった。

「聖Kって本当なんですか！？確かな情報なんですか！？」

「…た、確か何も…桜木クンの担任から聞いた話なんだから」

日向の手の力が抜ける。フランススは今だと言わんばかりに、慌てて引き下がった。

「N高から聖Kだよ、恥ずかしくて知られなくなかったんだろ。そつとしいてあげた方がいい」

上着を直しながら、日向になだめる様に言った。

「…あれ以来、喧嘩したままなんですよ。嫌だ、こんなの納得できない！」

「君も頑固だね。“愛”か？」

フランスは冗談で問い掛けた。が、真面目に返答された。

「そうじゃないですよ。そんな時期もあったかもしれないけど、好きとか友達とか恋人とかじゃなくて、もっと特別で大事で……とにかく心配なんです」

「まあ、問題起こさない程度に頑張ってくれたまえ、としか言いようがないよ?」

日向は、わかっていますよと顔を背けた。

「彼女が近くにいる事が、僕にとっては当たり前だったんです」

そう言い残して、生徒会室を飛び出した。

「やれやれ、青春だねえ」

少しばかり羨ましいと彼は思う。

聖K女子学園の時間帯がわからないので、一限だけ授業をサボった。

聖KまでN高からはバスで30分もかからなかった。流石はお嬢様高校と有名なだけあって、建物は校舎と言うより洋館造り。花や木が綺麗に整備されていて、まるで庭園の様であった。

“私立聖K女子学園”と書かれた金のプレートも、しっかり磨かれていた。

少し離れた所で日向は待つことにした。30分くらいして、チャイムの代わりに音楽が流れ始め、同時に校内がざわめき始めた。

日向は一番最初に出て来た生徒に声をかけた。引き止められた生徒は日向を見上げ、顔を一瞬に紅潮させると、緊張してうわずりながらも転校生について教えてくれた。

更に待つ事15分、桜を含む3人の女子生徒が校内から出て来た。捕まえる迄確認されるとまずいと思い、門の影にさりげなく隠れるが、通る度に生徒が“かっこいい人”だとか“N高の制服”だとか“誰の彼氏”とかざわめくので、内心ビクビクしていた。

だが運良く桜は気が付かず、門をくぐり抜けた所を見計らって、日

向はぐつと腕を掴まえた。

「やっとな掴まえた！」

思わず感嘆の声が勝ち誇った様に洩れた。

「え？」

小さく洩れた驚いた声の主は、桜ではなく桜の隣りに居た女の子であつた。

「あ！」

しまった！と思った瞬間、桜の鞆が脳天を直撃した。

「ぬわあにしてんのおおお！！この変態！ドスケベ！」

「きゃあ！桜ちゃん、そこまでしなくても……」

「……」

思わず目一杯手が出たものの、驚きと動揺が桜を一気に攻め立てた。

「……桜……今のは効いた……」

日向の目に、まだ星がちらつく。

「……日向……なんであんなここにいるの？」

震える唇を必死に堪えて問う。

「……逢いたかったから」

指定の制服だろう。緑のチェックのスカートに、ダブルのブレザー。N高では一度も見た事がない、化粧をした顔に髪を綺麗に結い上げ巻いていた。耳には大きめのライトストーンのピアス。思わずドキッとする。

「……ピアス、あけたんだ」

「……N高では、化粧も巻き髪もピアスも禁止だったから」

「……あのう、桜ちゃんのお友達ですか？」

日向の掴んだ女子生徒が問い掛けた。

「まあね、幼馴染みなの」

女子生徒はニッコリ微笑んだ。

「夜叉神織紗那と申します。以後、お見知り置きを」

すると更に隣りにいた生徒もとりあえず、と言う感じで話出した。

「あたしは、六弦音女^{ろくげんおとめ}。でもレディって呼ばれてる。桜のトモダチ」

日向は直ぐ様しやがみ込んで居た身体を起こすと、自分も2人に自己紹介した。

「えっと、N高の酒猫日向です。一応、桜の幼馴染み」
桜が付け足す。

「頭脳明晰、運動神経抜群、超モテ男、おまけに生徒会副会長、騙されちゃダメよ」

と、冷たく2人に言い放つ。

「…やめてよ…」

ふん、と顔を背けた。

「桜、どこかで話できないかな？」

「え？」

すると、織紗那がレディの腕を掴んで桜に言った。

「桜ちゃん、私達大丈夫だから！レディ、行こう？ケーキ食べて帰ろう？」

慌てて桜が引き止めようとするが、織紗那達はスタスタ行ってしまった。

「…あぁん…バナナチョコタルト、私も食べたかったのに…」

「…そのくらい奢るよ」

「…いらないわよ。奢るならチョコパにしてよ」

「チョコパ？」

「チョコレートパフェ！」

「……」

そのまま日向は桜の案内で、女子校生の集まるカフェに移動した。美男美女カップルを見て、周りが騒然とざわめく。席に付くと変わったデザインのメイドチックな制服を着たウェイトレスが、水とおしぼりを持って来た。ありがとうと日向が微笑み掛けると、ウェイトレスは注文も聞かずに顔を赤くして立ち去った。

「あ…」

引き止め様とするが聞いてもらえず、妙な歓声と「八重歯とか超プ

リチィー♪」とか言う声が聞こえてきた。

(めっちゃ聞こえてるし…)

仕方なく一口水を啜った。

今度は別のウェイトレスがやってきて「ご注文はお決まりでしたか?」と聞いた。

「桜はチョコレートパフェだっけ?あと、アイスマルクティとイチゴパフェで」

「あとアイスココアも」

かしこまりました、とウェイトレスは去って行った。

「イチゴパフェだってー!超キュートー!」

また歓声と聞こえてきた。

(…だからめっちゃ聞こえてるし…)

「…本当、どこ行っても目立っちゃって。超迷惑っ!」

「…僕だって迷惑なんだよ」

また水を一口啜る。

「話って何よ?」

「…ごめん…て、ただ謝りたくて…」

「……」

「僕のせいで苦しんで、僕のせいで必死に手に入れたモノ無くして…気付いたら僕には桜しかなくて。だから桜がいる事が当たり前になってた。僕にとっては恋人とか友達とかより特別で、どちらかと言うと家族みたいに思ってた。正直言うとお抱きたいと思った事だって何度もあったけど、それは単なる欲求でしかなかったから。昔みたに戻れないかもしれないけど、お互い大切な人が出来ても一緒に居られたらいいなって思う。自分の事考えずに、近付き過ぎてごめんな」

彼は溜め込んでいた感情が一気に溢れ出し、思わず泣きそうになった。そんな彼を見て、彼女は優しくクスリと笑った。

「…私こそ謝らなきゃね。日向が優しいのは知ってる。私の事で悩んでくれてたのも。でも、自分に負けたのは私。気にしないで」

——ここから新しくスタート出来ればいい……。2人共そう思った。

また別のウェイトレスがやってきて、注文品を置いて行った。

「相変わらずイチゴパフェ好きよね」

桜が笑う。

「イチゴと甘々好きだもん。特に練乳タップリかったやつ」

「…あんた、将来糖尿病になるわよ」

「……」

いつもなら全部入れるミルクティのシロップを、4分の1だけ残してみた。

「その太らない体型羨ましいわ」

「女の子は場所によっては多少肉付きよい方がいい場合もあるから気にしないでいいと思うよ」

「スケベ！」

桜がおしぼりを投げ付けた。



桜のいない朝。桜のいないバス。桜のいない学校…。

自分の身体の一部でもなくしたかの様に、ぽっかりと心に空間が出来た。けれども、桜は桜で楽しくやってるらしい。良かったと思うけど、良かったレベルにプラスアルファするくらい日向は悔しいとも思う。

だから時々、家から正反対なのに偶然を装って待ち伏せしたりした。ベターではあるが、フランスから映画のチケットを2枚もらったので今日はこれがネタ。彼曰く、先日見たい映画を見に行った方がいいが、前売りチケットを忘れたので当日買って見てしまったんだそうだ。あまり面白くなかったからあげると言われた。日向自身も見なかったから丁度良かったが、つまらないと言われるとなにか複雑…な心境。

いつもの様に聖K前で待ち伏せしていたら、いつもの様に女の子達がキャッキヤと騒ぎ出していた。

暫くすると、夜叉神織紗那一人が校門を潜り抜けた。日向に気が付き挨拶を交わした。

「あら、日向さん。こんにちは」

「あ、こんにちは。桜まだかな？」

すると彼女は少し考えた様な顔をしてから、にっこりと微笑んだ。

「昼前に少し貧血が酷いからと、先に帰りましたの」

思わず日向の口から溜め息が溢れた。

「大した事ないですから、明日には登校してきますよ？」

日向もまた考えた様な表情を作った。

「夜叉神さんだっけ？」

「織紗那で結構ですわ」

「織紗那ちゃんは、この後用事あるの？」

「いえ…特には」

「なら、映画に行かない？あんまり面白くないかもだけど」

織紗那は苦笑いを浮かべた。

「折角日向さんが桜にご用意なさったものですのに…勿体ないですわ」

日向もクスリと笑った。

「もらってさ、行く人いないから桜誘おうとしただけ。気にしないでさ、嫌なら仕方ないけど…」

織紗那は顔を赤らめながら言った。

「そんな…喜んで」

なら、と彼女の腕を引いてみた。すると、僅かに彼女の身体が強張った。

「あの…私…男性の方と、その、2人で何処かへというのは初めてで…」

日向が織紗那にだけ笑いかける。

「大丈夫！取って食ったりしないから」

思わず吹き出す。

「はい！」

考えてもみれば、桜以外の女性を誘うのは初めてかもしれない。桜がいる事が当たり前となっていて、気がねなく遊べたから桜が一番楽であった。もちろん付き合った女の子もいる。けれどどこか作った様な自分に疲れて、自分から誘い出す事等なかった。誘い出す事すら面倒と感じた冷めた感情であった。

それなのに…

不思議な子だなと日向は織紗那をそう感じた。別段かしこまる訳でもなく、只緊張した素振りも可愛く思えてしまう。自分を作り、常にアイドルでいなくとも、むしろアイドルの様に見ていないからこそ自然体でいられるのだ。

彼女の中で自分は特別ではない、一人の男なんだと思った。それは

桜と似ているけれども、それよりまた別な部類に思う。言ってしまうば、桜は姉弟…。

映画を見終わると、その足でカフェに入った。日向はイチゴパフェ、織紗那はプリンアラモードを頼んだ。アクション性の強いラヴロマンスの映画は、フランススが言う程悪くはなかった。

「日向さん、今日はありがとうございました」

織紗那はプリンをつつきながら、そう微笑んだ。思わず照れながら「気にしないで。ただアクションとか大丈夫だったかな？ って思ったけど」

と切り出すと彼女は楽しそうに

「私、アクションとか意外と好きなんですよ」

と得意気に笑った。

「そっか、良かった。また誘ってもいいかな？」

彼女は「はい」と照れながら笑った。

それからは、ちよくちよくと日向は織紗那を誘い出した。それは桜を誘うより、多くなっていたかも知れない。桜との間にお互い特別な感情を持っていた訳ではなかったから、桜は日向を日向は桜を良かったと思い、お互いでどこか安心した。

2人の間で何か進展があった訳でもないのに、周りは日向と織紗那が付き合っていると噂し始めた。

ただお互い楽しかったから、安らげたから側にいただけの話。噂を耳にし始めた頃から、2人互いを意識し始めた。

意識し始め、デートしようと正式に誘い出したのは日向であった。

日曜日、駅前の時計塔の下で待ち合わせ。15分前に日向は到着した。

（少し早かったかな…）

案の定、逆ナンに合うが愛想悪く無視。

待ち合わせ時間の5分前に織紗那は来た。遠くから日向を見つけると、慌てて走り寄って来た。

「…ご、ごめんなさい。だいぶお待たせしてしまいましたよね？」

レースのあしらわれた花柄のワンピースにデニムのジャケット姿。珍しく髪をアップに上げていて、その上下する白い首筋にドキッとしました。

「ううん。今来たところだから。それに、待ち合わせ時間には遅れてないよ」

照れ隠しするように、軽く笑った。

「それより走ったから、髪型気になるだろう？」

日向はポケットをさぐると、小さな翡翠のそれも古臭い鏡を取り出した。一瞬ためらったものの、それを彼女に差し出した。

「ご親切に、ありがとうございます」

織紗那は日向の差し出す鏡を笑顔で受け取ると、さっそく覗き込んだ。が、突如彼女の表情が陰しく変わった。そして呟く…。

……しくじった……

「え？」

織紗那、日向の周りから織紗那を残して全てが消えた。真っ暗な闇が広がり、更にはまるで鏡の中にでもいるかの様。鏡が割れる様なピシッと言う音と共に、空間に幾つもの歪みが入った。

歪みのカケラ一つ一つに、それぞれの違う自分が映し出されていた。あるカケラは泣いている自分、あるカケラは怒っている自分、あるカケラは幸せそうに笑っている自分…。

無限の自分が日向と織紗那を取り囲んだ。

織紗那が言う。

「永遠に居れば幸せよ？夢から覚めてしまったけど、もう一度夢を見せてあげるから」

織紗那が日向を静かに抱き締めた。

「…夢…？」

「そう。貴方が望む夢。幸せな世界…」

「…お兄様…」

真っ青な顔でゆっくりと目を開けたフランシスに、ジュリエラが呼び掛けた。

「…良かった…」

いよいよ涙は止まらなくなる。まるで子供の様に泣き崩れる妹を見上げ、暫くの間、彼は静かに

「おはよう」

と囁いた。

傍らには複雑な表情のまま横目で見下ろす陽太郎がいた。

陽太郎に目をやり

「ジャポン…ですか？」

と小さく問い掛けた。陽太郎の代わりにジュリエラがそうですよ、と返事をした。

陽太郎は無理やり笑みを浮かべると、そっと部屋から出た。縁側でうなだれる織紗那に、フランシスが目を覚ました事を告げた。

「…私が…もっと日向を観ていれば…」

震える唇で静かに声をだす。

「いや、俺があのとときもっと早く気づきさえすれば良かったんだ」

彼は彼女の肩を抱いた。もはやお互い泣く事も出来ず、考える事すら出来ず、ただ無言のままそうしていた。

やがて暫くの間において、力を取り戻した桜が現れ2人に告げた。

「織紗那樣、まだ望みはあります。日向、あの鏡きようを持っていてま

すわ。引き戻す事が出来るかもしれません」

っと。織紗那の目から大粒の涙が溢れ出た。

小鳥鳴き声と、ポプリの葉の反射する瑞々しい太陽の光で、日向は目を覚ました。

•
•
•
•
•
•

[illegible]

• • • • •

[illegible]

目の前には「おはよう」と覗き込む織紗那の顔が笑っていた。

お日様を遮るよう上げた左手。薬指に真新しいプラチナの指輪がキラリと光った。

「貴方、今日は朝からレコーディングなんですよ？遅れちゃうわよ。ほら、朝ご飯も出来てるから。今珈琲入れるわね」

焼けるトーストの臭いと、どこか甘い卵の臭いが鼻をくすぐる。ゆっくりと身体を起こすと、ベッドから這い出した。

「ねえ、新婚旅行お預けになってごめんね。昨日スケジュール調整で、レコーディングとプロモの撮影が終わったら時間開く事になったんだ。そしたらゆっくり出来るから。織紗那はどこに行きたい？」
珈琲を渡しながら彼女は嬉しそうに笑った。

「そう、うれしい。日向がいればどこでもいいわ！」

「そう。折角だから3ヶ国くらい周ろうか？また一緒に決めよう」
「そうね、さあ早く仕事に行って」

朝ご飯を平らげると、日向は愛車に乗り込みスタジオへと向かった。入籍のニュースは新婚旅行が終わるまで黙っておく予定だったのだが、どこから漏れたのか雑誌の取材が何人か来ていた。

スタジオの前で張る記者を縫う様に無言のまま押し退け、なんとかスタジオへと入った。既に他のメンバーは来ていた。

「なんだよ、あの取材班」

日向のぼやきにマネージャーが答えた。

「酒猫君の入籍がなんか漏れたみたいよ。どこの雑誌も我先にとってネタにしたいみたいね」

「……」

まだ何もしてないが、どっと疲れが襲った。

「さあ、さっさと終わらせちゃいましょうね」

はいはい、とその場にいたメンバー&スタッフ達は作業に取り掛かった。



織紗那は自分の部屋の床板を外すと、銅で出来た小さな瓶かめを取り出した。

「…良かった。まだ残っている」

古びた汚らしく汚れた瓶を、陽太郎が自ら洗い出した。

その間彼女は人形ひとがたを取り出すと、神棚の前に置いて呪文を唱え出した。左右の蝋燭の炎が激しく燃え上がり、呪文に合わせて風もないのにゆらゆらと揺れた。呪文が終わると同時、人形の真ん中に朱で一つの模様が浮かび上がって来た。

陽太郎が洗い終わった瓶に水を張ると、織紗那の部屋へと運び込んだ。

「陽太郎様、前へ」

瓶の中へ、織紗那は先程の人形を浮かべた。彼女が瓶の口を仰ぐ様にして手を数回通過させると、不思議な事に瓶の水はまるでテレビの様に全く別の世界を映し出した。

「日向が今見ている世界です。幻であって幻ではない、闇が作り出した日向の理想の境地…。呼び掛ける事は出来るけれど、真実の世界を決めるのは日向自身。日向が欲に負けてしまえば日向は帰る事を拒み一生闇の中を彷徨い続ける事になるのです。ただ…」

口をつぐんだ織紗那の代わりに、悟ったかの様に陽太郎が続けた。

「…それが理想であるなら、ある意味このままにしておいた方が幸せなのかもしれないな」

織紗那がコクリと頷いた。

「フランス様の天女もジュリエラ様の鬼も日向が歯止めとなっています。このまま日向が犠牲となれば、鬼も天女ももう現れる事はありません。けど…私は…悲しい…。わからないけれど、胸が痛い…。締め付けられる様に…痛い…。あの時みたい…もう失いたくない…」

陽太郎に寄り掛かると、織紗那は肩を震わせながら、声を押し殺して泣いた。

「…大丈夫、真実は一つしか存在しないよ。もし、あいつがいつまでも寝ていたいなんて言うなら、俺が殴り飛ばしてやるよ」
それが陽太郎なりの精一杯。精一杯に、イタズラな笑みを浮かべた。

◆お帰り◆

「…デビルもエンジェルもボクとジュリのトーカーカンです。メイワクかけません!」

織紗那の部屋の襖がゆっくり開いた。傍らにはフランシスを支えるジュリエラがいた。

「ヒウガ犠牲になる、イケナイ…。ワタシ、デビルから開放される為へイワしてきたネ。だから、デビル開放される迄、お兄サマとヘイワすればいいことヨ。ヒウガ助けまショ! アルマゲドンやつければ、きっと大丈夫!!」

精一杯笑おうとする2人ではあったが、目だけは笑っていなかった。

「…フランシス様、ジュリエラ様…」

織紗那は2人の名前を呟くと、子供の様にごしごしと涙を拭った。

「デビル、エンジェル、ボク達の身体みたいなモノです。前みたいなパワーは今はないですが、ハチョウ合わせるコトできますですよ」

クリンストーン兄妹は、瓶を囲う様にして2人腰掛けた。ゆらゆらと水面に浮かび上がる別次元の映像。

見守る陽太郎を背後に、3人は意識を集中させた。

——全てが、元在りし元へ。

.....

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

日向が自宅のマンションに戻る頃には、深夜1時を周っていた。メールで夕飯は食べてくると連絡は入れたが、この時間になると流石に腹も減る。何かないものかと冷蔵庫を開けると、サンドウィッチが4つほど作り置きしてあった。

多分、織紗那が夜食にでも作っておいたんだろう。そんな些細な気遣いが好きだ、と改めて日向は思った。

冷蔵庫からサンドウィッチとオレンジジュースを取り出すと軽く平らげ、自分が作曲用に使っているパソコンの電源を入れた。既に更なる新曲案は何曲か考えていて、新婚旅行の為に明日中に今有るストックのデモは渡しておきたいと考えていた。

パソコンが立ち上がる間お気に入りのカップに再びオレンジジュースを注ぎ、パソコンの前に腰掛けた時寝室の扉が開いた。

「…日向、お帰りなさい」

「あ！ごめん。起こしちゃった？」

慌てて振り向く日向に、ううんと織紗那は首を左右に動かした。

「丁度喉が渴いて起きただけよ。冷蔵庫にサンドウィッチあるわよ」

「うん、見つけた。ありがとうネ！おいしかった」

「良かった、無理しないでね」

彼女は再び寝室へと戻った。何曲かあるうちの最後になる曲の仕上げを終え、ヘッドフォンを装着した。流れるメロディは、惚気た仮歌詞に乗って軽快に流れた。

『強く抱き締めた君の温もり 忘れないうちに僕のモノにするよ
離れない繋いだ

手と手が 君と僕の絆を もっと深めるから…』

思わずニヤけてしまう。我ながら良い歌だと妙に納得し、この曲は旅行帰還後発売予定のシングルのカップリングにでも必ず入れたいと思った。仮歌詞であって、仮歌詞ではないのだ。

チェックを終えるとCD・Rに曲を焼き、鞆にしまった。

その後シャワーを浴びていたら、どっと疲れが身体中を駆け回り出した。決して悪い意味ではない大きな溜め息を吐き切った時、ふと先ほどチェックしていた曲の1フレーズが脳内を通過した。

『夢の続きいつまでも見ていたい 夢から覚めても現実には君との夢の続きならいいの…』

「…夢…？」

ぼつりと呟いた先に、壁に浮かんだ幻の織紗那。薄笑みを浮かべた彼女と目が合った。どこかで見たと、どこかで聞いたと、確かに知っている、自分の中の別の自分が囁いているように思えた。

幻の織紗那は言う。

『…夢…。覚めなければそれも現実。そうでしょう？』

「……」

疲れているんだと、日向はシャワーを止めた。パジャマに着替え、長い髪を乾かすと織紗那の隣りに潜り込んだ。時計はいつしか午前4時を周っていた。

明日は9時からスタジオ。

(…夢なんかであるものか…)

何故かはわからない、が、強く自分へと言い聞かせた。

翌朝起きてはみたが、いつもと変わらない朝だった。織紗那がいて、自分の左薬指にはプラチナの指輪。

ほっと安心した。

「日向、どうしたの？ 顔色があまり良くないわよ？」

織紗那が珈琲を持ったまま、そっと覗き込んだ。

「何か、うなされてもいたみたいだし」

「大丈夫。今日乗り切れば明日休みだし。明日はゆっくり寝るよ。

最近あまり寝てないからちょっと疲れが溜まってみたいで」

「そうね、それがいいわ」

差し出された珈琲を飲むと、重い身体を起こしてスタジオへと向かった。

スタジオでメンバー全員が揃うと、昨晚作ったばかりのデモを全員に渡した。新婚旅行から帰還次第日向の結婚発表も予定しているため、話題に乗って短期間での新曲発売をしようと普段以上にスケジュールはハードに周っている。が、日向の要領の良さに誰一人文句は出さなかった。

逆に無理するなと氣遣われる方が大きかった。

「あと少しだから、気合い入れていきましょう！」

マネージャーが元氣良く声をかけた。

休み前日との事で完成を目的として行うレコーディングは、結局

朝方迄にも及んだ。

一日開ければプロモーションの撮影、それが終わればいよいよ旅行だ。ハードに周るスケジュールの中、それだけが唯一の楽しみであった。

マネージャーに頼んでかき集めてもらった海外旅行のパンフを大量に抱えて帰宅した。確かに疲れてはいたし眠気もピークではあったが、眠ってしまうのがなんだかもったいなかった。

キッチンで前日同様サンドウィッチを見つけると、インスタント珈琲を入れて朝食として平らげた。眠ってしまうのはもったいないが、眠らなければ身体がもたないのでそのままソファーへと横になった。

日向がようやくとうとうと眠りかけたとき、寝室からけたたましい目覚ましの鳴き声が響き渡った。そんな煩わしいモノも気にする余裕さえなく、そのまま彼は眠りへと落ちていった。

織紗那がソファーで寝息を立てる日向を見つけ、軽く口付けをしてから毛布をそっとかけた。

ふと彼女の目に、テーブルへと無造作に積み重ねられたパンフレットが飛び込んで来た。ラスベガス、ロサンゼルス、サンフランシスコ、ミラノ、ヴェネチア、ローマ、ルクセンブルク、パリ、ニース、モナコにオーストリア、オーストラリア、グアム、香港：etc 織紗那はパンフレットを一枚一枚捲りながら目を通すと、それらを綺麗に重ね直して再びテーブルへと戻した。

そして小さく呟いた。

「：日向がいればどこだっていいのに。無理ばかりして：」

ふと珈琲が切れているのに気付く。

近くのコンビニへと、彼女はそっと外へ出かけた。日向が起きたのはそれから30分ほどしてからであった。

けたたましく切れては鳴り響き、切れては鳴り響く携帯の着信音に叩き起こされたのだった。迷惑そうに電話を取ると、相手は織紗那の親友“桜”からであった。

泣き声が酷くて言葉が聞き取れない。

「：桜、まず落ち着けよ。何言ってるかわかんないって」

呆れた様に言うと、桜は泣き声を押し殺しながらもう1度伝えようとした言葉を繰り返した。

「：テレビ：ニュース：見て」

仕方なくテレビを付けた。緊急ニュースとして流れているのは、よく知っている場所。家の近所のコンビニであった。

生中継でアナウンサーが喋る。

『：コンビニに突っ込んだ大型トラックの運転手ですが、即死の様です。また撒き扱いになったコンビニ客3名が即死、4人が重体との情報が入ってきました。先ほど重体である被害者の一人が、人気バンド“パティ”のギタリスト酒猫日向氏の婚約者であるのではないかと申し上げましたが、やはり婚約者本人であると：』

日向は衝動的にテレビを消した。

身体中から血の気が失せ、身体が小刻みに震え出す。

電話を構えているのもしんどくなって、無言のまま電源を落とすと、這う様に立ち上がりながら玄関を飛び出した。意思とは無関係に身体が動く。

けたたましいサイレン音と野次馬の群れ。野次馬を止めていた警官の若い一人が、日向を見て織紗那がもう既に搬送された事を教えてくれた。

今度は救急隊に病院の場所を尋ねると、同じ病院だからと別の被害者の救急車に乗せてもらえた。その間、日向は祈る事しかできなかった。

幸せの絶頂だった筈なのに、人生最大の幸せが一瞬にして破壊された。

病院に着くとすぐに看護婦が案内してくれたが、今は治療中だからと織紗那に会う事は出来なかった。

その間に警察から事件の話を聞いた。

トラックの運転手は度重なる徹夜続きに、どうやら大量の酒を飲んでいたらしい。突然の睡魔に耐え切れず昏睡。そのままトラックは近くのコンビニへと頭から突っ込んだ様だ。しかもアクセルに足を乗っけていたため、トラックはどんどん加速し、約85キロにまで達していた。

織紗那は店内奥にいたため、トラックに吹き飛ばされた商品棚や商品、割れたガラスをまともに受けた挙句、それらと壁に挟まれた状態から救出されたとの事であった。

状態は最悪：全身打撲に複雑骨折、頭蓋骨折に内臓破裂。

正直生きている事が奇跡、否、可哀想だと看護婦が呟いた。



地獄の様で、人生で一番残酷で、永遠かと思えるくらい長い時間であった。それから約3時間後、手術室の扉が開き、暗い表情の医者が出て来た。

「…我々も手を尽くしたんですが…これ以上はどうにも…。今夜辺りが峠でしょう」

…ただただ泣き崩れる事しか出来なかった。

織紗那の横たわるベッドへ案内される。全身を包帯で巻かれ、人工呼吸器をはめ、生きていると言うより“生かされている”に他ならなかった。

日向の目から益々涙が溢れ出る。包帯の巻かれた彼女の手を取ると、少しひんやりとした。頬に当てると、なんとなく温もりが感じられる気がした。

「…独りにしないで…」

日向が出せた唯一の言葉であった。その言葉に反応したかの様に織紗那の指先が軽く動いた。

そして唇も僅かだが動いた。声にはならなかったが、何を言いたいか彼にはわかった気がした。同時に、織紗那の命の灯は消えた。

「…ご臨終です」

医者最後の言葉が、日向の心をえぐる様に痛め付けた。

『…現実で逢いましょう…』

決して彼女はサヨナラとは言わなかった。自宅に搬送した遺体に寄り添いながら、思い出をひっくり返した。

織紗那の為に買ったウエディングドレスを着せ、あの時の様に綺麗に化粧を施した。まるで、眠っているよう。再生したビデオの向こうでは、彼女は相変わらず笑い、ほほ笑み、日向を呼ぶ。

「…これがもし夢なら…夢ならいいのに…」

枯れた筈の涙が再び溢れ出した。それから何時間経ったのかはわからないが再び涙が枯れる頃、ひっくり返した思い出の中に古びた小さな手鏡を見つけた。それは初めて見つけた様にも感じるし、前からあったようにも感じる。とにかく大切なモノ。

鏡を覗き込むと、そこに自分の姿は映っていなかった。ただ鏡には真っ黒い闇が映っていただけ。日向は気味が悪くなり、思わず鏡を手放した。

鏡は尚も闇だけを映し続ける。

「…変な鏡…」

だが、日向の目は遠巻きにその闇へと釘付けになっていた。

突然、フラッシュバックの様に記憶の一部の様な映像が走った。

…金髪の娘

…無数の青白い腕

…闇へ

……

考えるより早く口を付いて出た。

「…これは…夢…。帰らなきゃ…現実に…帰りたい…」

手放した手鏡を貪る様に引っ掴むと、真っ黒い闇に向かって日向は

叫んだ。

「帰りたい！」

別の涙が、彼の頬を伝う。鏡の向こうから声が聞こえた。

『日向、鏡を割るの。割って』

死んだと思った織紗那の声だ。

彼はためらう事なく目一杯に、鏡を床に叩き付けた。鏡は勢いよく砕け、同時に全てが消えた。

——日向は独り、闇の中に立っていた。

手にした月華丸が、生きてるかののように、怯えているかの様に力タカタと震え出す。

目の前に、日向が現れた。

「何も驚く事もないだろう？それとも、いい男が現れたなどでも思った？俺はお前、お前は俺。よくしってるだろう？」

自分だと言う自分と瓜二つの男は、尚も一人言葉を続けた。

「折角、お前の都合良いだけの世界を作ってやったのに、ばっかじやねーの？現実に戻ったってお前は所詮捨て子の酒猫日向。家族もいなけりゃ、ましてや愛する織紗那にすら振り向いてもらえない惨めな男なんだぜ？」

もう一人の日向はケタケタと笑う。

「…うるさい！家族…くらいいるよ…」

苦し紛れの日向の言葉に、彼は更に笑い転げて言った。

「妖怪やらが家族とでも言いたいワケ！？そりゃ、傑作だわ！！お

前もわかってんだろ？織紗那は月華丸を好きなだけ。織紗那嬢の愛しの王子様は月華丸よ。彼女は溜め息混じりに言うだろうね。”あーあ、日向、日向、アナタは何故月華丸ではないの？”ってな」

「…例えそうだとっても…僕は帰る…」

「ふうん、ま。なんなら俺がお前を月華丸にしてやってもいいんだぜ？」

彼がパチンと指を鳴らすと、今度は全てが平安と化した。

「夢も覚めなきゃ現実よ。後はお前の意思次第…」

日向の月華丸が、もう一人の日向の胸を貫いた。

「……」

「…何してんだ？このバカタレ」

「僕は帰ると言った筈だ」

さっきまで楽しそうに笑い転げていたもう一人の日向の目が、凍て付く様な視線で日向を睨み付けた。

「帰る帰るってガキじゃあるまいに！！」

彼が日向を殴り飛ばした。

「帰りたいきゃ帰ればいいさ！但しここからぬけたらな！！」

そして彼は日向の目の前から消えた。

舞う桜の花びらが、日向の肩にひらりと舞い降りた。

『美しい殿方じゃ』

桜が木霊する。

『わらわが美しいかや？』

見覚えのあるシーン。…もう騙されないと、日向は静かに目を閉じ、ぎゅっと刀を握り締めた。

(…次は…)

振り向きざま、彼は刀を振り落とした。

「!?」

確かな手応え。

真っ赤な返り血が日向を染め、切り捨てられた人物は音もなく地面に倒れ込んだ。みるみるうちに、地面に真っ赤な血溜まりができる。

とどめと言わんばかりにその人物の背後に刀を突き立てた。

「織紗那の姿をしていても、所詮偽りは偽りだ」

突き立てた刀と人物の間から青白い雷の様な電気が走り、瞬間、再び闇に戻ったかと思うと今度は闇が渦を描き出した。

あの時、闇に飲み込まれた時と同じ青白い腕が何本も現れ、日向にしがみつき始めた。

「…!!」

彼がもがく様にして右手を延ばすと、何者かに腕をひっぱられた。

青白い腕のせいで息が止まりそうになったが、気力だけでひっしにもがき、その腕を固く掴み直した。

そして急に身体が軽くなったかと思うと、そのまま目の前が真っ白になり、日向は意識を失ってしまった。

.....

[illegible]

.....

•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

陽太郎が見守る中、3人は闇の中の生命反応へと意識を集中していた。

細くもろい気配をたどっては、消え入りそうになった時に僅かな霊力を注ぎ込むのだ。闇に飲まれない様、闇に気付かれない様。

突然、3人が構えた。きよんとする陽太郎に向かい、険しくも嬉しそうな表情で織紗那はこう告げた。

「日向が帰ってきますよ」

と。陽太郎も再び勾玉を腕にはめた。

それから2分程すると目の前の空間に突如亀裂が走り、あの時と同様に無数の青白い腕が現れたかと思うと、日向のだと思われる人間地味た手の一部が中からぐいっと伸びて見えた。衝動的に陽太郎はその腕を掴んだ。

「!! 日向!? 日向なのか!?!」

返事は得られなかったものの、その手が陽太郎の手を掴み直した為に、陽太郎は一気に引っ張り出した。

反動で、障子をぶち破り、縁側から桜の木の前へと、後ろに立っていたフランススを巻き込んで3人は弾き飛ばされた。瓶のある部屋にはそれに啞然とする織紗那。と「あーあ」と呆れた様に呟くジュリエラだけが残された。

青白い腕が日向を追いかける様に外へと飛び出した為、2人も外へと出た。外には目を回す2人に、なんとか頭を押さえながら立ち上がるとする陽太郎。

「:っ! 今のは効いた!」

彼は体勢を立て直すと、美鏡を構えた。青白い腕はゆっくりと這いはじめ、陽太郎の前に固まると、一つの大きな黒い物体と化した。物体からぼこぼここと気色の悪い目玉が生まれた。思わず吐き気が込み上げてくる。

物体からテレパシーの様な声が生まれた。

『:器を寄越せ:』

低い地響きの様な声に、陽太郎は激しい頭痛を感じた。

「なんだ!?!」

ガクンと倒れ込む陽太郎の前に、ジュリエラが立ちはだかった。両腕を真横に真っ直ぐと伸ばし、彼女は叫んだ。

「アナタの器は私よ! 私を器にすればいいわ!」

:ちなみに彼女はフランス語で叫んだ。

物体は彼女の中へと吸い込まれる様に入って行った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

「椿、魅多寡を殺したの？」

鬼沙那が椿と呼ばれる娘に向かって冷たく問うた。

「否、多分、死んではおりませぬわ」

椿はにっこりと答えた。年は15、16歳程度だろ。引きずる程長い髪に、十二単の着物、唇には年に似合わぬ毒々しい赤い紅が引かれている。

「何故殺さなかった？」

尚もほほ笑みながら、椿は答えた。

「もし酒猫日向が戻ってくる事があったら、私の手が無意味に汚れるだけだからですわ」

鬼沙那が笑った。

その会話を聞いてか聞かぬか、魅多寡の首が転がる様にして2人の前に現れた。

「おのれ！椿！？恥をかかせやがって！！」

「魅多寡、鬼沙那様の前ですわ。私語をつつしみなさい」

「鬼沙那様！どうか、もう1度チャンスを！！酒猫日向は戻ってきました！だから今度こそ、今度こそ酒猫の魂と桜の木を消してごら

ん入れますから！」

必死懇願する魅多寡に、鬼沙那がにっこりとほほ笑んだ。

「あんた、面白いとこまではいったんだけどねえ。失敗は失敗なのよね…さあ、どうしたものかしら…」

魅多寡の歯が、ガチガチと鳴り出した。

「椿、あんたならどうする？」

「答えるまでもないですわ」

「餓鬼、あんたは？」

「椿に同じく」

「だって」

鬼沙那は手の平を魅多寡へとかざした。

「つまり、二度目はないってことネ」

断末魔の様な金切り声…悲鳴と共に、魅多寡の頭部は弾けて消えた。

「椿、次は貴女が行く？」

「嬉しきお言葉ですわ」

（…私が本当に殺してやりたいものは…）

◆温泉へGO!!◆

翌朝、日向は何事もなかったかの様に目を覚ました。自分の部屋ではなく、織紗那の部屋の隣りの客間で。

闇で見た事は未だリアルに彼の中に残っていて、今この現実の方が夢なんではないかと思う。ぶつけたかのように、頭部がずきずきとしている。

日向は徐に起き上がると、居間へと向かった。

居間では、織紗那、戌亥、桜、レディ、クリンストーン兄妹、陽太郎がいて、その中の人間組みだけが朝食を食べていた。

蝶子が「日向く♪」と抱き付いて来た。

「さっさと飯喰っちゃえよ」

おかわりと蛇老に空の茶碗を差し出しながら、陽太郎が日向に告げた。

「…あ、ああ…」

すどん、と空いていた織紗那の横に腰掛けた。

彼は彼女をチラリと目配せするが、気付いてもらえぬまま目の前に朝食が並べられた。

織紗那は入れ替わる様に朝食を食べ終わると、一人部屋へと戻って行った。

今度は日向が食べ終わると、それを見て陽太郎が玄関で待っててやるから急いで支度してこいよと言い、席を立った。

そういえば今日は学校だったかと、日向は支度をと部屋に戻った。支度を済ませると、彼は手の平程度の紙飛行機を簡単に作った。玄関へ向かう前に、織紗那の部屋の前で一度立ち止まる。

「…織紗那…」

いつかあった光景、また再び繰り返している様に思えた。

「開けるよ」

少しだけ障子を開いた。

「はい」

織紗那がかしこまった様に返事をした。先程部屋で作った紙飛行機を織紗那へと飛ばしながら、「行ってくるね」と言い障子を閉めた。
「……」

彼女は紙飛行機を手にとると、ちょっとだけ開いてみた。紙飛行機の出ていた紙の真ん中に添えられていたのは“ごめん”の3文字。思わずクスリと笑い、再び折り目に沿って紙飛行機を元の形へと戻すと、日向の閉めた障子に向かって飛ばした。

紙飛行機は障子に当たり、パサリと落下した。

.....

.....

.....

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

学校に着いて早々いつもの様に軽音部の部室に立ち寄った。

たいして日も経っていない筈なのに、やたら久々に感じる。部室では既に他の部員等やメンバーが、わらわらと集まってパソコンを覗き込んでいた。

「何してんの？」

誰に…と言う訳でもなく、日向は集まりに向かって声をかけた。

すぐ前にいたヴォーカルが、振り向きがてら日向を集まりに招き入れた。

「ああ、この前、酒猫が入院してた時のライブの映像出来たから見てんだ。川本がDVDにしてくれたから」

川本とは映像サークルの後輩で、余程の用事がない限りライブ映像を趣味も兼ねていつも納めてくれている。

「へえ…本当悪かったな。結局うちのバンドは出たの？」

「出たよ。代わりに鳥居川が出た」

「え？陽太郎が??？」

驚いてパソコンを覗き込むが、そこには全く別のバンドが映っていた。

「あのう…」

川本が遠慮がちに日向に顔を向けた。

「酒猫先輩の分も焼いておきましようか？」

「ああ、頼むよ」

「じゃあ、帰りに映像部によってもらっていいですか？」

「わかった。ところで次のライブは決まった？」

ヴォーカルが答えた。

「来月の3日」

「了解」

日向は一人だかりから抜けると、ギターをセッティングした。するとベースが日向に告げた。

「ちよつとうるさいから音出さないで」

「……」

ギターは繋げたままアンプのスイッチだ切って、スタンドに立て掛けた。

「なあ」

ふとヴォーカルが口を開く。

「鳥居川、バンド入んねーかな？」

「え？」

「あいつ、お前とそんなにレベル変わんねーぞ。そりゃ、お前のが上手いのは認めるけど…うん、かなり上手いよ。な？」

その場にいた全員が頷いた。

「…あいつ、僕とやるの嫌がるからな…」

ベースが言った。

「ギターじゃなくて、ベースは？」

「お前はどうすんだよ？」

と日向。

「中河のとのバンドのベースが丁度辞めるらしいから、そっち移るよ」

中河とは、軽音部の日向のバンドとは別のバンドのヴォーカルだ。

「…ううん…難しいと思うよ？あいつ、ボクシング命だし」

「この前だって急だったのに完璧に近かったし、そんなに練習いらないと思うんだよな。聞くだけ聞いてみてよ」

「ううん…聞くだけねえ…」

日向は大きく溜め息を吐いた。

部室を出て教室へ向かうと、丁度陽太郎と泉とばかり会った。言いにくそうにしながらも、日向は話題を選んで陽太郎に話かけた。

…取りあえず、ライブの件の礼を言わなければと、本来気を使うような間柄でもないくせに妙に顔色が気になる。

なあ、なんて言っときながら、何？と振り向いた5センチばかり高い彼の顔を見上げて溜め息を吐いた。

「え？何？？」

「…いいや、後で話すよ。取りあえず講義」

「？？？」

陽太郎と泉は不思議そうに顔を見合わせて呟いた。

「変な奴」

…妙に照れて言い出しにくい。

いきなりベースやってよ、と頼むのは普段拒否られている分もつと言いつらい。日向はどうしたもんかと頭を抱えた。

…少しづつ…ほんの少しづつ…記憶は呼び起こされる。それはなんの前触れもなく、突然に。

寿永3年。

戦場から忽然と姿を消した月影の遺体が見つかったと聞き、慌てて馬を走らせた。

屋敷には多くの悲しみに涙流す者達と、抜け殻の様に泣き崩れる月影の妻、春宮がいた。

春宮は美鏡の存在に気付くと、益々涙を流した。

「…美…鏡…さま…」

「春宮殿、月影は？この酷い臭いは一体？」

聞かずとも、予想はついていた。

「…月影…様の…遺体は、腐敗が酷くて…野良犬や、鳥に…つつかれて…。お美しかった面影も…ありません…」

美鏡はぺたりとその場に崩れ込んだ。

「…どこかで…生きてる…のでは、と…思っ…て…いました…」

美鏡の目から涙が溢れ出た。全身がガタガタと震え出す。

「…春宮殿。俺も遣いを走らせ探させたが、遺体はどこにもないと聞いた。近くの林にもおらんんだ。だからくの村人に救われたのではないかと思っ…ていたんだ」

「止どめに…心の臓を刺されています。それに…見つかったとき、縄で…縛られて…おり…ました…。遺体は…投げ捨てられていた…ん…です…」

「…敵に捕まったんだな…。恐らく、責め苦にも口を割らなかったんだろ」

「…多分…」

…それは単なる憶測でしかなかった。

『傷は浅い、だから死ぬな』

浅い筈がない。自分を庇って、月影は切り伏せられた。辛うじて息をしているんじゃないかと思う。汗と血とが地面にぼたぼたと流れ落ちる。

敵の方が優勢だった。月影を抱えて走る美鏡の足は遅い。

『…美鏡…、お前だけ逃げろ…約束したろ？』

『馬鹿野郎！死んでもないのに死んだと言えるか！！第一、お前はまだ死んじやいない』

『美鏡…どのみち…俺は…もう助からんよ』

最後の力か、月影は美鏡を突き飛ばした。そして、その勢いで地面に崩れ落ちた。

慌てて近寄ろうとする美鏡に、月影は怒鳴りつけた。

『行け！俺に構うな！お前だけでも生きろ！俺の分まで…』

…できるわけないだろう？と言葉に出かけた時、敵が美鏡に気が付き追って来た。

やむなく彼は、泣く泣く月影を残してその場から走り去るしかなかった。

「…何故…助けて…くれなかったの…？」

春宮が美鏡を涙ながらに見上げた。

「…私の…愛する人…何故に…守って…くれなかったの？」

…愛する人…。

美鏡は春宮に深々と頭を下げた。

「…春宮殿…本来は俺が死ぬべきだったのだ。だが月影は言った。

“俺の分までお前が生きろ”と。だから俺は死ぬ訳にはいかん。だが、殴ってくれ！好きなのだ」

頭を下げる美鏡に覆い被さるようにして春宮は泣いた。

「…出来る訳…ないわ…」

葬儀。月影を包みながらメラメラと燃え上がる炎を喻えるなら、それは地獄の炎であろうか。

春宮は一度も月影に抱かれる事なく、否、むしろ愛を囁かれる事すらなかった。

それでも彼女は彼を愛し、慕っていた。

跡継ぎが出来ないと白い目で非難を浴びせられようとも、耐えられたのは愛するがゆえ。織紗那の存在など知るどころか、疑う事すら知らなかった。それなのに…

翌朝、まだ霧も張れぬ早朝に美鏡は屋敷を出た。

同時刻、春宮は丁度美鏡の屋敷に着き、出掛けようとする美鏡を見掛けた。話しかけようとしたが、ある種の好奇心に押され、彼女は彼の後をつける事にした。

馬はさほど急いでる風でもなく、その上蹄の音に下駄の音が書き消されたため、徒歩の春宮にも易々と後をつける事が出来た。

暫く歩き、着いた所は巷でも有名な化け物屋敷。時期でもないのに狂ったかのように桜は咲き乱れ、あまつさえ子供の笑い声も聞こえて来る。

（美鏡様、もののけに取り憑かれてしまったの？）

春宮はガクガクとする膝を落ち着かせるよう壁に身体を押しつけ、息を飲んで様子を伺った。辛うじて声が聞き取れた。

「…美鏡様：よろしければ、お上がりになって」
女の声がした。

「…織紗那殿、ここで結構でございます」

美鏡のかしこまった声が聞こえた。

「…月影こと月華丸ですが…」

女の声が美鏡と重なる。

「帰ってみえたの！？帰って見えたなら…今直ぐ…会いたい…」

…会いたい????

今度は春宮の唇が、ガタガタと震え始めた。

「…愛して…いるのです…。例え望まない結婚により夫がいたとしても…あの方に…奥方が見えても。お願い美鏡様、月華丸様に逢わせてください」

懇願する女に、美鏡は泣き崩れながら謝った。

「織紗那殿、申し訳ない！月影は…月華丸は…死にました…」

「……」

「ただ、愛する織紗那殿の事だけ、最後まで気にかけておりました。最後に伝えてくれと頼まれた言葉を、伝えに…来ました」
女が泣き崩れた。

最後まで、聞けなかった…。

真っ青な顔で、春宮は走り出した。

夕方、美鏡は春宮の遣いに呼ばれて屋敷を訪れた。部屋では、真っ青な顔に絶望に打ちひしがれる春宮が横たわっていた。遣いによると、今朝方春宮が橋から身投げしたとのこと。運が良いのか悪いのか、近くを通り掛かった村人に救われたそうだ。

「春宮殿、後を追う様な真似をしても、月影は喜ばぬぞ」

宥める様に、美鏡が呟いた。彼の顔もまた、悲しみに溢れていた。虚ろな目で春宮は呟く。

「それは…織紗那とか言う娘がいるからか？後を追うなら…私より織紗那のが良いと言う事か？」

「……」

美鏡の心臓が踊り出す。

「…何故に…何故教^{なぜ}えてくれなんだ…？皆知^{なにゆえ}っていたんだ…。独り想う私を…皆馬鹿にしていたんだ…」

春宮が横たわったまま泣き出した。

「月影様は…私を抱いてくださらんかった…ましてや、愛の言葉すら囁いてくださらんかった…。夫婦とは名ばかり…だけでも…私は愛していたから…我慢できたんです…。いつか…愛してくださると…信じていたから…」

…言葉が見つからない。

「…あの娘は化け物屋敷に住む娘じゃ…。月影様は、もののけにたぶらかされた…」

「違う！織紗那殿はもののけではない」

慌てて否定する美鏡を、春宮が凍て付く様な目で睨み付けた。

「やはり、美鏡様も…」

「え？」

瞬間、使用人数名に美鏡は取り押さえられた。

「春宮殿？」

春宮は布団から起き上がって叫んだ。

「皆の者！化け物退治に行くのじゃ…！」

美鏡はされるがまま、使用人に引き連れた。

「春宮殿！春宮殿！」

もはや、凍り付いた彼女には美鏡の声はとどかなかった。

春宮を先頭に、織紗那の屋敷に辿り着くと、彼女の掛け声で使用

人達は屋敷に火を放った。

「春宮殿！止めるんだ！止めさせてくれ！！」

美鏡の叫びは春宮には届かない。

「月影様をたぶらかし、美鏡様を惑わす妖怪め！燃えて…燃えてしまえ…！骨も残らぬ様、燃えてなくなってしまう方がいい…！」

春宮は笑った。

春宮こそ、取り憑かれているのではないかと思えるくらいに…。

「何もかも…燃えてしまえ」

だが

美鏡は見た。

「…化け物だ…」

見開いたその目に焼き付けるがごとし。

惨劇の一部始終を。

全てはなくなり

美鏡だけが、残った。

「…炎が…龍に…」



「…ろう…」

「……」

「おい！陽太郎！！」

夢から覚める様に、はっとした。

声の主は日向。

「気分でも悪いのか？」

「あ！否、少しぼーっとしてただけ」

「あ、そう」

興味なさそうに返事を返した日向に割って、今度は泉が話を振った。

「あのさ、民宿やってるお婆さんがさ、手伝い足りないから誰か来て欲しいって言うんだよ。といっても、5日間だけ丁度人が抜けてって事なんだって。無事の進級祝いも兼ねて、御馳走も用意してくれるみたいだし。タダで温泉旅行なんて滅多にないからどうかかって日向と話してたんだけど…聞いてないだろう？」

珍しくも乗り気じゃない、というか、どこことなく上の空な陽太郎を心配しつつも呆れながら泉がぼやいた。

「なあ？」

「あ？ああ…。いいんでない？ちよっとコーヒー買ってくるよ」

「……」

日向と泉は顔を見合わせてハモった。

「重傷だわ」

暫くして、陽太郎が戻ってきた。

彼は買ったばかりの缶を開けると、一口飲んでから吹き出した。明らかに、何かに動揺している。缶のラベルを見ると、コーヒーを買ったつもりなのに“おしるこ”と書かれていた。

彼は大きく溜め息を吐くと、しるこ缶を日向に渡した。

「やる。俺、今日帰るわ」

いつものノリと全く違う陽太郎を、2人は引き止める事が出来なかった。

全ては終わった事だ。今更気に掛ける必要は全く持って、ない。しかしそれは、“記憶”という形で彼を彼等を苦しめる。だから自分はここにいるのだと、自分が日向を守らなければならないのだと。それは“償い”以外の何でもなかった。

学校が終わると、日向は映像部に寄ってDVDを受け取り、そのまま帰宅した。家に着くと、早速自室のパソコンでDVDを再生した。

画面の向こうでは、ジェラシーを抱いてしまう程ハマる陽太郎の姿があった。

「…なんで…」

思わず不満が洩れる。

携帯を手にとると、衝動的な不満要素と取りあえず大丈夫かというメールを陽太郎に送りつけた。が、返事は得られずに益々ジェラシーは悶々として、彼の中に渦巻いた。

確かに高校2年になってからの暫くは、陽太郎がサイドギターを奏で、自分がメインギターとしてバンドを盛り上げていた。

陽太郎はサイドギターが嫌なのか？なら自分がサイドに周っても…まあ、時々ならいいやとまで思っている。

バンドを止めてからは、例えセッションであっても“嫌だ”の一点張り。それがどうだ、日向でなければ自分から演奏しているではないか。

「だああー！！」

訳分かんないと雄叫びを上げると、日向はベッドに倒れ込んだ。メールが入る。陽太郎かと思いいくと、それは泉からだった。

『来週の木々月曜の間で、8人くらいまでなら良いらしい。多ければ多い方が助かるって（へーへ）V』

民宿の件だ。

ふと考える。

：日向、泉、陽太郎、織紗那、レディ、蝶子：あとは：前回のボードの後、桜にめっちゃくちや怒られたのを思い出した。思わず鳥肌が立つ。（：桜と戌亥でいつか：）人相が悪いので、蛇老は却下した。『了解』とだけメールを返した。

あれから、少なからず陽太郎と距離を感じる。

何故だかわからないのだが、雰囲気的に。電話もメールもそっけないし、朝飯にすら来なくなった。学校で会っても、どこかよそよそしく感じる。

泉が喧嘩でもしたのか？と尋ねてはきたが、思い当たる節がないため、日向は首を左右に振った。

今度は泉が陽太郎に民宿には行けるかと尋ねると、彼はうんと首を縦に振るのだった。

どう考えても、陽太郎が日向をあからさまに避けている様にしか思えない。そんなお互いがぎこちないままとうとう民宿旅行当日を迎えた。

織紗那の横にはピッタリと桜：あの夜以来、取りあえず紙飛行機で謝ってはみたものの、こちらもどことなくよそよそしさを残してはいた。

なんだか、折角の温泉旅行なのに面白味にかける。

織紗那に関しては自分が悪いのだが、陽太郎に関しては全くもって謎。思わず深い溜め息を吐いたら、泉に背中をバシン！と叩かれた。彼なりに雰囲気を読んで気を遣っているのだ。

織紗那は桜と陽太郎はレディと、泉は蝶子と、そして残るは戌亥：。日向は戌亥をチラ見して、心底彼がいて良かったと思った。でなきゃ、日向独りぼっち。悲しすぎる。

：しかし、何を話したらよいかイマイチ話題もない。皆がわいわ

いする中、一人ぼつねんと座っているのも嫌だったから、日向が運転手をかって出た。

泉カー（ワゴン）には最新ナビが付いているから、運転は楽だった。

高速で約2時間程飛ばして目的地についた。

白樺の木の道を抜けると、少しばかり勢いの強い川がある。川沿いに民宿はあった。小鳥の鳴声と川のせせらぎ、澄み切った空気が肺一杯をみたす。

車を停めると、和服のお女将さんが笑顔で迎えてくれた。

「海ちゃん、遠いところからありがとうねえ。あれま、べっぴんしゃんや男前ばかりでないの」

お女将さんは、泉の手を握りながらそう言った。そしてすぐ御一行に頭を深々と下げて挨拶をした。

「私、海斗の叔母の美千代みちよといいます。いつも海斗がお世話になっております。泉旅館の女将をしています。皆様には明日からお手伝いをお願いしようと思ってますから、今日一日はゆっくりしてってください」

年は45歳くらい、ふわっと流れる髪をお団子にバックで結い上げ、口許に黒子を携えたえらく上品で綺麗な風貌だ。

「こちらこそ、よろしくお願い致します」

織紗那が深々と頭を下げた。続いて一同が“お願いします”と頭を下げた。

「それじゃあ、お部屋に案内しますね。今日は客間、明日からは従業員室でお願いね」

お女将さんがそう言うと、奥からおじさん従業員がやってきて、荷物を運びながら一同を案内始めた。皆が移動を始めた時、

「：ちよつと、海ちゃん？」

とお女将さんが泉を呼んだ。少し離れて何やら簡単な話をすると、彼は普通に戻ってきた。

「どうしたの？」

日向が聞くと泉は「宴会の打ち合わせ」とだけ答えた。

泉旅館は、少し変わった内装をしていた。外観は京都の旅籠をイメージさせるのに対し、内観は和風とも洋風とも言い難いデザインをしている。

中でも巨大で見事なまでの浮世絵と、迫力のあるシャンデリア、床は畳張りで壁には電気製の燭台が飾られているフロアは、衝動的だった。

あまりに気になった為、日向が泉について聞いてみる。

「泉…、ここ普通に泊まるといくらくらいすんの？」

泉は日向の背中をバシン！と思いつき叩いた。思わずむせかえる。

「ディ○ニールンドくらいじゃない？ 気にすんなくて、金かかんないけど給料も出ないから」

「……」

複雑な回答だ。

部屋は案の定隣り同士で男部屋と女部屋に分かれた。

朝から挨拶のみで、まだ陽太郎とともに口を利いてはいない。

陽太郎が避けるから、別段日向は避けていなくとも何やら話かけ辛い。

陽太郎とは17年間一緒にいたが、こんな事初めてだった。泉も陽太郎を3年間見て来て、こんなにテンション低い様子は4年目にして初めてだった。

「…戌亥…一緒に温泉でも行かない？」

居心地の悪い空気に耐えられなくなつて、日向が戌亥を誘い出す。

「ああ」

と2人が部屋を後にしてから、泉が陽太郎に問い掛けた。

「…なあ、陽太郎。喧嘩してんの？」

「してないよ」

「じゃあ、なんで避けてるの？」

「誰を？」

「日向を」

「避けてないよ」

「うそ」

「ただ…」

「ただ？」

「…なんでもない。氣い遣わせて悪い」

「……」

——ただ…、日向、もとい月影への罪悪感が亡霊の様に陽太郎を苦しめ続ける…。

更に、残酷なまでの記憶は続く。



暗く、かび臭い牢獄に美鏡は投げ込まれた。

罪は『月影の妻春宮を始めとする、一族皆殺しの罪』。

良くて流罪、悪くすれば死刑。

京は崇りを恐れ、酒猫家を罪に問うことは出来なかった。代わりにその場に居合わせた美鏡へと、罪を擦りつけた。

幸い真実を知るものはいない。仮にいたとしても、反対する者はいなかった。

誰もが崇りを恐れ、自分だけには飛び火が来ぬようにと災い事は極力避けた。

美鏡自身も、織紗那に飛び火を与えぬ様にと口を噤んだ為、暗黙の了解だと“有罪”の2文字を背負う事になった。

薄暗い牢獄の中で美鏡は思った。

：月影も同じような目にあつたのかと。否、彼の方がもっと悲惨だったのかもしれないと。

考えれば考える程、涙が止まらなかった。

留置されて3日後、“死罪”だと役人が告げにきた。どうやら酒猫家と関わった者は、生かしておきたくないようだ。

役人は、あの場に居合わせたのが運の尽きだったなど、そっけなく言い放った。見てはいけないものを見た、止められなかった災いの“炎”の代償は余りにも大きく、残酷であった。

『俺の分まで生きろ！』そう残した故の思いも、答えようとした己の思いも、全てをいとも簡単に打ち砕いたのだった。

「…すまない…」

何度も呟いた言葉であった。それしか、その言葉しか知らないよう

に、尚も呟いた。

牢獄の中で美鏡は一通の手紙を認めた。それは役人によって確認されたが、内容に酒猫家の事柄がなかったため、彼の希望通り妻へと託された。

『ありがとう、そしてすまなかった。幸せになれ。強く生きろ』

そんな内容であった。

その日以来、妻は美鏡の屋敷から姿を消した。一説によれば、尼になったとも聞く。が、真実を知る者はいないし、今となってはわからない。ただ、彼の遺体を取りに来た尼が、よく似ていた事からそう噂されたようであった。

美鏡は届くか届かないかわからない手紙を役人に渡すと、ただただ届く事だけを祈り、口を噤んだまま静かに両手を合わせた。

(…月影…今行くぞ。また、酒でも共に吞もう…。早くにお前の元に行き過ぎて、きっとお前は怒るであろうけど。否、呆れるだろうか? まあ、どちらでもいい。また、共に酒が呑みたい)

人の一生とはあつけないものだ。人が人を裁き、人の生死までもが人によって決まる。なんたる傲慢、なんたる愚かさ。

薄っぺらい布切れによって視界は閉ざされ、美鏡はゆらめく一筋の鉄によってその首を切り落とされた。その場を染め上げた赤を見、これが“血の池地獄”なんだと誰もが思った。

戌亥を温泉に誘ったは良いが、やはり話題もなく、再び気まずい気分になった。

黙って湯船に浸かっていたら、戌亥の方から話しかけて来た。

「裸の付き合いはいいもんだ。日本人で良かったな」

彼の逞しい体付きを見て、日向はちよつとばかり貧弱な自分が恥ずかしくなった。

「日向殿は、どう思う？」

「…よくわかんないです」

戌亥は笑いながら言った。

「まだ、若いからな」

「……」

たまたま時間が早いせいか、戌亥と日向以外誰もいない。

温泉は内風呂が洋館風、露天風呂は日本庭園をイメージした作りになっていて、2人とも真っ先に露天風呂に入った。

やはり日本人だからか、日本風がやたらに落ち着く。ちなみに、

宿泊中の客間は、畳張りの純日本風である。

綺麗に施された庭園造りをぼーっと眺めながら、ふと日向が戌亥に問い掛けた。

「戌亥は、人間に恋したことあるの？ 仲の良かった友達に、突然突き放された事はある？」

その質問に戌亥は苦笑した。

「日向殿、拙者は確かに犬の式神だ。だがな、初めからそうだった訳ではないんだ。拙者は元々は人間だったのだよ」

「え？」

「もちろん、共に学んだ友もいた。戦った仲間もいた。愛したおなごもな。女心はわからんもんだ。800年以上生きて来たが、未だに解らん。そういった点では、日向殿の方が師匠かもしれぬな」
戌亥が大袈裟に笑った。

「…そんな事ないと思う…。どうでもいい子なら簡単なんだ。ただ笑って、優しくして、少しマメにメールとかしたらそれでいいもん。それで退屈はさなくなるし、寂しさもなくなる。代わり虚しさで煩わしさが生まれて…あとは、どうでもいいから気付けばなくなったりする」

「では、本当に大切な人の時はどうするんだ？」

「…わからない。出会った事…なかったから…。けど、出会って気付いた時、全てが真っ白になって、何もかもが無くなった様な気がした」

日向が湯船に隠れる様、口まで浸かった。

「…大切だと思うと、そこに“恐怖”が生まれる。どんなに修行しても、その恐怖だけはなくなんと思うんだ。恐怖は人を弱くする。だがな、反面“大切”な気持ちは絆を生む。絆は、人を強くする」

「…絆…」

「そうだ。日向殿は考えた事はないか？何故、自分は血の繋がりもないのに、酒猫家にいる？何故、陽太郎殿がお主の近くにいつもいるのだ？不思議に思わぬか？人の想いとは強いぞ」

「…想い…」

「陽太郎殿は美鏡殿と戦っているだろう。さすれば、助けてやれるのは一人しかおるまいて。人の気持ちなんぞ、言葉にせねば伝わらんもんだ。特に、付き合いが長ければ長い程に、言葉を失う分いざと言う時必要になると言う事だ」

日向が勢いよく湯から立ち上がった。

「戌亥、ありがとう！」

そういうと、日向は走り出した。

「日向殿、温泉はすべ…」

いい終わる前に、日向はぬるっとした湯に滑って扉に激突した。が、再びありがとうと言いながら、露天風呂飛び出して行った。

「…面白いやつだ…」

一人残された戌亥は、苦笑なんだか失笑なんだかわからない笑み

を零しながら、そう洩らした。
「二人もいいもんだ」

◆大神様◆戌亥編◆

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

1184年、寿永3年2月6日。後白河法皇の近臣、修理権大夫しゅりこんだゆうから、平家に使者が送られた。

持参された手紙の内容は『源平の和平の件でそちらに向かうので、交渉が終わるまで一切の戦闘行為をしないように。この事は関東武士（源氏）にも伝えてあるので、平氏も徹底する事』であった。

翌日7日、摂津国一ノ谷（神戸市）にて、停戦命令を律義に信じた平氏は武装を解除。そこへ源義経が奇襲をかけ、平氏側約1000余人余りが死去。

続いて重衡は捕虜、忠度以下、経正、経俊、敦盛など多くの一門が討たれた。

その少し前、木曾義仲を攻め入った源義経の噂が平氏の仲で広まり始めた。

少しでも高い戦力をと、巷でも剣の達人として名高かった月影、美鏡の2人が強制的に参戦させられた。しかし、かねてより平家を討伐したいと考えていた後白河法皇の企みにより、奇襲という形で虚しく終わった。

それをきっかけに、平家は更なる滅亡へと進んで行ったのだった。

その更に以前、詳しい年号はわからないが、どのくらい昔かというと100年くらい前の話。

一人の男の子が、覆い被さる母の身体を退けて、ゆっくり起き上がった。一部始終その目に焼き付けたから、今更揺さぶり、母の名を呼ぶ事も考えなかった。

一匹の子犬が、母の血を舐めた。

「お前も一人？」

子犬は少年を見上げ、きょんとだけ鳴いた。

少年は子犬を抱き抱えると、周りを見渡した。大人の犬が死んでいた。

「あれが、お前の母さんか？」

子犬は、再びきょんと鳴いた。

「お前の母さんも、俺の母さんも、あいつに殺されたんだ。一緒に強くなるのか？」

こんな時代だ。弱い者は殺されても仕方ないと思った。

母を串刺しにした刀は幸い少年の脇腹を掠めただけ。切った男は少年も切ったと思い込み、ご満悦にその場を立ち去った。

犬も、母も同じだった。憂さ晴らし、ただそれだけの為に死んだ。

「俺の名は巳太^{みた}。お前の名前は：そうだな、戌亥^{いぬい}だ。強そうな名だろ」

戌亥はきょんきょんと鳴いた。

.....

.....

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・

強くなりたい、と願った少年は、ある貴族の屋敷に雇って貰える事になった。給料はないが、代わる屋根のある寝床と、例え粗末で食べ物と呼ぶには忍びない残飯であつても口に入るそれがある事は、ありがたいと思えた。

そして何より強くなる為の拷問に近い修行は、巳太の心を強く燃やした。

――強くなる。誰よりも強くなる。

主人は、誰よりも強くなって家に遣えろといった。巳太も“御意”と答えた。強くなれば、なんでも良かった。

屋敷に遣えると、巳太に“親友”と呼べる友達ができた。年は巳太より5つも上で、巳太が憧れるくらい強かった。

その親友も巳太が13になる頃戦に行き、そのまま帰ってこなかった。師と呼べる様な人がいた訳でもなかったから、敢えて師と言うならば、その親友の事なんだろう。

けど、その親友も死んだんだと理解した。だからもつと強くならなければいけないと思った。

巳太の親友は、戌亥しかいなくなった。巳太と苦楽を共にした戌亥も、彼と共に強くなった。

巳太が14になった春の昼。戌亥が巳太に、櫛を啜えて来た。

「戌亥、これどうした？」

戌亥は巳太を、桜の木の根元に案内した。戌亥が木の根元に腰かけ、ご機嫌にもワン！と鳴いたら、屋敷の影から女の子が一人顔を出した。

錦の衣を纏った、可愛らしい少女であった。巳太は少女に櫛を差し出し

「これ、あんたの？」

と聞いた。少女は怯える様に近寄ると、櫛を受け取った。

「あ、ありがとう」

少女は戌亥を見下ろした。

「…こいつは戌亥。賢いから、何もしないよ」

戌亥は嬉しそうに、少女にワン！と鳴いた。少女は驚いて、尻餅を付いた。

巳太が手を差し出した。

「俺は巳太。犬は初めて？怖い？」

少女はその手に掴まると

「…怖い…」

と洩らした。

「戌亥、わんこ踊りだ」

「？」

巳太は少女を立たすと、きょとんとする少女を尻目に手拍子を取り出した。すると、それに合わせて戌亥が立ち上がった。

戌亥は腰を前後に揺らしながら、前足だけ空で犬掻きをする様に左右に腰を振っては踊った。その姿が余りに滑稽で余りに面白く、余りに間抜けだったから、少女は思わず声を上げて笑った。

お腹が痛くなるくらい笑っていた。笑っていたら「椿！？」と、屋敷の影の向こう側から主人の声がした。少女は、はっとして走り出した。

「…明日…またここで…」

(…椿…)
つばき

巳太は、昔から理解をするのが早い。

それは母を殺された時にも感じた。

だから無駄な事をして、考えて、精神を乱さない様にしようとの
日決めた“教訓”の一つであった。

(…主人の娘か…)

二度と出会ってはいけない、最も関わってはいけないと理解した。



翌日、巳太は桜の木の根元に行かなかった。代わり、翌々日の朝寄ってみると、根元に和紙の包みが置いてあった。

何かと思い開いてみると、黒く長細い甘い匂いのするものが何本か包まれてあった。試しに舐めてみたら、今まで口にした事もない、甘く香ばしい味がした。だから巳太は、それを桜の木の根元に埋めた。

毎朝行うロードワークを終えて戻ると、朝食の粗末な残飯を口にした。

…案の定吐き気がしたので、ムリヤリ白湯で流し込んだ。

午前のトレーニングを終えた頃、戌亥がまた櫛を啜えてきた。巳太は大きく溜め息を吐いたが、仕方なく戌亥の頭を撫でると再び桜の木へ出向いた。

やはり、少女が待っていた。

「……」

巳太は無言で少女に櫛を渡すと、直ぐにその場を去ろうとした。

そんな巳太の腕を、少女はしかと握り締めた。

「…巳太、なんで昨日来てくれなかったの？」

少年は少しだけ嘘を吐いた。

「俺はお前を知らないし、約束した覚えもないし、俺は主人にしか会ってはいけないからだ」

少女は巳太の腕を離した。

去り行く巳太の背に、少女は言葉を投げ掛けた。

「私は椿。年は10（とお）になります」

椿は木の根元に、昨日と同じ様な和紙の包みを置いた。

「唐菓子、甘くて美味しいから。また食べてくださいね。明日もまたここに来て、唐菓子を持って来ますね」

巳太は何も言わなかった。

それから毎日、椿は唐菓子を桜の木の根元に置いた。雨の日は濡れない様木にくくり付けた。巳太は毎朝、それを埋めた。

それから15になった頃、巳太は主人に呼ばれた。用のある時は、いつもなら使用人が告げにくる。だから巳太は戦の話なんだと思った。

綺麗な畳の部屋に、巳太は座って頭を下げた。

「巳太、お主はどのくらい強くなった？」

巳太は答えた。

「相手がおらぬゆえ、私にはわかりません」

主人は言う。

「よかろう。ならはこの屋敷に権滋郎ごんじろうという、武道に長けた使用人がいる。権滋郎は京でも壱弍を誇る腕を持っている。手合わせしてみろ」

「御意」

巳太は庭に出た。権滋郎が竹の棒を手到庭に出た。身体は大きくガッシリとしていて、人相は悪い。権滋郎は言った。

「貴様の獲物は？」

「手合わせだから、素手で十分」

「ガキが！」

権滋郎は竹の棒を、プロペラのようにブンブン回した。回しながら棒の先は狙いを外す事無く巳太に飛んだ。目にも止まらぬ高速連打の突きを、巳太は冷めた表情でゆらりと全て交わした。

やがて権滋郎が疲れたのか動きがスローになり始めた。構わず巳太はゆらりとゆらりと交わすだけ。

「逃げてばかりでは勝負はつかんぞ！」

権滋郎が叫ぶと、巳太の姿が一瞬にして消えた。

「!？」

権滋郎が動揺して手を止めた時、巳太が権滋郎が伸ばす竹の棒の端に舞い降りた。ずしりと重みを感じられた時、主人が手を叩いた。

「巳太、強くなったな」

巳太は頭を下げた。

「権滋郎も見事であった」

彼も頭を下げた。

「前へ」

と主人が言うと、側にいた使用人の男が巳太の前に黒い服と脇差しを置いた。

「巳太、そなたの元服祝いじゃ。今日からそなたは立派な使用人じゃ。こんな時代じゃ、暗殺者や密偵から守る役目を遣わすぞ」

「ありがたきお言葉」

巳太は心から、頭を下げた。

「ゆえに、巳太の名前なんだが…」

主人が言葉が続けようとした時、彼は言葉を挟んだ。

「…私、否、拙者、死ぬまで“巳太”で結構でございます」

巳太が“巳太”である限り、彼は強くなり続ける。

「わかった」

今度は主人が、隣り部屋の襖を開けた。薄手の布が、姿を遮る。

向こうから巳太は見えるが、巳太から向こうはみえない。それでも女性が2人いるという面影はわかった。

「妻の硝香しょうかと愛娘の椿じゃ。この二人は命を掛けても守っておくれ。もちろん私も…」

（…椿…）

——あれから一年…。

未だに唐菓子¹は添えられている。

「…命に代えてもお守り致します」

巳太は姿を改めると、あの桜の木を訪れた。やはり、和紙に包まれた唐菓子が置かれてあった。

「……」

巳太は、初めてそれを食べた。以前舐めた時より、食べて見れば何

百倍も美味しい事がわかった。

もう一つ口に含んだ。カリカリした食感も、美味しかった。

「…やっど…食べてくださいましたね」

「!？」

振り向くと、そこには椿が立っていた。目にうつすらと涙を浮かべているものの、何より嬉しそうにほほ笑んでいた。

「…巳太、元服おめでとう。もう唐菓子は置いておかないけれど、食べたくなったらいつでも私の前に来てくださいね」

「…椿殿…」

それは巳太の正直な感想であった。

「綺麗になりましたな」

そう言って、巳太は彼女の前から姿を消した。

待ってと手を伸ばしはしたが声に出せず、高鳴る胸を押さえて椿は手を戻した。

「…巳太…」

一目会いたいと思っていた。

会ってほくれぬから、会えぬというから椿は毎日唐菓子を置いた。

それが所詮捨てられていたとしても、巳太がそれに気付きそれを触っているという事が、彼女にとっては重要であった。

毎日毎日唐菓子を運びながら、巳太とはどんな性格なんだろうとか、何が好きなんだろうとか考えるのが楽しかった。

いつしか夢見る乙女は、想像だけで塗り固められた巳太に恋い焦がれる様になっていた。



それ以来、変わった事と言えば、椿が毎日の様に桜の木の下にて巳太を呼び出す様になった事。

巳太も椿を主人と、忠実に仕えた。それから、残飯だった飯が食事と呼べる物になった事、給料が少なからず入る様になった事、ゆっくりと寝る時間が無くなった事だ。

いつも眠りは浅く、軒下や天井裏にて常に主人の周りを観察しなければならなかった。曲者が現れれば直ぐに斬れる様、どんな些細な物音や気配にでも敏感に反応した。

戌亥も屋敷の玄関や庭を四六時中見張り、怪しい者が近付けばワン！と吠えて忠実に働いた。

「巳太っ！」

いつもの様に、椿が呼ぶ。

「はい！」

椿の前に、巳太が現れた。

「ねえ、巳太は“恋”をした事がありますか？」

「は？」

突然の質問に、思わず疑問符が飛ぶ。

「歯ではないです。恋です。男女の燃える様な熱き想いです」

「…はあ…？」

彼は、どう返して良いのか解らない。

更に椿は続ける。

「巳太は、私の事がお嫌いですか？」

「いえ、とんでもありません」

「なら、私に“恋文”を書いてくださいな！胸が締め付けられる様な熱い恋文がいいわ」

「……」

ぽかーん…とした。

椿11歳、只今青春真っ盛り！乙女色満開！！

「…椿殿」

ぽかんと開いた口を塞ぐ様、巳太はなんとか言葉を続けた。

「拙者は教養がない故、字というモノを知りません。それに、恋文とは熱き想いを持つ者が想いを寄せる者へ送るもの。身分の違う拙者がいくら遊びとは言えその様なモノを送るなど、なんたる不届きな行い。斬り捨てられても文句は言えぬでござる」

椿は悲しそうな表情をした。

「ならば、詩を下さい！否、交換いたしましょう！！」

「……」

（…だから、字イ知らねえって…）

巳太は突っ込みたい気持ちを押さえ、再びどう答えてよいかかわからず、言葉に詰まった。

「巳太、2人の秘密って素敵でしょ？詩なら言葉でも覚えていられる」

「……」

きらきら目を輝かせて語る少女に、巳太は大きく溜め息を吐いた。

「…拙者…詩など作った事はないでござるが…」「上手くなくてもいいのです。素直な気持ちを、詠めばよいのですから」

…素直な気持ち…ねえ…

椿Ⅱ唐菓子、しか思い付かない。

「…女とは解らぬ生き物だ…」

巳太15歳、青春(?)と言う名の壁にぶち当たる。

翌日、やはり椿に呼び出された。

「巳太っ！出来ましたかっ！？」

一応主人なので、無視する訳にもいかず渋々参上した。

「……」

「早く聞かせてくださいな！」

恐らく夢中で走ってきたんだろう。椿は顔を赤らめながら、息を荒くしてそう言った。

「一度しか詠みませんぞ」

「はい」

巳太は大きく息を吸い込んだ。

『桜舞う 舞い散る花に 君を見て 思い誓わぬ 命かけぬと』

巳太が椿と出会ったのは、桜が舞い散る日の桜の木の下で。もう二度と会わぬと思ったものの、主人に遣わされ椿も主となった。

二度とあってはいけないと思ってからも、唐菓子が2人を繋いでいた。

これも何かの縁と思い、主である間は命を掛けても守ると巳太は誓った。

その気持ちを素直に詩に詠んだ。

「巳太、素敵な詩ね」

椿は嬉しそうにほほ笑んだ。余りに素直に喜ぶから、思わず照れてしまう。すると今度は椿が詩った。

『胸焦がれ 想い巡らす 君の影 恋を謳いて 面影愛し』

椿はそれ以上何も言わずに俯いた。

「…椿殿？」

巳太が名を呼ぶと、彼女はその場から立ち去る様に小走りで逃げた。後に残された巳太はぼやく。

「女とはわからん…」

巳太18歳、椿13歳。

主従関係は崩れる事なく続いていた。

椿が巳太の主となってから、4回目の桜が咲いた頃であった。

巳太は椿の父上、従来からの主人に呼び出された。主人は庭の桜を眺めながら言った。

「巳太、お主は椿をどう思う？」

「と、いいますと？」

「お主が椿に呼び出されては、遊び相手にされてる事は皆知ってるよ」

はっはと笑う。

「お主も手を焼いたな。少し可愛がり過ぎたかな、少々我が儘に育ててしまった」

「滅相もない。椿殿もお寂しいんですよ」

「うむう」

主人はまるで溜め息を吐くかのように、そう唸った。

「あんな娘じゃが、嫁にやっても大丈夫だろうか？」

主人は少し心配そうに、そう巳太に問うた。

「…嫁に…ですか」

それ以上何も言えなくなり押し黙る彼を見て、主人が再びぼやいた。
「娘の成長とは早いものだな。巳太、もう遊び相手にされる事もな

いぞ」

「……」

主人は無理をするかのように、声に出して笑った。

椿が嫁に……。

家を出てしまえば、巳太はもう椿を守らなくてもよい。否、守る事が出来なくなる。

桜の木の下で、ふいに立ち止まる。戌亥も聞いていたのか、少し寂しそうにくんくんと寄ってきた。

「……戌亥、呼び出される度に煩わしいと感じていたのにな」

胸焦がれ 想い巡らす 君の影 恋を謳いて 面影愛し

ふと、あの詩が頭を掠めた。あの日から思い出す事すらなかった筈なのに。

突如として、胸が苦しくなった。

「……本当に、女とは解らん生き物だよ」

戌亥はきょんと、首をもたげた。

「巳太」

丁度椿の呼ぶ声がした。毎日見ている筈なのに、やたら大人びては、やたら綺麗に見える。

「巳太、ここにいたのですね」

椿の目は今にも泣き出しそうであった。泣き出しそうであったが、顔だけは無理して笑っていた。

「椿殿、どう致しましたか？」

「……桜舞う 舞い散る花に 君を見て 思い誓わぬ 命かけぬと……」

「!？」

「覚えていますか？」

椿が巳太に抱き付いた。いつの間にか、椿の頭2つ分も大きくなっ

ていた。

「出会ったばかりの頃、覚えていますか？まだ貴方はみすばらしい服を着て、髪も顔も泥だらけ。でも、目だけは強く輝いてましたね。私は幼くて、ただ可愛そうだからと唐菓子を持ってきたの。でも貴方は唐菓子にも私にも見向きもせずに、いつも戌亥とばかり。段々意地になってきて：でも気付いたら、貴方の強いまなざしが四六時中私から離れなくなっていました」

椿は泣いているのだ。巳太に抱き付いたまま、涙を見せぬよう顔を押しつけて。しかし、肩だけは小刻みに震えていた。

「：愛しています：あれから：ずっと」巳太の胸が熱くなった。行き場のなかった手を、椿の肩に添えた。

「：椿殿、いけません。拙者は椿殿の家来でしかない。影ながら椿殿を命に変えてもお守り致す身でござる。椿殿には未来が：」

「抱いてください！！」

椿が言葉を遮る様に叫んだ。巳太の身体から力無く抜け落ちると、大粒の涙を流しながら座り込んで言った。

「：お願い：私を連れて：どこか遠くに逃げて：」

戌亥が椿の顔を舐めた。それをそっと遮り、巳太も同様に座り込んだ。

「：椿殿、泣くのはお辞めください」

椿は尚も涙を流した。

「巳太：私：巳太以外の男の所へ：嫁になど行きたくない：」

今度は巳太が少女を抱き締めた。

「巳太：私は錦の衣も、唐菓子も白いご飯もいりません：ただ、貴方が：巳太にいて欲しいだけ：」

この時初めて、彼は彼女を大切だと感じ、命に変えても守りたいと感じ、更には愛しいとさえ感じた。

だが：

「椿殿、なりません…」

「何故？」

「…拙者、椿殿には幸せになってもらいたいから…」

そう呟く巳太の頬を、椿がひっぱたいた。

「愛しい者を失って、幸せになれるというの！？心ない相手に抱かれて…巳太は…」

泣きながら椿は咎める様に叩き付けた言葉を、今度は引っ込めるかの如く突然止めた。そして小さく“ごめんなさい”とだけ呟いた。

巳太は私を愛していない…

巳太にとって、私は主人でしかない…

そう思った。



擦れ違う真実を受け止めた時、椿に未来は無くなった。目の前が真つ暗になった気がした。

「…嫁に…行きます…」

諦めた様に椿が言った。

「……」

その言葉に、巳太の心臓はえぐり取られる様な衝撃を受けた。否、えぐり取られた方が幾分かマシだったかも知れない。

椿と屋敷を抜ければ、間違いなくお尋ね者であろう。間違いなく死罪であろう。まともな生活すら望めないであろう。

昔の様な川で身体を清め、泥水を啜り、残飯を漁り、雑草を食し。

冬は筵にくるまり、雨の日は雨漏りの酷い小屋を借り、夏は虫に喰われながら臭い脇道で小さくなりながら寝る。

自分は良い。しかし、貴族として何不自由なく暮らしてきた椿には堪え難く、ましてや考えすらさせた生活であった。“守る”とは、身だけではなく、椿に関しては全てを守りたいんだと巳太は強く思った。

（椿殿…すまない…）

自分というより、例えば愛がなくとも貴族の元に嫁いで、何不自由なく一生を終えた方が幾分か幸せだと彼は思った。

椿が口を開く。それが、彼女の最後の言葉となった。

「私は貴方の思い通り、嫁に行きます。ですが、もし貴方が私を愛してくれていると言うのであれば、明後日の満月の夜、この木の下でお待ちしています…」

だが、巳太は行かなかった。

それは、椿を何よりも愛していると気付いてしまったから。

あれから何年経ったか、変わらずに巳太は主人と奥方の護衛のみを続けていた。

国は益々乱れ、荒れた噂を聞く度、巳太は椿を思い出すのだった。時折、椿から手紙が届いた。だが巳太については何一つ触れてはいなかった。手紙が届く度、彼の口からは決まって溜め息がもれるのであった。

『お父様、お母様、元気でいらっしゃいますか？夫は優しく、何不自由ない生活に、私椿は大変満足しております…』

幸せであるなら何より…

そう思った。

否、そう言い聞かせた。

嫁に行く日も、満月の夜も、椿は巳太を呼ばなかった。巳太は椿に逢わなかった。逢えば、放したくなくなると解っていたから。

椿が望む通り、彼女を連れて屋敷を出ただろう。力だけでは、守ってやれない。幸せには出来ない。椿がこの屋敷からいなくなっても、巳太は彼女を一時も忘れた事がなかった。

桜舞う　舞い散る花に　君を見て　思い誓わぬ　命かけぬと

そこに残ったものは、もはや、主人と家来との関係ではなかった。

更に時は流れる――。

巳太の心は止まったまま、時は流れる――。

椿が嫁いだから7回目の桜が咲いた。

忙しく駆る馬の蹄の音がした。いつも椿からの手紙を届けにくる遣いの者であった。遣いは家来達を押し退け屋敷に上がると、主人の前に突然土下座をしてみせた。

いつもとは違う光景であったため、護衛に巳太は主人の直ぐ隣りに付いた。遣いは涙ながらに「討たれました」と言った。

主人も奥方もただ呆然と立ち尽くした。

「――一昨日、夜盗が入りました。家来の中に反逆者があり、夜盗と組んでいた様で、主人は討たれ、屋敷には火が放たれました。逃げ惑う女子供の中、奥の部屋にいた椿様が夜盗に囚わり、衣服をはぎ取られ――」

「――やめてください――」

途中で奥方が泣き崩れた。

「――娘は――？」

震える唇を堪えて、主人が問うた。

「自害されました」

家にいた家来達から嗚咽が洩れ始めた。

「滅びたのか？」

遣いはコクリと頷いた。

「汚される間、椿様はずっと“巳太”と泣き叫んでおりました。巳太様にこれを」

遣いが出した物は、椿が大切にしていたモノ。そう、椿と初めて出逢った日に戌亥が啜えて来たあの櫛であった。

巳太が震える手でその櫛を受けとると、遣いは「ごめん!」と隠していた短刀で腹をかつさばいて死んでしまった。

「…巳太：娘を連れてきてはくれぬか？」

言われなくとも…。

「御意」

弱い者は、死んでも仕方ない…。

こんな時代だから、仕方ない…。

焼け焦げたしゃれこうべ。

死体は沢山あったが、巳太には何故かすぐに解った。

頭がい骨を大切そうに抱き上げる傍ら、戌亥が涙を流していた。

「戌亥、お前も悲しいか？」

あの時と同じ様に、戌亥はきょんと泣いた。

戌亥が巳太の頬を舐めた。舐められて、泣いているんだと気付いた。

「戌亥、拙者は弱いままだったんだな。一番大切なものを守れなかったよ。こんな時代だ。どこに行こうが、平穏などなかったんだ」

巳太が刀を抜いた。

「戌亥、主人と奥方に届けてくれないか？櫛と椿殿をな」

戌亥がきょんと首をもたげた。巳太が戌亥を優しく撫でた。

「命をかけても守ると約束したんだよ。椿殿を一人にする訳にはいくまいて。さあ、戌亥行くんだ」

白く揺らめく刃を見ても、戌亥は動かなかった。

「…お前は一番の親友だったな…」

巳太が自らの腹をかつさばいても、戌亥は暫く見つめていた。

…そうか…見届けてくれるか…

巳太の意識が消える時、一度だけ…ただ一度だけ、戌亥は悲しく遠吠えを響かせた。

「鬼沙那樣」

十二単を翻し、椿がほほ笑んだ。

「殺してしまったら、その時は魂だけお持ちいたしますわ」

「構わないよ。魅多寡の様な失敗でなければね」

「では、参ります」

「期待してるよ」

椿と櫛を届けて直ぐ、屋敷から戌亥の姿は消えた。巳太が自害し

てから、戌亥は口に一切のモノを入れなかった。

一週間もせずに、戌亥も死んだ。

…戌亥、椿殿がいらないんだ…

やがて二つの魂は、この世を彷徨ううちに一つとなった。

…椿殿が生まれ変わった時、その時こそは守りきるのだ…。

守れなかった者を、愛しき者を求めて、かつて二つであった一つの魂は今もなお彷徨い続ける…

◆日向の告白◆

「あらあ。ひうちゃん、湯上がりべっぴんしゃんね」

ほんのりと頬染めて、髪を女みたくポニーテールに結い上げた青年を、擦れ違いがてら女将さんが呼び止めた。

「女将さん、丁度良かった」

「女将さんなんて、みっちゃんって呼んで」

女将さんは、ほほほと上品に笑った。

「みっちゃんさん、陽太郎知りません？」

「陽ちゃんなら、海ちゃんとピンポンやってますよ。すごい白熱様で、陽ちゃん圧勝」

女将さんことみっちゃんが、あっちと指をさして教えてくれた。

「ありがとうございます」

店内の娯楽場。奥に小さなバーがあり、手前に卓球台とビリヤード台が2台ずつ置かれていた。小振りのジュークボックスから流れ出るのは、陽太郎好みの流行りのJポップス。

「まーじでえー」

なんて言う泉の嘆き声と「うっしやー！」っという陽太郎の雄叫びが聞こえた。

日向は大きく深呼吸すると、偶然通り掛かった振りで2人に歩みよる。どっからどう見ても、探して来た事バレバレではあるが…。

陽太郎の放ったスマッシュが、泉ではなく日向に飛んだ。明らかに八つ当たりに近いそれを、日向は無言で受け止めた。

「…やるか…？」

そっけなく陽太郎が問い掛けた。

「手加減しないよ」

「ばあーろー。俺がお前に負ける訳ないだろ」

「負けたらどうすんの？」

泉がさり気なく日向にラケットを渡した。

「負けたら、じゃあ、一つ願いを聞いてやるよ」

「おっし」

「その代わりお前が負けたら、俺の願いを聞いてもらうから、なっ！」

陽太郎の隠して持っていた球が、日向の横を通過した。

「1点！」

「！！きったねえのっ！！」

思わず叫ぶ。

「あ、レディ！」

振り向いた陽太郎に、今度は日向が一点入れた。

「！！卑怯だぞっ！！」

今度は陽太郎が叫んだ。

そんな2人を見ながら、泉が呆れた様にぽつりと言った。

「：子供が二人：」

そして、その場から逃げる様にして退散するのであった。

息ピッタリと言うのか、2人の球は一定のリズムを保ちながら綺麗なお互いを行き来する。

「：美鏡か？」

突然の日向からの唐突な問い掛けに、陽太郎の手がぴたりと止まる。

：1点。

彼は無言のまま球を拾いに行くと、相手方にと打ち放った。再び、球の行き来が始まる。

「人ってさ、よく死ねばそれで終わりだっていうじゃん。それで、ダメなのかな」

また日向に点が入る。

「：ダメ：だから、今があるんだとしたら、それは単なる“逃げ”なんじゃないのか？」

今度は日向の手が止まり、陽太郎に点が入る。

：1点。

「…おかんが死んだ時、理解が出来なかった。死ぬってわからなかった。死ねばリセットされるとかそうじゃなくて、おかんが死んでも俺は消えてなくなったりしないし、親父や俺の記憶からおかんが無くなる事はないんだ。おかんが無くなっておかんから俺が無くなったとしても、それはおかんの中だけであって、おかんが確かに存在したって事実はなくならないんだ。そう思った時、死んでも自分だけはリセットされなければいいのって思った。けど大人になって、人は弱いからリセットされなければならないんだって思った。リセット仕切れなかった分が、多分来世で跳ね返ってくるんだろうな」

「……」

「死ねば終わり…なんて寂しいじゃん」

陽太郎特有の悪戯な笑みは、無理している様に見えた。

「多分お前は、織紗那ちゃんに逢いたくて酒猫ババの家に来たんだと思うし、俺はお前に謝りたくて出会ったんだと思う」

「僕は…」

なんとなく、言葉に詰まる。

「謝られるような事されてないし、むしろ…」
再び言葉に詰まる。

隙を突く様に、陽太郎に1点が入る。

…ありがとう、だけが言えない。

陽太郎が続ける。

「…お前は…どこまで覚えてる？」

遊んでるのかと思うくらい、一定のリズムを保ちながら球の弾む音が伝わる。

縫う様にお互いが感じる自分自身の呼吸。そこに、お互いの壁を初めて見た気がした。

「…織紗那ちゃんの数珠、出来れば嵌めないで欲しい…」

「数珠？」

疑問符に乗せた日向のスマッシュが決まる。

「…やっぱり、リセットされた方がいいと思うから…」

「……」

陽太郎がラケットを置いた。

「俺は思い出せて良かったとも思うし、思い出さない方が良かったとも思う。刀を振ってみても数珠を嵌めた時みたいに全然振れないし、だから辛うじて陽太郎なんだと思う。そうでなければ、自分が誰なのか解らん」

陽太郎は再びラケットを握り直すと、球を打ち付けた。とっさに返す日向。

「…僕は、別に恨んでもないし悪く思っていない。また逢えた事は凄くうれしいと思うし、今があるからそれでいいと思ってる」

過去は過去、今は今。ただそれだけ。

「過去があるから、今がある」

日向の予想外の言葉に、なんだか妙に笑いが込み上げて来た。

「…柄にもなく、考え過ぎてたんかな？」

彼は、やっと笑えた気がした。

「本当に、柄にもない」

過去がどうであれ、日向にとって幼い頃から陽太郎は大切な存在なのだ。いつも側で守ってくれる、頼りになる存在。

「一人にしないで、ただそれだけ」

「恋人みたいな奴だな。気持ち悪い」

心外だと言わんばかりに、日向はスマッシュを打ち込んだが今度は返された。

けれども、とりあえず二人の間にあった壁みたいなものは取れた様。良かったと思う。

「ところで」

ふと日向が疑問符を投げ掛ける。

「何点入れたら終わりなの？」



なんとか日向の勝利で卓球を終えると、再び湯に入ろうと思い、陽太郎と二人仲良く泉を呼びに部屋に戻った。

案の定部屋にはおらず、隣りの部屋を訪ねてみたら、レディと織紗那と桜がのんびりとくつろいでいた。

「桜、泉知らない？」

「蝶子と出かけましたわ」

現在の蝶子は、推定約14歳。織紗那の呪術により乙女に変身中、本人達はどうだか知らないが、現在は泉の恋人なのだ…と皆思っている。

「ま、お熱い事で」

なんとなく裏切られた気分になる。

織紗那：は、まだつんけんしてる様に見えなく…ない。

陽太郎が言った。

「俺ら風呂行くんだけど、行く？」

どうせ男と女に分れるのだから誘う必要もないのだが、生き帰りだけでもワイワイ楽しみたいと思ってしまるのが温泉。

一旦部屋に戻り、用意をしてから大浴場にぞろぞろと向かった。

やはり2人共真っ先に露天風呂へと向かう。

露天風呂では、まだ戌亥が風呂に入りながら唄を歌っていた。

「戌亥、風呂長っ！」

思わず突っ込む。

「日向殿もまた来たのか。陽太郎殿と仲直り出来て良かったでござるな」

はっはと笑う戌亥と陽太郎本人を目の前にして、無性に照れくさくなって離れる様に奥へと移動した。

陽太郎も湯船に入った。

「…なんか、さっき話したんですよ。ゆっくり。話事すら怖かった

のに……」

「？」

「そしたら、楽になった気がした」

「……若いとは良い事だ。桜やババや拙者、蝶子やレディ……拙者等は年を取りたくても取る事はできません。時間が止まっているからな。時間が止まるとはどういう事か解るか？」

「さあ？」

「仮に今を1分としようか。一日が一分、一年が一分、百年が一分、そんな感覚なのだ。つまり、そういうことだ」

陽太郎の眉間にシワが出来る。

「よく、わかりません」

戌亥が笑った。

「魂は一つだが、所詮肉体は肉体だ。だが、肉体は区切りになる。拙者等に区切りはない。今を全て受け止めねばならんのだよ。今と
して、な」

「……」

「つまり」

陽太郎なりに考えてみる。

「開き直りも大事だって事ですか？」

「ま、そういうことでござるな」

モヤモヤがだいぶ消えた様に思えた。

一方、鍛えぬかれた2人の男を目の前にして、筋肉っていいな
と憧れる輩がいる事を2人は知る由どころか思ってもいなかった。

『陽ちゃん♪』

突如女風呂の方からレディの声がした。

「なーにー？」

呼ばれた男が返事をした。

『さあて、問題ですっ♪一番オッパイ大きいのは誰でしょ？』

男3人が思わず吹き出す。

『ちょ、ちよっとレディ！』

咎める桜の声がした。

「見てみないとわからん」

問題を振られた男はギャグのつもりで返したのだが、流石式神というべきか、陽太郎の頭に手桶が綺麗にヒットした。

『馬鹿！陽太郎！！』

桜の怒鳴り声。出来たタンコブを擦りながら「冗談だって」と頭を上げた。

『デバガメ禁止！！』

再び桜の怒声。

「しません！」

：と、言いつつも、見るなど言われれば言われる程見なくなるのが男心。身体は自然と女湯の方へ向かっていた。

危機を感じたのか、戌亥がお先にと逃げる様に出て行った。下も立派だと日向はちよっぴり憧れる。そして直ぐに、危ない作戦会議を陽太郎と行うのであった。

（だって、下半身で生きてる年頃なんですものっっ！）

あーでもない、こーでもない、ここはダメ、あれはアカン…等と真剣になってる姿はどう見ても痛々しい。

2人が諦めかけた頃、何してんの？と泉が来た。泉の裸を見て、彼は自分の仲間だと思い、日向はちよつと安心した。

そしてすぐ、最重要機密へと頭を戻した。

「お前はアホかつ！風呂でやるっつたら一つしかないだろっ！！」
耳打ちするくらいの大きさで陽太郎が言った。

「早くしないと、皆上がっちゃう」

日向が囁く。

「あー…」

泉が棒読みで声を出した。

「ここさ、23時から5時までは混浴になるんだぜ」

早く言えばよと、2人は泉を湯船に沈めた。海坊主みたく浮き上がった泉がポツリと零す。

「…水風呂潜ってみ」

「……」

急いで潜ってみる2人。女風呂と男風呂の仕切りは、水風呂の所のみ藁の様な素材の壁で出来ていて、潜ってみると床から20センチ程の隙間があった。

確かに女風呂とは繋がっているが…。

「意味無ぢゃん！」

陽太郎が嘆く。

「はつくしゅん！」

日向が答える。

「そーゆー事。だから混浴時間がある訳よ」

まだ冬。四季桜が綺麗な季節。

水風呂にてすっかり冷えきった身体を、2人揃って湯船に沈めた。

「今夜お祭りがあるんだってさ。さっきみっちゃんが言ってた」

なんだか上機嫌に泉が話出した。

「祭り？」

「そう、毎年四季桜の綺麗な時期にやるんだよ。ここの浴衣可愛いだろ？うちで毎年新作と入れ替えしてんだ」

はっとしたように日向が問い掛けた。

「もしかしてお前んちって…」

「あれ？言ってなかった??? 全国に10店舗持つ呉服屋。ついでに俺跡取り」

「!？」

確かに金持ちなんだろうとは思っていたが…ボンボンだったのねつと納得した。



四季桜はライトアップされ、道行く人々の足を止めるのであった。女の子達はお女将さんから浴衣を借り、男の子達は着流しを借りて、気分もすっかりお祭りモード。

陽太郎とレディ、泉と蝶子なんかは腕を組みだし、気付けば人の波に揉まれながらどこかに消えてしまった。

戌亥と桜も途中までは一緒にいたのだが、気付けばこちらもいなくなっていた。

人の数はどんどん増える。遠慮がちにも織紗那の手を握ろうとしたら、彼女の手がびくつき引っ込められた。

「…織紗那、少し人込みから抜けようか？」

日向の問い掛けに、彼女は顔を伏せながら答えた。

「人の少ない所はちよつと…」

別に怒ったつもりはないが、少し膨れた様な口調で日向は言った。

「…何もしないよ…」

そして織紗那を残して、スタスタと歩き始めた。

川沿いに並ぶ出店の列を抜け、少し暗がりの土手に差し掛かろうとした時、織紗那の手が日向の腕を掴んだ。小さく息が切れている。

「…嫌なら来なくてもいいのに」

無言のまま、彼女の手に入れた。

「…私…」

彼女が何を言っているのか解らなくなり押し黙ると、今度は日向が織紗那の腕を握り返した。

彼は俯く彼女の腕を引きながら、土手下に降りた。

土手下は上とは打って変わり、暗くて静かだった。人込みを避けたカップルや人が数人いる事は確認が取れたが、誰が何をやってるかまでは暗くて解らなかった。

川の前で、日向は織紗那の手を放した。

「…もう、あんな事しないよ」

織紗那がコクリと頷いた。日向が落ちていた石を拾い上げると、スライドさせる様に勢いよく川に向かって投げた。石は4回程跳ねて沈んだ。

「…私はただ…貴方と居たいだけ」

彼が再び石を拾い、投げた。が、手元が狂ったのか2回で沈んだ。

「きっと、貴方になら…日向になら…傷付けられても、私は我慢出来ず。だけど…」

上手く言葉を作れない織紗那のセリフを、もういいよ、と遮った。

「…好き…だからさ。誰にも取られたくないって思うし、だから…」
とうとう言ってしまったと思ったら、なんだか無性に走り去りたい気分になった。しかしここで走り去ったら小学生なので、ぐっと堪えて言葉が続けようと思う。が、思考が上手く働いてくれない。

「だから…、だから、本気でめちゃくちゃにする気はなくて、ただ男は危ないんだって思ってた欲しくて…」

言って、自分も男じゃん、と軽くへこむ。反応がないのでちらっと目配せすると、織紗那が静かに号泣していた。

日向はぎよつとしたままなす術も無く、その場で固まってしまった。

「…私だって…私だって女です。男と女の関係の楽しみは知っています」

再び、ぎよつとする彼。

「だけど…あの夜は違います…あんなの…只の強姦です」

ぐさつと日向の胸に何かが刺さった。

痛い！とてつもなく痛い！！

…否、自分が悪いのだが…。

「ごめん」

ポツリと言う。

「…やっぱり…ちゃんと反省して謝って欲しくて…じゃないと私、日向の事…」

たまたま付近を通過した戌亥だけが、織紗那に土下座する日向の姿を見掛けたとかいないとか。

近くをうろろしていた数名のカップルが「可哀想に。あの人、きっと浮気がバレたのね」と話していたとかいないとか。周りの状況について、本人達は露知らず。

散々謝り倒してようやく織紗那嬢の機嫌が直った頃、日向の携帯にメールが入った。まだお祭りは続いている、人だかりもさっきの倍近くになっていた。メールは泉からで、どうやらそろそろイベントが始まるらしい。詳しくは書いてなかったが、取りあえず彼女を連れて土手を上がってみた。

ちんちんどんちんちんどん♪

陽気な祭りばやしが聞こえて来た。祭りばやしというより、なんだかちんどん屋。

ちんちんどんちんちんどん♪

楽器を持った七福神の格好をした人を先頭にして、十二単の着物を着た女の子を乗せた社を担ぐ男達が続き、平安時代の踊り子風の女性の列が舞いながらぞろぞろと続いた。

ちんちんどんちんちんどん♪

毎年綺麗な桜が満開に咲きますように。四季桜が満開の花で埋め尽くす川沿い。

「面白いね」

くすりと笑いながら話す日向の腕を握って、織紗那がコクリと頷いた。彼女のうっすらと浮かび上がる首筋も、ふっくらとした唇も、淡く色付いた頬も、全てが愛しいと思う。

ちんちんどんちんどん♪

祭りばやしが去り、足を止めていた人々が歩き出す頃、2人も再び歩き出した。

今は堂々と手を組んで歩けるから、立派か恋人同士なんだと実感出来る。

…800年。

形を変えて、全ての、あの日、止まってしまった時間が再び動き出した様な気がした。

——戦だ。戦に行かねばならなかったのだ。

——生きて帰ってください！

「日向」

歩みを止めて織紗那が呼んだ。

「桜が」

ふわふわと花びらが一枚、日向の髪に舞い降りた。

『…かあちゃん、起きてよかあちゃん…』

子供が泣き叫ぶ。

『…無念…』

呪いながら死んで逝く者がいる。

『坊や…私の坊や…』

悲しみに狂わされる親がいる。

全ての思いや悲しみが、念や邪となってこの世を彷徨う。

“…おいで…”

やがてそれらがある一つの声に呼び集められる。

“…ここにおいで…”

それは、それらにとって、とてつもなく気持ちいいもの。

“…おいで…”

薄紅色がそれらを包んだ。やがて幾つもの彷徨える魂は、一つの姿を手に入れた。

極楽浄土。

極楽浄土。

そんな言葉はどうに忘れた。

『せめて地獄に流されるのなら、この恨み晴らして逝きたい』

そう願って、大地を再び踏み締めた。



日向は織紗那と林檎飴を買った。小さいやつだ。懐かしい味がした。

それから後で食べようね、とカステラも買った。

出店と先程見た“ちんどんパレード”以外にめばしい物も無かったので、泉と陽太郎にメールをして民宿へと引き上げることにした。隣りで林檎飴を舐める織紗那は満足そう。心底良かったと思う。

民宿に戻ると、フロントでいきなり女将さんにつかまった。女将さんは、困った様に話を振ってきた。

「ひうちゃん、海ちゃんから聞いたんだけど三味線弾けるんだって？」

織紗那と、突然の問い掛けに思わず日向はきよんとする。

「ええ、まあ。ずっと弾いてないし、上手くもないですケド」

ギターをやり始めるよりずっと前の話、日向が初めて持った楽器が三味線だった。三味線は元々日向を引き取ったおばあさんが弾いていて、それを自分も教えてもらったというだけの話。

村に来てすぐの時にはまだ友達もいなく、捨てられた子供だとイジメられた。だから、楽器だけが楽しみだった。そう、陽太郎と出会うまでは。だから今でも体が覚えているから、弾こうと思えば弾けるのだ。

「ほんとお」

お女将さんは安堵の溜め息を吐いてみせた。

「今日ね、宴会があるんだけど、うちの三味線弾きがダウンしてしまっただけなのよ。譜面持ってくるからお願ひ出来ないかしら？」

丁度同じタイミングで、泉と蝶子も戻ってきた。

「ただいま」

「ああ、早かったな」

そこに“蝶子といたのに”という補足説明は敢えてのべなかった。

「ああ、宴会の準備手伝わなきゃいけないから」

泉の回答に、日向は少し驚いた。

「僕も今手伝ってくれて頼まれたとこなんだよ」

「そうなんだ。ま、頑張ろうな」

泉は少しばかり足早に部屋へと戻った。

「なんかね、宴会に出るらしいよ」

「出る？」

泉も三味線弾きなのかと、首を傾げた。

「これこれっ」

お女将さんが三味線と譜面を手に、小走りで走りよってきた。

「ちよっと弾いてみて欲しいんだけど」

ざっと譜面に目を通すと、メジャー演歌のアレンジ版であった。

「なんとかなりそうですね」

いいながら、簡単に1フレーズのみ奏でてみた。

「ひうちちゃん、上手いわねえ。もしかしたら、うちの三味線弾きより上手かったりして……」

思わず苦笑して見せた。

「まさか！本職の方には構いませんよ」

「そしたら、後2時間くらいで始まるから一時間前に衣装合わせに来てくれるかしら。従業員に言ってくれたら解るから」

「わかりました」

部屋へ戻る日向に気を遣いながら、蝶子を連れて織紗那が娯楽ルームへ向かう。

「日向、ではまた後ほど」

「ああ」

部屋に戻るとほぼ貸し切り状態で、三味線を弾き続けた。約束の約1時間程前になると、日向はフロントへと向かった。

フロントに着くと待っていましたと言わんばかりに女性従業員が誘導し、控え室らしき部屋に案内された。

お女将さんと年を取った上品な女性と、日向とたいして変わらな
いくらいの女の子がいた。

衣装らしき青い錦の着物が目立ったが、他には袴やドレスや燕尾
服等、色々な服が掛けられていた。

お婆さんまでは行かないお婆さんがまず日向の全身を見つめた。

そしてお女将さんに軽く話をする、お女将さんは軽く笑いを漏ら
しながら日向に近寄って来た。

三味線と譜面を受けとりながら言う。

「しばらくトイレも行けなくなってしまいうから、取りあえずトイレ
は済まして来てね」

「はあ」

そして言われるままにし、再び戻ってくると、今度は服を脱がされ
た。訳の解らぬままパンツ一枚になったと思ったら、今度は赤い襦
袢を着せられた。

お女将さんとお婆さんが、再び何かを話ながら今度は日向に着せ
た襦袢の肩の部分をだけさせた。

また納得すると今度は青い錦の着物を着せた。赤く派手な帯を前に
縛り上げると、今度は椅子に腰掛けさせた。

彼は何かがおかしいと思いつつも、2人が余りに真剣だった為
に何も言えず、ただただ成すがままにされていた。

「ひうちゃん、それじゃあ、腰掛けて目をつぶって」

言われたままにする。顔を弄られ髪を弄られ…。

そして数十分後、お女将さんの合図で目を開ける。その時鏡の向
こうにいたのは、どこからどう見ても“男”ではなかった。

目を丸くしながら鏡の前に固まる日向を無視して、ギャラリは
きやつきと騒ぎ出した。

「ひうちゃん似合うわあ！女の子より色っぽい」

お婆さんは妙に満足そう、お女将さんと女の子はいきなり写真を撮
り始めた。

「…あのう…」

何が言いたいのか、自分でもわからなくなってきた。髪も服も化粧も……まるで花魁。

困っていたら、泉が入ってきた。

「「わおっ!!」」

お互いを見て、お互い驚きがハモった。

「ひうちゃん、どお？ 素敵よねえ♪」

「……いやあ、思わずトキメいた」

「でしょう♪」

「……やめてよ」

男にトキメかれても嬉しくない。それより何より、泉の衣装の方が気になった。

真っ赤なスタンドカラーの細身のスーツに、羽根とかモツサモツサした毛とかが付いている。

今度は背後から陽太郎が顔を出した。

「おおっ！ 誰このお嬢さん♪」

「……」

どうやら話を聞いていなかったらしく、いきなり顔を近づけてくると手を握ってきた。

（お、げっ!!）

背後で皆がクスクス笑う。

「ん……初めて逢った気がしないねえ。もしかして、運命？ ねえ、後でアドレスでいいから連絡先教えてよん♪」

「……もう知ってるザマスよ」

「え？」

「僕だ、バカタレ！ 気持ち悪い」

陽太郎が固まった。ついでにこいつも、泉に負けず劣らず妙な格好をしていた。

「……何その格好……」

「俺、鼓打つの」

「は？」

そう、やたら派手な袴姿で：バカ殿みたい：。

日向が泉をキッ！と睨むと、彼は口笛を吹きながら部屋を出て行った。

「おい！いず：」

追いかけようとしたが、彼は派手にすっ転んだだけだった。

お女将さんと女の子が、日向に手を貸す。

「あ：悪い：」

悪びれた様子もなく詫びる陽太郎。良く見たら、彼が長い日向の着物の裾を踏み付けていた。

「：お前なあ：」

「だからごめんって」

すると、お女将さんが言いにくそうに話を振ってきた。

「ごめんねえ：。私がね、海ちゃんに頼んだのよ。本当はね、宴会の芸子さんの予約にミスがあって今日から5日間の穴が空いてしまったのよ。それで何か出来る人いないかしらって」

「……」

そう言われては責める訳にもいかず、わかりましたよと頭をうなだれた。

「：手伝いってコレのことだったのね」

「ごめんねえ。でもね、明日からの従業員室って言っても客間の事だから」

ハメられたんだと解っても、ここまできたら今更怒るに怒れない。泉だって、必死だったんだろうと考えて：良い旅館にしかもタダで泊まれるんだし、よしとするか！。等と諦めた。

「それではよろしく願いますー！」

今度は誰にも踏まれない様、日向は裾をたくしあげた。するとお女将さんが耳打ちした。

「ひうちゃん、今は芸子さんなんだから、お上品にお願いね」

軽く頬を染めつつ、いそいそと宴会場に向かった。

宴会場に入る前に軽く打ち合わせ、舞台上がると思っていた以

上に注目された。

先に日向が上がって腰掛けると、拍手と更には指笛まで鳴らされた。泉がマイクの前に立ち、続いて陽太郎が腰掛ける。

2人とも、実は泉の歌なんぞ聞いた事もない。から、大した期待もしていなかったし、女将さんの話から泉も穴埋めに使われたんだと思っていた。

そしたら

「海ちゃんー！！待ってましたー！！」

「よっ！大将！！頼むよー！」

等と妙な歓声が飛び出すから驚いた。

陽太郎と二人、ちらりと目を合わせる。

「…皆様、いつもお集まり頂きありがとうございます」

日向と陽太郎、同時に吹き出しそうになった。

「年に一度の泉海斗スーパリーサイタル、今回演奏してくれるのは、三味線弾きの“ヒナコ”嬢と鼓打ちの“ヨウタロスケ”」

再び演奏者二人組は吹き出しそうになった。

（誰がヒナコ嬢だっ！！）

（なんだ！？ヨウタロスケって！！）

…泉は続ける。

「僕の歌に酔いながら、彼らの演奏にも耳を傾けてください！今回のツアーは、きつと素晴らしい最高のものになるはずです」

日向が思わずバチを飛ばしそうになり、誤魔化す様にふと客席にスマイルを向けると、なぜかおばさん組が嗚咽を初めていた。

「では、皆様お聴きください」

日向が震える手で（半ばヤケクソ）で三味線を弾きだしたらば、それに陽太郎が続いた。初めて、しかも即席で合わせたと思えない息の合いように、舞台裏でお女将さんは涙を流していた。

軽快な三味線と鼓に、観客はただ呆然と聞き入っていた。

（二人とも最高だぜっ！）

高くマイクを掲げると、泉が歌いだした。

（（泉！！激うまつ！！！！））

…なんかもう、訳の解らぬ間に宴会は大成功の中幕を閉じた。

…泉海斗。

呉服屋の跡取り息子。だが、正体不明。



泉はなんだかプレゼントとかいっぱいもらっていた様だが、日向も陽太郎も状況を把握しきれず、泉を置いてフラフラと衣装を解きに控え室に向かった。

「…腹減ったな…」

「…うん…」

上の空でどうでもいい会話を交わしていたら、お女将さんが泣きながらよって来た。

「すごい良かったわぁ!! 今ご飯の用意してるからねえ。衣装解いたらもう少し待っててね」

「「あい…」」

今日はもう早く寝ようと思った。

日向は着物を脱ぎながらふと考えた。考えた事を見透かされた様に陽太郎に言われ、ドキンと心臓が踊った反面大きく溜め息でも吐きたくなった。

「俺さ、お前のゴスロリ姿はいつか見るだろうとは思ってたんだがな」

「……」

…ほっといってください!

陽太郎もバカ殿ファッションを脱いだ。

「二人とも、おっつかれちゃ〜んぴおーん♪」

貢ぎ物を抱え、本日の主役が戻ってきた。服についていたなんかモコモコした毛とか羽根とかが、雫られた様になくなっていた。

荷物を置き、彼はハイテンションにもくるくるとステップを決めながら近寄って来ると、足を交差させて止まり、指をパチンと鳴らせてみせた。

「サイッコーだったのです!」

陽太郎と二人、思わず眉間に指を当てて大きく溜め息を吐いた。すると泉がいじけた様に半泣きになりながら叫び出した。

「たまには俺だって目立ってたっていいじゃないよお!! いつも自分等ばっか目立ちやがって! 俺なんかあ、俺なんか…」

泉の身体がぶるぶると振え出す。

「女の子に告白されたかな? って思ってもな、ぼぼ100%の確率で“…って、酒猫君かもしかしくは鳥居川君に伝えてくれませんか?” はあと、とか言われてんだぞっ!!」

「…いや、なんも言っていないから…」

日向が慰める様、泉に囁いた。

「目立ちたいなら目立ってくれ。大いに存分に力の限り目立ってくれ!」

…お婆さんにモテても嬉しいのかな? と思ったが、敢えてその疑問は飲み込んだ。

陽太郎が問う。

「悪かったな。けどさ、初耳なんだが…お前なんて答えてんの?」
泉の口許が邪悪に微笑んだ。

「…酒猫、もしくは鳥居川と出来てるから諦めた方がいいよって…くっくく…って…」

「!？」

…泉の報復…のつもりらしい。
取りあえず1発ずつ殴っておいた。

部屋に戻ると、男部屋の方に8人分の食事が用意されていた。女の子達が準備を手伝っていた様で、丁度全員がタイミング良く席に着く形となった。

「日向、お疲れ様」

織紗那が差し出したおちよこを受け取った。それを見て、レディも陽太郎におちよこを差し出した。更にそれを見て蝶子も泉におちよこを差し出そうとしたが見つからず、何を思ったのか茶碗を差し出していた。

戸惑う泉を、面白そうなので全員見て見ぬ振りした。そして蝶子以外のおちよこ&茶碗に日本酒が注がれた。

「では、お疲れ様！」

乾杯をすると、全員ぐびっと呑んだ。ふはぁ！っと感嘆の息が漏れる。透かさず泉が立ち上がった。

「あれえ？日向クンゼーんぜん呑んでくない???」

「ええ?!僕っ?!?」

泉がビールグラスに日本酒をドクドク注ぐと、それを日向に渡した。

「まあまあ、遠慮せずにつ！」

：どうやら、先程の茶碗の矛先が日向に向いたよう。

「なあ、美味しく呑もうぜ」

震える手で受け取りながら、力なくそうぼやいた。

「美味しく呑んでるじゃん♪男らしいとこ見せてよ」

(こ、殺される!)

グラスに口を当てながら、陽太郎に助け船を出そうと名前を呼んでから日本酒を一口含んだ。呼ばれた男は何食わぬ顔で振り替えると、

「俺、忙しい！」一言だけ言い捨てた。

良く見ると、彼はレディの乳をどさくさに紛れて揉んでいた。見てはいけないものを見て、思わず日本酒を吹き出した。

泉と織紗那のきゃっとかわあっとかいう声がして、日向はお絞りをつかんで顔を背けてむせ込んだ。

：どうやら、鼻からもでたらしい…。

(レディも拒否れよ…)

仕方ないので、日向は諦めた様にグラスを飲み干した。一気に身体が熱くなった。

「おっとこらしい♪」

ムカツクので、今度は日向がビール瓶を引っ掴むと泉のグラスに注いだ。

「まあ、泉さんもいっちゃいましてよー♪」

泉が飲んでいる隙を見計らって、その間にビールと日本酒で1…2

の飲みものを作った。日向はビールを飲み干した泉にそれを渡した。
「ほら、バーテンダーが作ってやったんだからありがたく吞め」

泉は受け取ると、陽太郎の肩を叩いた。

「陽チャン、強精剤」

彼はレディに夢中のご様子。なんの疑いもなくそれを一気に飲み干した。

（つまらん）

と2人が思った瞬間、陽太郎がむせ返った。

「うゝげっ！なんだこれっ！！」

「ジャックダニエル」

陽太郎の目が座り始めた。

「そうか、日向はジャックが呑みたいのか……。悪いが日本酒しかなかったんでな。その代わりたんと呑んでくれ」

今度は陽太郎が、日本酒を並々と注いだ茶碗を日向に渡した。

「さあ、バーテンらしく見本を見せてもらおうか！」

：結局、日向が再びターゲットと化した。

そんな3人のやり取りを見て、蝶子が織紗那の浴衣を引っ張りながら言った。

「：怖い：」

「私達は私達で楽しく呑みましょう」

そして、同じ室内に2つの世界が出来上がった。それから、1時間後。突然日向が立ち上がると、トイレに駆け込んだ。

織紗那が恐る恐る覗きに行くと、日向はシンガポールのシンボルみたくなっていた。呆れて彼女が彼の背中を擦っていたら、陽太郎がケラケラ笑いながら言った。

「織紗那ちゃん、いつもの事だから平気よ」

すると今度は泉が立ち上がった。

「：俺も：」

「お前も？」

：よって、陽太郎が勝利した。

「…頭痛い…」

あれから暫くして、色気も夢も希望も何もなく宴会は終わった。

日向はトイレと、激しい渇きによって深夜目を覚ました。ガンガンなる頭を抱えて携帯を覗くと、デジタル時計は深夜の2時27分を差していた。

「…気持ち悪い…」

ふと周りを見渡すと、戌亥以外の二人もまたウンウンと唸っていた。ざまあみろ、と思う。

そして、目を覚まさせられた原因を解決すると、再び彼は横になった。

けれども吐き気と頭痛で直ぐには寝付ける筈もなく、夜風に当たろうと外に出た。

暗い廊下をまるで夢遊病患者の様によたよたと歩いていたら「あら、日向？」と誰かに呼び止められた。

「んあ？」

かったるそうに振り替えると、そこには桜が立っていた。

「どうしたの？もう大丈夫なの？」

「桜こそどうしたの？」

人事の様に問い返す日向に、彼女は大きな溜め息を吐きかけた。

「…どうって…覚えてないの」

「うん」

こんな時は素直になるに限る…と日向は考える。

実際、陽太郎と泉に馬鹿みたく飲まされ、織紗那に擦られながら吐いていたところまでは思い出せるのだが、以後の記憶が全くない。気付いたら布団で寝ていて、トイレに行きたくなって先程起きた、みたいな。

「…酒臭いからお風呂でも行ってきたら？」

「うーん…朝方水死体で上がりそうだから、朝一で入るよ」

「…そう」

元々桜は日向の保護者的な存在だ。見た目は16、17歳ではあるが、幼い頃からの日向をずっと見てきた。だから、余計に心配なんだろう。

「…そんなに心配はないけどね」

自分よりずっと幼い表情が心配そうに揺れるから、彼はそう付け足した。

小さい頃は、ずっとずっと大人に見えたのに…。

「散歩？私も一緒にいい？」

コクリ、と頷いた。民宿に庭がある訳ではないけれど、白樺や小川のある並木道は立派な散歩コースだ。

民宿の周りにだけぽつんぽつんと、片手で足りるくらいの数の小さな街灯がちらばっている。

「…日向とこうしてお話するのって、久しぶりね」

桜が懐かしそうに笑った。

「覚えてる？小さい頃は良く“桜をお嫁さんにするんだ！”ってプロポーズしてくれたわよね。それから、春には蓮華で出来た花冠をくれたわよね」

「…そうだっけ…」

妙に照れてしまい、はぐらかす様に知らない振りをした。桜はそれを、当たり前前の事のように見透かして微笑んだ。

「日向だけじゃないの。日向を引き取ったおばあさんも、その母もそのまた母も…私はずっと知ってる。もちろん織紗那様も」

ふと考える。

「織紗那の幼い頃ってどんな感じだったの？」

「…そうねえ…」

少し考えて

「日向によく似てるかも」

と苦笑いをしてみせた。

「僕に？」

「そう。いつも桜、桜ってね。だけど、時々寂しげな目で遠くを見

つめるの」

桜の横顔が、物憂げに見えて急に切なくなった。

「仕方ない事だけど、大好きな人達を見送るのは悲しい事ね。何度経験しても、慣れないわ」

桜は、どんな想いで見送ってきたのだろうか…。

何人も、何十人も、何百人も、幼い頃から自分の名を呼び、慕って来た者が、老い朽ちて行くのを、どんな想いで受け止めてきたんだろうか…。

「桜」

日向が歩みを止めた。彼より3歩程進んで、彼女が足を止めて振り返った。

「ありがとう」

静かに笑った桜の表情は、まるで泣いているかのようにも見えた。

「…日向に一つ、伝えてないことがあるの」

「何？」

.....

.....

.....

・
・
・
・
・
・

翌朝、案の定日向、陽太郎、泉の3人は見事二日酔い。
お女将さんが呆れながらに、二日酔いの薬をくれた。

「海ちゃん、若いからって、少し考えて行動なさい！」

「…あい…」

テレビの音も激しく頭に響くので、携帯を含めて音の出るモノは
全てオフにした。

泉が2人にも無言でお女将さんからもらった薬を差し出した。2
人共、無言でそれを受け取った。

ドンドンドン…

頭を叩く音がする。

ドンドンドン…

「頭を叩く音がするんだ」

辛そうに陽太郎が洩らした。

「かいとお〜♪」

ドンドンドン…

「……」

3人が押し黙る。沈黙を破ったのは泉だった。

「：違う。蝶子だ」

：正直：今一番会いたくないキャラクターだ。

「：日向：」

ついで、織紗那の声がした。

：ふと、彼の中で昨日話した桜との会話が思い起こされた。

「：どんな顔して会えばいいんだろ：」

無意識に口をついて出たセリフに、陽太郎が有り難迷惑にも答えてくれた。

「変な顔して会っとけ」

指先で鼻頭をぐいっと上げられた。

「……」

「あははは」

それを見て、テンション低く泉が笑う。

よっこらせ、と泉が重い腰を上げたのと同時に日向は陽太郎の指先を払い退けた。

「：昨晚：」

「ん？」

「祭りで彼女に好きだって言ったんだ。後で気付いたんだ。言っちゃいけなかったんだって。：通じ合えば通じ合う程、辛くなるって：」

現実に取り戻された。

決してハッピーエンドには成り得ない。

ただ：もう一目逢いたかった。

それだけの想いに、奇跡が起きた。

もう一目逢いたい：それだけの奇跡。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

「…後悔…してる」

この想いを伝えれば、気持ちが楽になると思っていた。ただそれが自分勝手な感情であり、結果的にお互いを更に苦しめる事になるとは思ってもみなかった。

愛情不足ゆえ、愛情の伝え方がわからない。そんな自分に嫌気が差していた。そんな感情も、所詮結論さえ述べてしまえば単なる“自分勝手”。

「…けど…彼女は笑うだろうな」

陽太郎が続ける。

「全てを受け止めて、最後までお前の前でだけとはと、笑い続けるだろうな」

…強い訳ではない。弱いからこそ、彼女は微笑むのだ。自分自身が崩れてしまわないように。

◆◆◆◆◆
(後書き)

こんにちは。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。
何より、お疲れ様です。

たまには後書きを書きたいと思います。

無事2人と仲直りした日向ですが、そう簡単にラブラブにはなれ
ませんW

しかも日向覚醒まで、まだまだかかります。

ストーリーもまだまだ続きます。

途中でうんざりするかもしれませんが、どうぞお付き合いください
ませ。

…あ、何かコメント等残していつて下さると大変嬉しいのですが…。

◆それは、地獄への渡し舟◆

あの日、あの時代、あの場所ところで…私が引き止めさえしなければ…。

別に桜は、二人の恋を否定したい訳じゃない。

寧ろ、幸せになってくれと願うばかり。

だからこそ、必要以上の恋愛感情を持って欲しくなかった。また、大好きな人が傷付くのを見たくなかったから。

あの晩、桜は言った。

「鬼沙那が消えれば、酒猫の血が途絶えた今、全てを保つ事は不可能になるの。織紗那様が戻り、私達も消えてなくなる。本当のサヨナラね」

…何も…言えなかった。

何の為に生まれ、何の為に生きてるの？

誰に問えばいい？

自分が存在する理由…理由？

彼女…織紗那に逢う為だけなの？

それが理由なら、全て消えた後…自分は何をしたらいい？

壊れそうになる。

「鬼沙那を、やっつけなければいいじゃん…他の奴等なんかどうだっていい」

醜い感情。多分、自分には人より醜い感情が何倍も育っているんだと彼は思う。

見た目とか才能とか優等生とか：そんなツマラナイツマラナイ単なる物差しに：まるで蛆虫の様に群がってきただけじゃないか。だから、腹の底で笑いながら、ドイツモコイツモ利用してやった。

幼い頃からずっと思ってる。

はっ！として、その場から逃げる様にして彼は部屋に戻った。

「…日向…ごめんね…」

二人が出逢わなかったら……

あの日、引き止めさえしなければ……

全ての歯車がずれる事はなかったと思う……

.....

.....

•

・・・

日向が煙草に火をつけた。次いで、陽太郎はそれを奪って消却した。

彼曰く、煙草は体力を奪うからよろしくないらしい。

泉に流されて部屋に入って来た蝶子が、きゃっきゃと笑いながら泉に飛び付いた。

“きゃ”の“K”の部分だけで、既に脳味噌は爆発寸前だ。

織紗那がそっと日向の顔を覗き込みながら囁いた。

「日向、具合はどうですか？」

「…最悪…」

色んな意味で、気分が悪い。

チラリと織紗那を見ると、確かに彼女は陽太郎が言った様に心配そうではあるが、微笑んでいた。

その笑顔を見る度、醜い感情や醜い本音ばかりがプツプツと湧いて来る。

幸せの権利ってなんだ？

幸せってなんだ？

初めから全ての結末がサヨナラなんて…

あり得ない…あり得ない…あり得ない…

「…が？」

「……」

「日向」

ふと呼び戻される。

「怖い顔しないで。少し横になったら？」

自分の身体に添えられた彼女の手を、彼は握った。確かに存在するし、温もりもある。

「…怖い…」

「え？」

怖くて…怖くて…怖くて…。

…織紗那…

僕は微笑む事すら出来ないよ…

セツナイ。

それは、お腹が空いた時より切なくて

“ありがとう”とか“愛してる”とか、どう伝えていいか解らない僕だけど

これが人を好きになる事なんだと気付いた。

「泣いてるの？」

「え？」

織紗那の問い掛けに、彼自身も含めて皆がぎよつとした。

「……」

日向は恥ずかしくなって、部屋を飛び出した。

「…なんか変じゃねえ？泣く程嫌なんかな、芸子」

泉が呟いた。

「腹痛くなっただんじゃねえ？ほら、飲み過ぎた翌日って、腹壊す事ない？」

「あー…あるある」

全く、呑気なもんだ。

神様が言ってるよ。

君は、幸せになっちゃいけないって言ってるよ。

君の幸せは、あげちゃったって言ってるよ。

余所の子に、あげちゃったって言ってるよ。

何の為に？

唯一：唯一、信じてた人。

唯一、暖かった人。

昨晚の川辺で腰を下ろした。

「…ばあちゃん…なんで死んじゃったのさ…」

お婆さんが死んでからあつという間だった。レディが来て織紗那が来て式神達が現れて…独りじゃないんだと思ったら、そんなに悲しくなかった。

お婆さんが死んだ実感もたいして沸かぬまま、気付いたら恋をして。

だけど…

だけど：

だけど、呼び戻された現実はまだ自分は“独り”だったって事。

なんだか知らないが、突然泣けて来た。

もはや号泣の勢いで泣いていたら、心配した織紗那が外まで探しにきた。日向は鼻水と涙で目茶苦茶になった顔を見られたくなくて、咄嗟に小川に飛び込んだ。

「きゃあ！」

彼女もまた驚いて飛び込んだ。

「日向！日向あ！！」

一応、様子を見に探していた泉がその声と水の音に気付き、小川の方に駆けて来た。小川に流れる2人を見て、泉も叫んだ。

「あゝ！！！かっぱかっぱかっぱかっぱ！！」

動揺して、意味不明な事を口走る。が、アイコンタクト&ジェスチャーで『陽・太・郎・を・呼・ん・で・来・る』と伝えると、一目散に駆け出した。

深さ約30cm程度の小川なのに、事態が訳解らない方向にどんどん大きくなって行く…。

「河童はどこだ！！」

日本刀を手に、真剣なまなざしで現れた陽太郎と、ひたひた水滴を垂らしながら、深さ約30cm程度のゆるやかな小川の中に立つ日向と目が合った。

陽太郎は突如泉に向かって刀を振り下ろした。泉の甲高い悲鳴が響いて、間一髪避けられた切っ先が地面に突き刺さった。彼は徐にそれを鞘へしまうと、今度は自分が甲高い悲鳴を上げながら疾走して消えた。

：どうやら、恥ずかしくなって立ち去った模様。

一呼吸置いて、泉が日向に怒鳴りつけた。

「何やってんだよ！？びっくりしただろ！！」

「…泉…」

続いて織紗那も怒り出した。

「日向！驚かさないで！！命を粗末にしないで！」

人は弱くて、ちっぽけだから、醜い気持ちも生まれるのかな？

醜い気持ちは、自分自身の弱さなのかな？

「…全てが…全てが消えてしまえばいいと思った」

織紗那の腕が日向の身体に絡み付く。濡れたままの互いの身体が、ひんやりとした違いの体温を伝え合った。

泉がそれをそっと引き離すと、向かい合った日向の頬に思いつきり拳を叩き込んだ。身体が吹っ飛び、再び川の中に身体が落ちた。泉も川の中に飛び込むと、日向の胸倉を掴み上げた。

「おセンチになるのは勝手だけどね、訳もわからん間に散々心配かけて死んでサヨナラ？少々自分勝手すぎやしませんか？」

また殴られた。

「いい加減目覚ませや！」

また：殴られた。殴られた痛みより、痛いものを感じた。初めてだ。

「陽太郎は：あいつは何にも言わないけどさ、誰でも痛みの一つや二つあんだよ！全てがなくなればいい！？？そんな事誰だって思ってる。お前見てるとイライラするんだよ！！」

何度も何度も殴り出した。

「泉様！それ以上は止めてください！！」

織紗那が止めに入るが、泉はそれを無視した。何かが壊れた様に、泉は日向を何度も何度も殴り付けた。

…ねえ…

もしかしたら、人は皆“独り”なのかもしれないね

甘え過ぎてたのかもしれないね…

皆が優しいから…

優し過ぎるから…

僕は

親なんかいないけど、それ以上に大事にされてきたんだ…

血の繋がりがあっても、大事にされない子もいるからさ

そう考えたら

恵まれてるのかな？

泉を無理矢理退けて割って入ってきた織紗那を、日向は強く、強く抱き締めた。

彼女の肩越しに見る泉の手には、赤い血がべっとりと付いていた。それでも不思議と怒る気にはなれず、ふと泉の顔を見上げると、彼の表情は泣いているかの様に寂しそうだった。

「ねえ、日向。私は、ずっと側にいてあげられないけど、一緒にいる間は貴方を守りますから」

君に見取られるのなら、死ぬ事なんて怖くないのに…

否、死ぬ勇気すらないのにね…

「…安心して。死ぬ勇気なんかないから」

織紗那は、本当は存在しない。だけど、彼女にしたら日向や日向のいるこの世界…もとい現在は、本当は存在しない。

「日向の痛みも苦しみも辛さも…全て共有出来ればいいのに」

彼女は、弱い僕に神様がくれた奇跡なのかな？

本当は僕が…彼女を支えなきゃいけない筈なのに…

全てを精一杯愛する為の

試練ってやつかな？

「…醜いよね…」

その言葉にはっとしたかの様に泉が気付き、血の付いた手を小川の水で洗い出した。

「…俺は悪くないぞ」

「わかってる」

顔に手をやる。幸い鼻血は止まったらしい。全く、いい男が台無しだ。

「…殴られて解ったよ。ありがとう」

「またいつでも殴ってやるぞ」

「それは遠慮しとく」

自分と向き合うのが怖かった。

本当の自分は醜くて、ドライで、臆病で…。

こんな自分でも良いって言う奴なんかいないって思ってた。

けど、人は完璧ではないから、そんな自分でも良いって。

作らなくても良いって。

「…織紗那、いいかな？」

「ん？」

身体と身体が境界線の様で邪魔だ。

「君がいなくなった時は、君を踏み台に幸せになってもいいのかな？」

彼女が優しく頷いた。

「日向が幸せになってくれるのなら、私は幸せ。踏み台ね、幸いだよ」

ありがとう。

「風邪引くぞ」

泉が照れくさそうに言った。

「お陰で二日酔いも冷めたよ」

思わず日向の表情に、苦笑いが生まれる。

「風呂でも行こうかな」

ありがとう。

…うん。

君との今が終わってしまったそのときは、前に、進むからね。



スパーン！と肩に叩き付ける様に手ぬぐいを掛けると、戌亥は景気良く温泉の扉を開けた。どうやら彼は大変に温泉を気に入ったよう。

内風呂を抜けて露天風呂に向かい、露天風呂の扉を開けた時、くぐもった湯気が晴れ始め、視界が開けて来た。

さて、入るかな。と思ったとき、晴れ始めた視界の向こうに少女が見えた。白襦袢を纏った髪の毛の長い少女は、年に似合わない赤い紅の乗った唇を引きつらせて不気味に笑った。

「……」

はっ、と気付いて取りあえず肩に掛けていた手ぬぐいを腰に巻き直した。少女は尚も不気味な薄笑みを浮かべ続け、只1度だけ「……また……」と言い残して消えた。

その場に呆然と立ち尽くす戌亥だけが残った。

「戌亥さん、どしたんですか？」

同じ様にタオルをスパーンと肩に掛けた陽太郎がやってきた。

「……否……」

戌亥にとって、懐かしい臭いがしていた。

.....

.....

・
・
・
・
・

・
・
・

『ゆうやくこやくえの、あかとくんぼく…』

少しだけ眠っていた様で、意識の向こうで唄が聞こえた。懐かしい
声を呼んで、そんな自分の声に驚いた。

『…ばあちゃん…』

しかし、呼ばれた人物はまるで夢とは思えないほどリアル、かつ穏
やかに微笑みかえしたのだった。

『なんだい？日向…』

もう一度呼びかけた時、目の前にいたのは老婆ではなく、織紗那で
あった。

「日向、風邪引きますよ？」

「あ…」

思わず、中途半端な声が出た。

川から上がり、陽太郎達と入れ違いに風呂に入った日向達3人だ
ったが、泉だけ先に行き、遅かった織紗那を待つ間になんとなく廊
下でうたた寝してたらしかった。

「日向、よだれ」

「あ…」

再び中途半端な声が出る。袖で拭うと立ち上がった。

「あのね、私達は夕飯のお手伝いを、日向達はまた宴会の準備を
するんだそうですよ」

「そっか」

寝言は言っちゃいないかと少し心配になる。

やはり言っていた様で、恥ずかしながら案の定しっかり突っ込まれた。

「ばあちゃん」とは、酒猫家の者ですか？」

「あ、うん」

頭を掻きながら、思わず紅潮した顔を俯いた。しかし、織紗那は別段気にする素振りもなく続けた。

「そう、お婆さんは何故子供を作らなかったのかしら？」

日向が答えた。

「…生まれる前に死んじゃったんだって。旦那さんも戦争でなくなつたから、それ以来子供も出来なかったんだって」

「…戦争で…」

そう呟き、彼女は黙りこくつた。

“戦”で大切なモノを失う辛さは、多分彼女が一番良く知っている。日向も特別返す言葉もなく、共に部屋へ向かった。

.....

.....

.....

・・・

戌亥は露天風呂で感じた懐かしい臭いを追って外へ出た。懐かしい臭いはモノのそれではなく、魂からにじみ出る様な雰囲気的なものであった。

もしや、と思った。だが嫌な予感はある様で、再び目の前へと現れた少女に息を飲んだ。

「私を捜しているの？」

「…椿…殿？」

少女は尚も微笑んだ。

「ずっと、ずっと殺してやりたかた」

「……」

唇の端が苦痛に歪むのが、僅かに見て取れた。だが、そんな彼女に近付くと戌亥こと巳太は、構うことなく椿を強く強く抱き締めた。

「お捜ししましたぞ」

「…ぶ…」

椿は巳太を突き飛ばした。

「無礼者！！」

「椿殿？」

「私がどんなに苦しくて、どんな想いでいたか、巳太にはわからないでしょう！？地獄を見て、恥をかかされ、死んだ方がいいが恨むに恨めず、上にもあがれずに朽ち果て消える所を鬼沙那様に拾われた」

「…桜…の中に眠っていたのですか？」

桜は、あの枯れた桜を指していた。彼女はコクンとうなだれた。

「桜に入らなければ、私はあの後すぐに悪霊になっていた」

巳太は驚きのあまり、言葉を失った。

900年近くだろうか、捜し続けていた“彼女”は、自分のすぐ

近くにいた。

「…私は…」

椿が巳太へと手をかざすと、彼の身体は後方へと弾き飛ばされた。だが、彼は何の抵抗もせずに、ただただそれを受けた。

「巳太を忘れられなかった。信じてたから」

願った筈の幸せは、単に彼女を苦しめただけ。巳太はそれを知っていたから、あの日、後を追った日、学んだ事だったから。痛め付けられても、仕方ないと思った。

自害した魂は二つに別れた。一つは鬼沙那、一つは織紗那。同じ主人であったならば、彼女なら共に極楽へ行ける道を示してくれたような気がした。

「椿殿」

打ちのめされた身体を起こして、巳太が囁いた。

「拙者、もう貴女様を離しはしませんぞ。地獄へ、共に落ちましよう」

自害した魂は上がれない。ましてや椿は、鬼沙那の手に落ちた“恨み”や“怨念”のそれだ。悪く言えば“悪霊”。

「地獄へは、巳太、貴方だけが逝け！」

再び巳太の身体が吹っ飛ばされた。圧により一瞬呼吸が止まる。その後、呼吸と同時にゲホゲホと咳き込んだ。

「…巳太、私はもう戻れないのよ」

椿が悲しくそう呟いた気がした。

「日向の魂…持っていかなきゃ」

噎せ返る巳太から踵を返して歩き出した。

「…椿殿、やめてください」

その声に歩き出した彼女が足を止めて、少しだけ振り返る。

「織紗那様は拙者の恩人、敵になる様な事はやめてくだされ。それに…」

女将さんがデジカメを片手に、黄色い声を上げている。

「ひうちゃん、かわいいわぁ♪」

撮った写真はどうなるのか、どこへ行くのか…少々不安に思う。

いやいや、そんな事より…。

「みっちゃんさん、今夜は何したらいいんですか？」

尚もシャッターを押しながら彼女は答えた。

「昨日と同じよ」

新たな疑問。

「衣装はこれで？三味線ですよね？」

女将さんは、さも当然の事のように答える。

「そうよ」

「おかしくないですか？」

「何言ってるの！洋と和のミスマッチさが斬新さを生んでいるのよ。人気でるわよ」

…オカシイだろ！？

「……」

口に出せないから、心で叫んだ。顔で笑って、心で泣いて。どっかで聞いた様な台詞が頭をかすめる。が、明らかに意味は違う。

そして陽太郎がやってきた。やはり、おかしな格好だ。日向は、何故陽太郎が衣装に疑問を抱かないのかを不思議に思う。

「わお！すげえ」

「その言葉、そっくりそのまま返す」

フリルのシャツに金色の刺繍の入ったタキシード、ついでに怪しげなマントをひらり。しかし、背が高いからさまになっている所が見えてカナシイ。

それは多分、日向も同じだ。無意識に溜め息が出る。

「ひうちゃん♪ハイ、チーズ！！」

取りあえず、カメラ目線でピースした。



「織紗那殿」

宴会のお手伝いにと廊下を行き来する織紗那を、戌亥が呼び止めた。

「どうしました？」

「少し、よろしいですか？」

「……」

なんとなく判る傷付いた風な様子に、断る理由もなく頷いた。

少し川寄りの人気のない場所へと歩く。そこで突如、戌亥は織紗那へと恭しく片膝をついて頭を下げた。

「拙者、悪霊になる所を酒猫家に拾われてから、お仕えして参りました。しかし、今回ばかりは…止められませんでした。否、拙者には出来ません。この様な事を言える立場ではないのは百も承知の事…」

言葉を濁す戌亥を、敢えて咎め様とはしなかった。そして、彼女は次の台詞を待った。

「…900年、捜していたのです。共に地獄へ落ちる覚悟も出来ております。…椿殿を助けてください…」

…彼女なら、織紗那なら、極楽浄土への道を教えてくれる気がした。

あの日救えなかったから。

今度こそ、救いたい。

もう二度と離さない。

もう二度と、一人にしない。

やっと見つけた

愛しい人。

地獄とはどんな所なんだろう？

痛みや苦痛を味わいながら、きっとじわじわと生きて行くんだろうな。

死ぬ事が出来なくて。

でも大好きな人を“恨む”事の方が痛くて苦しくて悲しくて切なくて…。

それでも良かったんだ。と、その時は思った。

存在さえしていれば、いつかきっと会えると思っていたから。貴方が私を見つけてくれると思っていたから。

今度は離さないなんて、もう遅すぎるよ。

貴方を恨む事でしか、私は存在できないんだよ？

貴方がいれば地獄の苦痛もきつと耐えられると思うけど、貴方には地獄に来て欲しくないな。

ごめんね…

ごめんね…

本当は判ってたんだよ。

ちゃんと心は繋がってた事。

だからきつと、“駆け落ちしよう”なんて手を差し延べてくれたら、私は諦めきれてたから。

強がりとか意地っ張りとか、私の性格。

嫌な、性格。

せめて、貴方の手で私を地獄に送ってください。

地獄への渡し船は、貴方がこいでください。

今度出逢えるのなら、幸せな恋人同士になれるといいな。

貴方と二人、桜坂を歩きたい。

息を切らせた私の手を、無言で引いてくれるの。

愛しています…

死して尚

私は貴方を、愛しています…

.....

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

静かに寝息を立てる日向を、椿が静かに見下ろしていた。そこに戌亥こと巳太の姿はなく、好都合だと彼女は思う。

そっと椿が日向の顔に手をかざすと、彼の口から細く煙の様な物が立ち上り始めた。それはやがて一つにかたまり、日向の額のすぐ上で、拳大の光の玉となった。フワフワと浮いたままのそれを、彼女はただ呆然と見つめていた。

やがて落ち着いたかの様にその光を手にとると、光は椿の手の中で消えた。

「!?!」

パツと電気がつけられる。辺りが急激に明るくなった時、首元で不気味に煌めく刃にやいば気がついた。

「そう簡単に殺されても困るんだ」

陽太郎が言った。ふと気付くと、見下ろした先には日向ではなく、ただの紙人形が落ちていた。

「…人形ひとがた…」

「何故そこまで日向に執着するんだ？ 目的は酒猫家だろ？ アイツは酒猫だが酒猫の血は引いちゃいないよ」

椿は冷たく笑った。

「さあね。日向の魂はご馳走だと言っていたけれど、私にはどうでもいいのよ」

椿は首元でギラつく美鏡の刃を掴んだ。ぎりぎり手の平に食い込み、やがて刀からボタボタと赤い血が滴り落ちた。

「ふうん…。霊体でも切れるのか…」

冷めた様に眩くと、驚く陽太郎の腹部に手を当てた。刹那、彼の身体は勢い良く背後に吹き飛ばされ、壁に叩き付けられた。

「…っ…!?!」

言葉にならない激痛に一瞬呼吸が止まる。

「ねえ、巳太は？」

「…巳太…?」

陽太郎が小さく聞き返したと同時に、ふと目の前に椿の顔が現れた。尚も彼女は顔を近付けると、今度は彼の前髪を鷲掴んで顔を無理矢理に上げた。

「あんたも死にたい?」

不気味に笑いながら言う。

ぶんっ!と気合いで刀を振り切ると、次の瞬間には 元いた場所に椿が立っていた。

「皆殺し。なら、さびしくないでしょ?」

咳き込む度、叩き付けられた背中が激しく痛む。ズキズキする背中を丸めながら

「こなくそがー!!」

と、気合いで立ち上がった。

「あら、かっこい」

血の滲んだ手の平を舐めて、彼女は見下した様に眩いた。

「あんた、椿ちゃんだろ? 戌亥サンから少し聞いた」

「…戌亥…」

椿が大袈裟に笑い出した。

「そうか、見ないと思ったら。アイツ、イヌっところに成り下がったか!!」

…巳太…

こんな私を

貴方はまだ愛してくれますか？

助けて

くれますか？

「黙れ！クソガキ！！」

再び陽太郎の身体は吹っ飛ばされた。

二度目の衝撃。視界がぼやけて、気付いた時には堪らず吐いていた。

(…ったく、日向に掃除させよ…)

余裕もないくせに余裕っぽく笑った。

「戌亥はどこ？」

今度は名を変えて、椿が同じ人物を尋ねた。

「さあ？逢ってどうすんの？キスでもしてもらおう？」

言い終わると同時に彼は頬を殴り飛ばされた。

「…っ…！！？」

ボクシングで慣れてる…と言いたい所だが、残念ながらにマウスピースのない口内はあっさり切れた。

「恨んで、恨んで、恨んだ男だ！！」

恨んで

恨んで

恨めなかった…

恨めなかったよ…

「泣く程に？」

「!？」

椿の手がピタリと止まる。

「本当は、ずっと逢いたかったんじゃないの？悲しくない？好きな人恨むの」

カナシイよ。

だけど

だけどさ…

「五月蠅い！」

椿は再び陽太郎を殴り始めた。

「五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！…」

…已太…

…巳太…

ねえ

…助けてよ…



椿が小さく

「…巳…太…」

と呟く。

ぐったりとする陽太郎から殴り付ける手を止めて、椿は彼の胸倉を掴んで顔を近付けた。

「…巳太は…どこ？」

深呼吸と同時に、陽太郎は静かに目を閉じた。

「陽太郎殿、すまない」

背後で戌亥の声があった。咄嗟に振り返る、椿。

「…巳…太…」

「…椿殿。泣くのはお止めくださいな。巳太は側にいますよ」
無意識のうちに溢れ出していた涙は、巳太を目の前にして益々止まらなくなる。

「…巳太…怨めしい…」

巳太は、コクリと頷いた。

「貴方が怨めしくて、憎くて、殺してやりたいぐらい嫌い」

「…もう死んでますよ」

彼は、ふっと笑った。

「笑いなさいな、殺されてもいいから」

巳太…

ごめんね…

椿は

私は、幸せにはなれなかったよ。

「巳太、逢いたかった。“嫌い”だって伝えたかった。ずっと“恨んでる”って伝えたかった」

彼女はそっと近付くと、彼に口付けをした。

そして、一言こう告げた。

「…ありがとう…」

風だ。

瞬間、気味の悪い風が部屋中を駆け巡り出した。

天井が割れて、割れ目から巨大な目が現れた。目が徐々に開き始める。

「地獄の扉が開くわ!!」

一声と共に、不気味な風渦巻く部屋へと織紗那が飛び込んできた。

「織紗那樣っ！」

「……」

織紗那は札を一枚取り出すと、何やら呪文を唱えてそれを天井の目に投げ付けた。札は目を繋ぐ瞼と瞼の間に張り付き、開花を止めた。

「…やめて…」

椿が呟いた。地獄の扉は天井に出来た目と共に開く様で、足下にも小さな目と同じぐらいの割れ目が生まれた。

「やめてよ」

椿の声に反応してか、足下の割れ目から鎖らしきモノが伸びて椿の身体を絡め出した。手に足に首に…絡み始める。

再び強い風が、織紗那の札を捲り取った。徐々に目が開き始め、足下の割れ目も開き始める。ずるずると椿に絡み付いた鎖が、彼女の身体を引きずり込もうと戻り始めた。

今度は藁人形を取り出した織紗那に、戌亥は待てと手をかざした。
「…申し訳ない、織紗那殿。もういいです。もう…。拙者は椿様と地獄へ逝きます」

「…戌亥…」

黙って見送るしかないのか？織紗那は、ただただ呆然とするしかなくなつた。

「椿様、逝きましようか？」

鎖に絡められながら、椿は叫んだ。

「巳太のうつけ者！…嫌いだって言つた筈よ。来ないでよ！…」

お願いだから…

巳太は来ないでよ…

巳太は構う事なく椿を抱き締めた。

強く

強く

心から

強く

…巳太…

突き放せないよ…

そんなに強く

抱き締めないで…

椿の身体と密着する巳太の身体が、尚も鎖に絡められてずるずると引きずり込まれる。

ただ立ち尽くしたままの織紗那の背後から今度は日向が現れた。

「おかしいよ！！」

全員がハッとして、日向に目を向けた。

「だって、幸せて誰にでもなる権利がある筈だろ！？今は平安時代じゃなくてさ、平成なんだよ！！市民平等なの！！」

「…日向…」

その言葉に背中押されたかの様に、固まっていた織紗那が藁人形を投げた。

地獄の目が開き切る…

椿と巳太に絡んでいた鎖がするすると解け始め、尚も伸び続けていた鎖も全てが藁人形に絡み出し、二人の代わりに人形が引きずり込まれた。

藁人形が消えると同時に、目も割れ目も消えた。

辺りが何事もなかったかの様に静まり返る。

「身代わり人形？」

巳太の腕の中で、椿の力が抜けた。座り込む彼女を、巳太が支えた。日向が2人に向かって、泣きそうな声で言った。

「そんな結末…なんか嫌だ。悲しすぎるよ…うまく言えないけど、地獄に逝ったって救われない気がするから…」

何故か涙が溢れてきた。

「天国に行く方法考えようよ」

溢れ出た涙を、ゴシゴシと拭い去った。

「…日向殿…」

極楽浄土。

縁のない所だと思っていた。

「天国…極楽に行けるのかしら…」

椿の力ない問い掛けに、巳太は「きっと」と答えた。

「もしも極楽へ行けなくとも、巳太は椿様にお供致します。例えそれが地獄の果てでござっても」

ありがとう。

死しても尚、温かいんだと椿は思う。

想う心、抱き締め合う温もり、あの頃より幸せだと思う。

「日向、ありがとう」

織紗那が言った。

「え？」

間拔けな疑問付に、彼女は満面の笑みを返したただけであった。

「それより、日向。陽太郎様を」

日向と戌亥の代わりにボコスカにされた陽太郎。

「陽ちゃんゝ、陽ちゃん風邪引くよゝ」

隅に転がっていたので、日向は近付いて頬をペチペチと叩きながら呼び掛けた。少しばかり間を置いて、ううんと唸りながら陽太郎はうつすら目を開いた。

「…ひ…ひなこ？」

…衝動的に、トドメを刺してしまった。

のびきった陽太郎を引きずりながら、片付けの邪魔になるので取りあえず廊下に出そうとした時、

「おこんばんは！」

と声がした。聞いた様な声。

人がいる筈のない窓に、人が座っていた。顔面蒼白でガタガタと震えながら、椿が巳太にしがみついた。

「…き…鬼沙那樣…」

「あんたも結局そうな訳？」

突如伸び始めた無数の手が巳太の身体と椿の着物を掴んだ。

「いやああああ！！！」

巳太の身体から引き離されようとする。

「役立たず」

ポツリと呟いた。

「鬼沙那！やめて」

織紗那の声に、椿を引きずり込む手がピタリと止まった。

「よっ！やめてあげたけど？」

意外な行動に、驚いた。が、次の瞬間織紗那の身体は宙に舞っていた。

陽太郎と同じ様に、激しく叩き付けられた。

「…っ…！」

「織紗那！！！」

かすんだ視界の中、日向の呼ぶ声がした。

(日向…逃げて…)

鬼沙那が織紗那の髪を鷲掴んで引き上げた。

「日向と交換は？まあ、このままあんたを殺しちゃえば、交換もクソもないけどさ」

掴んだ頭を壁に打ち付けた。鈍い音がして、壁にうつすら血が付いた。

「あはぁ♪簡単には、殺さないよ！」

言い終わると同時に、鬼沙那は彼女の腹部を蹴り付けた。

「…っあ…!!」

声にならない悲鳴が飴する。

「まだ死ぬんじゃないよ。あんたを、あんたを苦しめ傷付けたい。憎しみと恨みと怨念で満たして、その身体は私がもらう」

血と汗で汚れ始めた織紗那の顔を、鬼沙那はベロンと舐め始めた。耳元で小さく囁く。

「…日向食べたらさ…最高にイイんじゃない？」

目的は

日向ではなく

私？

「…いや…」

小さく出た台詞。

「あんたの親父も食べたしね、怨ましいでしょ？私が。織紗那、今、

日向も食べてあげるからね」
「…いや…」

無力に

ちっぽけに

ただされるがまま

見てる事しかできないの？

視界が徐々に涙で 滲む中、鬼沙那が日向に目を向けた。

（お願い！日向、逃げて！！）

主人公、腰が抜けて動けない様子。

…実に、情けない。

◆家出◆織紗那編◆

軽やかに弾む鞠の音。糸を幾多にも重ねられてできた鞠は、遊ぶには少々難しい。

齡6つになろうかと言う少女は、真剣な面持ちで鞠つきを繰り返す。

空からは桃色の花びらがひらひらと舞い落ち、少女の黒髪へと時折色を乗せた。

ふとした拍子に鞠が起動を外れて転がり始める。

ころころと転がりながら、縁側から足を垂らし、腰掛けていた青年の足に当たってそれは止まった。

青年が鞠を拾い上げて言うた。

「上手くなったね、織紗那」

少女は満面の笑みで駆け寄りながら返事を返した。

「とと様もやる？」

とと様、所謂少女の父は苦笑いを向けた。

「私は上手くないからね」

そして、鞠を渡した。

「とと様と同じ色ね」

鞠を受け取りながら少女は嬉しそうに言う。

「そうだね」

「でもね、りしゃなはとと様の方が好きです」

「ありがとう」

そして、少女は再び鞠つきを始めた。

青い鞠。

青い眼。

幼女は、殿方とは皆青い眼をしていて、髪はお日様に近い栗色をしていると思っていた。

父以外の生きた男は知らないし、知りたいとすら思わなかった。それより、2ヶ月程前に屋敷の門を抜けた母の行方の方が気になっていた。

けれど、寂しいとは感じない。同じ屋敷にいながらあまり顔を合わせる事はなかったし、優しい父もそのままだから。

ただ、父は以来少しだけ元気がなくなった様な気がした。

そんな時はお腹が空いているんだと、台所から饅頭を持ってきては父に渡した。

いつもと変わらない昼下がりのある日、唐菓子を手の平いっぱいを受けて、いつもと同様に父親の側へと駆け寄る。

なんだか深刻な表情もまだ幼い少女にはわからず、お腹が空いているんだとそれを差し出した。

「とと様、食べてください！お腹がいっぱいになったら、幸せにもなれますよ」

だって、そう教えてくれたのは他でもない父様だから。

父様は唐菓子をつだけ摘むと、無理に微笑みを浮かべながら幼女の頭を撫でた。

「織紗那は、ずっと父様の側にいてくれる？」

父様とは対象的に、幼女は満面の笑みを浮かべ、はい！と言った。そんな愛娘を、父様は強く強く抱き締めた。

「良い子ね」

鬼沙那が笑う。

固まったまま動けないでいる日向の首筋を、そつと舐めた。

柔らかな生暖かい感触が首筋を巡り、恐怖と気持ち悪さに卒倒しそうになる。

酷い頭痛に顔をしかめながら、織紗那は身体を俯せへと反転させた。

「…やめ…て…」

必死で近付こうと、腕を伸ばしては前に進もうと身体に力を込める。が、朦朧とする意識に激しい痛みが拍手をかけ、どこにどう力を入れていいのかさえわからない。

「…お願い…やめて…」

溢れた涙が頬を濡らし、それは頭部から流れ滴る血液に混じり、まるで血の涙を流しているかのようにも見えた。

「あんたは、そこで大人しく見てな。自分の無力さに、狂い死にでもするがいいわ」

冷たい言葉が、モロに突き刺さる。

「私が…私だけを…痛め付けば…いいじゃない…」

織紗那から嗚咽に紛れて洩れた言葉。

鬼沙那はただ満足そうに笑うだけであった。

「…さあ…日向…まずどうしてあげましょうか？」

鬼沙那の腕が日向の身体に絡み付く。ひんやりとした。

今度は彼女の唇が彼の首筋をなぞる様に移動する。

「…やめ…」

やめろ、と言いたかった。それなのに、言葉は紡がれる前に鬼沙那の唇によって塞がれた。

冷たい何かが、日向の口内から鬼沙那の体内へと移動する感触を彼自身感じていた。

突き放したいのに突き放せず、冷たい何かが抜けて行くのと比例して妙な脱力感が襲うのを大人しく感じているしかなかった。

強張っていた身体も次第に自分では支えていられなくなり、冷たい何かが抜け切る頃には、鬼沙那に身体を預けていた。

彼女は日向から唇を離すと、恍惚の笑みを浮かべながら舌なめずりをした。

「思った通り、甘い生気だったわ」

ニツコリと織紗那に向き直る。

ただ悔しくて、周りを見渡すものの誰一人手助け出来る状態ではなかった。

倒れたままの陽太郎に、身体を半分以上飲み込まれた状態の戌亥と椿。

それに、この部屋自体が結界によって、外部からの侵入を閉ざされているよう。

織紗那の脳裏を今蠢くのは、遙か昔の忌まわしい思い出。

あの頃と同じだ、あの頃と被って見える。

織紗那の握り締めた拳が、敷かれた畳を叩き付けた。

『…お友達に…なりましょう…』

桜とは違う声が、桜の木から聞こえた。

『…ねえ…一緒に遊びましょう？』

青い鞠を手にして、その声に織紗那は呆然と聞き入っていた。

『ねえ…ここから出してよ…』

薄紅色の花びらが、その声に反応するかのようになり、ゆらゆらと降り注ぐ。

「しゃくら？」

幼女がぽつんと問うた。

『…私は…鬼沙那^{きしゃな}…』

「きちゃん？」

『そう…貴女に…逢いたい…』

織紗那は困った顔をした。

『ここは…暗くて…苦しくて…寂しいの…』

鬼沙那の啜り泣きが、聞こえてきた。

織紗那は言う。

「どうしたらいい？」

鬼沙那は答えた。

『あなたの…靈力を…私に分けて欲しいの』

「れいりよく？」

『そう。私の身体に手を当ててくれればいいの』

そして、言われるがままに織紗那は桜の木に手を置いた。

木の中から鼓動が生まれる。

…ドクン…

…ドクン、ドクン…

その鼓動は徐々に鮮明さを増して行く。
やがて、木がほんのりと熱を帯びてきた気がした。

「織紗那！」

突如、背後から父様の叫び声が聞こえた。
肩をびくつかせ振り返る。

「とと様？」

「織紗那！直ぐに離れなさい」

言われた通りに幼女は父様の元に駆け寄ろうと手を離した。が、その手首を何者かが掴んだ。

「?!」

『…もう…遅いわ…』

木に向き直ると、桜の木から人とは言いがたいモノが薄笑みを浮かべながら、織紗那の手首を握り締めていた。

真っ黒い煙の様なモノが、人らしい姿を形取り、木から顔と右手首より先だけがぬっと出ている。

「うああ…」

悲鳴にもならない声が洩れる。青い鞠がポーン…と地面を転がった。

幼女を見て掴むそれは言うた。

『私が…鬼紗那…』

「織紗那！」

父様が一枚の札を投げ付けた。

札は桜の木から出るその手に当り、手と同時に一瞬にして燃え尽きる様に消えてなくなった。

「鬼よ！大人しく帰れ」

『…鬼…』

織紗那を掴む鬼の右手が父様の御札により消えた為、少女は自らの力に転倒するも、その場から離れて大好きな父様の背後に隠れることができた。

睨み付ける鬼の眼が、織紗那を捕らえたまま動かない。

『…元々同じ魂でしょうに…元在りし元へ帰るかの如く、一つになりましょう？ わらわには、お主の肉体からだが必要な…』

そう呟くと、鬼沙那の身体が木から抜け出した。

それはやはり黒く煙の様なものが、人を形どっただけの奇妙なすがをなしていた。

「この娘には、命に変えても手出しさせぬ！」

鬼が薄笑み浮かべて言う。

『お主、来流須くるすだな？ 丁度良い。お主だけでもこの身体をもう少し自由に動かす事が出来るだろうな。望み通りにしてやろう』

鬼沙那が一步、踏み出した。

「来流須？」

震える瞳で織紗那が呟く。そしてふと父を見上げれば、金色の髪の毛の間から覗く、青色の眼が陰しく鬼を捕らえていた。

鬼は言う。

「命が惜しいでしょ？ その娘をお渡し」

父が言う。

「ならん！」

鬼が顔を歪めた。

「ならば、貴様が死ね」

ふと鬼が手を翳した。瞬間、辺り一面に血飛沫が舞う。

一瞬何が起こったか解らず、ただ呆然とする中、大好きな父の悲鳴

にて織紗那は現実呼び戻された。

父の左肩から下がない。だくだくと足元に、まるで滝の様に父の血液が滴り落ちる。

父が右手で傷口を押さえながら呟いた。

「織紗那、屋敷の中へ」

：屋敷の：中へ：？あまりの出来事に、その言葉が理解出来ず、更に父の着物を握り締めて言った。

「お前は、立派な道師になるべき娘なんだよ。強く、強くなれ。強くなって、鬼を：鬼沙那を：」

「：ブツブツ五月蠅いよ」

再び鬼が父へと手を翳した。今度は父の右脚が飛んだ。

「さあさあ、次はどこにしましょうか？」

震えて声が出ない。

その場から動く事すら出来ないでいる。縁側へとどっと倒れた身体をもたげて、父が叫んだ。

「戌亥！戌亥！！」

ゆらり：と、幼女の横に黒ずくめの男が現れる。

「織紗那を！」

戌亥は怯え固まる織紗那を抱き抱えて言った。

「主様！」

父はゆっくりと微笑みながら言った。

「：後は：頼んだよ」

屋敷へと駆け込む2人を鬼は追うが、壁にでもぶつかったかのように弾き飛ばされた。それは一瞬にして黒い煙よろしく原形を失い散るが、離れた場所にて姿を取り戻した。

「つまりね結界なんぞ張りよってからにっ」

鬼沙那の眼が再び父へと向けられる。

「まあいい。精々悪足掻きすれば」

だが父は

「悪足掻きかどうかは、私が死んでから決めるんだな」

と、血塗れの右腕を黒いモヤの様な鬼の土手っ腹に突っ込んだ。

「…悪しき魂よ…清き天の裁きを持って…」

鬼沙那の身体に、金色の亀裂が走り始める。

「この…命と引き換えに…」

「…こざかしい！」

鬼の手が父の腕を掴んだ。ミシミシと骨が砕け始める。霞み行く意識の中最期に呟く最後の言葉。

「…封じたまえ」

同時に鬼に掴まれた右腕が千切れ飛び、鬼の発する断末魔の悲鳴と共に鬼沙那の姿が消えた。

桜の木から声がした。

「…おのれ…人間の分際で…！必ずや…必ずや…お前達一族に…地獄の苦しみを…味合わせてやるからな…」

声が消えると同時に、父の意識も消えた。戌亥が、顔を伏せて呟く。

「…必ず、織紗那樣をお守り致します」

姿を消していた式神達が一人、また一人と姿を現しだした。皆が涙を流していた。織紗那はただ一人理解出来ずに、戌亥に抱かれたまま彼の胸に顔を埋めていた。

否、理解出来なかったのではなく、したくなかっただけだ。それを受け入れたのは、もっとずっと大人になってから。誰もが優しくかったから。



強く、なったと思っていた。あの時より強く。だが、鬼沙那もまた強くなっていた。

鬼沙那が人形のように身動きしない日向の身体を突き放すと、力なくどっと仰向けに倒れる彼へと手を翳した。そして冷ややかな眼で織紗那を目配せさす。

「覚えてるかしら？まずは、左腕、そして右脚…だったかしら？ねえ？」

織紗那が力の限り言葉を発する。

「…れば…？」

「なあに？」

鬼はイヤらしく問い返す。

「どうすれば…助けて…くれるの…？」

言葉になった瞬間、それ以上は嗚咽にしかならなかった。

鬼沙那は高笑いの後、ゆっくり織紗那へと近寄り、頭を踏み付け言った。

「お前の苦痛と、絶望を見たいわ。地獄の業火にその身をじわじわと焼かれ、綺麗なお目めを串刺しにする。最期は、悪しき虫立ちにハラワタを食い潰されて死ぬ様な、そんな酷く醜く悲惨な最期を味わわせてやりたいわ」

ぐりぐりと足元で転がしていた織紗那の頭部を、蹴飛ばして続けた。

「けど、アンタは私のモノ。私にその肉体を寄越しな。それで私は完全な支配者になる…」

鬼沙那が今度は彼女の頭部を鷲掴んで続けた。

「もう、誰にも支配されることのない存在にね」

「…日向を…」

解ってる。正しい判断ではない。決して…正しくはない。

「…それで、日向を助けてくれますか…？」

鬼は薄笑み浮かべて言う。

「いいだろう」

ドッ…と、鬼沙那の手から織紗那が離された。

日向の中で声が聞こえる。

ただ漠然とし過ぎていて、その主も、内容もわからない。

けれどその声は徐々に鮮明さを増し、彼の脳へと直接叩き込まれた。

『ご苦労、だったな。ありがとう』

…意味が、わからない。

ただ一つ言えるのであれば、自分の身体が別空間にでも飛ばされた様に、自分で自分がコントロール出来なくなっているということ。

意識だけが閉じ込められた様にそこにいて、全て見つめているのに、ただ見守っているかの様に自分の行動を見ているだけ。

悲しいけど、悔しいけど、“日向”はそこに存在していなかった。

鬼が織紗那の手を離れた瞬間だった。

鬼沙那の胸を貫通し、織紗那の左頬スレスレに月華丸が突き刺さった。

口からどす黒い血を吐き、カラクリ人形のように鬼沙那の首が90度くるりと回転する。

「…貴様…」

ゆらり、と立ち上がったのは日向だった。けれどそこにはいつもの呑気さも、優しさも暖かみもなく、ただ凍て付く眼で鬼沙那を見据えていた。

日向の姿をしてはいるが、明らかに日向ではない。

「このガキがっ！」

奇声を発しながら襲いかかる鬼沙那をひらり…と優雅に避けると、彼は突き刺さったままの月華丸を引き抜いた。

再び苦痛に耐え兼ねて、鬼が奇声を発する。

まるで舞いでも舞っているのかと思える程、優雅に華麗に、そして無駄のない剣捌き。気付けば鬼沙那の両腕がなくなっていた。

「…貴様…何奴！」

シュウシュウと、鬼の口から蒸気よろしく邪気が立ち上る。

彼が答えた。

「月影^{げつえい}。貴様の腐った頭に叩き込んでおけっ！」

…月影…？月華丸様…？

「おのれ！次に会う時には、必ず食ろうてやるから覚えておけっ！
そう一言吐き捨てると、鬼沙那はドロンと姿を消した。

鬼が完全に消えたのを確認して、月影は凍て付いた眼から優しい眼へと変え、織紗那の前へと跪いた。

その細い指先で織紗那の前髪を掻き分け、悲しげに微笑んだ。

「申し訳ない…本当に…本当に、近くにいたのに、申し訳ない…」

…ダメだ…と、思った。

けれど涙は止まらず、弱々しい手で月影の手を握った。温かい。確かに、温かい。ずっと求めていた温もりだった。

「月影…様…」

彼は言う。

「月華丸でいいよ」

と。

そして、尚も続けた。

「ずっと、待っていたんだよ。逝く度生まれ変わろうと、何度朽ち果てようと、また巡り逢えるって。ようやく、逢えましたね」

痛いとか、苦しいとか、辛いとか…今は感じない。
ただ

「月華丸様 あゝ…」

とだけ発し、彼にしがみついて泣くしかなかった。

…愛しています…

心から、愛しています

例え、時が巡ろうと…

例え、天が二人を引き裂こうと

やはり、貴方を

貴女を

愛しています

今、そこに日向はいない。

彼女の中にも、日向の中にも日向はいない。

けれど、確かに日向は存在し、月影も確かに存在するのだ。

一つの肉体に二人の魂が存在する。

『…なんなんだよ…』

日向の中で、日向が叫ぶ。

『どうなってるんだよ』

それは、泣き声に近かった。泣き崩れる織紗那を包んでいるのが自分ではなく、彼女が求めているのも自分ではない。

逃げ様にも逃げられる筈もなく、ただ残酷な程その現状を見せ付けられていた。

『お願い…だから、やめてくれよ…見たくないよ…聞きたくないよ…』

織紗那の声が、何度も何度も響く。

「…月華丸様…ずっと、ずっと、お逢いしとうございました…お慕いしていると、伝えとうございました…」

なんでこんなに優しいのだろう、暖かいのだろう。ズルイくらいに、彼はオトナだ。

織紗那が一呼吸置いたのを見計らい、月影は言う。

「神様は残酷だね。だが、時に温かいよ。もう行かなきゃ。彼の身体がもたないからね」

ハツとする。

「いや…！ いかないでくださいませ…！」

縋り付く織紗那の唇へそっと口付けを交わすと、優しく身体を引き離した。

絶望に崩れる織紗那を擦り抜け、今度は陽太郎の脇に跪いた。

「…美鏡…、昔のよしみだ。頼むよ」

日向の中の日向がシャットダウンされ、強制的に現実へと戻される。別物だった自分の指先が動くし、身体だって酷くダルくて節々が痛い。

「…ふざけんな…」

吐き捨てた言葉も、ちゃんと空間へと響く。



「ふざけんな！」

その声に反応したのか、陽太郎の顔がピクリと動いた。

「：オイシイとこだけ持っていきやがって：。ふざけんな、ふざけんなよ。：敵う訳：ないじゃんか：」

泣き声のようになるが、泣いちゃいけないと思った。ぐっと天井を見上げる。涙が零れない様にしたが、熱くなる目頭は止められず、それを数回深呼吸して落ち着かせた。ふと織紗那を見れば、何かが事切れたかの様に、ボロボロ泣いていた。抱き締めてやりたいが、今彼女が求めているのは自分ではない。優しく触れる事すら、ままならず、何も出来ない自分の無力さを再び味わった。

何の為に存在し、何の為に生きているのだろうか。もし月影と再び代わる事が出来るのなら、一生彼である方が意味があるんじゃないかと思った。

部屋を閉じ込めていた鬼沙那の結界が解かれ、桜やレイ達に続き、泉までもが飛び込んでくる。また、戌亥と椿も放たれ自由になる。

「織紗那樣っ！」

一部始終見ていた戌亥が駆け寄ると、桜も同じ様に駆け付け、彼女の背をゆっくり撫でた。悲惨な部屋の状況を呆然と眺め、泉が呟いた。

「：何が：あったんだよ：」

座り込んだままの日向が、誰とも目を合わせないよう、俯いて零す。

「なにもねーよ、なにも：」

「だけど！：」

問い詰めようとしてやめた。普通じゃなかったから。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

喧嘩とかそう言った優しい類いではない。強盗でも押し入ったんではないかとお女将さんは心配したが、ただ大丈夫ですと繰り返し、謝るだけ。

外傷が酷いからと、織紗那、日向、陽太郎は病院で手当を受ける事となり、他は警察に任せたようだ。

何も出て来る筈がない。そこで起きていたのは、人間同士の争いではなかったのだから。

畳にこびりついた鬼沙那の血液は墨の様にどす黒く、腐敗した肉の匂いがしていた。それが何か、まず解る奴はいないだろう。ただ、刀だけは見つからないよう隠すのに苦労した。警察に発見されれば、間違いなく銃刀法違反にてしょっぴかれてしまうから。

楽しい筈の温泉旅行は一転し、全ての中にわだかまりを残しつつ、疑問と沈黙と不安の一幕を閉じた。

屋敷に帰ってから、その道中も、織紗那と日向は一言も話をしなかった。否、出来なかった。お互い部屋に閉じ籠ったまま、食事ですら部屋で済ませた。

「…戌亥…」

織紗那がぽつんと呟く様に呼んだ。

「如何致しましたか？」

突如現れた黒ずくめの男に、織紗那は悲しい目を向け問うた。

「…日向は、どうしていますか？」

戌亥は答える。

「…ご自分で、お確かめにはならないので？」

彼女は首を左右にゆっくり振った。

「…作用で。特に変わらずにありますよ」

「そう、ありがとう」

織紗那は力なく、礼だけ告げた。

部屋から出た戌亥を見計らって、彼を桜が捕まえる。

「戌亥。織紗那様は？」

「相変わらずでござるよ。日向殿を心配していた」

ふう、っと深い溜め息が出た。

「ご苦勞様。日向も、相^{あちら}変わらずよ」

同じ様な深い溜め息が零れた。

「なんとかならぬものかな。拙者、男と女の関係はとんと苦手で…」

戌亥が苦笑い混じりに言った。

「日向がもう少し男らしくしてくればねえ…」

右手を右頬に当てて、桜が呆れ顔でうんうんぼやく。

「本当、月華丸様にそっくりなくせに…っていうか、むしろ本人のくせに、なんであの包容力とか落ち着きとか剣術捌きとか譲り受けな…」

桜が言い終わる前に、その口を戌亥によって塞がれた。余りの急さに、彼女の口から「ふがあ！」なんて妙な声が漏れた。

「桜殿っ！」

慌てる彼の後ろを見上げると、日向が立ち尽くしていた。

「…落ち着きのない、小さな器の弱っちいガキンチョで悪かったな！」

ドンドンっと廊下を鳴らして去って言った。

「…桜殿…言い過ぎでござるよ…」

戌亥の手を退かしながら、桜が可愛らしく言う。

「てへっ♪」

「……………」

日向は自分の部屋へ戻ると、ベッドに倒れ込んだまま、顔を埋めた。今更涙なんか出てこない。

どうせ敵わない、どうせ…。そう考えて、何度も何度も諦めようとした。けれど、そんな風に決めたところでどう接して行けばいいんだろう？

そう悩んでいたら、織紗那がどうしているか気になった。取りあえず、話しかけてみようか。実行しようとした矢先、桜達の会話を一部始終聞いてしまった。

別に盗み聞きする気は、全くなかったのだけれど。怒りと悲しさと悔しさと切なさ、苦しさと痛みが心臓をえぐり取るように一気に駆け抜けた。

心が潰れたと思った。桜達も、自分が日向ではなく月影なら良いと思っていると、理解した。

「…月影…いるんだろ？いるんだったら、僕と代われよ…僕がいなくなるよ」

ゴロン…と、寝返りを打った先に、天井が見えた。あの時みたいに、意識はシャットダウンされない。

「卑怯だよ。ピンチになったら助けに来る王子様なんてさ、ズルイよ。助けにきて、何もかもかつさらいやがって…」

何やってんだ？自分。何やってたんだ？自分。アホらしい…何もかもが、バカらしくて仕方ない。

それから眠ってしまっていた様で、3時間程して目が覚めた。原因は桜だ。

「日向！日向！起きてよ！！」

不機嫌そうに顔を歪め、叩き起こされた男は声を上げる。

「ああ？ あんだよう…？」

ほっという欲しい。どうせ自分なんて必要としない人達だ。

「日向、大変なのよっ！」

イラッとして、自分に掛かる桜の手を払う。

「何が？ 僕じゃなくて、月影に頼めよ」

瞬間、グイッと顔がもたげ、強烈な音と共に左頬へと鋭い痛みが走る。

「！？」

何が起こったかわからず、パチクリさせた目の中に火花が散っていた。桜が日向の胸倉を掴んだまま怒鳴る。

「子供みたいに、いつまで拗ねてんのよ！ それが、ダメだって言うてるの！」

日向が逆ギレする。

「な、殴る事ないだろ！」

「殴りたくもなるわよっ！ 考えたことあるの？ 誰もが日向の事考えてる、日向の事助けたいって思ってる。だけどね、日向以外本当は誰も存在してないのよ。悲しいけれど、それが事実。でもね、今私達が存在しているのも事実」

哀しいかな。

「存在している間は、頼っても甘えても良いから、お願いだから傷付け合うのはやめてよ…」

桜の目から涙が溢れた。

…桜…ごめん。

それは、無理だよ。だってこんなに大好きで、大切に、切なくて、愛しくて、独り占めにしたいくらい愛してしまったから。

「…ごめん…」

彼女は続ける。

「私はね、日向のことずっと見て来たんだよ。小さい頃から、ずっと一緒にいたんだよ。寂しい時も、悲しい時も、楽しい時も、嬉しい時も。ずっとずっと見て来たから、日向の事は誰よりも知ってるし、織紗那様に負けないくらい大好きで、大切だよ。今更、月華丸様が現れても、織紗那様が月華丸様を好きだと言っても、私は日向が好き。日向が大切」

ふわり、と桜の髪から甘い春の匂いがした。

「…桜…さ…」

ふっと、照れた笑いが込み上げる。

「恥ずかしいよ」

桜も、ふっと笑った。

「…でさ、何が大変なの？」

日向の問い掛けにハッとした彼女は、涙をゴシゴシ拭ってから答えた。

「そう！織紗那様がね、いないのっ！！いなくなっちゃったの」

「は？」

意味がわからない。

「これ…」

桜から一枚のメモ用紙を受け取る。

「………」

が、日向には、字が古典過ぎて読めなかった。桜が横から突っ込む。「ありがとうございます。この様な別れ方をしたこと、後悔致します。私なりに考えた結論です。勝手ながら、お許しください。って書いてあるの」

外は曇り。今にも泣き出しそうだ。

「ここ出てって何処に行く気だよ」

「行くところなんてないわよ」

「なんで誰も気付かないんだよ」

「式神ですもの。織紗那様が気付かれない様にしようと思えばできるわよ」

「…とにかく、捜しに行くから。桜達は待っててよ。もしかしたら、帰ってくるかもしれないし」

「…うん…」

雨が降り出す前には帰りたい。まだ夜は冷えるから…。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「にゃ～…」

衝動的に飛び出して、どこまで来たかはわからないけれど、ざわざわとざわめく草の音と猫の鳴き声に織紗那は足を止めた。振り向いてみれば、1メートル程後ろに警戒した様の子猫がいた。

しゃがみ込んで手を出す、子猫は同じ距離を保ったままにゃあにゃあとうめくだけだ。織紗那もまた手を出すのを辞め、ただ寂しそうに話しかけた。

「にゃんこ、お前も独り？宿無しかい？」

子猫は再び、にゃあと鳴いた。

寂しいな、と彼女は思う。空っぽになった心が苦しく思う。

「にゃんこ、一緒に何処か捜そうか？」

再び子猫に手を差し出すと、子猫はじっと織紗那を見つめてからゆっくり歩み寄り、その指先を舐めた。

「良い子だ」

「にゃ」

…ポツリ…ポツリ…空が泣き出す。

「雨が。何処か、捜さないと…」

織紗那はそっと子猫を抱き上げると、宛てもなくその場を立ち去った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

日向は取りあえず陽太郎にメールを入れてはみたが、来ていないと言う。そんなに遠くへは、行っていないはずだ。お金はもちろん、地理感だっただろうから、徒歩で行ける距離など限られている。ただ街頭もほとんどない真っ暗な田舎道で何か無ければいいと、それだけが心配で心配で仕方ない。道に迷って途方にくれているか

もしれないし、心細くて寂しくて何処かで泣いているかもしれない。
こんな時、月影だったらどうするんだろう。やっぱり捜して、見つけた時強く抱き締めるんだろうか。

神社の前で荒い呼吸を繰り返す。家出させるまで追い詰めたんだと、最低だと自分自身を咎めてみる。月影の代わりくらいは出来るかな、ふと苦笑い混じりにそう思った。

再び踵を返して別方向へ捜しに行こうとすると、ポツリポツリと雨が降り出した。

「…ヤバい…急がなきゃ」

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

「…ふ…ふー…ふー…」

呻き声にも似た荒々しい呼吸が、暗くジメジメとした空間に響き渡る。ぴちゃり…ぴちゃり…と、水の滴る音が同時に聞こえ、声が途切れると同時にズシヤリと何かが崩れ落ちた。

再び「ふー…ふー…」と荒々しい呼吸が繰り返される。

カサカサカサ…何匹ものゴキブリが、崩れ落ちたその上を乗り越えていく。ゴキブリに混じって、ひたひたと別の足音がした。

「…鬼沙那樣…？」

その声に、物体はギロリと剥きだしになった眼球を向けた。黒く乱れた髪の毛の間から覗く目は落ち窪み、唇は紫に変色し、更にはカサ付き割れている。

「…おのれ…月…影…」

まるで墓から掘り起こされた遺体の様なそれが、そう微かに声を作った。

「やはり、鬼沙那樣ですね！」

餓鬼が声を張り上げる。

「鬼、鬼沙那樣、両腕は！両腕は如何なさいましたかっ?!」
慌てふためく餓鬼に言うた。

「…魂…人間の…魂…死人でも…構わぬ…」

「直ぐに、お持ちいたします！」



雨は徐々に強くなる。久々の雨天だ。家にいれさえすれば、風流だなんて思えたかも知れない

「にゃあ」

「少し、寒いね」

ようやく見つけた公園の小さなドーム型の遊具。ちょうど膝を抱えて座り込めば、大人一人くらいは入れるスペースになっている

織紗那は先に子猫を行かせると、四つん這いで自分も潜り込んだ。髪も服もビッシヨリと濡れて、徐々に体温を奪い始める。

ピカリ、と空が発光すると、ゴロゴロ唸り声と共に雨は更に激しさを増した。子猫が自ら滴る雨水を、ぶるぶると振り払った。

「にゃー」

「お前は便利だね」

「にゃ」

子猫は小首を傾げて、ちょこんとその場に腰掛けた。再び空が唸りながら発光を繰り返す。

さあ、何処に行こうか…。

.....

.....

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

日向は傘を取りに戻るのも億劫で、雨に打たれながら捜していた。徐々に酷くなったため一度は帰宅を考えたものの、織紗那の事を考えるといてもたつてもいられなかった。

近くに、もしかしたらこの先に、この角を曲がったら。そう考えれば考える程、先へ先へと身体は進む。

下着までもがビショビショになり、滴る雨水で視界がやけに見辛い。ふと足元へ視線をやれば、いつの間にか用水路の水が溢れ始めていた。

数少ない建築物である近くの古い神社にもいなかったし、村中のお店を周ってはみたが、誰も織紗那を見かけてはいないと言う。

ここしかない、そう思い飛び込んだのは幼い頃から馴染みの小さな個人病院だ。こんな姿を見られたら、怒られるのは目に見えている。だからなるべく避けたかったのだが致し方ない。

仕方なく、そっと自動扉を潜った。

「…先生…？」

蚊の鳴く様な声が聞こえる筈なく、扉の開閉に気付いた看護師が「ひうちちゃんじゃないの、どうしたの?!」と、驚きの声を上げた。

「今、タオル持ってくるから!」

慌てて走り出す看護師に、日向は人差し指を唇の前に立てて見せた。「しー! 先生には内緒にしてよっ。怒られるからさ」

すると彼女は苦笑いを浮かべつつ、日向の背後を指差した。何かと

思い振り向くと、一人の年老いた医師が苦い顔して立っていた。

「日向、なんて格好しとるんじゃない」

「ひっ！」

なんて情けない声と同時に、脳天へと激痛が走る。

「…ってえ！殴る事ないだろう」

瞬間、更に耳たぶを引っ張られた。

「いたたたたたっ！」

思わず涙で視界が歪む。

「日向！肺炎にでもなったら、どーすんじゃない！死んだ酒猫ばが、化けて出るぞっ」

横から看護師がタオルを差し出し、それを日向が受け取ると同時に耳たぶから手が離された。

「そーれどころじゃないんだって！」

「なら傘くらいさしたらどうなんだ」

濡れた身体がひんやりとする。水滴を吸い込む乾いたタオルが心地よくて温かく感じてしまう。

「女の子見なかった？村の子じゃない子」

「彼女か？」

その問いに、一瞬言葉につまる。

「…そんなじゃないけど…大事な人」

うん、と言えない自分が情けない。

「いんや、見てないが」

小さな希望すら消え失せた。

「その子が、どうかしたのか？」

絶望に放心する日向を、医師が呼び戻した。

「…ちよつと…」

再び目の前に火花が散る。

「また、お前はっ！全く、若いからと女遊びもほどほどにっ…」

頭に作った2個目のたんこぶを押さえ、蹲りながら日向は呻いた。

「なんなんじゃ、ないっつーの！遊びだったら、こんな中探し回るか

よ
:
:

そしてふと気付く。

「あ……」

「どうした？」

タオルを医師に押しつけると、彼は医師が呼び止めるのも聞かずに病院を飛び出した。

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•

-
-
-
-
-

あつた！

あと一か所だけ、雨宿り出来て捜していない場所……

天にも祈りたい。

小さい頃、婆さんに怒られては逃げ込んだ場所。一人で、時には陽太郎と。

意地になって帰らない時もあった、お気に入りだった場所。大人になって、忘れていた。

医師に殴られて、なんとなく懐かしく思い出した。

きっと、彼女はそこにいる。

天は何度も発光し、轟き繰り返す。雨の強さは止どまる事を知らない。

走って、走って、息が切れる頃辿り着いた小さな公園。ジャングルジムに砂場にシーソー、滑り台、そう幼心に秘密基地だったドーム型の建造物。

公園内は整備のない土のままで、大量の水がそのままでつかい水溜まりの様になっている。歩く度水が跳ね返り、びちゃびちゃと音がする。

四つん這いになれば、大人一人が辛うじて入れる様な小さなトンネル。否、詰めれば2人は入れるかもしれない。

先に子猫が日向に気付き、にゃあと鳴いた。扉をノックする仕草で問い掛ける。

「とんとんとん。いらっしやいますか？それともお留守ですか？」

これが、僕の精一杯。

「：日向：」

今にも泣き出しそうな、彼女の声がした。

「とんとんとん。お嬢さん、お邪魔してもよろしいですか？」

織紗那は顔を伏せると、コクリと頷いた。

「ありがとうございます！では、お邪魔します」

日向は四つん這いで潜ると、織紗那の隣りに膝を抱えて座り込んだ。子猫が、織紗那の膝でまったり丸くなる。そして、にゃあと鳴い

た。

「良い場所見つけたね」

怒るとか嬉しいというより、そこにあったのは情けなくて、悲しい気持ちだった。

無理にでも笑ったつもりが、泣き顔から無理に笑顔を見せた様に引きつった笑みにしかならなかった。

「…で…」

「ん？」

織紗那は、顔を伏せたまま。

「なんで、私なんか…そんなに濡れてまで…なんで…」

抱き締めて、いいんだろうか？このもろくて細い小さな肩を、抱いていいんだろうか？

「…どうしても、嫌いになれなかったから」

「…ごめんなさい…」

謝らないで。

「…ごめんなさい…ごめんなさい…本当に、ごめんなさい」

君が謝れば謝る程、心がえぐり取られそうだよ。

「…やっぱり…私、日向じゃなくて月華丸様を見てたのかもしれないません…」

解ってる。

だけど…

「せめて月影の…代わりには、ならないかな？」

「…え？」

考えて、それしか答えが出なかったというだけ。

「やっぱり、ダメ？」

ごめん、僕の方が泣きそうだ。

何も言わずに、ただ織紗那は顔を伏せたまま頭を左右に振った。

「なんで、家出なんてしたのさ？」

日向の質問に彼女は答えようとせず、ただ繰り返して謝った。

「…ごめんなさい…」

「怒らないよ？怒ってないよ？僕が嫌？」

気持ちが届かなくても、近くにいたい。それすら叶わないんだろうかと思う。追えば逃げるし、追わなくても逃げようとするから。

彼女がわからない。

わからないけど、やっぱり嫌いになれなくて。

「：嫌、なんかじゃない」

戸惑う様に、彼女は続けた。

「私が：私を狙っているから。鬼は、私が憎いのだから。私が近くにいたら、また日向が狙われるから」
情けない。

情けなくて、情けなくて、死にたくなった。

死にたくなって、死ぬ代わりに日向は織紗那の肩を抱き寄せた。

「情けなくてごめん、弱くてごめん。僕は大丈夫だから。本当に、本気で大丈夫だから。君のためなら死んでも、構わないから。否、殺しても死なないから。だから、戻ってきてよ」
ようやく、伏せていた織紗那の顔が上げられる。

「：戻って、いいのですか？」

日向は言う。

「君の家だよ」

濡れたままの身体同士が密着したままひんやりと、だけど芯は温かくお互いの体温を伝え合う。

「：帰ろう？風邪引くよ」

悲しい程に、温かい。

辛い程に、優しい。

何度朽ち果てようと、何度生まれ変わろうと、それだけはきっと変わらない。

「：ありがとうございます…」

子猫も連れて行こうか。きっとこいつも、独りじゃ寂しいよ。

•

•
•
•
•
•
•

「鬼沙那様、自縛靈しか用意出来ませんでした」

びちやびちや、くちやくちや、下品な音がする度、タライの中か

不思議な光景だ。

餓鬼の問い掛けに、鬼沙那の目玉がギロリと睨み付けた。口の周りは粘液の様なもので、べとべとになっている。

「ひえっ?!ご、ご冗談を」

ゲップを吐くと、足の指で白い蛆……もとい、魂を摘みあげ口に放

り込んだ。薄笑み浮かべて鬼は言う。

「のう、鬼若丸と鬼姫はいるか？」

ゆらり、と青白い人魂とオレンジの人魂が姿を現した。

「織紗那、月影、美鏡、椿の魂を並べろ。これじゃ、まずくて満足に妖術も遣えんわ」

「必ずや」

子供の声が、そう答えた。

「それと、腕が欲しい。気に入る腕が欲しい」

「御意」

人魂は、跡形も無くその場から消えた。

◆鬼の子守唄◆く蝶子編く

「はつくしよん！」

と、日向。：39度。

「：うう：頭痛い：気持ち悪い：」

案の定風邪だ。熱にうなされながらずっとぶつぶつ唱えている。

「まるでお経ね」

桜が氷嚢片手に呆れて言った。

「：しどい：」

鼻を吸る音が実に情けない。

「：桜、織紗那は？」

「昨日まで調子悪そうだったけど、今日は割といいみたいよ」

「：そっか」

なんだか、会いたいなんて思ってしまう。

「織紗那、何してるのかな？」

桜の乗せた氷嚢が、ひんやりとして気持ちいい。

「会いたい？」

意地悪く聞く彼女に「別に」なんて言い捨てて、顔まで布団を引き上げた。

「素直じゃないね」

「僕はいつだって素直だよ」

「……」

やっぱり自分は格好悪いと、日向は改めて認識した。

「桜、テレビ付けて」

部屋の中央のリモコンに手を差し出しながらそう甘えるが、素ではリモコンに届かない。はいはいと、まるで保護者のように桜がテレビの電源をオンにして、差し出したままの日向の手にそれを乗つけた。

「他に欲しいものある？」

気を使う桜に「女の子」と日向。桜は軽く小突いてやった。それだけ冗談言えれば、心配はない。

たまたま付いたニュース番組から流れるアナウンスの声。読み上げるシナリオの事件発生を示す場所が隣り町だったせいか、思わず口をつぐんでは布団から顔を出して、画面を見入った。

『…18歳のOLと判明。遺体には肩から下の両腕がなくなっていました』

「流行はやりのバラバラ殺人事件ってやつかな？」

呑気に問い掛ける日向に、桜が本日二度目の呆れたまなざしを向けた。バラバラ殺人事件がいつ流行りゅうばらったと言うのだろうか。なんとも嫌な流行りゅうばらである。

「日向、この手のニュース何度か見てるのよ」

「?…桜は何が言いたいワケ？」

「人の仕業じゃないかもってこと」

.....

.....

.....

酒猫家の枯れた桜の木の枝に腰掛ける幼顔の女が、天を見上げていた。空は重たい灰色をしている。

十二単を身に纏うその少女とも呼べる女は、艶やかな長い黒髪を靡かせながら、怯えた様に「巳太」と呼んだ。

その幹を挟んだ逆側の枝に、ゆらりと黒い男こと戌亥が姿を現した。

「どうされましたか、椿様」

椿は空から目を離し、巳太こと戌亥の顔を見た。

「翼を与えられた鵄が騒いでいます。鬼若丸と鬼姫が、二つの黒い霊気が、近くまで来ている。…怖い…」

僅かに震えて見える、愛しい人の唇。いつか温もりを失った白く線の細い手の甲に自らの手を被せて、彼は囁いた。

「大丈夫。命に変わっても守りますゆえ」

クスリ、と笑う。

「もう死んでる」

二つの唇が重なり合う時、空が小さく光放った。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

[illegible]

-
-
-
-
-
-

「ちようだい、ちようだい。お姉ちゃん、ちようだい」

年は10歳前後だろうか。揃いの和服姿の二人の子供が、互いに手を繋いで雨の中立ち尽くしている。

時折瞬く稲妻の閃光に浮かぶその顔は、気味が悪いくらいに無表情で人形のように綺麗だ。

二人の子供は20歳前だろうかと思われる通行人女性の足を止めた。

「ねえ、お姉ちゃんちようだい」

女性は少し気味が悪いと思いますが、二人の子供へと恐る恐る問うた。

「どうしたの？傘は？風邪引いちゃうよ」

男の子だと思える方の童子が、女性の腕をガシリと掴んだ。

「ちようだい、コレちようだい」

「え？」

言うが早いか、響き渡ったのは同じ女の悲鳴。

「ギャアアア！！」

断末魔の悲鳴の中、次に呟いたのは女の童子。

「まだ貫ってないよ」

女性が激痛の中二人の子供に目を向けると、男の子が握っていたものは…。

（私の、腕？）

恐怖に転倒し、起き上がろうとしたがやはり腕はなく、痛みと恐怖のあまりただ地面でのたうち回る事しか出来なかった。

「お姉ちゃん、あたしにもちようだい」

引きつった顔で幼女を見る。

「…いや…」

「ちようだい」

「いやあああ！！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

「鬼沙那樣、またですか？」

地面にこびりつく粘ついた肉片を引き摺りながら、餓鬼が言うた。

「3日と保たずして、また腐りよったわ」

鬼沙那は残りの腕の掌を、何度も開いたり閉じたりするが、その度地面に肉片がぴちゃぴちゃと滴り落ちる。

「…おのれ月影…急がねばなるまいな」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

「…日向…」

部屋の襖越し、優しい声に目が覚めた。寝ぼけ意識に加え、熱で朦朧とした頭では、桜なのか織紗那なのか判別出来ない。

言葉にならず、再び落ちようと瞼を閉じた時、誰かが部屋に入ってきた。多分、言葉の主だ。そのまま、日向は気付かない振りをしていた。

「…日向…」

再び小さな声がして、頬に柔らかな感触を覚えた。次に目が覚めた時は既に外は真っ黒で、土砂降りとまではいかないにしろ、少し激しい雨が降り注いでいた。

まだ頭はぼー…としたままだ。起き上がろうと身体を反転させたとき、指先に当たる小さな木箱に気が付いた。

「？」

不思議に思い開けてみると、ブレスレット状の青い数珠が入っていた。

「…数珠…？」

そう小さく確認するように唱えると、蓋をしておしてそれを机に置いた。

代わりにタバコを手に取り、布団に戻ってタバコに火を付けた。少し熱は下がったようで、まだだるさと熱っぱさは残るものの、昼間よりは身体が言う事を聞く。半分くらい吸ったところで火を消し、再びテレビの電源を入れた。

アナウンスの声と、聞いた様な内容のニュース。淡々としたトーンで、5人目の被害者だとキャスターは告げる。

「…日向、もういいの？」

人影もなく、自動的に襖が開かれ、心配げに揺れる声と共に、ゆらりと少女が姿を現した。

「…あ、ああ、桜。うん、だいぶいいよ」

日向がいい終わらないうちに、桜の手の平が彼の額に添えられた。

「まだ、熱いよ」

「でも、平気」

幼い頃から見慣れた顔が近付くと、何故だか顔が紅潮した。照れた様に、桜の手を振り払った。

『私も織沙那樣に負けないくらい、日向が好き』

あのセリフが、頭の中を響かせる。

ふいっと背けた日向の顔に、ぐいっと桜の顔が近付いた。

「日向？」

衝動的に

「ごめん」

と呟いた。

「？」

「…少し…寝るよ」

「うん。氷変えてくるね」

既に水と化した氷囊を持って桜は立ち上がると、日向を残して部屋を出た。

「…男って…面倒臭い…」

がぼつと頭から布団を引つ被って、そう嘆いた。熱か何か解らないが身体が芯からほてってふわふわする。特に下半身辺りに集中している気が…。

「だあっ！」

彼は突然掛け声を上げて飛び起きると、ダルマのようにちよこんと腰掛け、カクンと肩を落とした。

「……もう嫌……」

軽く自己嫌悪。

[illegible][illegible][illegible]

-
-
-
-
-

「鬼姫」

二つの子の影が時折瞬く稲妻に照らされて、人魂よろしくゆらゆら揺れる。呼ばれた少女はコクリと頷き、両手の平を胸元で天へと向

けた。

「かーごーめ…かーごーめ…かーごのなあかのとーりーは…」
少女が童歌を口づさむと、手の平の上に青白い炎が生まれた。

「よーあーけーの晩に…」

炎はやがて鶴を形取る。

「後ろの正面…だあれ…」

炎の鶴は一言“キィ”と叫ぶと、少女の手の中から飛び去った。

「夜明けの晩に、迎えに行くのよ。お友達、迎えに行くのよ」

炎の鶴は空を駆ける。

そして闇の中、廊下に佇む蝶子の前に降り立った。

「とりさん？」

齡5歳程度であろう幼女は、小首を傾げてそう呟いた。

鶴が答えた。

「かごめ、かごめ…忘れちゃいけない、かーごーめ…」

そして鶴は再び舞い上がると、幼女こと蝶子の頭上を3回程周り、別の部屋へと消えていった。

「…忘れちゃいけない、かごめ？」

何かに取り憑かれたかのよう、幼女の唇はパクパクと動いて閉じた。

次に鶴は日向の枕元へと舞い降りた。眠る彼に、鶴は言った。

「かーごーめ、かごめ…思い出して、かごめ」

そして、鶴は日向の身体に吸い込まれる様にして姿を消した。

直後、彼の中の心臓が、はち切れんばかりに大きく鼓動した。同時に焼ける様な熱さが肺と気管支を走り抜け、終には呼吸が止まるかの様に、カクンと意識を失った。

5分程して、直ぐに桜が現れた。

「日向、氷持って来たわよ。気分はどう？」

…違和感…。

「日向？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

『日向、日向…』

意識の向こうで、誰かが何度も自分の名を呼ぶ。答えようにも、上手く言葉が作れない。身体も上手く動かせない様に思う。

『日向なの？』

なんとか出来た行動は、眠そうに目を擦る事。だが実際は目というより、顔を擦っていた。

「…ちやくらあ…ひゆうがやよお…」

…違和感…。

「ん？」

疑問符を上げた次の瞬間、桜に抱き締められていた。

「日向ああー！！とうとう、罰が当たったのねえー！！」

何がなんだか解らない。取りあえず、桜に抱き上げられた瞬間パンツが脱げそうになり思わず焦った。

「しゃくらあ、ぱんつ脱げるうっ…て…ええ?!」

脱げそうなジャージのズボンを掴んで、日向は自分の頭を疑った。

「…ちいたいのぉ? ちいたいのぉ?? しゃくら、ボクね、ちいたいのぉ?」

何が言いたいのか、さっぱり解らない。が、桜は見透かしたかのようになにを答えた。

「きつとね、人生やり直しなさいって神様がチャンスくれたのよ」
「……」

桜、それは酷いです。

「冗談はさておき、なんか拾い食いでもしたの? どうでしょう。可愛いから私はこのままでも構わないけど…」

にやりとした彼女の口許が、本気めいていてなんだか怖い。呆れた様に頬を膨らますと、日向は小さな両手の平で桜を押し退けた。反動で床に着地しようとするが、ぶかぶかの服に引っ掛かって床に転げ落ちた。

弾みで顔を強打して、涙が込み上げてきた。

「…ふえ…」

情けない声が漏れる。

「日向、大丈夫?!」

「…いちゃい…えぐっ…」

大粒の涙が視界を歪めた。

「気をつけなきゃダメよ」

桜が抱き起こそうと手を差し延べるが、日向はそれを振り払った。

「…いちゃちゃんとか、いくのっ…」

涙を拭いながら、日向はとてと部屋を後にした。

「…不思議な事もあるものね。人間って不思議ね…」

そう呟いた桜の前に、今度はゆらりと老婆が現れた。

「……蛇老……？」

「あれは、もののけの仕業」

振り返る桜に、蛇老は続けた。

「また一波乱……くるな……」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•

酒猫家の屋根に一人の女の影があつた。真つ白の襦袢に、赤い紐で緩やかに後ろで髪を束ねた姿で。彼女の頬に涙の筋が止めどなく引かれ、それは月の光を浴びてキラキラと闇夜に輝いた。

風が通る度、彼女の柔らかな黒髪がふわりと流れた。

「かーごーめ：かーごーめ：かーごのなあかのとーりーは…」

「後ろの正面だあれ……」

一通り歌い終わると、女は泣き崩れた。

「…返して…私の…私の子を…返して…」

.....

[illegible]

•
•
•
•
•

はっているのか歩いているのか解らない様なよちよち歩きで、日向は織紗那の部屋へと向かった。

彼女ならどうにか出来るかもしれないと言う安易かつ定かではない答えを求め廊下に飛び出して見たものの、見慣れた筈の真っ暗な廊下は不気味で果てしなく思えた。

「ようっちい！」

子供なりの気合いである。大人だった時は何食わぬ顔で行き来出来た屋敷内も、子供にとってはちよつとした肝試しかつらビリンスなのだ。

歩く度、ぎしぎしと鳴く床板にビビりながら一歩一歩踏み出していく。

30センチ程進んだところで振り返り、がらんとした背景を確認すると急に涙が込み上げてきた。

「……やだ おお……」

独りだと思った瞬間だった。突然身体が石の様に動かなくなり、日向の中には恐怖しか無くなった。真っ暗な空間とどす黒い記憶が混じり合い、その先で誰かが囁く。

『…ねえ、日向…。良い子だから、少しだけここで待っていてね…』

かつて、日向の前からそのままいなくなった人だ。どうしようもなくなり嗚咽を上げながら本格的に泣き始めた彼を抱き上げたのは、桜だった。

「良い子だから泣かないの」

桜の柔らかい声が、日向を包み込み、衝動的に小さな手で彼は彼女の胸元にしがみついた。

「…ふえ…いないない、いやあなの…」

桜の手が日向の背中をぽんぽんと宥める。

「大丈夫、私はいなくならないわよ。ずっと一緒にいるよ」

「いっちょ…いるの…いないない、だめなの…」

桜が歌う。

「朧月夜に揺れる夢…母の胸で眠りゃんせ…よる子悪い子眠りゃんせ…鬼が来ぬうち眠りゃんせ…♪」

日向は泣きやむと同時にうとうとと眠りについた。

「織紗那樣」

桜が障子越しに呼び掛けた。

「お入りなさい」

織紗那の凜とした声がすると、桜は障子を開いた。

「織紗那樣、日向に妖術が」

申し訳ないと言わんばかりに、桜が大きくうなだれた。

「鬼沙那には結界すら効かないのかしら」

解っている。自分の霊力が本調子ではないうえ、日に日に弱まってきたことくらい。対して次第に力を増しているような鬼沙那を、どうにか出来る自信が持てなかった。

「織紗那樣、氣弱にならないでくださいな」

「…そうね」

自嘲するしかなかった。目頭にうつすら涙を浮かべたまま眠る日向を織紗那は桜から受け取ると、一度だけ愛らしく抱き締めてから自分の布団へと寝かせた。

「桜、私がついてるから大丈夫」

すやすやと眠る幼児に布団をかけながら、こちらこそすまないと言う素振りで答えた。

「まだ彼等は直接私達を狙ってはこないでしょう。ただ…」

「ただ？」

意味深な言葉に、桜がつい復唱した。

「感じない？蝶子の靈氣が変わったの」
桜がはっとした。

「眠らんしえ、眠らんしえ…よる子は静かに眠らんしえ…おっ月様ゆらんこ、眠らんしえ♪」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1841v/>

◆◆◆桜咲く◆◆◆

2011年11月15日14時30分発行